

LIBRARY OF THE UNIVERSITY OF TORONTO

N^o 197
Lala Reservada
Incunables

Inc
197

T. 879684
C. 1000212794

(2)
T. 879658
C. 1000212680

(1)
T. 736055
C. 1000086206

Salva Preserv. Da Este ~~1~~ ~~2~~ ~~3~~ ~~4~~ ~~5~~ ~~6~~ ~~7~~ ~~8~~ ~~9~~ ~~10~~ ~~11~~ ~~12~~ ~~13~~ ~~14~~ ~~15~~ ~~16~~ ~~17~~ ~~18~~ ~~19~~ ~~20~~ ~~21~~ ~~22~~ ~~23~~ ~~24~~ ~~25~~ ~~26~~ ~~27~~ ~~28~~ ~~29~~ ~~30~~ ~~31~~ ~~32~~ ~~33~~ ~~34~~ ~~35~~ ~~36~~ ~~37~~ ~~38~~ ~~39~~ ~~40~~ ~~41~~ ~~42~~ ~~43~~ ~~44~~ ~~45~~ ~~46~~ ~~47~~ ~~48~~ ~~49~~ ~~50~~ ~~51~~ ~~52~~ ~~53~~ ~~54~~ ~~55~~ ~~56~~ ~~57~~ ~~58~~ ~~59~~ ~~60~~ ~~61~~ ~~62~~ ~~63~~ ~~64~~ ~~65~~ ~~66~~ ~~67~~ ~~68~~ ~~69~~ ~~70~~ ~~71~~ ~~72~~ ~~73~~ ~~74~~ ~~75~~ ~~76~~ ~~77~~ ~~78~~ ~~79~~ ~~80~~ ~~81~~ ~~82~~ ~~83~~ ~~84~~ ~~85~~ ~~86~~ ~~87~~ ~~88~~ ~~89~~ ~~90~~ ~~91~~ ~~92~~ ~~93~~ ~~94~~ ~~95~~ ~~96~~ ~~97~~ ~~98~~ ~~99~~ ~~100~~ ~~101~~ ~~102~~ ~~103~~ ~~104~~ ~~105~~ ~~106~~ ~~107~~ ~~108~~ ~~109~~ ~~110~~ ~~111~~ ~~112~~ ~~113~~ ~~114~~ ~~115~~ ~~116~~ ~~117~~ ~~118~~ ~~119~~ ~~120~~ ~~121~~ ~~122~~ ~~123~~ ~~124~~ ~~125~~ ~~126~~ ~~127~~ ~~128~~ ~~129~~ ~~130~~ ~~131~~ ~~132~~ ~~133~~ ~~134~~ ~~135~~ ~~136~~ ~~137~~ ~~138~~ ~~139~~ ~~140~~ ~~141~~ ~~142~~ ~~143~~ ~~144~~ ~~145~~ ~~146~~ ~~147~~ ~~148~~ ~~149~~ ~~150~~ ~~151~~ ~~152~~ ~~153~~ ~~154~~ ~~155~~ ~~156~~ ~~157~~ ~~158~~ ~~159~~ ~~160~~ ~~161~~ ~~162~~ ~~163~~ ~~164~~ ~~165~~ ~~166~~ ~~167~~ ~~168~~ ~~169~~ ~~170~~ ~~171~~ ~~172~~ ~~173~~ ~~174~~ ~~175~~ ~~176~~ ~~177~~ ~~178~~ ~~179~~ ~~180~~ ~~181~~ ~~182~~ ~~183~~ ~~184~~ ~~185~~ ~~186~~ ~~187~~ ~~188~~ ~~189~~ ~~190~~ ~~191~~ ~~192~~ ~~193~~ ~~194~~ ~~195~~ ~~196~~ ~~197~~ ~~198~~ ~~199~~ ~~200~~ ~~201~~ ~~202~~ ~~203~~ ~~204~~ ~~205~~ ~~206~~ ~~207~~ ~~208~~ ~~209~~ ~~210~~ ~~211~~ ~~212~~ ~~213~~ ~~214~~ ~~215~~ ~~216~~ ~~217~~ ~~218~~ ~~219~~ ~~220~~ ~~221~~ ~~222~~ ~~223~~ ~~224~~ ~~225~~ ~~226~~ ~~227~~ ~~228~~ ~~229~~ ~~230~~ ~~231~~ ~~232~~ ~~233~~ ~~234~~ ~~235~~ ~~236~~ ~~237~~ ~~238~~ ~~239~~ ~~240~~ ~~241~~ ~~242~~ ~~243~~ ~~244~~ ~~245~~ ~~246~~ ~~247~~ ~~248~~ ~~249~~ ~~250~~ ~~251~~ ~~252~~ ~~253~~ ~~254~~ ~~255~~ ~~256~~ ~~257~~ ~~258~~ ~~259~~ ~~260~~ ~~261~~ ~~262~~ ~~263~~ ~~264~~ ~~265~~ ~~266~~ ~~267~~ ~~268~~ ~~269~~ ~~270~~ ~~271~~ ~~272~~ ~~273~~ ~~274~~ ~~275~~ ~~276~~ ~~277~~ ~~278~~ ~~279~~ ~~280~~ ~~281~~ ~~282~~ ~~283~~ ~~284~~ ~~285~~ ~~286~~ ~~287~~ ~~288~~ ~~289~~ ~~290~~ ~~291~~ ~~292~~ ~~293~~ ~~294~~ ~~295~~ ~~296~~ ~~297~~ ~~298~~ ~~299~~ ~~300~~ ~~301~~ ~~302~~ ~~303~~ ~~304~~ ~~305~~ ~~306~~ ~~307~~ ~~308~~ ~~309~~ ~~310~~ ~~311~~ ~~312~~ ~~313~~ ~~314~~ ~~315~~ ~~316~~ ~~317~~ ~~318~~ ~~319~~ ~~320~~ ~~321~~ ~~322~~ ~~323~~ ~~324~~ ~~325~~ ~~326~~ ~~327~~ ~~328~~ ~~329~~ ~~330~~ ~~331~~ ~~332~~ ~~333~~ ~~334~~ ~~335~~ ~~336~~ ~~337~~ ~~338~~ ~~339~~ ~~340~~ ~~341~~ ~~342~~ ~~343~~ ~~344~~ ~~345~~ ~~346~~ ~~347~~ ~~348~~ ~~349~~ ~~350~~ ~~351~~ ~~352~~ ~~353~~ ~~354~~ ~~355~~ ~~356~~ ~~357~~ ~~358~~ ~~359~~ ~~360~~ ~~361~~ ~~362~~ ~~363~~ ~~364~~ ~~365~~ ~~366~~ ~~367~~ ~~368~~ ~~369~~ ~~370~~ ~~371~~ ~~372~~ ~~373~~ ~~374~~ ~~375~~ ~~376~~ ~~377~~ ~~378~~ ~~379~~ ~~380~~ ~~381~~ ~~382~~ ~~383~~ ~~384~~ ~~385~~ ~~386~~ ~~387~~ ~~388~~ ~~389~~ ~~390~~ ~~391~~ ~~392~~ ~~393~~ ~~394~~ ~~395~~ ~~396~~ ~~397~~ ~~398~~ ~~399~~ ~~400~~ ~~401~~ ~~402~~ ~~403~~ ~~404~~ ~~405~~ ~~406~~ ~~407~~ ~~408~~ ~~409~~ ~~410~~ ~~411~~ ~~412~~ ~~413~~ ~~414~~ ~~415~~ ~~416~~ ~~417~~ ~~418~~ ~~419~~ ~~420~~ ~~421~~ ~~422~~ ~~423~~ ~~424~~ ~~425~~ ~~426~~ ~~427~~ ~~428~~ ~~429~~ ~~430~~ ~~431~~ ~~432~~ ~~433~~ ~~434~~ ~~435~~ ~~436~~ ~~437~~ ~~438~~ ~~439~~ ~~440~~ ~~441~~ ~~442~~ ~~443~~ ~~444~~ ~~445~~ ~~446~~ ~~447~~ ~~448~~ ~~449~~ ~~450~~ ~~451~~ ~~452~~ ~~453~~ ~~454~~ ~~455~~ ~~456~~ ~~457~~ ~~458~~ ~~459~~ ~~460~~ ~~461~~ ~~462~~ ~~463~~ ~~464~~ ~~465~~ ~~466~~ ~~467~~ ~~468~~ ~~469~~ ~~470~~ ~~471~~ ~~472~~ ~~473~~ ~~474~~ ~~475~~ ~~476~~ ~~477~~ ~~478~~ ~~479~~ ~~480~~ ~~481~~ ~~482~~ ~~483~~ ~~484~~ ~~485~~ ~~486~~ ~~487~~ ~~488~~ ~~489~~ ~~490~~ ~~491~~ ~~492~~ ~~493~~ ~~494~~ ~~495~~ ~~496~~ ~~497~~ ~~498~~ ~~499~~ ~~500~~ ~~501~~ ~~502~~ ~~503~~ ~~504~~ ~~505~~ ~~506~~ ~~507~~ ~~508~~ ~~509~~ ~~510~~ ~~511~~ ~~512~~ ~~513~~ ~~514~~ ~~515~~ ~~516~~ ~~517~~ ~~518~~ ~~519~~ ~~520~~ ~~521~~ ~~522~~ ~~523~~ ~~524~~ ~~525~~ ~~526~~ ~~527~~ ~~528~~ ~~529~~ ~~530~~ ~~531~~ ~~532~~ ~~533~~ ~~534~~ ~~535~~ ~~536~~ ~~537~~ ~~538~~ ~~539~~ ~~540~~ ~~541~~ ~~542~~ ~~543~~ ~~544~~ ~~545~~ ~~546~~ ~~547~~ ~~548~~ ~~549~~ ~~550~~ ~~551~~ ~~552~~ ~~553~~ ~~554~~ ~~555~~ ~~556~~ ~~557~~ ~~558~~ ~~559~~ ~~560~~ ~~561~~ ~~562~~ ~~563~~ ~~564~~ ~~565~~ ~~566~~ ~~567~~ ~~568~~ ~~569~~ ~~570~~ ~~571~~ ~~572~~ ~~573~~ ~~574~~ ~~575~~ ~~576~~ ~~577~~ ~~578~~ ~~579~~ ~~580~~ ~~581~~ ~~582~~ ~~583~~ ~~584~~ ~~585~~ ~~586~~ ~~587~~ ~~588~~ ~~589~~ ~~590~~ ~~591~~ ~~592~~ ~~593~~ ~~594~~ ~~595~~ ~~596~~ ~~597~~ ~~598~~ ~~599~~ ~~600~~ ~~601~~ ~~602~~ ~~603~~ ~~604~~ ~~605~~ ~~606~~ ~~607~~ ~~608~~ ~~609~~ ~~610~~ ~~611~~ ~~612~~ ~~613~~ ~~614~~ ~~615~~ ~~616~~ ~~617~~ ~~618~~ ~~619~~ ~~620~~ ~~621~~ ~~622~~ ~~623~~ ~~624~~ ~~625~~ ~~626~~ ~~627~~ ~~628~~ ~~629~~ ~~630~~ ~~631~~ ~~632~~ ~~633~~ ~~634~~ ~~635~~ ~~636~~ ~~637~~ ~~638~~ ~~639~~ ~~640~~ ~~641~~ ~~642~~ ~~643~~ ~~644~~ ~~645~~ ~~646~~ ~~647~~ ~~648~~ ~~649~~ ~~650~~ ~~651~~ ~~652~~ ~~653~~ ~~654~~ ~~655~~ ~~656~~ ~~657~~ ~~658~~ ~~659~~ ~~660~~ ~~661~~ ~~662~~ ~~663~~ ~~664~~ ~~665~~ ~~666~~ ~~667~~ ~~668~~ ~~669~~ ~~670~~ ~~671~~ ~~672~~ ~~673~~ ~~674~~ ~~675~~ ~~676~~ ~~677~~ ~~678~~ ~~679~~ ~~680~~ ~~681~~ ~~682~~ ~~683~~ ~~684~~ ~~685~~ ~~686~~ ~~687~~ ~~688~~ ~~689~~ ~~690~~ ~~691~~ ~~692~~ ~~693~~ ~~694~~ ~~695~~ ~~696~~ ~~697~~ ~~698~~ ~~699~~ ~~700~~ ~~701~~ ~~702~~ ~~703~~ ~~704~~ ~~705~~ ~~706~~ ~~707~~ ~~708~~ ~~709~~ ~~710~~ ~~711~~ ~~712~~ ~~713~~ ~~714~~ ~~715~~ ~~716~~ ~~717~~ ~~718~~ ~~719~~ ~~720~~ ~~721~~ ~~722~~ ~~723~~ ~~724~~ ~~725~~ ~~726~~ ~~727~~ ~~728~~ ~~729~~ ~~730~~ ~~731~~ ~~732~~ ~~733~~ ~~734~~ ~~735~~ ~~736~~ ~~737~~ ~~738~~ ~~739~~ ~~740~~ ~~741~~ ~~742~~ ~~743~~ ~~744~~ ~~745~~ ~~746~~ ~~747~~ ~~748~~ ~~749~~ ~~750~~ ~~751~~ ~~752~~ ~~753~~ ~~754~~ ~~755~~ ~~756~~ ~~757~~ ~~758~~ ~~759~~ ~~760~~ ~~761~~ ~~762~~ ~~763~~ ~~764~~ ~~765~~ ~~766~~ ~~767~~ ~~768~~ ~~769~~ ~~770~~ ~~771~~ ~~772~~ ~~773~~ ~~774~~ ~~775~~ ~~776~~ ~~777~~ ~~778~~ ~~779~~ ~~780~~ ~~781~~ ~~782~~ ~~783~~ ~~784~~ ~~785~~ ~~786~~ ~~787~~ ~~788~~ ~~789~~ ~~790~~ ~~791~~ ~~792~~ ~~793~~ ~~794~~ ~~795~~ ~~796~~ ~~797~~ ~~798~~ ~~799~~ ~~800~~ ~~801~~ ~~802~~ ~~803~~ ~~804~~ ~~805~~ ~~806~~ ~~807~~ ~~808~~ ~~809~~ ~~810~~ ~~811~~ ~~812~~ ~~813~~ ~~814~~ ~~815~~ ~~816~~ ~~817~~ ~~818~~ ~~819~~ ~~820~~ ~~821~~ ~~822~~ ~~823~~ ~~824~~ ~~825~~ ~~826~~ ~~827~~ ~~828~~ ~~829~~ ~~830~~ ~~831~~ ~~832~~ ~~833~~ ~~834~~ ~~835~~ ~~836~~ ~~837~~ ~~838~~ ~~839~~ ~~840~~ ~~841~~ ~~842~~ ~~843~~ ~~844~~ ~~845~~ ~~846~~ ~~847~~ ~~848~~ ~~849~~ ~~850~~ ~~851~~ ~~852~~ ~~853~~ ~~854~~ ~~855~~ ~~856~~ ~~857~~ ~~858~~ ~~859~~ ~~860~~ ~~861~~ ~~862~~ ~~863~~ ~~864~~ ~~865~~ ~~866~~ ~~867~~ ~~868~~ ~~869~~ ~~870~~ ~~871~~ ~~872~~ ~~873~~ ~~874~~ ~~875~~ ~~876~~ ~~877~~ ~~878~~ ~~879~~ ~~880~~ ~~881~~ ~~882~~ ~~883~~ ~~884~~ ~~885~~ ~~886~~ ~~887~~ ~~888~~ ~~889~~ ~~890~~ ~~891~~ ~~892~~ ~~893~~ ~~894~~ ~~895~~ ~~896~~ ~~897~~ ~~898~~ ~~899~~ ~~900~~ ~~901~~ ~~902~~ ~~903~~ ~~904~~ ~~905~~ ~~906~~ ~~907~~ ~~908~~ ~~909~~ ~~910~~ ~~911~~ ~~912~~ ~~913~~ ~~914~~ ~~915~~ ~~916~~ ~~917~~ ~~918~~ ~~919~~ ~~920~~ ~~921~~ ~~922~~ ~~923~~ ~~924~~ ~~925~~ ~~926~~ ~~927~~ ~~928~~ ~~929~~ ~~930~~ ~~931~~ ~~932~~ ~~933~~ ~~934~~ ~~935~~ ~~936~~ ~~937~~ ~~938~~ ~~939~~ ~~940~~ ~~941~~ ~~942~~ ~~943~~ ~~944~~ ~~945~~ ~~946~~ ~~947~~ ~~948~~ ~~949~~ ~~950~~ ~~951~~ ~~952~~ ~~953~~ ~~954~~ ~~955~~ ~~956~~ ~~957~~ ~~958~~ ~~959~~ ~~960~~ ~~961~~ ~~962~~ ~~963~~ ~~964~~ ~~965~~ ~~966~~ ~~967~~ ~~968~~ ~~969~~ ~~970~~ ~~971~~ ~~972~~ ~~973~~ ~~974~~ ~~975~~ ~~976~~ ~~977~~ ~~978~~ ~~979~~ ~~980~~ ~~981~~ ~~982~~ ~~983~~ ~~984~~ ~~985~~ ~~986~~ ~~987~~ ~~988~~ ~~989~~ ~~990~~ ~~991~~ ~~992~~ ~~993~~ ~~994~~ ~~995~~ ~~996~~ ~~997~~ ~~998~~ ~~999~~ ~~1000~~ ~~1001~~ ~~1002~~ ~~1003~~ ~~1004~~ ~~1005~~ ~~1006~~ ~~1007~~ ~~1008~~ ~~1009~~ ~~1010~~ ~~1011~~ ~~1012~~ ~~1013~~ ~~1014~~ ~~1015~~ ~~1016~~ ~~1017~~ ~~1018~~ ~~1019~~ ~~1020~~ ~~1021~~ ~~1022~~ ~~1023~~ ~~1024~~ ~~1025~~ ~~1026~~ ~~1027~~ ~~1028~~ ~~1029~~ ~~1030~~ ~~1031~~ ~~1032~~ ~~1033~~ ~~1034~~ ~~1035~~ ~~1036~~ ~~1037~~ ~~1038~~ ~~1039~~ ~~1040~~ ~~1041~~ ~~1042~~ ~~1043~~ ~~1044~~ ~~1045~~ ~~1046~~ ~~1047~~ ~~1048~~ ~~1049~~ ~~1050~~ ~~1051~~ ~~1052~~ ~~1053~~ ~~1054~~ ~~1055~~ ~~1056~~ ~~1057~~ ~~1058~~ ~~1059~~ ~~1060~~ ~~1061~~ ~~1062~~ ~~1063~~ ~~1064~~ ~~1065~~ ~~1066~~ ~~1067~~ ~~1068~~ ~~1069~~ ~~1070~~ ~~1071~~ ~~1072~~ ~~1073~~ ~~1074~~ ~~1075~~ ~~1076~~ ~~1077~~ ~~1078~~ ~~1079~~ ~~1080~~ ~~1081~~ ~~1082~~ ~~1083~~ ~~1084~~ ~~1085~~ ~~1086~~ ~~1087~~ ~~1088~~ ~~1089~~ ~~1090~~ ~~1091~~ ~~1092~~ ~~1093~~ ~~1094~~ ~~1095~~ ~~1096~~ ~~1097~~ ~~1098~~ ~~1099~~ ~~1100~~ ~~1101~~ ~~1102~~ ~~1103~~ ~~1104~~ ~~1105~~ ~~1106~~ ~~1107~~ ~~1108~~ ~~1109~~ ~~1110~~ ~~1111~~ ~~1112~~ ~~1113~~ ~~1114~~ ~~1115~~ ~~1116~~ ~~1117~~ ~~1118~~ ~~1119~~ ~~1120~~ ~~1121~~ ~~1122~~ ~~1123~~ ~~1124~~ ~~1125~~ ~~1126~~ ~~1127~~ ~~1128~~ ~~1129~~ ~~1130~~ ~~1131~~ ~~1132~~ ~~1133~~ ~~1134~~ ~~1135~~ ~~1136~~ ~~1137~~ ~~1138~~ ~~1139~~ ~~1140~~ ~~1141~~ ~~1142~~ ~~1143~~ ~~1144~~ ~~1145~~ ~~1146~~ ~~1147~~ ~~1148~~ ~~1149~~ ~~1150~~ ~~1151~~ ~~1152~~ ~~1153~~ ~~1154~~ ~~1155~~ ~~1156~~ ~~1157~~ ~~1158~~ ~~1159~~ ~~1160~~ ~~1161~~ ~~1162~~ ~~1163~~ ~~1164~~ ~~1165~~ ~~1166~~ ~~1167~~ ~~1168~~ ~~1169~~ ~~1170~~ ~~1171~~ ~~1172~~ ~~1173~~ ~~1174~~ ~~1175~~ ~~1176~~ ~~1177~~ ~~1178~~ ~~1179~~ ~~1180~~ ~~1181~~ ~~1182~~ ~~1183~~ ~~1184~~ ~~1185~~ ~~1186~~ ~~1187~~ ~~1188~~ ~~1189~~ ~~1190~~ ~~1191~~ ~~1192~~ ~~1193~~ ~~1194~~ ~~1195~~ ~~1196~~ ~~1197~~ ~~1198~~ ~~1199~~ ~~1200~~ ~~1201~~ ~~1202~~ ~~1203~~ ~~1204~~ ~~1205~~ ~~1206~~ ~~1207~~ ~~1208~~ ~~1209~~ ~~1210~~ ~~1211~~ ~~1212~~ ~~1213~~ ~~1214~~ ~~1215~~ ~~1216~~ ~~1217~~ ~~1218~~ ~~1219~~ ~~1220~~ ~~1221~~ ~~1222~~ ~~1223~~ ~~1224~~ ~~1225~~ ~~1226~~ ~~1227~~ ~~1228~~ ~~1229~~ ~~1230~~ ~~1231~~ ~~1232~~ ~~1233~~ ~~1234~~ ~~1235~~ ~~1236~~ ~~1237~~ ~~1238~~ ~~1239~~ ~~1240~~ ~~1241~~ ~~1242~~ ~~1243~~ ~~1244~~ ~~1245~~ ~~1246~~ ~~1247~~ ~~1248~~ ~~1249~~ ~~1250~~ ~~1251~~ ~~1252~~ ~~1253~~ ~~1254~~ ~~1255~~ ~~1256~~ ~~1257~~ ~~1258~~ ~~1259~~ ~~1260~~ ~~1261~~ ~~1262~~ ~~1263~~ ~~1264~~ ~~1265~~ ~~1266~~ ~~1267~~ ~~1268~~ ~~1269~~ ~~1270~~ ~~1271~~ ~~1272~~ ~~1273~~ ~~1274~~ ~~1275~~ ~~1276~~ ~~1277~~ ~~1278~~ ~~1279~~ ~~1280~~ ~~1281~~ ~~1282~~ ~~1283~~ ~~1284~~ ~~1285~~ ~~1286~~ ~~1287~~ ~~1288~~ ~~1289~~ ~~1290~~ ~~1291~~ ~~1292~~ ~~1293~~ ~~1294~~ ~~1295~~ ~~1296~~ ~~1297~~ ~~1298~~ ~~1299~~ ~~1300~~ ~~1301~~ ~~1302~~ ~~1303~~ ~~1304~~ ~~1305~~ ~~1306~~ ~~1307~~ ~~1308~~ ~~1309~~ ~~1310~~ ~~1311~~ ~~1312~~ ~~1313~~ ~~1314~~ ~~1315~~ ~~1316~~ ~~1317~~ ~~1318~~ ~~1319~~ ~~1320~~ ~~1321~~ ~~1322~~ ~~1323~~ ~~1324~~ ~~1325~~ ~~1326~~ ~~1327~~ ~~1328~~ ~~1329~~ ~~1330~~ ~~1331~~ ~~1332~~ ~~1333~~ ~~1334~~ ~~1335~~ ~~1336~~ ~~1337~~ ~~1338~~ ~~1339~~ ~~1340~~ ~~1341~~ ~~1342~~ ~~1343~~ ~~1344~~ ~~1345~~

Incipiunt questiones fratris gratiadei de esculo
 excellentissimi sacre paginis doctoris predicatorum
 ordinis per ipsum in florētissimo studio patanino
 disputate feliciter.

*Libreria de S.
 Pedro Ntr. de
 Toledo*

Questio

prima est. Utrum
 ens mobile et non
 corpus mobile sit
 subiectum natura-
 lis philosophie. Et videtur
 quod non. Id enim quod
 supponitur in scientia
 ex eo quod est subie-
 ctum proprie passionis
 est proprie subiectum
 scie: sed corpus sup-

ponitur in naturali philosophia ex eo quod est subiectum motus quod est propria
 et prima passio naturalis. ergo corpus est naturalis philosophie subiectum.
 Minoris declaratio est. quia motus supponitur in primo
 philosophorum. supposito autem motu necesse est sup-
 poni et motus subiectum quod est corpus: quia nihil mo-
 uetur nisi corpus. igitur ibidem supponitur corpus non propter
 aliud nisi quia est subiectum motus. Preterea cuius
 principia et proprietates considerantur in scientia est scie subie-
 ctum: sed in naturali philosophia sicut patet discurrendo per
 singulos libros eius inquiruntur principia et proprietates
 corporum. Unde in libro de celo philosophus dicit quod scientia de
 natura fere plurima videtur circa corpora magnitudi-
 nes et horum extrinsecas passiones et motus. adhuc autem
 circa principia quecumque talis substantie sunt. ergo cor-
 pus est subiectum in scientia naturali. Si dicitur quod non inquiruntur
 in scientia naturali in quantum sunt principia et proprietates corporum
 sed in quantum sunt principia entis mobile quod re est idem
 quod corpus non autem ratione. Contra. Queadmodum su-
 pradicta principia non inquiruntur in scientia naturali in quantum
 sunt principia corporum: sic etiam imo et multo magis non
 inquiruntur ibidem in quantum sunt principia entis cum sint
 principia corporum vltimum sumpti non autem entis. Inqui-
 runt autem in quantum sunt principia mobilis: sed corpus
 mobile non dicitur corpus in eo quod corpus sed in eo quod
 mobile: sicut et ens mobile non dicitur ens in eo quod
 ens sed in eo quod mobile. Sicut igitur dici potest quod in
 dicta scientia supradicta principia inquiruntur que sunt
 entis mobilis eo quod ens mobile non dicitur ens sim-
 pliciter sed secundum quod mobile: sic etiam dici potest quod ibi
 inquiruntur principia corporum mobilis: quia hoc non dicitur
 corpus in eo quod corpus sed in eo quod mobile. ergo corpus
 mobile est subiectum scie supradicte et magis quam ens
 mobile: sicut principia mobilis magis sunt principia cor-
 porum quam principia entis. Preterea eiusdem scie est
 considerare rem et modum rei: sed mobile additum enti non
 sicut dicitur quia ens dicitur non habet sed sicut modus qui
 dicitur. igitur si additio bona est ad eandem scientiam specta-
 bit considerare ens et mobile: sed scientia que considerat
 ens est prima philosophia. igitur et illa que considerat mobilis
 est: sed hec est philosophia naturalis. ergo naturalis philosophia est philosophia prima.

quod est impossibile. Si dicitur quod est duplex modus
 entis quia generalis et specialis: et generalis pertinet ad eandem
 scientiam ad quam pertinet considerare de ente: non autem spe-
 cialis. mobile autem est specialis modus entis non ergo
 scientia ad quam spectat eius consideratio sit prima philosophia

Contra modus entis specialis non est modus entis in
 vniuersali sed est modus alicuius specialis entis. Si igitur
 mobile est non generalis sed specialis modus erit necessa-
 rio modus non entis vltis sed huius entis. Nunc autem
 ita est quod quilibet modus si dicitur esse immediata additio
 et bona addendum est ei cuius est primo modus. Si igitur
 mobile est modus entis specialis quod necessario est cor-
 pus necessario debet primo adiungi corpori et non enti
 cuius est modus secundario et ex consequenti. et sic dice-
 tur corpus mobile maxime: primo: et propriissime: ens
 autem mobile erit dictum secundarium: sed quod primum est dicitur
 poni subiectum scie et non secundarium. ergo corpus mo-
 bile et non ens mobile est subiectum in naturali philosophia.

Preterea quicumque aliqua passio per accidens se-
 habet ad aliquod subiectum de ipsa respectu illius subie-
 cti non potest esse scientia nisi per accidens: sed mobile per acci-
 dens se habet ad ens cum nec essentialiter conueniat enti
 nec consequatur principia entis in quantum ens. ergo de
 mobili respectu entis non potest esse nisi per accidens scientia.
 si itaque naturalis philosophia est de mobili adiuncto enti: naturalis
 philosophia erit scientia per accidens quod est inconueniens. Si
 dicitur quod naturalis non considerat mobile sicut passionem sed
 sicut rationem formalem sui subiecti. sicut autem passiones
 considerat motum qui per se conuenit enti mobili eo quod
 consequitur principia eius: et ideo naturalis philosophia est scientia per se.

Contra prima propria passio dicitur aptitudinem et
 non actum: sed motus dicitur actum et mobile aptitudi-
 nem. igitur mobile et non motus considerat naturalis philosophus
 sicut propriam passionem. Preterea propria passio
 semper inest suo subiecto: motus autem nec enti mo-
 bili nec enti semper inest: quia contingit dare ens mo-
 bile absque eo quod moueatur actu. ergo motus non est
 propria passio entis mobilis. constat autem quod hoc quod
 dicitur mobile est essentialiter corpori et consequitur principia
 corporum et semper ei inest eo quod semper si est dare corpus
 est dare mobile. ergo mobile est propria passio corporum
 et corpus ipsi subiectum: et similiter est subiectum proprium
 naturalis philosophie in quantum eius passio est mobile. Pre-
 terea in sexto philosophorum probatur: quod quicquid mouetur est
 corpus: et ideo etiam corpus contingit moueri et sic motus
 conuertibiliter inest corpori: sed quod conuertibiliter inest
 alicui et non est de essentialitate eius est propria passio ipsius.
 motus autem conuertibiliter inest corpori ut probatum est et non
 est de essentialitate corporum: ergo est propria passio eius: ergo et corpus
 est proprium scie naturalis subiectum. Preterea quod
 est de intellectu alicuius: aut pertinet ad eius essentialitatem:
 aut est proprium eius subiectum. nunc autem corpus est de
 intellectu motus. quia non contingit intelligere motum non
 intellectu corpore: et non est corpus de essentialitate motus
 igitur est proprium ipsi subiectum: et per consequens est proprium sub-
 iectum naturalis philosophie. Preterea si totum aliquod est subie-
 ctum totius et partis scie debet esse subiectum per se subiecti
 vltis: nunc autem scientia libri de anima est per se scientie naturalis et



Questio

ibi agit de anima que non est pars subiectiva entis mobilis. ergo ens mobile non est subiectum totius scientie naturalis. Preterea subiectum scientie est predicabile de omnibus de quibus agit in scientia sed ens mobile non predicatur de omnibus de quibus agit in naturali philosophia: cum non predicetur de motore separato de quo agit in libro physicorum. ergo ens mobile non est subiectum scientie naturalis. Preterea in libro primo physicorum secundum omnes agitur de principiis subiecti scientie naturalis: sed principia de quibus agitur ibi sunt materia forma et privatio: et hec non sunt principia nisi corporis. ergo corpus est proprie subiectum in philosophia naturali et non ens mobile. Preterea quandoque aliqua duo predicata tali ordine attribuuntur alicui quod primum est ratio attributionis secundum: quicquid est ratio et causa quare alicui attribuitur primum est etiam ratio et causa quare eisdem attribuitur et secundum. Nunc autem sic est quod hec duo que sunt esse mobile et esse consideratum naturalis philosophie tali ordine attribuuntur enti. quod esse mobile est ratio quare sibi attribuitur esse de consideratione scientie naturalis. ergo quicquid est ratio quod esse mobile enti attribuitur est etiam ratio quod sibi attribuitur hoc quod est esse de consideratione scientie naturalis. Constat autem quod ens non est ratio corporis quod sit mobile. quia si ideo corpus esset mobile quia est ens: tunc omne ens esset mobile. quod falsum est. est tamen corpus enti ratio quod ens ipsum sit mobile. unde et omne corpus est mobile. ideo corpus ratione sui est de consideratione naturalis philosophie: et ens non ratione sui sed ratione corporis. Quod autem ratione sui in scientia consideratur: etiam illa ratione ipsius est proprium subiectum scientie. ergo corpus est proprium subiectum naturalis philosophie.

Preterea. quando aliqua due scientie se habent sicut subalternas et subalternata earum est idem subiectum: magis tamen minusque contractum. quia scientia subalternata contrahit subiectum subalternantis: sicut habemus primo posteriorum. habent autem se modo predicto scientia de celo et scientia physicorum. ergo imparum debet esse idem subiectum: magis tamen ac minus contractum. Nunc autem in libro de celo agitur de mobili ad situm: quod non est nisi corpus. igitur eius subiectum est corpus mobile ad situm. et per consequens subiectum libri physicorum quod est idem cum subiecto totius naturalis philosophie est corpus mobile simplex. Et preterea idem sunt ens mobile et corpus mobile cum sibi inuicem conuertantur. ergo si corpus mobile non est subiectum naturalis philosophie: nec per consequens ens mobile erit subiectum ipsius. In contrarium est quod philosophus ait in xi. metaphysice: ubi dicit quod naturalis principia et proprietates speculantur entium in quantum mota. Respondeo dicendum de hac questione diversas opiniones esse. Quidam enim non profunde et subtiliter sed solum superficialiter aspicientes rationem subiecti scientie naturalis videt

tes quod philosophia est de naturalibus. Naturalia autem sunt quorum principium est natura. natura vero est principium motus: et moveri non potest aliquid nisi sit corpus. Concluserunt et concludunt quod corpus motum vel corpus mobile debet esse proprium subiectum ipsius non ens mobile. Quod autem hoc habeat veritatem ulterius conati sunt et conantur triplici modo ostendere. Et primum est quia omnis scientia que est vere scientia debet ea que considerat ad per se nota et immediata reducere. est autem naturalis philosophia scientia et vere scientia. debet igitur facere ad aliquid per se nota et immediata reductionem. hoc autem ut dicitur est impossibile: si non corpus mobile sed ens mobile ponatur subiectum ipsius. Cuius rationem assignant. quia quando aliqua scientia versatur circa passionem sic ut sit scientia passionis illius si non accipitur in ipsa aliquod subiectum equatum illi passioni ea que de passione dicitur ad per se nota et immediata reducere non potest. Huius autem dicti declaratio est. quia tunc solum fit reductio ad immediata quando fit ad prima rerum principia. prima autem principia cuiuslibet passionis sunt principia subiecti et ideo tunc ea que de passione dicuntur sunt reducta ad immediata quando est facta reductio usque ad ipsa principia subiecti. Si autem scientia que est de passione aliqua non accipiat pro subiecto sue passionis aliquid cuius principium considerat: sed id cuius consideratio spectat ad scientiam altiorum: cuius nulla scientia suos limites transcendat: talis philosophia ad illius subiecti principia suam passionem reducere non poterit: et per consequens nec reductionem facere ad immediata et per se nota. talis autem ut adiunguntur est naturalis philosophia: dato quod ens mobile sit ipsius subiectum. Cum enim huius passio que est mobile non equetur enti nec naturalis philosophus consideret ens nisi respectu huius passionis quam transcendere non potest: etiam principia entis ea que de dicta passione dicitur reducere non poterit: nec per consequens in principia eius quod accipitur ut subiectum sue passioni coniunctum. Non igitur faceret ad immediata reductionem nec esset vere scientia nisi acciperet aliquid aliud ab ente coniunctum mobili ut subiectum et sibi equatum sic ut ea que considerat possit in ipsius principia reducere hoc autem non potest esse nisi corpus. ergo corpus mobile est subiectum ipsius et non ens mobile. Hoc etiam declarant illo medio quo dicitur quod ad eandem scientiam spectat considerare ens et modos entis: et illo iterum quo probatur naturalem philosophiam esse scientiam per accidens si ens mobile sit subiectum eius. sed quia iste rationes sunt multo melius declarate in obiectionibus quam in rationibus eorum ideo hic non ponuntur ne contingat nos eandem rationem frequentius replicare. Sufficit enim vidisse iam solas rationes per quas probant quod ens mobile non possit esse subiectum in naturali philosophia: et si finem veritatem rationes sumptis eo modo quo

ab eis assignate sunt sint pueriles et viles in comparatione ad modum quo sunt in obiectiōibus posite. Nobis autem inter alias quadruplex via occurrit ad presens declarandi apertissime impossibile esse quod dicitur videlicet quod ens mobile non sit subiectum naturalis philosophiæ. Et prima quidem via est illa per quam incessit doctor noster sanctus thomas ad huius probationem. et sumitur ex eo quod nulla scientia probat suum subiectum esse. Videmus enim quod philosophus naturalis probat esse corpus mobile: cum in vi. physicorum probet omne mobile esse corpus. Et hoc quidem esset impossibile fieri si non ens mobile sed corpus mobile esset subiectum in ista scientia. Ut autem hec via declarandi propositum plenius intelligatur sciendum est quod aliter inquiritur et declaratur entitas rei simplicis et aliter compositi alicuius. Nam entitas rei simplicis declaratur et inquiritur proprie ex ipsa sui nominis significatiōe: inquirendo scilicet et declarando utrum nominis significatum habeat possibilitatem vel impossibilitatem ad esse. si enim ostendatur habere impossibilitatem ad esse ostensum erit quod sit impossibile ipsum poni in actu essendi: et ulterius quod non sit ponibile in rerum natura: et per consequens quod sit nihil. hoc enim dicimus nihil quod in rerum natura poni vel esse non potest. Si autem econtrario ostendatur quod illud significatum habeat possibilitatem ad esse declaratum erit statim quod possit stare sub actu essendi: quod possit poni in natura rerum: et per consequens quod non sit nihil sed aliquid. omne enim huiusmodi positivum quod poni potest in rerum natura est aliquid. quia non aliunde hoc totum habet nisi quia ipsum eius significatum est componibile ipsi esse. quicumque probaret hanc compossibilitatem de eo: de necessitate etiam probatiōe que est per causam ipsum probaret esse aliquid et non nihil. Entitas autem rei compositæ proprie inquiritur et declaratur ex partium componentium compossibilitate. Cum enim compositum consurgat ex compositiōe earum: si compositio est ponibilis: et compositum est ponibile. et si compositio est imponibilis: et compositum similiter est imponibile. tunc autem compositio est imponibilis quando partes compositiōnis sunt sibi inuicem incompossibiles. Nam si sunt sibi incompossibiles sunt sibi inuicem et incompossibiles: et per consequens ex ipsis fieri compositio non potest nec compositum aliquod consurgere in natura. econtrario autem per omnem modum tunc dicitur esse compositio ponibilis quando compositiōis partes compossibilitatem habent ad inuicem. nam si hanc habent: compossibiles ad inuicem sunt: et compositum ex ipsarum compositiōe potest consurgere in natura. quod ideo est aliquid et non nihil. Nec autem omnia patent per exempla. Quia enim hircus est incomponibilis ceruo est et incomponibilis sibi: nec compositio potest esse ex eis ex qua in natura consurgat hoc compositum quod est hircus ceruus. et ideo est hoc omnino nihil: cum nullo modo sit ponibi-

le in natura. Corpus autem et anima rationalis non sunt incomponibilia: ac per consequens potest esse ex eis compositio ex qua in natura consurgat hoc compositum quod est homo: propter quod etiam homo est aliquid et non nihil. Et quia quod sit aliquid non habet aliunde nisi ex compossibilitate partium: cum propter ipsa sit ponibilis in natura. ideo quod curque probaret corpus et animam rationalem sibi compossibilia esse probaret de necessitate eorum hominem non esse nihil sed aliquid. quod est probare entitatem hominis. Sic igitur declaratum est quod tunc proprie probatur entitas alicuius compositi quando probatur compossibilitas partium componentium ipsum. Nunc autem sic est quod corpus mobile non dicitur corpus solum sed istud totum coniunctum quod est corpus mobile. probare igitur perfecte entitatem ipsius tunc contingit quando probatur unum componentium esse componibile alteri: sicut corpus mobile vel econverso. Nam si unum non compateret secum aliud: non esset tunc possibile poni in natura hoc coniunctum quod est corpus mobile. et sic non esset aliquid sed nihil. Constat autem quod naturalis philosophus non solum probat quod unum predictorum aliud secum patitur: sed etiam quod sic compatitur quod aliud necessario secum ponitur. quauis enim non probet entitatem mobilis simpliciter: supponens tamen ens mobile esse et supponens motum quod neganti ipsum mobile non potest probare probat ulterius quod ipsum mobile quod supponitur compatitur secum corpus: et taliter quod necessario si ipsum mobile est oportet etiam esse et corpus. ostendit ergo quod non est impossibile mobile coniungi corpori ut sic istud compositum quod est corpus mobile sit imponibile in natura et non nihil: imo potius quod est ponibile et necessarium ipsum coniungi sibi ostendens in vi. physicorum: quod necessario quicquid mouetur est corpus. et sic supposito ens mobile esse: probatur quod necesse est poni in natura hoc coniunctum quod est mobile corpus siue corpus mobile. Uerum igitur est dictum doctoris nostri scilicet quod naturalis probat entitatem corporis mobilis siue probat ipsum esse aliquid et non nihil: supponens tamen mobile siue ens mobile. quia mobile includit ens non probans esse in natura rerum. Uerum est ergo et principale videlicet quod non corpus mobile sed ens mobile est subiectum naturalis philosophiæ. Et hec est via firmissima et indissolubilis per quam incessit doctor noster.

Ut autem appareat euidentius insolubilitas eius ponam solutiones aduersariorum quas ideo dabam quia breuiter non intelligebat rationem. Parcat uero nobis si plix loquimur: quia pertinacitas aliquorum hanc requirit. Dicunt igitur primo quod naturalis philosophus si possit probare corpus mobile esse posset etiam probare motum esse: sed motum probare non potest: quia hoc supponitur in primo physicorum: igitur nec corpus mobile. probat tamen omne corpus esse mobile et omne mobile esse corpus. quod non est probare corpus mobile esse: sed motum corpori inesse conuertibiliter. Sed quod sic dicentes in omnibus deficiat et uocem propriam ignorent

Questio

aperte ostendit. Nam quāuis negātibz esse ens mobile sicut negabant pmenides et melisus: non possit naturalis probare qd sit motus: sicut nec neganti causam potest causatū per causam pbari. si quis tamē ens mobile non negasset sed motum sibi per causam: quia per diffinitionē subiecti siue entis mobilis naturalis potuisset et posset ostendere motū esse eo qd semp naturaliter pcedendo per diffinitionē subiecti potest ppuz de subiecto demonstrari. Ulterius etiā dato qd naturalis nō supponēdo mobile sed probādo pbaret etiā corpus mobile: necessariū esset dicere qd probaret et motū. Nunc autē quia non probādo mobile sed supponēdo qd sit ens mobile probēt corpus mobile esse: non est dicendū qd ideo pbat et motum: sed potius quasi supposito motu sicut et ente mobili probet entitatez corporis mobilis. Ulterius etiā falsum dicūt cū adiūgunt qd philosophi probat omne corpus esse mobile et omne mobile eē corpus. Quāuis enim probet simpliciter in sexto physicozū omne mobile esse corpus: nunq̄ tamē probat simpliciter omne corpus esse mobile: sed addendo ad corpus hoc qd dico physicū vel naturale. In libro enim de celo et mūdo in secundo capitulo p̄mi: ostendit omne corpus naturale eē mobile fm locū probās demonstratiue: quia per diffinitionē nature qd motus insit corpori physico vel naturali. et cum nō aliter demonstrēt esse passio nisi demonstrando eam inesse pprio subiecto si corpus naturale vt dicūt esset ppum subiectum motus de necessitate ibi philosophi motus esse demonstratiue probassz. quod est cōtra dictū eozū. Ulterius etiam cōtradictoria dicūt quādo adiūgūt qd philosophi probat omne mobile necessario esse corpus: nec tamē probat esse huius cōiuncti quod est corpus mobile. quia sicut declaratum est demonstrare compossibilitatē et necessariam habitudinē partis alicuius cōiuncti ad aliā partē est ppriissime demonstrare cōiuncti entitatem que nō nisi ex illa habitudine necessaria partium compositionis vel ex eozū compossibilitate confurgit. Patet igitur qd plena fuerit falsitati bus hec solutio. Soluūt autē adhuc aliter. dicūt enim qd naturalis nō non posset probare suū subiectum esse in eo qd naturalis sicut in veritate nō potest: posset tamē et potest illud probare subinducendo personā primi philosophi: et sic pbaret corpus mobile esse si inueniret hoc quod probaret: sed hoc quod nihil sit dictū aperte ostendit. Quādo cūq; enim aliquis artifex probat aliqd per p̄cipia sue artis id demonstrat fm qd talis artifex est et non subinducendo personā alterius artificis. quia non ob aliud quis assumit personā alterius artificis nisi vt per illius p̄cipia ostēdat quod per sua non potest. Nunc autē naturalis philosophus per sue artis ppriissima p̄cipia ostendit compossibilitatē vel necessariā habitudinē mobilis ad corpus siue entitatē necessariā

corporis mobilis supposita entitate entis mobilis. Assumit enim qd omne quod mouet partim est in termino a quo et partim in termino ad quē quia dum totum est in termino a quo non mouetur: dum totū est in termino ad quē similiter: quia tunc completus est motus. et hec omnia sunt naturalissima p̄cipia ex quibus concludit id qd mouet esse diuisibile et corpus. Item ad idem assumit hoc p̄cipiū notissimū in naturalibus. omne quod mouet impossibile est p̄us maius moueri ipius q̄ aut equale aut minus. et per hoc p̄cipium ppriissimū et notissimū in naturali scientia deducit et probat mobile necessario esse corpus: et sic habere necessariā habitudinē ad ipm. et per consequēs qd istud cōiunctū: corpus mobile supposita entitate entis mobilis: necessario sit aliquid et non nihil. Cum igitur naturalis per ppria p̄cipia probet corpus mobile esse: dicet qd hoc probat subinducendo primū philosophū: est ignorare p̄cipia scientie naturalis. patet igitur iam qd naturalis philosophi per se probat entitatē huius cōiuncti quod est corpus mobile. Et sic declarata est perfecte prima via declarandi quod volebam sumpta ex eo qd nulla scientia probat suū subiectū esse. Secūda via ad declarandū propositū sumitur ex modo quo corpus cadit sub cōsideratōe naturalis philosophie per quā sic proceditur. Corpus: aut est subiectū naturalis scientie in eo qd corpus: aut in eo qd tale corpus. vtp̄ta quia potest poni existere in potentia ad actū aliquē. Si dicatur qd in eo qd corpus. Cōtra illud quod est subiectū naturalis philosophie est subiectū motus: et eo ipso est ppriū subiectū scientie naturalis quo est subiectū motus et non aliter: sed corpus in eo qd corpus non est ppriū subiectū motus. ergo corpus inquantū tale non erit etiam subiectū scientie naturalis. Quō autē corpus in eo qd corpus non sit ppriū subiectum motus apertissime demonstrat. Id enim quod est ppriū subiectū motus inquantū hmoi non dicit aliquid absolutū: nec aliquid absolute participans actū fm qd accipit ex tertio physicozū tam ex textu q̄ ex commēto: sed potius est aliquid ordinatū in actum qui acquirit per motū. Cuius ratio est. Quia omne quod mouet necessario eo ipso qd mouetur ordinat in id quod mouetur: et omnis motus de necessitate hūc ordinē includit et ideo tali ordine subtracto: necessariū est subtrahi motum. Si igitur aliquod ens accipiat quod ratione sui non dicat aliquid ordinatū ad actum siue ad terminū motus sed potius dicat absolute participans actum: hoc ratione sui nullo modo mouebitur nec erit subiectum motus: sed potius erit quid immobile omnē motum excludens. Si enim ratione sui moueri posset: ratione etiam sui diceret quid ordinatū ad actum: sed positū est qd non dicat ratione sui aliquid ordinatū ad actum sed potius qd dicat aliquid absolute exis in actu

ergo hoc ratione sui nullo modo mouebit. Constat autem quod corpus in ratione qua corpus est non dicit aliquid ordinatum in actum vel in terminum motus: sed potius dicit absolute quid participans actum. quod patet ex ipsa nominis significatione. Nihil enim aliud est corpus et nihil aliud dicitur nomine corporis nisi substantia manens sub actu corporis: et per rationem corporis non dicitur ordinatum sed potius absolute ex natura sub aliquo actu. Si igitur nihil est subiectum motus nisi in ratione qua dicit quid ordinatum ad actum qui per motum acquiritur: et corpus in ratione qua corpus est non dicit aliquid ordinatum ad actum sed absolute quid manens sub actu iam habito: concluditur de necessitate quod corpus in ratione qua corpus est non fit mobile nec possit aliquo modo esse subiectum motus: nec per consequens naturalis philosophie. Si ergo corpus motui subicitur et est aliquo modo subiectum motus: nec hoc est in ratione qua corpus est: quia sic dicit absolute quid manens sub actu: oportet quod sibi hoc conveniat in quantum accipitur ut existens in potentia ad actum: qui per motum acquiritur. nam et hec potentia necessario ratione sui includit ordinem ad actum et e converso ordo ad terminum motus includit hanc potentiam. Nunc autem sic est quod quantumcumque aliquid de se habeat rationem entis in actu: in quantum tamen accipitur sicut quod existit in potentia ad actum aliquid quem habet rationem entis in potentia et non entis in actu. Si ergo corpus est subiectum motus solum in ratione qua in potentia existit ad actum qui per motum acquiritur: concluditur de necessitate quod ipsum motui subicitur solum in quantum participat rationem entis in potentia ad actum predictum. Constat autem quod eadem est ratio entis in potentia ad dictum actum et ratio entis mobilis. quia ens in potentia nihil aliud dicitur quam ens ordinatum in actum. Unde idem est dicere: ens in potentia ad actum qui per motum acquiritur: et ens ordinatum in actum talem. Ens etiam mobile nihil aliud dicitur quam ens ordinatum in actum qui acquiritur per motum. et hec est ipsa ratio entis mobilis. Si igitur corpus non est subiectum motus propter ipsam corporis rationem: sed in quantum participat ipsam rationem entis in potentia ad id quod acquiritur per motum. et hoc ut declarauimus est omnino ipsa ratio entis mobilis: concluditur de necessitate quod corpus non in ratione qua corpus sed in quantum participat rationem entis mobilis est proprium subiectum motus: et similiter naturalis philosophie. sed si corpus non subicitur motui nec naturali philosophie: nisi quia participat rationem entis mobilis: cum diffinitio talis non debeat sibi ex eo quod corpus est: sed ex eo quod ens mobile. sicut nunquam dicitur esse diffinitio aliqua alicuius: nisi sicut quod est ipsum diffinitum: et ens mobile non per aliud sed per se habeat diffinitionem illam suam propriam: sicut corpus de se habet suam propriam rationem et hominem suam: et sic de singulis. concluditur de necessitate quod

corpus non sicut se sed sicut aliud. quia non sicut rationem suam sed sicut rationem alterius subicitur motui et naturali philosophie: et ens mobile sicut se et non sicut aliud. quia sicut rationem suam et non sicut rationem alterius sicut subiectum proprium tam naturalis philosophie quam motus. Est autem ista multum decens et rationabilis conclusio. Cum enim sic se habeat subiectum proprium ad sciam ut proprium obiectum ad potentiam. quemadmodum illud dicitur proprium obiectum cuiuslibet potentie quod ratione sui ipsius et non ratione alterius respicit ipsam potentiam: sicut visibile se habet ad visum: sic etiam et illud debet dici proprium scie subiectum quod ratione sui et non propter rationem alterius ipsam respicit sciam. Nunc autem ut declaratum est ipsum ens mobile per suam rationem et non per aliam respicit naturalem philosophiam. et ideo convenientissime ponitur proprium ipsius subiectum.

Est autem ulterius notandum quod mobile non immediate respicit corpus: quia nec corpus immediate et per se ponitur in diffinitione mobilis. Mobile enim ex ipsa prima sua significatione dicitur ens ordinatum in terminum motus: sicut ex ipsa significatione primaria dicitur id quod existit in potentia in terminum illud quod in quantum habet ut declarauimus idem est quod ens in potentia in dictum terminum. et hoc idem est ens quod sic est ordinatum. hoc autem si materialiter in re sit idem quod corpus: in ratione tamen et formaliter non est idem. Unde nec hoc quod dico mobile respicit corpus quod corpus: sed quod ens in potentia. et quod hoc quod dico ens in potentia in terminum motus: non accipit immediate corpus sed ens: quia hoc in se et sua ratione includit. ideo nec etiam mobile debet immediate accipere corpus sed ens. ut dicatur non corpus mobile sed ens mobile. Nam hoc quod dico ordinatum in terminum motus: quod est idem quod mobile sicut sui rationem non dicit corpus quod est de se ens in actu dicit tamen necessario de ratione sui hoc quod dico ens. quia dicitur ens in potentia de cuius ratione est ens. nam et potentia et actus non sunt modi contrites corpus in eo quod corpus sed in eo quod ens: quod sunt modi entis immediate. Quia igitur mobile sicut et quid in potentia directe respicit ens: corpus autem non directe. quod non quod corpus: sed quod ens in potentia: etiam necessarium est hoc quod dicitur ens mobile sit proprium et primarium dictum. hoc autem quod dico corpus mobile non est proprium et primarium dictum: sed ipsum proprium et secundarium. et quod quod primarium est in consideratione scie est proprium eius subiectum: et non quod secundarium ideo ens mobile est proprium subiectum scie naturalis: et non corpus mobile. et sic completa est secunda via demerandi quod ens mobile sit subiectum naturalis philosophie: sumpta ex modo quo corpus consideratur a physico. Tertia via ad declarationem eiusdem sumitur ex compatatione naturalis philosophie ad doctrinalem. sicut enim philosophum in quarto methaphisica. si nulla substantia esset preter physicas: naturalis philosophia esset prima philosophia. hic igitur sic procedit. si nulla substantia esset preter physicas methaphisica. quod non esset: remaneret tamen et physica et mathe. Cuius declaratio est. quod sicut remoto subiecto et subiecti proprietatibus: remouetur scia que est de subiecto illo. sic etiam posito subiecto et subiecti proprietatibus: necesse ponitur sciam que illa considerat. Nunc autem sic est quod ablata omni substantia preter physicas: et si

Questio

tollat subiectū p̄me phie vt patebit in seq̄nti q̄de
nō tñ tollit subiectū physice nec etiā mathematice.
Substātia.n.physica est quā cōsiderat nāl. Sub
stātia etiā physica ē necessario q̄sta. z hanc cōside
rat mathematic. posita igit sola substātia physica
ponit nccio subiectū tam nālīs q̄ doctrinalis
phie: z p̄ oīs h̄ vtraq; scia. Nūc aut sic est fm di
ctū phi q̄ istis duab; sciētīs remanētibus solis:
nālīs phia ē phia p̄ma: s; p̄ma phia d; eē de sub
iecto p̄ori subiectis oīm aliaz. igit cum nālīs scia
etiā remanēte mathematica phia p̄ma dicat: o; nccio
q̄ subiectū ip̄i sit p̄us subiecto mathematice.
h̄ aut est ip̄ossible si nō ens mobile sed corp̄
mobile ponat subiectū scie nālīs. Cui; declaratio ē
q; illud ē p̄us a quo nō cōuertit ex n̄di oīa. Nūc
aut videm; q; si in intellectu ponit corp̄ q̄stū: nō
ideo ponit ibi corp̄ mobile: sed si ibi ponit corp̄
mobile nccio ponit corp̄ q̄stū. oē.n.corp̄ mobili
le est corpus q̄stū z nō ecōuerso. z s; si intelligit
corp̄ mobile intelligit de necessitate corp̄ q̄stū z
nō cōuertit. Est igit corp̄ q̄stū p̄us corpe mobili:
z p̄ oīs mathematica est p̄or physica si hui; sub
iectū ē corp̄ mobile. ip̄is igit duab; solis remanē
tib; est mathematica phia p̄ma z nō physica. q̄
est o; phm. Nō solū aut h̄ ē o; phm sed etiā cōtra
veritatē. Cui; declaratio est. q; cōsideratio p̄ime
phie debet eē vlioz cōsideratōe cuiuslib; alterius
scie z ad plura se extēdere. physica autē est talis
respectu mathematice z nō ecōuerso. mathema
tic; aut se nō extēdit ad cōsiderandū nisi ea solū q̄
sunt in genere quātitatis: sed nālīs se extēdit ad
cōsiderandū omnia q̄ cadūt sub motu vel mutatōe
vel que sunt vna res cū eis. z q̄a eozū que sunt in
p̄dicamēto substātie multa cadūt sub mutatōe
extēdit se physic; ad cōsiderandū res hui; p̄redi
camēti. Quia mot; est etiā in quātitate z q̄litate
z vbi: z quia est idem cū actione z passiōe z h̄ in
ip̄o fundant. Et quia quādo derelinquit ex tem
pore quod est passio motus: z quia situl cōtinue
renouat. ideo ad res oīm istoz p̄dicamētoz cōsi
deratio naturalis philosophi merito se extendit.
Patet igit q; vniuersalior sit cōsideratio physici
q̄ mathematici: cum hic se extendat solū ad res
quātitatis: ille vero fere se extendat ad entia sin
gulozū p̄dicamētozū. igit de necessitate oportet
q; ablata methaphisica naturalis sciētia sit philo
sophia p̄ma z maxime vniuersalis z non mathe
matica: z p̄sequēs sibi dandū est p̄ subiecto: nō
aliquid sp̄ale sicut mathematice cui dat q̄stū: sed
aliquid vniuersale z cōe quodāmodo entib; oīs
p̄dicamētozū. quod esse nō potest nisi ens mo
bile. Unde z phus hoc vidēs signant dicit semp
mathematicaz versari circa quid sp̄ale sicut circa
q̄stū: physice vō nunq; dat sp̄ale ens vt corp̄ vel
aliquid tale: sed semp ens contractū per motum.
Unde in xi. metha. dicit. Mathematica circa ali
quā partē cōueniētis materie facit theoriā: puta
circa lineas: aut angulos: aut nūeros: aut reliquo

rū aliquid quantoz. de physica aut ait nālīs acci
dentia z p̄ncipia speculat entū in q̄stuz mota. Si
aut vellem; videre quō ens motū vel mobile vni
uersali; est q̄sto accipiēdu; est quod dicit doctor
noster de mobili in suis q̄onib; disputatis. Ait. n.
ibi q; mobile habet duplicē acceptiōez. Vnā q̄dē
inquantū opponit ad immobile non subijcibile mo
tui: z sic mobile est idē quod subiectū mot;: z oē
tale est q̄stū corpus z ecōuerso. Aliā acceptiōem
h̄nt inquantū ens motū opponit ad ens fixum z
stans in sua entitate sic q; vniuersali; idē remoue
ri non p̄t: z sic dicit ens mobile nō solū corpus
subijcibile motui: sed omne quod nālīter potest
pdere suā entitatē: cuiusmodi sunt nō solū corpa
sed forme substātiales generabiliū z forme acci
dentales que non sunt corpa q̄sta. z q; mobile
v̄r sumptū includit vel continet sub se mobile ac
ceptū vtroq; modo: iccirco ens mobile vniuersa
liter sumptū quo modo est subiectū nālīs phie ē
vniuersali; corpe q̄sto: z p̄ consequēs naturalis
scia est vniuersalior mathematica z eēt p̄ma phi
losophia si methaphisica tolref. quod totū tolli
tur vt declaratū est si non ens mobile sed corpus
mobile ponat p̄p̄m subiectū in sciētia naturali.
Et hec est tertia via ostendēdi p̄positū sumpta ex
cōparatōe physice ad mathematicā. Quarta
via adhuc sumit ex ip̄a diffinitōe motus. Cōstat
enim q; illud est p̄p̄ie subiectuz alicui; scie quod
est p̄p̄iū subiectū p̄p̄ie passiōis sed in sciē
tia illa cōsiderate. p̄p̄ia vero passio q̄p̄imo
cōsiderat naturalis est ip̄se motus. Videamus
igit quid sit subiectū p̄p̄iū motus. hoc enī v̄so
statim apparebit quid sit p̄p̄iū subiectum sci
entie naturalis. Est autem id p̄p̄iū subiectum
motus per quod datur motus diffinitio. Ad cui
us intelligentiā cōsiderandū est q; multiplices
diffinitiones inueniūtur. Quedaz eteniz sunt que
non dantur per additāmētum alicuius quod sit
extra essentiā diffiniti. Et quedam sunt que dan
tur necessario per additamenta. Cuius diuersita
tis ratio est. quia cum diffinitio dicat entitatem
diffiniti: ea que entitatem habent perfectam per
sua essentialia absq; eo q; ip̄a alicui extrinseco cō
iuncta sint possunt etiam absq; alicuius extrinse
ci additamento per sua essentialia perfectam ha
bere diffinitōem. que autem perfectam entitatez
non habent per sua essentialia nisi alicui extrinse
co coniuncta in essendo perfectā etiā diffinitōem
habere non p̄nt si est additāmēto illi; extrinseci.
Nūc aut sic est q; substātie entitatē p̄ sua eēntia
lia nō cōiuncta alicui extrinseco cū non recipiant in
subiecto p̄fectā habēt. q; z per ip̄a diffiniri debēt
absq; nulli; extranei additāmēto. Accidentia nō
habent diffinitōez perfectā sine additāmēto sub
stātie vel subiecti quod illi; entitat; p̄ncipiū est z
cā: sicut z p̄ncipioz eiusdē. Sic igit iam v̄sa ē dif
finitionū diuersitas. z cū hęc ponatur iam ap
paret q; in diffinitōe accidentiū perfecta semper

debet apponi subiectū: et quod motus est accidens ideo oportet quod subiectū apponatur in diffinitione ipsius: et quod est accidens propriū quod considerat naturaliter: ideo oportet quod propriū subiectū naturalis philosophie in eius diffinitione ponatur. Videamus igitur que sit perfecta motus diffinitio: quod tunc statim videbitur quid sit propriū subiectus motus et scientie naturalis. Perfecta autem motus diffinitio est illa qua dicitur: Motus est actus existentis in potentia inquantum habet. Ens autem in potentia non est idem secundum rationem ut supra declaratum est cum ipso corpore: est tamen idem secundum rationem cum ente mobili: sicut supra patuit et philosophus vult in tertio physicorum ubi illam ostendit diffinitionem perfectissimam esse: Idemitas vero rationis est que facit perfectam et omnimodam idemitatem subiecti. ergo omnino idem subiectū est ens in potentia inquantum habet et ens mobile. Ens igitur mobile est propriū et perfectus subiectus: tam motus quam naturalis philosophie. Est autem considerandum: quod sicut motus non dicitur corporis actus in potentia: sed entis in potentia: sic etiam cum habet quod dicitur in potentia inquantum habet dicat ipsam mobilitatem non oportet etiam dici actus corporis mobilis sed entis mobilis. et sic iam per quartam viam sumptam ex diffinitione motus: patet quod necessarium est dicere: ens mobile esse subiectū scientie naturalis et non corpus mobile. Motuum autem dicentium sunt: patet quod puerile est. non enim mobile considerat philosophus ut propriam passionem: sed potius ut modum et rationem formalem sui subiecti: quod est habet totum quod dicitur ens mobile cuius prima et propria passio est motus qui fluit a principis entis mobilis quam naturalis de se considerat et ad que potest et motum et omnia que de motu considerat reducere. aliorum vero motuorum defectus per sequentia apparebit.

Ad primum igitur argumentum iam patet responsio. dato enim quod motus supponitur in primo physicorum et sicut proprium subiectum motus. non ideo tamen concludendum est: quod supponitur corpus. sed ens mobile: quod hoc est proprium subiectum motus: ut ostensum est: et non corpus. unde et antiqui philosophi ut permenides et melissus: concedebant esse corpus et tamen negabant esse motum: et ens mobile. Patet etiam solutio ad secundum. Si enim consideramus naturalis principia et proprietates corporis inquantum corpus: et inquantum corpus sunt: concluderet argumentum. nunc autem et si considerat principia corporis. non tamen considerat ut principia corporis sunt: sed entis mobilis: et habet etiam proprietates considerat per se et primo. sed proprietates corporis considerat inquantum rationem entis mobilis precipiant. et non inquantum habent rationem corporis: ut declaratum est.

Ad tertium patet solutio. nam quantum ens mobile et corpus mobile dicant mobilitatem que est ratio formalis subiecti et scientie naturalis. corpus tamen mobile se habet ad ens mobile sicut secundarium ad primum. nam sicut habet quod dico: in potentia autem terminum motus immediate respicit ens quod diuiditur per potentiam et actum. sic etiam hoc quod dico mobile: cuius eadem ratio est cum hoc quod est existere in potentia ad dictum terminum. nam ratio formalis que habet determinare. vniuersaliori proprie oportet addi: et non equo polenti: nec in minus se haberi. et mobile quidem respicit corpus sicut quoddam contentum sub ente mobili. et ideo adiunctum sibi non facit ipsum esse

subiectum toti scientie naturalis: sic nec adiunctum corpori anima: quod utrumque est quod particulare respectu tam motus quam mobilis. reperitur enim secundum philosophum et secundum veritatem motus in qualitate et in ubi. et tamen neutrum ipsorum est corpus. unde et commentator dicit super secundo physicorum: quod in libro primo qui totus est de physico auditu non diffinitur nisi ea que sunt vltra totam nature: sicut sunt natura motus et habitus. in alijs vero libris diffinitur alia considerata: non tamen vltra sicut in de celo et mundo corpus. Ad quartum dicendum est: quod si proprio ista intelligatur quod ad omnino eandem scientiam spectet consideratio de re et de modo rei quocumque: falsum erit quod dicitur. nam rem vnam et eandem sub alio tamen et alio modo rei considerat scientia subalternans et subalternata: sicut geometria accipit lineam simpliciter perspectiua autem assumit lineam sub modo ipsam consequente ex applicatione ad materiam: et tamen non sunt omnino vna scientia. Si autem intelligatur quod consideratio de re et de modo quocumque rei spectat ad scientiam eandem illo modo identitatis: qui reperitur inter scientiam subalternantem et subalternatam: erit verus intellectus. et naturaliter quidem bene procedimus subalternari prime philosophie: cuius prima philosophia considerat ens simplex. naturalis vero considerat ipsum sub modo sibi debito ex applicatione ad materiam. Ad quantum dicendum est: quod duplex potest dici modus aliquis esse specialis. Uno quidem modo dicitur specialis modus qui est distinctiuus specialis entis et non entis vltra sumpti. et sic mobile non est modus specialis entis: quod non distinguit ex opposito contra modum alium spalem entis sed potius vniuersale omnem enim ens vel est mobile vel immobile. Alio modo dicitur aliquis specialis modus: quia non est proprius cuiuslibet entis sed alicui determinati sicut per se. et per accidens. et si vltra diuidant ens: non tamen quodlibet eorum conuenit omni enti. sed habet quod dico per se: est modus solius substantie. et per accidens: est modus solius accitatis. et quod proprii modi sunt non cuiuslibet entis: sed spales dicuntur possunt: vel modi spales esse. sicut etiam mobile et immobile. et si vltra diuidant ens. dicuntur tamen spales modi quod hoc quod dico immobile: non est modus proprius cuiuslibet entis: sed imaterialis solius. et hoc quod dico mobile non est proprius modus cuiuscumque sed solius entis applicati ad materiam naturalem. nunc autem modus non oportet annexi ei cuius est proprius et quasi constitutus: sed ei solius cuius est distinctiuus: sicut per se non oportet adiungi substantie quod fieret negatio. sed enti quod distinguit et determinat et vltra determinatio oportet addi ipsi determinabili: et non iam determinato: et propterea etiam mobile non oportet addi enti statim sub materia naturali: sed simpliciter enti. Ad sextum dicendum: quod patet responsio. non enim mobile additur enti ut passio: sed sic modus distinctiuus ab immobili quod non considerat philosophus. unde est formalis ratio subiecti scientie naturalis cuius per formaliter rationem vniuersalem ab alio distinguitur. motus autem est propria passio per se et non per accidens se habens ad ens mobile cum sequatur principia eius.

Ad septimum dicendum est: quod non est necessarium

Questio

omne passionem dicere aptitudinē et non actum
quin potius sūt aliqua q̄ si in aptitudine sumant
nō solum nō erūt pprie passionēs: sed nec etiam
uenire poterunt ei cuius sunt proprietates acce-
pte vt dicunt actum. aptitudo enim ad paritatem
et imparitatem nullo mō uenit numero: quia tūc
posset poni numerus aliquis: qui nec eēt par vel
impar: sicut qz aptitudo ad ridendū: est hominis
proprietates: et nō actualitas ridendi. potest esse ali-
quis homo qui actu nō rideat: non potest autem
esse aliquis numerus qui nō sit actu par vel impar
et iō paritas et imparitas: nec in aptitudine: s; i actu
sunt numeri proprietates. sic ergo similiter nō ob-
stante qz motus dicat actum et non aptitudinem
poterit esse: et est propria passio entis mobilis.

Ad octauū dicendū: qz pprie passionēs qn̄ op-
positionē habēt ad inuicē: nō o; qz semp oēs actu
insunt suis subiectis. sed necessarius est qz semper
altera vel altera: sicut non semper numerus est
par nec semp impar: semp ē tñ par vel impar. vñ
et pmo posterior habet: qz ea que p se insunt ne-
cessario insunt reb: vel simplr vel oppositē. sunt
autē proprietates entis mobilis motus et quies. et si p
pns respiciat mobile. et oē quidē mobile mouet
vel q̄scit. Ad nonū dicendū est qz q̄uis q̄cqd
mouet tanqz subiectū motus nō in alio receptū sit
corp. nō tñ in quocūq; est aliquo mō motus: id ē
corp. cū motus sit in qualitate: qz corp nō est. et iō
nō est accidēs ouertibile corpi oino. Et vltē nō
solū nō cōuertibilē inest corpi in rōne qz corp ē
sed nec etiā sibi inest ut supra patuit. Ad. x. di-
cendū: qz subiectū inclusus in intellectu motus: est
ens in potētia ad motum t̄minuz vel ens mobile
qz idē est et nō corp: quin poti corp in rōne qz
corp ē: mobilitatē et motū excludit. Ad. xij. dicē-
dū: qz aīa i. intellectiua et si nō sit pars subiectiua en-
tis mobilis: est tñ pars constitutiua alicuius ptis eius
subiectiue ut puta hoīs. Ad. xij. dicendū: qz sub-
iectū o; esse tale qd vel predicef de ptractatis in
scīa: vel per ordinē ad ipm illa ad sciam referant
Et motor quide; sepatus ad sciam nālem referē
per ordinē quē habet ad ens mobile cum influit
motū. Ad. xij. dicendū: qz de mā forma priuari
one agit in libro physicor: nō iō qz sunt p̄cipia
corporis: s; qz sunt p̄cipia entis mobilis. Ad
xiiij. dicēdū: qz esse mobile nō enti attribuit rōne
corporis: nec corpi rōne entis: sed vtriq; rōne entis
imperfecti. Ad. xv. dicendū: qz si nihil localitē mo-
uet nisi corpus: nō tñ corp huic motui subijcitur
rōne qua corpus est: sed inquantū p̄cipiat rōnez
entis mobilis in loco. et iō ens mot. le fm locū ē
pprie subiectū in libro celi et mūdi. Ad. xvj. dici
posset: qz nō oē ens mobile ē corp mobile: sed ē
ens mobile qd est corp: rōne differt a corpe mo-
bili tanqz p̄cipalius dictū a secundario ut supra
patuit. Itē tanqz nugatorie dictū a pprio dicto. et
iō nō o; si negat corpus mobile esse subiectus: qz
neget et ens mobile: cū nō sit eadē rō vtriusq;.

Questio secunda.

Questio

sc̄ba ē: Utr p̄ma
phia subalternet
sibi nālē et doctrinalē phiaz? Et vñ
qz n. semp. n. scīa subalternata accipit
vt p̄ma p̄cipia sua cōclones pbataf
in scīa subalternatē. S; nālīs et doctrinalē phia nō
accipiūt ut videt p̄cipia q̄ sint cōclusa i p̄ma scīa: q̄
nō subalternant sibi. Preterea scīa subalternās
nō diuidit ex opposito i sciam subalternantē. s; p̄ma
phia diuidit ex opposito i p̄dictas sicut p; p
p̄m in. vi. metaphysice vbi dicit: qz tres sunt mōi
sue partes phie. s. phisicus: metaphisicus: et ma-
thematicus. ergo p̄ma phia sibi alias duas nō sub-
alternat. Si. di. qz p̄ma ppō falsa est. Cōtra: que
ex opposito diuidunt: sibi inuicē opponunt. que
autē opposita sunt sub inuicē cōtineri nō possūt
Scientia autē subalterna sub scīa subalternatē cōti-
net. ergo vna eaz nō potest diuidi ex opposito i
aliam. Si. di. ea que ex opposito diuidunt aliq̄
cōe vniuocū: taliter opponūt qz sub inuicē conti-
neri nō p̄nt. que autē diuidūt aliq̄ cōe analogum
nō opponūt tali oppōne q̄ impediāt vñ eoz o; z
dinari sub alio: sicut effectus sub cā. et tali diuisiōe
diuidūt hoc cōe qz est scīa: pres scīe supradicte.
Cōtra: qz sub vniuoce p̄dicamēto in p̄dicamētali
linea ordinat vniuocū videt debere eē. sed scīa
ponit sub habitu qui vniuoce p̄dicat: qz et ipsa o; z
esse quid vniuocū. Preterea si est qd analogice diui-
sum: adhuc o; z diuidētia aliqua oppōnez habere:
qz alr nō diuiderent ipsam ex opposito. omnium
autē nō est cā oppositi: igit nec de diuidentib; ano-
logū dici poterit: qz vñ cōtineat sub alio: sicut ef-
fectus sub cā. Preterea scīa subalternās o; z ac-
cipere potiores demōstrationes qz subalternata:
Nūc autē ista scīa qz p̄ma dī nō videt sic se habere
ad alias: qz in mathematicis potissime demōstra-
tiones sumunt: qz p̄ma phia sibi reliqs phie pres
minime subalternat. Preterea scīa subalterna
fm Ar. in pmo posterior debet dicere pp̄ quia:
si nō ppter qd. s; nālīs et doctrinalis ppter quid
dicūt: qz p cām demōstrāt: hic quidē p formales:
ille vō p oēs. qz iste due scīe nulli alteri possūt sub-
alternari. Preterea scīa subalterna o; z ex addi-
tione se habere ad sciam subalternantē: ita videt
qz subiectus ipsius accipiat et applicet ad materiā
sed cū subiectū p̄me phie sit ens oino imateriale
utpote omnino a materia seperatum: quia et fm
diffinitionez et fm omne non poterit aliquo mō
ad materiā applicari: quia id quod est imate-
rialis subā nullo mō pōt habere oppōnez phisice
materie: igit phisica nō subalternabit p̄me phie.
Si. di. qz substantia imaterialis nō est subiectum
p̄me phie: s; ens cōiter acceptum qd pōt bene cō-
trahi ad intelligibīlē et sensibīlē materiā. Cōtra
id qd est p̄cipalius intentum in scīa debet esse
pprium ipsius subiectum. substantie vō imateria

lis cognitio est principalissime intera in pma phi-
 losophia: ut dicit Avicenna in sua methaphysica
 ergo ipsa est ppriissime subiectum ipsius. Preterea
 fm Aristotele i sexto methaphysice: Si nulla sub-
 stantia esset preter phycas: tunc no esset alia pri-
 ma phia q̄s phica. hoc aut esse no posset vbi me-
 thaphysica solas substantias imateriales cōsidera-
 ret. ergo subiectum ipsius no est ens in cōi s̄ tale
 ens qd̄ est oīno immateriale: cū probatum sit q̄
 nihil extra ipsum consideret. Preterea scientia
 subalternas z subalternata no debent esse equal
 considerationis: sed naturalis est equalis cōsidera-
 tionis cum prima phia: qz vtraqz considerat ens
 mobile z imobile z no aliud: igit naturalis sciētia
 prime phie subalternari non potest. Preterea
 scia subalternans debet demonstrare per sua p̄n-
 cipia: principia scie subalternate. Prima vō phia
 no potest per principia sua demonstrare principia
 naturalis z doctrinalis philosophie. cuius p̄batio
 est: qz p̄ncipia sua sūt cōmissima principia vō cōia
 ut habet in p̄mo posteriorū demonstrationē no
 ingrediunt: ergo pma phia p̄dictas scias sibi sub-
 alternare no potest. Preterea scientia subalter-
 nas z subalternata sic se debēt habere ut de quo
 vna dicit qz altera dicat p̄pter quid. z per conse-
 quens q̄ vna demonstraret per effectū: alia debz
 demonstrare per cām: qz aliter no contineret me-
 dium demonstrationis vnius sub medio demon-
 strationis alterius: sicut effectus sub cā: sine quo
 perfecta subalternatio esse no potest: sed natural
 z prima philosophia no sic se habent: quia vtraqz
 per effectū demonstrationē facit de motore sepa-
 rato: igitur vna no vere subalternat alteri. Pre-
 terea subiectum scie subalterne debet immediate
 contineri sub subiecto subalternitatis: sed in sub-
 iecta quadriualium scientiarū: z subiectum prime
 philosophie cadit medio loco quātitas d̄ qua cō-
 muniter sumpta nulla scia est inter subiectū etiaz
 naturalis philosophie z p̄me cadit h̄ q̄ dico ens
 actu: qd̄ diuidit̄ per ens actu fm actum perfectū
 z per ens actu fm actum imperfectū: qd̄ est idēz
 cū ente mobili. ergo nec naturalis nec quadriual
 scientia subalternatur p̄me philosophie. Sed
 cōtra est quod phs dicit in primo methaphysice
 qz prima philosophia ordinat alias scias. hoc enīz
 sine subalternatione esse no potest. Respondeo
 dicendū: qz de ista qōne sunt diuerse opiniones.
 Quidam enī dicūt: qz prima phia sibi naturalēz z
 doctrinalē vere subalternare non potest. assignat
 aut huius rōnem ex eo qz nulla scientia subal-
 ternata potest reductionē facere ad per se nota: sic
 neqz ad imediata. naturalis vō z doctrinalis ad
 per se nota reducūt ea que cōsiderant: sicut doctri-
 nalis ad cōes animi cōceptiones cuius sunt omne
 totū est maius sua parte: si ab equalibus equalia
 demas ea que reliquūt sūt eōlia: quas etiā cōes
 cōceptiones dicūt sumi posse ex subiecto scie nālis
 cū sit quid valde cōe. ergo nec nālis nec doctrina

lis scia vere subalternari p̄nt p̄me phie. S̄ hec
 opinio stare no pōt: qz quattuor vijs ad presēs pos-
 sumus declarare. Et p̄ma quidē via sumit̄ ex cōpa-
 ratione sciarū ad entia: siue ex p̄portionalitate or-
 dinis sciarū z entium. cū enī oīs scia referat̄ ad sci-
 bile: qd̄ necessario est aliquod ens: qz qd̄ nihil ē:
 sciri no potest: oīz necessario ex ipso ordine entium
 accipere ordinē sciarū. videmus aut̄ entia talit̄ or-
 dinata qz oīa cōtinent̄ sub vno qd̄ est principius
 z cā entitatis alijs oibus. z per cōsequēs est supre-
 mum z primū in toto ordine entium. oportet igit̄ z
 scias sic esse ad inuicem ordinatas: qz oēs cōtine-
 ant̄ sub aliqua que sit p̄ma z suprema in toto or-
 dine sciētiarū: hec aut̄ no pōt esse nisi vna tm̄. cuius
 declaratio est: qz cū p̄ma z suprema scia sit illa q̄
 directe z per se p̄ngit ad primū scibile: qd̄ est pri-
 mū z supremū ens: z hoc sit oīo vnū z simplex oī
 multiplicitate carens. oīz etiā qz prima scientiarū
 que ad hoc vnū directe pertigit: vna sit z no mul-
 te. Et quēadmodū quidē primū ens sub se conti-
 net oīa alia: z omnibz est principium entitatis: ut di-
 xim⁹: sic etiā oīz qz z prima scia cōtineat sub se oēs
 alias: z cā sit cōpleta fm modū suū omnium aliarū
 cui⁹ rō est: qz ex ordine p̄ncipiorū essendi in entibus
 sumi oīz ordo p̄ncipiorū cognoscendi in scibili-
 bus. Nūc aut̄ ut dictum est: primū ens qd̄ est pri-
 mū essendi principium oīa sub se cōtinet: z omnibz
 est cā essendi. ergo oīz qz z p̄ma p̄ncipia prime scie
 ad primū ens directe pertinentis sub se cōtineat
 omnium sciarū p̄ncipia z cā sit fm nāz p̄fecte cog-
 nitionis eoz: z sic ut videt̄ quēadmodū nulluz fm
 essendi p̄ncipiū esse pōt sine ente. primo cui⁹ enti-
 tas est cā entitatis aliorū: sic etiā nullū fm cog-
 nitionis p̄ncipiū esse possit sine primis p̄ncipijs p̄me
 scientie: ut etiam cōsimiliter veritas ipsorum cā
 sit veritatis in omnibus principijs secundis. Vi-
 demus aut̄: qz in oibus sciētijs sic se habentibz: qz
 p̄ncipia vnius sunt p̄pter quid z cā veritatis p̄nci-
 piorū alteri: vna cōtinet sub se aliā: z pōt in ipsaz
 descendere ad demonstrandū demonstratiōe cālī
 principia eius per p̄ncipia sua. Cū igit̄ p̄ma p̄n-
 cipia prime phie ut p̄batū est sub se cōtineat p̄n-
 cipia nālis z doctrinalis scie z omnium aliarū z ipso-
 rum veritas cā sit veritatis in oibz. cōcludit̄ neces-
 sario: qz p̄ma scia cōtineat sub se nāle z doctrina-
 le phiam z oēs alias: z qz descendere in eas possit
 ad demonstrandū causalr p̄ncipia eaz p̄ p̄ncipia
 sua. Ulteri⁹ aut̄ videm⁹ qz oīa q̄ de nā sua sūt ta-
 lia qz cōcludi cālīter z imediate h̄nt per p̄ncipia
 scie alic⁹. de nā etiā sua p̄ cōis h̄nt qz sint cōclones
 demonstrate in illa scia. Cū igit̄ ut p̄batū est: p̄nci-
 pia nālis z doctrinalis phie de sua nā habeant qz
 cālī z imediate cōcludant̄ p̄ p̄ncipia p̄me phie cō-
 cludit̄ de necessitate qz ipse de nā sua habeat qz
 sint conclusiones demonstrate in prima phia. z si
 no requiratur semp qz ibi actu cōcludantur p̄-
 p̄t sui nimiam euidentiam. Nunc autem ita est
 qz nunqz vna scientia accipit tanqz sua principia

Questio

ea que de natura sua habent q̄ sunt cōclones in al
tera scia: nisi perfectissime illi scientie subalterne
Cum igit̄ ut demonstratū ē: naturalis et doctrinal
phia assumant ut sua p̄cipia ea q̄ de natura sua
habēt q̄ sunt cōclones demōstrate in prima phia
cōcludit̄ de necessitate q̄ utraqz eaz p̄me phie p̄
fectissime subalterne. p̄ aut̄ ex hac rōne q̄ nec p̄
naturale nec p̄ doctrinale phiam tradit̄ vltia co
gnitio. illa. n. cognitio d̄ vltia: qua habita nō cō
tingit vlti^o q̄rere quid: qualis nō est cognitio q̄
acquir̄ p̄ dictas scias: eo q̄ de ipsaz p̄mis p̄cipi
is cōtingit q̄rere p̄pter q̄d: cū sue veritatis cām
hēat veritatē p̄cipioz prime phie i q̄ p̄fecte tota
illa cognitio cōplet̄ et vltimat̄. p̄pter q̄d etiā meri
to ille subalternat̄ huic. h̄ vō nulli alteri subalt̄
nari pōt: cū supra se nullā hēat: utpote de se cōple
tam et vltimā cōinēs cognitionē. et sic p̄ma via
declarāda p̄positū: sumpta ex ordine sciaz et entiu
Secūda vō et tertia via sumit̄ ex ordine demō
strationis sed different: s̄m q̄ differentes demō
strationes fiunt in sciētis. Sūt. n. quedā demon
strationes p̄cedentes ex p̄mis pōnib^o scie: quas
necesse est esse notissimas in qualz scia sup oīa q̄
demonstrant̄ in ipsa. Quedā vō alie sunt q̄ p̄ce
dunt ex p̄mis diffinitionib^o scie. et intelligo illas
esse primas diffōnes in scia: an̄ quas nulla potest
accipi que spectet ad cōsiderationē scie illi^o. ex p̄te
aut̄ primaz demonstrationū sic p̄cedit̄. Videm^o
enī in vna et in eadē scia vlti^o: q̄ habit^o generat^o p̄
demonstrationē accipientē pōnes demonstratas
vel demōstrari possibiles in vlti^o: subaltern^o ē ha
bitui cāto p̄ demonstrationē illas pōnes demon
strantē p̄ pōnes p̄iores s̄z p̄ositatē nāe. Vni^o
aut̄ rō est: qz semp̄ necesse habit^o cōclonis subalt̄
nus est habitui p̄cipioz nāe ordine imēdiate cō
cludentiū cōclonē illā. Quēadmodū. n. veritas cō
clusionis op̄at̄ ad veritatē p̄cipioz nātr ipsā de
monstrantiū ut effect^o ad cām: sic etiā et cōclonis
cognitio se h̄z ad cognitionē eozdez: qz ea q̄ nā
liter sunt cā veritatis alicui^o: sunt etiā p̄ sui cogni
tionē nātr cā cognitionis eiusdē. et iō sicut veritas
cōclusionis subalternat̄ a veritate p̄cipioz ut effe
ctus a cā: sic etiā et cognitio ipsi^o subalternat̄ ē cō
gnitioni eozundē: ut effect^o cause. Est aut̄ vna et
eadē cognitio q̄ d̄ habit^o p̄cipioz demōstratio
nis p̄cedētis ex pōnib^o secūdis. et habit^o cōclonuz
illat̄: p̄ p̄ demonstrationē accipientes pōnes p̄pas
ad secūdas demōstrandū. Sicut enī vna et eadē
pō p̄cipiū vocat̄ in demōstrationē scda. et con
clusio in demōstrationē p̄cedente. sic etiā vna et
eadē cognitio d̄ habit^o p̄cipioz scde demon
strationis. et habit^o cōclusionis demōstrationis p̄ce
dentis. Si igit̄ ut p̄batū est habit^o cōclonis subal
ternus est habitui p̄cipioz demōstrationis cōclu
dentis ipsam: oīz necessario q̄ sit subalternus ha
bitui cōclonis illate p̄ demōstrationē: illa p̄cipia
cōcludentē. cū idem sit ibi habitus p̄cipioz et hic
habitus cōclusionū ut ostensū est. Est aut̄ habit^o

cōclusionis illate in demōstrationē prima subalter
nus habitui p̄cipioz ex quib^o illa demōstratio
procedit: igit̄ et habitus cōclonis secūde demōstra
tionis qui habitui subalternat̄ aīcedētis cōclonis
erit subaltern^o eidē. hoc aut̄ totū pōt breuiter per
vni^o exemplū determinari in scia nāli. Accipiat̄
enī hec pō: nullū cōtinuū inanimatū pōt mouere
seipsum. deinde accipiat̄ h̄ pō: graua et leua sunt
continua inanimata et concludat̄ q̄ hec nō pōt
mouere seipsa. Alterius aut̄ accipiat̄ illa supposi
tio vniuersalioz: utpote q̄ omne mouens seipsuz
est diuisibile in duo diuersa: quoz vnum habet
rōnem mouentis et reliquū rōnem moti: et adiun
gatur q̄ nullum continuum inanimatū est diuisi
bile in duo sic diuersa. et postea inferat̄ q̄ nullum
continuum inanimatum potest mouere seipsum.
In istis demonstrationibus apparet totū quod
dictum est. ideo enī graua et leua nō mouent se
ipsa: quia nulluz cōtinuū inanimatum est tale: et
ideo cognoscimus graua et leua se non mouere
quia hoc cognoscimus continuo inanimato non
conuenire. igitur habitus illius conclusionis ha
bitui illius p̄cipiū subalternatur sicut effectus
cause. et similiter habitui conclusionis illate in
demonstratione secūdo facta cum sit vnus et
et idem: et vltius simul totalis cognitio similiter
est subalternat̄ cognitioni illius p̄cipiū omne mo
uens seipsum diuisibile est in duo diuersa: quoz
vnuz et̄. Ex cognitione. n. hui^o p̄cipiū trahit̄ tota
cognitio alioz. Et sic semp̄ in vna et eadē vniuersa
li scia: tota cognitio habita p̄ demōstrationē que
sumit pōnes secūdas: subalternat̄ cognitioni ha
bite per demōstrationē illas ex p̄mis pōnib^o cō
cludentē. Nunc aut̄ ita est: q̄ quēadmodū se ha
bent in vna et eadē scia pōnes p̄me: et magis vni
uersales ad pōnes secūdas et minus vniuersales
sic etiam se habent positiones prime philosophie
ad primas positiones scientie doctrinalis et natu
ralis: sunt enī et ipse prima p̄cipia veritatis ista
rum: quēadmodū q̄dē per p̄iores in eadē sciētia
demonstrat̄ posteriores: sic etiam multo imo al
tiori et perfectiori modo per positiones prime sci
entie demonstrari habent prime positiones natu
ralis et doctrinalis philosophie. concluditur igit̄
de necessitate q̄ tota scientia naturalis et doctri
nalis que trahitur ex suarum positionum prima
rum cognitione: subalternat̄ est cognitioni p̄iorū
p̄cipioz prime philosophie. et per consequēs
ipsi vniuersalissime scientie que sola habet p̄prie
per illa prima p̄cipia et reliqua demonstrare.
Possumus autem si volumus hoc q̄ diximus et
ratione probauim^o scilicet q̄ prima philosophia
aliarum scientiarum p̄cipia demonstrat causa
liter etiam auctoritate ostendere. Auicenna nan
qz dicit sic in primo sue methaphysice: *De scientia*
diuiditur in partes: quaruz quedam inquirūt
causas vltias in quantum sunt cause omnis causati
et alie inquirūt causam primā ex qua fluit omne

esse causatū non inquantū est mobile vel quanti-
tatiū. et quedā alie inquirūt dispositiōes que ac-
cidunt esse. et quedā inquirūt p̄ncipia scientiarū
particulariū. Et huius ratōnem assignat dicens:
P̄ncipia cuiusq; sciētiarū minus cōmuniū que-
stiones sunt in scientia cōmuniori: sicut p̄ncipia
methaphisice in naturali: et p̄ncipia mensuratōis
in geometria. et hinc concludit. contingit igitur ut
in hac scientia monstrent p̄ncipia singulariū sciē-
tiarū que inquirūt de dispositiōibus vniūscuiusq;
iusq;. Ex quibus verbis liquide apparet qd p̄nci-
pia prime philosophie demonstrant p̄ncipia
omniū aliarū: et qd ip̄a sibi omnes alias subalter-
nat. Philosophus autē in primo posteriorū sic di-
cit: Manifestū est qd non est vniūscuiusq; sciētie
p̄ncipia prop̄a demonstrare. Erunt enī illa per
que scilicet demonstrant aliarū p̄ncipia scientiarū
omniū p̄ncipia: et scientia illorū prop̄ia om-
nibus. quod non aliter intelligi potest nisi ut di-
catur prop̄ia omnib⁹: quia descendēs in omnes
ad demonstrandū earū p̄ncipia. Deinde adiūgit
et nanq; sciuit magis intellectus ex superioribus
causis. et ex p̄oribus enim sciuit cū non ex causa-
tis causas sciat. per quod aperte innuit qd hec sci-
entia demonstrat aliarū p̄ncipia per causas et nō
per causata. Et quia dixerat demonstratiōem pri-
me scientie descendere in alias sciētiarū ad demō-
strandū earū p̄ncipia: quomodo hoc possit esse
declarat dicens: Sed demonstratio nō cōuenit
in aliud genus videlicet in aliud simpliciter: s; aut
sicut dictū est geometrice p̄spectiuas et arithme-
tice in armonicis. Et per hoc iam reputat planū
quomodo et prima scientia in alias descendat.
Cum igitur descensus geometrice in p̄spectiuā:
et arithmetice in musicā: sit descensus subalternā-
tis in subalternatā vere: apparet manifeste inten-
tionē fuisse philosophi primam philosophiā in
alias omnes descendere demonstrando: utpote
in sibi vere subalternas. Et sic completa est secū-
da via declarandi propositū sumpta ex ordine de-
monstrationū p̄cedentiū ex suppositiōib⁹ scientie.

Tertia vero via ad idem declarandū sumitur
ex ordine demonstrationū diffinitiōes accipien-
tium pro medio. vbi considerandū est qd diffini-
tio nūquā potest vere demonstrari de illo cuius
est diffinitio. Cuius ratio est. quia cū omnis de-
monstratio sit per medium: oportet necessario il-
lud quod vere potest de aliquo demonstrari ha-
bere vere medium per quod demonstrat de illo:
quod necessario et causa ē verificatiōis eiusdē de
eodē: quia verum mediū causa est. Inter autem
diffinitiōem et diffinitū nullū cadit mediū: sicut
nec inter quidditatē et rē cui⁹ est q̄dditas. nō enī
est dare causam p̄pter quā homo sit aīal rationa-
le nisi qd aīal rationale est: et similiter est de alijs. q̄
nullo modo pōt vere demonstrari diffinitio de il-
lo cuius est diffinitio. hoc autem veritatē habet
in omni scientia tā subalternatē q̄ subalterna.

Videmus enī qd cognitio passionis secūde subal-
terna est cognitōi passiōis p̄me: et similiter cog-
nitio passiōis p̄me subalterna est cognitōi subiecti.
nam et passio secūda passioni p̄me: et passio p̄ma
subiecto subalternat sicut effectus sue cause: et ta-
mē cū tota hac subalternatiōe nō pōt vere demō-
strari de passiōe p̄ma diffinitio sua p̄ diffinitiōem
subiecti: nec de passiōe secūda demonstrari potest
sua p̄ diffinitōem passiōis p̄me: sed de passione
p̄ma p̄ diffinitōem suā demonstrari potest diffini-
tio secūde: et de subiecto p̄ suā diffinitio p̄me. et
hoc facit illas cognitōes dici sibi inuicē subalter-
nas. nō igitur ad subalternatiōem sciārū exigitur qd
subalternas demonstrat diffinitōem datam in
scīa subalternata de p̄po diffinito in ip̄a. qz cum
hoc sit impossibile de re aliqua inueniri ut onīus
est: impossibile tūc eēt aliquā scīarū dici p̄ sub-
alternam: sed sufficit qd subalternas demonstrat
subiectū et diffinitōem subiecti scīe subalterne de
alio si demonstrari possit: sicut etiā ad hoc qd cog-
nitio passionis dicat p̄prie subalterna cognitōi
subiecti sufficit qd diffinitio quod est p̄ncipiū cog-
noscedi ip̄am demonstrat de subiecto per diffi-
nitiōem eius: que similiter est ratio p̄ quā ipsum
cognoscit. Nunc autē p̄mus p̄bus hoc facē pōt
et facit fm naturā sue sciētie de subiecto et diffini-
tionē subiecti tam doctrinalis q̄ naturalis p̄hie
Dico autē fm naturā sue sciētie: quia quando de
ordine naturali scientiarū loq̄mur debem⁹ atten-
dere non ad ea que in scriptis ab hominib⁹ sunt
redacta sed ad ea potius que sciētie de sua natu-
ra attribuunt. Quod autē p̄me p̄hie de sua natu-
ra attribuunt quod diximus patet si considerem⁹
vscq; ad que sua cōsideratio se extendit. Nā p̄m⁹
p̄bus diuidere habet ens per substātiā et accidēs
et substātiā per corporeā et incorporeā: et h̄ etiā
oīa cōsiderat. et quia quantū quod est subiectus
in mathematicis est p̄p̄a passio substātie corpo-
ree quā habet diffinire p̄mus p̄bus: et p̄p̄ia pas-
sio de suo subiecto demonstrari debet p̄ diffinitio-
nem subiecti: manifestū est qd et quantū et diffini-
tio quāti fm naturā suā demonstrari potest de
substātia corporea per diffinitōem ip̄ius: et non
nisi a p̄mo p̄ho qui solus eius diffinitōem consi-
derat. Similiter etiā diuidit p̄mus philosophus
ip̄m ens per ens in potētia: et ens in actu p̄fecto:
et ens in actu imp̄fecto: cuius p̄p̄iū est esse mo-
bile quod cōsiderat p̄hysicus. et mobile quidez et
eius diffinitio demonstrari potest de ente in actu
imp̄fecto per diffinitōem ip̄ius. Nā ens in actu
imp̄fecto est ens carens cōplemēto actualitatis:
quod aptū natū est habere. et h̄ est causa eius qd
est esse ordinatū in actū acquiribile per motum
vel mutatōem: quod est diffinitio mobilis. Ideo
enim aliquid ordinat ad actum aliquē acquirē-
dū quod aptū natū est habere ip̄m nō tñ habet.
Unde mobile cōparat ad illud sicut effectus ad
causam et sicut p̄p̄iū ad subiectū. Unde Auicē.

Questio

in sua methaphisica dicit: Dicemus igitur q̄ hic posita de quibus tractabat̄ in alijs scientijs sunt accidētia in hac sciētia: quia sunt dispositōes que accidūt ad esse z diuisiones eius. z ideo q̄d nō probat̄ in alia sciētia probat̄ in ista. quia enī diuidit̄ h̄ sciētia in substantiā z accidens: ideo sunt ei ppria. Et iterū in p̄mo sic: Contingit aut̄ in hac sciētia vt demonstrēt̄ principiā sciētiarū singulariū que inquirūt dispositōes vniuscuiusq̄ esse. igit̄ hec sciētia inquirūt dispositōes esse z ea que sunt ei quasi partes z species quousq̄ venitur ad appropriatiōem ex qua prouenit subiectus naturalis: igit̄ pmittam⁹ illā appropriatiōem ei z appropriatiōem ex qua prouenit subiectum disciplinalis dimittam⁹ ei: videlicet ad considerationē proprietatū eis cōuenientū: diffinitionem autē illius subiecti appropriati ei quod considerat̄ a p̄mo philosopho demonstrare de eo cui appropriatur spectat ad primū philosophū. Ex quibus omnib⁹ euident̄ cōcludit̄ q̄ prima philosophia sibi naturalē subalternat z doctrinalē z p̄fectius q̄ geometriā p̄spectiua: cū ip̄a demonstrare non possit diffinitōem visualis de linea eo q̄ visuale ex p̄ncipijs linee non causat̄. Et sic completa est tertia via declarādi quod volum⁹ sumpta ex ordine demonstrationū diffinitōem accipientiū p̄ medio. Quarta autē declaratio sumit̄ ex eo q̄ ad eandē sciētiā p̄tinet cōsiderare rem z modū rei. Ad cuius intelligentiā est considerādū q̄ du plices modi alicuius rei accipi possunt: quia generales z speciales. Et generales quidē proprie dicunt̄ qui rem fm se consequūt̄. z isti quidē spectant simpliciter ad eandē sciētiā ad quā pertinet cōsiderare de re cuius sunt modi. Cui⁹ ratio est. quia nunq̄ in aliqua sciētia potest haberi cognitio alicuius rei p̄fecta nisi p̄fecte eius ratio cognoscat̄: nec ratio fm se habēs diuersos modos potest cōplete cognosci nisi illi omnes modi sub quib⁹ potest intelligi cognoscant̄. tales autē sunt modi rem fm se cōsequētes qui necessario etiā rationē similiter cōsequunt̄. z ideo de necessitate oportet q̄ vna simplex sciētia cōsiderat rem z modos generales ip̄ius. vnde sola methaphisica cōsiderat modos generales entis: z sola sciētia libri p̄orū cōsiderat generales modos sillogismi. Modi autē speciales rei sunt qui rem cōsequūt̄ ex applicatiōe ad aliquā materiā: sicut modi speciales sillogismi sunt illi qui ip̄m consequunt̄ ex applicatione ad materiā necessariā vel probabilem: z visuale in linea dicit̄ quēdā modū speciale sumendi lineā: quia cum applicatiōe ei⁹ ad mām sensibile. Et tales quidē modos cōsiderare non pertinet ad eandē simpliciter sciētiā ad quā spectat consideratio rei absolute sed ad eandem eo modo quo subalterna dicit̄ idēmitatē habere cum subalternāte. Unde modi cōsequētes sillogismi ex applicatione ad materiā necessariā spectat ad sciētiā libri posteriorū que subalternat̄

sciētie libri priorū: z visuale spectat ad p̄spectiua que subalternat̄ geometrie. Nūc autē mobile et quantū sunt speciales modi entis: quia ip̄m consequētes ex applicatiōe ad materiā. Quantū enī consequit̄ ens ex applicatiōe ad materiā intelligibilem: mobile vero ip̄m consequit̄ ex applicatiōe ad materiā sensibile. ergo de necessitate oportet dicere: supposito q̄ ens mobile sit subiectū in naturalibus vt in p̄ma questiōe declaratū est: z ens quantū in mathematicis q̄ vere z p̄fecte taz p̄physica q̄ mathematica subalternat̄ p̄me phie. Et hec ē quarta z vltima via ostēdendi dictū nostrū de subalternatione eē necessariū z cōtrariū impossibile. Et rō quidē facta in cōtrariū puerilis est eo q̄ peccat p̄ fallaciā equiuocatiōis. nam p̄ se nota aliqua dici possunt duplici de causa. Vna quoq̄ causa ē ip̄orū euidentia: quia videlicet eorum veritas est sic euidēs q̄ statim cū p̄ponitur absq̄ h̄ q̄ per alia notificent̄ apparent vera eē: z iccirco appellantur p̄ se nota. Alia causa ē eorum primitas q̄ videlicet sunt ita p̄ma q̄ ante se alia priora nō habēt p̄ que demonstrēt̄: z ad talia p̄pe reducti ones facit solū illa que nulli subalternat̄ qualis est prima phia. Naturalis z doctrinalis vero nō faciūt reductiones p̄ se z proprie ad ista: sed ad p̄ se nota primo mō quod subalternationē p̄fectaz non impedit: sicut patet ex p̄habitis. Ad primū igit̄ iam ex predictis patet responsio: quia naturalis z doctrinalis accipiūt tanq̄ ppria sua p̄ncipia ea que de natura sua habent q̄ sint conclusiones p̄bate in prima phia. Ad secūdū vō responderi debet interimendo minore. videm⁹. n. q̄ mathematica diuiditur i quatuor scientias. scilicet arithmetica: geometriā: astrologiā: z musicam. vnde z quadriualis dicitur: z tamē omnes tres subalternantur arithmetice. Ad tertium dicendum q̄ ex opposito diuidūtur p̄pter oppositos modos participādi cōmune diuisus: z modi quidē sub inuicē non cōtinētur sed res que sub illis modis accipiūtur: sicut etiā modus eēdi per se quod ē substantie: z modus eēdi per aliud quod est propriū accidentis non continetur aliquo mō sub inuicē: sed res accidentis bene continet̄ sub re substantie sicut effectus sub sua causa. Nam z hoc dat intelligere ip̄e modus eēdi per aliud. Similiter autē dicendū est z in p̄posito. z similiter est dicendū ad quintū argumētū. Ad quartū vero respōderi debet per interemptōem maioris p̄positōis. solū enī anologa trāscēdētia non cōtinent̄ in recta linea sub genere: contigit tamē reperire anologa non trāscēdētia: sicut sunt ratiocinatio z demonstratio z h̄mōi q̄ necessario sub determinato genere ordinant̄. Ad sextū dicendum q̄ fm naturā simpliciter loquēdo demonstrationes p̄me philosophie sunt potissime super omnes alias vtpote accipiētes prima omniū p̄ncipia. Ad septimū dicendū q̄ naturalis z doctrinalis z si dicit̄ p̄pter quid de bis que per sua

principia demonstrat: de principijs tamē suis dicit
tū quia et non ppter quid: sed pma philosophia
est que dicit ppter quid de ipis. nam p istud pnci-
piū pme philosophie. idem enim nō est actu et
potētia fm idē. demonstrat illud pncipiū idē nō ē
mouēs et motus fm idē. de quo nālis fm se dicit
solū quia. p illud etiā pncipiū impossibile est idē
esse et nō esse. hoc cōcedētī et negātī: qd si ab eq̄li-
bus equalia demant: que remanēt o3 esse eq̄lia.
demonstrari pōt demonstratiōe dicēte ppter quid
verū esse pncipiū qd opinamur. vel vt ppus loq̄-
mur qd ore dicit esse falsum. et hoc quidē sufficit
ad subalternatiōem pfectā. Ad. viij. dicendū qd
subiectū pme phie nō est ens dictus de substātijs
immālib⁹ solū: sed ens inq̄tū ens. dicit aut pms
phus id solū cōsiderare qd sepatū est fm esse et f3
rōem a mā: nō quia in hac esse nō possit: s3 qd esse
ei⁹ quod cōsiderat vt subiectū ppiū nō ē p mām
sensibile cōstitutū: qd tūc extra ipam inueniri non
posset: sicut etiā esse quātūtatī qd solū p nālia cō-
stitutū nō pōt aliquo modo extra ipam in aliquo
inueniri: sicut inuenit ens quod cōsiderat metha-
phic⁹. et quia mobile dicit motū talis entis cōsi-
derat phus nālis: apparet manifeste qd subiectus
nālis phie ex additiōe se h3 ad subiectū pme phie

Ad. ix. dicendū qd ens inq̄tū ens est pmo intē-
tū in pma phia tanq̄ toti⁹ subiectū: sed substātie
immāles dicit inter alia ibi pncipaliter intēte: qd
in eis pmo et maxime reseruat ratio hui⁹ subiecti
que in alijs etiā reseruat et si nō sic pfecte mouet.

Ad. x. dicendū qd si nullū ens eēt nec eē posset
ppter mobile: mot⁹ esset pma passio entis cōsi-
derat fm se: nec tūc esset alia cōsideratio entis inquātus
ens et cōsideratio motus: nisi eo quo est alia cōsi-
deratio subiecti a cōsideratiōe passiōis ppe: que di-
uersitas cōsideratiōis nō diuersificat sciam. et ideo
tūc nālis phia ad quā spectat cōsiderare de motu
cōsideraret etiā de ente inq̄tū ens. et ideo nō pōt
eē vna scia de ipō fm se sumpto et cōsiderato sub
ppetatib⁹ cōueniētib⁹ nō solū mobilib⁹ nec solum
immobilib⁹ sed oibus. Ad. xi. dicendū qd et si taz
nālis q̄ p m⁹ phus cōsiderat motore sepatū: nō iō
tamē sunt cōsideratiōis equalis. qd p m⁹ phus cōsi-
derat vt ait Auicē. in sua metha. fm id quod ē in
esse et in natura sua: nālis vero cōsiderat ipm rōne
cuiusdā sui effectus: sicut rōne motus pfluētis ab
ipō. et h⁹ cōsideratio ē posterior et inferior q̄ pma.
Itē p m⁹ phus ipm cōsiderat inq̄tū est pncipiū et
causa eēndi: naturalis vero solū inq̄tū ē pncipiū
mot⁹. et hec cōsideratio est oio min⁹ vlis q̄ pma.

Ad. xij. dicendū sicut in determinatiōe dixim⁹
qd pncipia coia que sunt cōmunes animi cōceptio-
nes: et si nō ingrediant fm substātiā demōstratiōes
diffinitōes accipiētes p medio: ingrediūt tamen
illas que ex ipis pōnib⁹ vel supōib⁹ pcedūt. Itē
p m⁹ phus etiā aliquaz diffinitōes cōsiderat p q̄s
pōt alias demōstrare sicut supra patuit. Ad. xij.

dicendū qd fm qd dicit Auicē. in sua metha. qd effi-
nālis et p m⁹ phus cōsideratiōe faciāt p effectum
de pmo motore: nō tamē hoc est per eādē rōem
qd naturalis ex ppetate sue scie habet qd talē cōsi-
deratiōez faciāt: cum talis scia ad ipm sepatū mo-
tore nō ptingat nisi rōne mot⁹ fluētis ab ipō. P m⁹
ph⁹ p m⁹ ph⁹ fm nām sue scie directe o3 cōsideratio-
ne de ipō facere p ea que sibi de sua essentia et nā-
cōueniūt. cōsideratiōem vō tradit ex effectib⁹ sum-
ptā ppter nostri intellect⁹ infirmitatē qd est aptus
nat⁹ p effect⁹ in causaz cognitiōez ascendere. Ad
xij. dicendū qd nō oportet subiectū scie subalterna-
te immediate cōtineri sub subiecto subalternatis
quia nec linea visualis immediate sub cōtinuo cō-
tinet quod est subiectū geometrie: s3 immediate cō-
tinet sub linea que ē pars illi⁹ subiecti. et ens qdēz
mobile et ens q̄tū filr se h3 ad subiectū pme scie:
vt ex pbabitur patet.

Questio tertia.

Questio tertia

q

est. Utrū oim corpaliū sit eadez
mā. Et videt qd sic. Illud enī
qd est in potētia ad formas ex-
tremas est in potētia ad oēs: s3

materia generabiliū est in potētia ad formas mā-
les extremas: quia ē in potētia ad intimā formas
māle vtpote ad formā elemētalē. Itē est in po-
tentia ad formā supremā: vtpote ad aiām intelle-
ctiā que est nobilissima formarū. ergo est in po-
tentia ad omnes medias: s3 medie sunt omnes q̄
sunt altiores forma elemētali et inferiores aiā in-
tellectiua: et talis est forma celestis: cū ipa non sit
pncipiū intelligēdi. ergo materia generabiliū est
in potētia ad oēs formas celestes. Preterea. si
probatū fuerit corp⁹ celeste eē corruptibile: cum
oim corruptibiliū sit vna mā: probatū erit statim
qd oim corpaliū sit vna mā. Quod autē ipm sit
corruptibile sic ostēdit. Corp⁹ celeste: aut h3 vtus-
tem ad duratiōem infinitā: aut finitam tm. Si ad
infinitā cū corp⁹ tale sit finite magnitudinis i ma-
gnitudine finita: tūc erit virt⁹ infinita. qd ē impossi-
bile. h3 igit virtutē solū ad finitā duratiōez. Finies-
tur ergo quādoq̄ sua duratio et ipm necō p cōns
corruptet. ex quo cōcludit necō vt videt qd eadez
sit materia celi et materia istorum inferiorum.

Preterea quoz est idē genus ipsoz est eadem
mā. sed oia corpalia cōueniūt in hoc genere qd ē
corp⁹. g oia corpalia cōueniūt i vna mā. Si. oī.
qd corp⁹ nō pdicat vniuoce de corpe generabili et
incorruptibili. Cōtra idē ē vniuoce pdicari qd p-
dicari fm idē nomē et fm eandē rōne. sed de cor-
pore generabili et incorruptibili pdicat fm idem
nomē et eandē diffinitionē: qd p3 siue accipiatur
diffō corpis qd est subā: siue diffō corpis qd ē q̄-
tū: tā corp⁹ generabile q̄ ungenerabile ipsā p m⁹

Questio

cipabit. g. corp^o vniuoce de vtroq^{ue} pdicat. Si. oi.
q^{ue} pdicat vniuoce fm logicū z nō fm physicū. et
q^{ue} quoz est eadē mā est idē gen^{us} fm physicū: cuz
ergo omniū corpaliū nō fit eadē mā: iō corp^o de
eis equoce pdicat. Contra aīal z oē genus fm nā/
les pdicat equiuoce: q^{ue} fm phm in. vij. physicoz
Juxta genera latēt equocariōes. Si g^o phica eq^{ue}
uocatio corpis de generabili z ingenerabili impe
dit ipsoz esse vnā materiā. tūc nec hoīs z asini po
terit eē vnā mā: cū fm phm aīal equoce de ipfis
pdicat. hoc aut est falsū: igit falsū est q^{ue} equoca/
tio nālis corpis ipediat omniū corpaliū esse vnā
materiā. Pretea agentia z patiētia cōicant in
vna mā. sed corpa celestia agūt in ista inferiora z
h^{abent} patiunt ab ipfis: ergo ipsoz est vna mā. Pre
terea omniū transmutilū est vna mā: sed omīa
corpa sūt trāsmutilia: q^{ue} oīa subiūnt motū
z oīs mot^{us} ē de s^{ub}rio in s^{ub}riū: q^{ue} sine mobilis trā/
mutatiōe fieri nō pōt. ergo omniūz corpoz ē vna
mā. Preterea accipiat minimū ignis in quo ē
ultima forma ignis z diuidat ibi nō erit vltimus
forma ignis: nec alicui^{us} elemētōz: aut igit rema/
nebit mā sine forma: q^{ue} est ipossibile: aut ibi fiet
forma celestis. q^{ue} aut nō possit ibi manere forma
ignis: manifestū est. tūc. n. iste ignis diuisus non
fuisset minimus quod est s^{ub} pōnem. Forma etiā
alteri^{us} elemēti ibi remanere nō pōt: q^{ue} cū in quo
libet mīmo alteri^{us} elemēti sint multa mīma ignis
si ignis minim^{us} resolueret in minimū alteri^{us} ele/
mēti: mīmū ignis resolueret i multa mīma ignis
q^{ue} est ipossibile. ipossibile est igit q^{ue} mīm^{us} ignis
resolua^t in aliud corp^o elemētale vel elemētatur.
resoluet g^o i corp^o celeste. z sic eadē erit mā corpis
celestis z elemētōz. g^o eadē erit p^{ro}sequēs mātia
omniū. Pretea si mā supioz z inferiorz distin/
guūt fm essentiā: aut distinguūt seipsis: aut disti/
guūt p^{ro} ordinē ad formā nō seipsis p^{ro} ea q^{ue} enīz
habēt essentias diuersas que habēt rōnes diuer/
sas. illa aut habēt rōnes diuersas: de q^{ue}bus forma
ri possunt cōceptiones diuerse. sed de mā tā supi/
oz q^{ue} inferiorz: nihil aliud cōcipit itellec^{tu} nisi q^{ue}
est pura potētia de se. g^o cū idē fit cōcept^{us} nō dif/
ferūt rōne: z p^{ro}sequēs nō differūt p^{ro} essentiā. nō
distinguunt etiā p^{ro} ordinē ad formā. fm enī tales
ordinē materia i genere relationis est: ut dī scōo
physicoz: Relatio aut accūs est. nihil autē distin/
guūt essentialit^{er} p^{ro} id quod est accūs sibi. nec igit
due materie per illum ordinē distinguunt. ergo
nullo mō sunt plures: sed vna tm̄. Preterea cū
spēs rez sint sicut nūeri: ut dī i q^{uarto} methaphyce
sicut ipossibile est inuenire duas spēs numerozū
in eodē gradu. sic etiā est ipossibile i eodē gradu
inuenire duas spēs quascūq^{ue}. Si igit mā corpoz
supioz z inferiorz differūt in eētia: nō erūt i eodē
gradu. vbi aut nō est nisi pura potētia: nō pōt esse
gradus: igit est vna mā tm̄. Pretea nobilioz
corpi debet nobilioz actio. corp^o aut celeste nobi/
li^{us} est in oīa alia corpa: g^o p^{ro} oībus alijs nobilioz

actio sibi debet. Stat aut q^{ue} aliud corpus: utputa
igneū: pōt sua actione formā suā inducere in māz
alioz corpoz. igit z corp^o celeste poterit inducere
suā. z p^{ro}sequēs eadē est mā susceptiua forme ce/
lestis: z omniū aliaz formaz corpaliū. Pretea
oē q^{ue} agit de necessitate nature agit fm cōditio/
nem suā. vñ tm̄ pōt iprimere i passum quantum ē
illud quo agit. vñ ignis pōt tm̄ calefacere q^{ue}tm̄
calidus est. Cū igit sol agat de necessitate nature
puta illuminādo: tantū poterit illuminare quātū
lucidus est. sed cū in passo tantū imp^{er}itū est d^{omi} eo
quo agens agit quantum est in agēte: statim fit ibi
forma agens. igit q^{ue} in aliquo tantū recipit de lu/
mine solis quātū est in sole: statim fit ibi forma agē/
tis. ergo q^{ue} in aliquo tantū recipit de lumine sol
quantū est i sole: statim fit ibi forma solis. z sic erit
eadē mā corpoz supioz z inferiorz. Preterea
quecūq^{ue} cōueniūt in mō significādi: cōueniūt in
mō eēndi. sed mā supioz z inferiorz cōueniūt i mō
significādi: q^{ue} vtraq^{ue} significat noīe materie cor/
poralis: igit cōueniūt in mō essendi z p^{ro}sequens
in eētia quā eē necessario p^{ro}supponit. Pretea
inē duo extrema nō pōt cadere duo media distin/
cta nisi vnū eoz sit p^{ro}pinquū vni extremo: z alter
p^{ro}pinquū reliquo. Stat aut q^{ue} simplr non ens: z
ens in actu simplr sūt duo extrema tm̄. z inē ipsa
est mediū ens i potētia q^{ue} est idē q^{ue} mā subiecta
forme substāiali. Si g^o sunt due mae siue duo en/
tia in potētia. oportebit necessario vnū eoz eē p^{ro}/
p^{ro}pinquū nō enti: z aliud p^{ro}pinquū enti. hoc aut est
ipossibile. cū vtrūq^{ue} eoz sit pura potētia. distat igit
tur vtrūq^{ue} equalit^{er} ab extremis pdictis. z p^{ro} oīs
sunt tm̄ vna materia: z nō multe. Preterea cor/
pus celeste cū sit quantum est diuisibile: cū sit nāle
nō pōt diuidi in ifinitū. ē igit deuenire ad aliquaz
partē minimā: q^{ue} si vltimus diuidat in p^{ro}tib^{us} diuis/
nō remanebit amplius forma celestis. z cū ipossi/
bile sit dare materiā sine forma. erit ibi necessario
generata alia forma. z p^{ro}sequēs illa mātia erat i
potētia ad formā. Nec aut est rō materie genera/
biliū est ergo vna materia supioz z inferiorum.

Sed h^{abent} est q^{ue} materia istoz inferiorz est i po/
tētia ad formā aliā ab illa quā h^{abent}: q^{ue} nō est verū
de materia celesti. igit nō est vna materia corpoz
supioz z inferiorz. Preterea corruptibiliū z in/
corruptibiliū est ipossibile cās esse easdē. corpa
aut supiora sunt incorruptibilia: z inferiora corru/
ptibilia. g^o ipossibile est eoz eē easdē cās intrise/
cas. materia aut est vna de causis intrinsecis. ergo
ipossibile est eoz vnā eē materiā. Pretea vni/
cuiq^{ue} dat forma fm aptitudinē sue materie: sic p^{ro}
in singulis inducendo. forma aut corpis celestis
est oīno ingenerabilis. ergo z materia sua o^{mn} esse
oīmodo ingenerabilis: ut videlz generatiōi subij/
ci nō possit. ex quo sequit^{ur} q^{ue} nō hēat aptitudinēz
ad formā generabilē. z p^{ro}sequēs q^{ue} sit diuersa a
generabiliū materia que talē aptitudinē habet.

Rūdeo ad b^{on} q^{ue}ōnis euidentia p^{ro}intelligendūz

est qd cū actus sit rō z pncipiū distinctōis in reb⁹ ea que in se z in sui natura nullū hnt determinatū actū: nullā iō vident distinctōem habere. Nam z pncipiū act⁹ est determinare infinitatē potētie z distinguere cōfusiōem ipi⁹. sicut ex opposito propriū est potētie determinari p actū z de cōfusione quadā trahi ad eē distinctū. z qz mā in sua essentia nullū actū includit s; ē pura potētia sicut patet in sequenti qōne. iccirco videt qd in ipi⁹ eēntia qntū de se est nulla possit cadere distinctio. verūz qz aliqua apparēt semp eē in actu: nec in eis vlla potētia determinabilis p actū inuenit que actuz pcedat. actū dico pncipiū z substātificū. aliqua vō inueniūt qnq; exntia in actu: qnq; autēz in potētia tñ: z sic potētia actu pmo vel substātifico determinabilis appet in eis: nō videt qd possit mā que in eēntia sua est sola potētia vniuoce repiri i vtrisq; rebus. In his. n. que qnq; sunt in actu. ppo qnq; vō in potētia videm⁹ qd potētia tpe pcedit actum nā aut z pfectōe semp act⁹ pcedit potētiā. qz ens in potētia ad ens in actu cōpat sicut impfectū ad pfectū. Et qz act⁹ est rō z pncipiū agēdi vnicuiq;: cū vniquodq; agat fm qd est in actu z nō fm qd est in potētia. actor vō p supponit vtutē z potētiā opādi. qz nunq; actio egredit ab eēntia nisi mediante vtute: videt cōsequi qd actū pncipiū z substātificū rei sequit ordine nāe potētia ad actū secūdu que est ipa virt⁹ vel potētia agēdi vel opādi. Et que admodū quidē actus secūdu differt ab actu primo. qā prim⁹ est ratio z pncipiū eēndi simpliciter in actu: secūdu vero non est ratio z pncipiū eēndi in actu simpliciter: sed in actu tali vel tali sic etiam potētia ad actum secundum inuenitur differre a potētia ad actū primū. quia p potētiāz ad actū primū res ponit in potētia simplr ita. s. qd ponit carēs omni actu cū talē potētiā null⁹ actus pcedat pncipiās ipam. p potētiā vō ad actū secūdu: res nō sic dicit eē in potētia qd dicat carere oī actu z eē potētia pura s; pot⁹ ecōtrario est i actu simplr: in potētia vō fm quid tñ quia in potētia solū quidē accidētali. vtrāq; quidē potētiā inuenim⁹ in his que qnq; sunt z qnq; nō sunt. in his aut que semp sunt actu nō videm⁹ aliquā potētiā tpe aut aliquo modo pcedere actū primū z substātificū. qz sic aliqui viderent talia eē in potētia solū z nō in actu vllō modo. qd falsum est: cū semp sit actu. Verū qz talia actū hnt qui est ratio z pncipiū agēdi inuenim⁹ in eis potētiā z virtutē respectu act⁹ secūdi qui a re nō egredit nisi mediante vtute z potētia cōntē actū primū. Et qz soluz pma potētia que ordinat ad actū substātificū est potētia substāntialis: secūda vō est substāntia accidētalis: qz ordinat in actū accidētale: videt cōseq qd in substāntia eorū que semp sunt nulla sit potētia. z qz potētia que est in substāntia ē potētia substāntialis: est tñ potētia in eis cōntē eorū substāntiā z qdditatē que dicit potētia accidētalis. Nā igit que in sua eēntia est potētia intllib⁹ nō eo modo

inuenit quo in illis que semp nō sunt. In his enī inuenit mā pncipiū. quia potētia non ponens actū aliquē qualis est potētia ad actū primū. In incorruptilib⁹ vō videt: aut qd nō sit mā: aut si dicat qd in eis sit: erit talis mā nō pura potētia s; ponēs necō actū. qz talis mā dicit potētia respectu act⁹ secūdi: que tamē de necessitate p supponit actū primū. z sic equoce diceret mā de hac z illa.

Propt ista que dicta sunt diuersi diuersimos de opinati sunt de corpaliū mā. Quidā. n. cōsiderātes corpa celestia inuariabilia z incorruptibilia eē z in suo actu substāntifico eodē modo se habēt: dixerūt in eis nullo modo eē mā. ppe dictā fm qd mā est potētia substāntifica in substāntia rei inclusa. quia h est potētia ad eē simplr qualis nō pōt inueniri in corpe celesti cū sit exns sp in actu. Nā zsi in ipō inueniret talis potētia: frustra ibi esset oīo z ociosa: cū p nullā potētiā nālē possit materia celestis deduci ad aliquē actū substāntificū qui est pncipiū eēndi simplr. Est aut impossibile in fundamēto nature aliquid esse ociosum z frustra. ergo oīo impossibile est esse aliquā potētiā in subā celi inclusam. Verū qz celū mouet de vno vbi ad aliud: est in ipō potētia ad vbi qē potētia accidētalis p supponēs actū primū z essentiā celi q fm istos est ipē act⁹ prim⁹ z simplr nō recept⁹ in aliq potētia. Et rōe hui⁹ potētie ad vbi fm istoz pōem in corpe celesti dicit eē mā extēso nomine māe ad oēm potētiā nō semp cōiunctam suo actui z nō aliē. Sed qd ista pō sit oīo impossibilis apte oñdit. Impossibile est. n. qd subā immāl sit subiectū nisi immālū z spūaliū accidētū. oīs autē subā simplex q est act⁹ nō recept⁹ in aliq potētia s; est p se subsistēs est subā immālis. g impossibile est qd aliq talis sit subiectū pncipiū nisi immālūz et spūaliū accidētū. subā aut celi est subiecta dimensioni q nō est imateriale nec spūale accidēs sed maxime māle z corporeū: vñ z vocat corp⁹ quātitas ergo impossibile est qd celū sit subā immālis: ita scz qd in sua eēntia sit act⁹ simplex: s; o; de necessitate qd in sua qdditate z eēntia habeat cōpōez potētie z actus: nec o; qd potētia inclusa in hac substāntia pcedat actū. Solū. n. illa potētia q nō est nata totaliter pncipiū vnicō solo actu tpe pcedit actuz i vno z eodē: qlis est potētia inclusa in subā gnābilū: s; ea que includit in subā celi est nata totalr pncipiū vno actu cui iccirco semp est cōiuncta nec vnq; tpe ipm pcedere pōt. qz cū nūc sit nata pncipiū alio actu oporteret tūc eā ponere actu exntē sine oī substāntifico actu. quod est impossibile. Et qz talis potētia semp est cōiuncta suo actui z illi esse qd cōseq talē actū nō pōt dici esse ociosa. qz illa potētia in nā dicit ociosa q p potētiā nālē actiua actui cui cōiungibilis est s; nō cōiuncta: cōiungi nō pōt. qd nō est vez de potētia substāntifica celi: q vt dixim⁹ semp est cōiuncta suo actui. Vez qz h videt esse pō cōmētatoris qui tñ eā defendere conat ob plicitatē vitandā ad pncipiū supsedeam⁹ a maiori declaratiōe z

Questio

improbatioe ipsius. qz in sequentibus quoniam procedente deo pleni discutiet. Nunc autem sufficiat breuiter vidisse quod ipsa stare non potest. Quidam ergo alij videntes quod impossibile est in substantia celi non includi potentiam et actum. dicunt quidem esse compositum et ex materia et forma. et quod in essentia materie nullus actus includitur qui videtur esse proprie distinctum non valentes videre quod sublato actu in pura potentia cadere possit distinctio adiungunt quod hec potentia in sua essentia indistincta est et vna omnium corporum: tam generabilium quam ingenerabilium vix est quod si accipiat formam eos ut ordinata in formas sic distinguet. quod ordinata in formas celestes non erit ordinata in formas generabiles: et sic ex ordine in formas secundum istos talis materia distinguitur et diuersa efficitur. Quod autem in sua essentia indistincta et vna sit materia omnium ipsi conantur ostendere ex eo quod si sunt diuersae materie in essentia aut vna est magis potentia ens quam alia aut non. Si sic: tunc altera ipsarum includit actum: et sic per suam essentiam non erit potentia. quod est impossibile. id est non quod est minus in potentia eo quod est potentia pura est ens actu. Nulla enim materia est nisi pura potentia. ergo vna non est minus ens in potentia quam alia. In pura autem potentia ut adiungunt de se non cadit distinctio: et si distinguetur hoc erit ex ordine ad actum. Materia igitur omnium cum sit pura potentia vna est in sua essentia secundum istos et indistincta: distincta vero solum ex ordine ad formam. Et quod ordo vel respectus ad formam est relatio que non est ipsa substantia materie sed actus eius: sequitur ad potestatem istorum quod materia generabilium et ingenerabilium sit vna in substantia: diuersa vero solum in actu. Sed quod ista potest sit oio impossibilis: triplici via ad primum ostendi potest. Et prima quidem via sumitur ex comparatione potentie ad actum. Ad cuius intelligentiam est considerandum quod vna et eadem potentia potest respicere actus diuersos materiales: sicut gustus potest respicere amarum et dulce: que dicuntur actus realiter et specie differetes. Vnde quod vni potentie et virtuti correspondet nectio vni proprium obiectum tamen: ordo de necessitate quod illi plures actus secundum rationes suas proprias differetes conueniant et vniantur in vna formali ratione obiecti sub quo solum et non aliter ponatur proprie et primo respicere illam potentiam. Unde gustus secundum quod gustus est non respicit primo amarum nec primo respicit dulce. Cuius ratio est. quia nunquam res aliqua inueniri potest extra id vel cum opposito eius quod primo conuenit sibi: sicut quia habere tres equales duobus rectis: triangulo conuenit primo: nunquam inueniri potest aliqd triangulum que non habeat tres. et sicut quia esse risibile conuenit homini primo: impossibile est esse aliquem hominem que non habeat aptitudinem ad ridendum. et quemadmodum quod auditum secundum quod auditus est attribuitur primo respicere sonum: non potest esse aliqd auditus qui non respiciat sonum: aut qui respiciat aliqd non participans aliquo modo rationem soni. et vltimum verum est quod nunquam res aliqua inueniri potest cum opposito eius quod sibi primo siue immediate attribuitur. Nunc autem ita est quod amarum et dulce secundum rationes proprias opponuntur cum dulce sit amaro oppositum nullo modo posset respicere dulce: et si secundum quod gustus

est primo respiceret dulce: nullo modo respiceret amarum quod opponitur dulci. Inuenimus autem quod respicit vtrumque. igitur neutrum respicit secundum rationem propriam sed potest vtrumque secundum quod participat vnam rationem alicuiusmodi: utpote rationem saporis que ipse gustus ponit respicere tanquam proprium et primum obiectum. Inuenimus autem tale proportio inter gustum et suum proprium obiectum siue inter gustum et saporis: quod nunquam re nec intellectu sic ab invicem separari potest ut gustus possit secundum quod gustus est respicere aliqd non participans rationem saporis aut quod sapor possit aliquam potentiam respicere que non sit gustus: quoniam potest omnis potentia per hoc ipsum quod est respiciens aliquid non participans rationem saporis: per hoc ipsum quod est ordo quod sit dicitur a gustu: sicut etiam omne obiectum quod primo respicit aliam potentiam quam gustum: ordo quod sit re dicitur a sapore. Quod melius per exempla patet. Auditus. n. per hoc ipsum quod est in sua essentia et natura non respicit saporis sed sonum qui non participat rationem saporis: ordo nectio quod per hoc ipsum quod est in sua essentia et natura sit dicitur a gustu et distincta ab omni potentia que per suam propriam additatem habet non respicere illud sed aliqd aliud non participans rationem illius. Inuenimus autem materiam generabilium et ingenerabilium taliter se habere quod materia generabilium per hoc ipsum quod est in sua essentia et natura respicit formam generabilem tanquam actum proprium et primo sibi correspondente: et materia ingenerabilium per hoc ipsum quod est in sua essentia et natura respicit solum formam ingenerabilem sicut. Hec autem declaratio est. quod si materia non respicit formam ingenerabilem vel generabilem per suam essentiam: tunc inclinabitur in ipsam per aliqd additum essentie sue. hoc autem est impossibile. Cuius ratio est. quia vnaqueque potentia per se naturali inclinatur in actum per quod conuenit sibi quod naturali illi actui coniungatur. Nunc autem sic est quod materia per suam essentiam et per nihil additum coniungitur essentie forme generabilis quam etiam essentie forme ingenerabilis: alio modo immediate essentia forme coniungitur essentie materie. quod est impossibile. ergo necesse est quod materia per suam essentiam et per nihil aliud inclinatur in formam generabilem et in formam ingenerabilem. Quod etiam materia generabilium inclinatur solum in formam generabilem et tanquam in actum proprium et primo sibi correspondente apte ostenditur. Vnaqueque etenim potentia illum actum sine medio ipsam proficiente respicit velut proprium et sibi correspondente primo que respicit inseparabiliter. actum autem que separabiliter respicit non potest respicere tanquam sibi primo correspondente: sicut gustus non respicit actum dulcis primo quantum ad gustum dulce immediate proficiat gustum proprie illud quod separabiliter ipsum respicit. separabiliter dico quod potest respicere etiam non dulce sicut amarum quod non participat rationem dulcis saporis aut respicit primo quod et inseparabiliter. Dico autem inseparabiliter. quod nihil respicere potest in quantum gustus est nisi participans rationem saporis. Nunc autem videmus quod materia generabilium sine villo medio coniuncta forme generabili tali vel tali. utputa lapidis vel ligni et si se

pabilr ipam respiciat cu possit ab ipa distingi & co
iungi alteri hnti oppoem ad illa forma tr gnabile
vtr sumpta inseparabilr respicit cu no possit oio oi
forma generabili expoliari. qz tuc fieret trāst^o de
generabili ad ingenerabile. qd est impossibile. Cuz
igit ma generabiliuz p hocipm qd e in sua eentia
respiciat inseparabilr forma generabile: cluditur
necio q ipam respiciat sicut actū p pum & primo
sibi corrdete. Qd aut materia ingenerabiliū si
milit etiā respiciat forma ingenerabile statū appz
cū impossibile sit q forma ingenerabilis māz sepa
biliter respiciat. Cui^o rō est. qz iccirco aliq forma
dicif esse forma rei generabilis qz ipa est forma a
materia separabilis. Cū aia intellectiua qstucunqz
sit icorruptibilis in se: tr dī forma rei generabilis
& corruptibilis ppter illud q est forma a mā sepa
bilis. Si g forma rei ingenerabilis respicit a mā
ingenerabiliū separabilr tuc sequit q forma rei in
generabilis sit forma gnabilis. qd est impossibile.
g impossibile est q mā ingenerabiliū p hocipm qd
est in sua eentia nō respiciat inseparabilr forma in
generabile. Pz igit iam q mā generabiliū respic
forma generabile & nō aliā: cuz hāc etiā respiciat
pmo: & materia etiā ingenerabiliū ingnabile solū
cū in ipam inseparabilr inclinē ita videlz q sibi in
separabilr iungit. Si igit materia ingenerabiliū p
hocipm qd est in sua essentia respicit forma inge
nerabile & nō aliā: & materia generabiliū p hīpm
qd est in sua eentia respicit forma generabile & nō
aliā: cludit de necessitate q materia ingenerabil
p hocipm qd est in sua eentia & natura sit dñs &
diuersa a materia generabiliū. sicut etiā qz gust^o
p hocipm qd est in sua eentia & natura respicit sa
porē & nō sonuz: & audit^o ecōtrario p hocipm qd
est in sua eentia & natura hz q respiciat sonū & nō
saporē. gust^o p hocipm qd est in sua natura e dif
ferēs & diuersa potētia ab auditu. Ex hac aut de
clatōe apte iūci pōt pōem dñā sup^o recitatā eē
oio irrōnabile & puerilē. Dicebat enī in pōne illa
q zfi p respectū ad forma ingenerabile & ad aliā
materia diuersificetur: est tr materia q respicit ge
nerabile forma & materia q respicit aliaz oio vna
in eentia. Si enī ita hoc se hz tuc nullo mō h vna
eentia pōt pmo respicere forma ingenerabile aut
pmo forma generabile. qz tuc vna eentia nō possz
vllō modo respicere aliā. queadmodū & si gustus
pmo respiceret dulce nullo mō respiceret amarū
vt supra de clatū est. g o3 tē dicē q talis vna mate
rie eentia respiciat vtrūqz fm quādā vnā rōnem
cōem. qz sicut supra dictū est: cuilibz vni potentie
o3 corrdere pmo vnū qd & nō multa. h aut non
poterit eē nisi rō forme subālis corpee. forma igit
tur subālē corpeā talis vna eentia vtr pmo respi
ciet. Nūc aut nos videm^o q qñcūqz aliq potētia
respicit pmo aliqō obiectū vtr vtr & qstucūqz in
separabilr: inseparabilr respiciet illud vtr: separabilr tr
respicit oē pticulare sub illo dētū. sicut qz gust^o
respicit saporē vtr: nullo mō pōt respicere insepa

biliter dulce. qz tuc nō respiceret amāz: & p dñs
nec vtr saporē. Cōstat aut sicut pbatū e q eentia
materie ingenerabiliū respicit forma ingenerabilez
inseparabilr cū sibi inseparabilr iungat p dñs h vna
eentia nō respicit oēm forma corpalē: s3 de neces
sitate est vna alia eentia materie q respic formas
alias ab ingenerabili: & p dñs multe sunt materie
corpaliū p suas eentias dñtes & repugnātes: & nō
vna trī. Et sic cōpleta est via pma sumpta ex cōpa
tōne potētie ad actū. Secūda via vō sumit ex
rōe pūatōis. Ad cui^o itelligētiā pōsiderādū e q
pūatio nunqz hz fieri nisi circa subiectū i quo est
nālis aptitudo ad habitū illi pūatōi oppositum.
vnde surditas que est pūatio audit^o nō pōt esse i
lapide q nullā nālē inclināōem hz ad audiēdū: s3
poti^o fit semp circa illud aīal quod ad auditū ha
bendū est nālī inclinātū: ipm trī actu nō hz. Naz
& pmo p hoc a negatōe distiguit. qz negatio oio
nihil ponit: nec v3 forma nec subiectū. Pūatio
vō & si de sua rōne nō habeat ponere forma sed
tollere: habet tamē de sua rōne ponere determi
natū subiectū. qz subiectū habit^o ppter id q hīr^o
& pūatio hnt fieri nālī circa idē. Dis igit p sup
positis vtrū^o querendū est: vtrū forma celesti ad
iūcta eentie sue māe onat ibi insimul secū pūatis
onē forme gnabilis. Et qdē si dicat q nō: hoc nō
poterit eē nisi ppter alterā trīū cāz. Aut. n. forma ce
lestis in sua mā nō ponit pūatōem forme gnabil
qz illa mā est talis q de sua eentia & nā sibi cōue
nit q nullaten^o inclinē in forma gnabile & subie
ctū pūatōis vt dictū est: o3 hīe nālē inclināōem
ad habitū. Aut hoc ideo est. qz mā cui adiūgitur
ipā celestis forma etiā de sua eentia & nā habeat
nālē inclināōem in forma gnabile: cū trī iūgit
forme celesti tollit ab ipa h nālis inclinatio. Aut
h ideo est. qz forma celestis cū adiūgit sue matie
ponit in ipa insimul secū ipam forma gnabilez: &
forma & pūatio insimul eē nō pnt. Et qdē si dica
tur p mū v3 q in mā celesti ideo nō ponit pūatio
forme gnabilis. qz h mā est talis q de sua essen
tia & nā hz q nō possit iclinari in forma gnabile
stati habebit ppositū. Nā. n. gnabiliū de sua
eentia hz q inclinē in forma gnabile. g de neces
sitate cludit q sit in sua eentia dñs & disticta a
mā celesti que de sua eentia hz q in hanc forma
nullo modo inclinē: sicut lapis q de sua essentia
hz nō iclinari in visum. in sua eentia distinct^o est
ab hoīe q p sua eentialia hz inclināōem ad vidē
dū. nā impossibile est q vna sit eentia iclinata dua
bus iclinatōib^o sic repugnātib^o q vna possit nul
laten^o se q eentia quā se q alia. Dico aut h esse
impossibile qz dīctōez iplicat. Si vō de tertū v3
q forma celestis ideo nō ponit pūatōem forme
gnabilis in mā cui adiūgit. qz ibi ponit ipam for
mā gnabile. p3 q hoc stare nō pōt. forma. n. cele
stis & forma gnabilis sunt forme repugnātū na
turaz. formas aut repugnātes impossibile est siml
pficere eandē partē materie. qz tuc idē staret sub

Questio

perfectiōibus oppositis. quod est impossibile. ergo impossibile est quod forma celestis in simul secū ponat in sua materia formā generabilē. Sed si dicat quod forma celestis nō ponit secū in sua materia formā generabilē nisi sūm quod virtualitē continet ipsam. quia in ipsa virtualitē continēt omnes forme generabilium: sicut in forma primi et vltis generātis patet. quod hic nihil est ad ppositū. Essentia etenim materie ex quo vna est: nō inclinā in formā generabilē solū quod virtualiter continēt in forma celesti. quia sic ē eā inclinari solū in formā celestē: sed etiā inclinā in formā generabilē sumptā sūm hoc quod est in propria natura: quia sic materia generabilium respicit ipsam. Si igitur huiusmodi essentie inclinatio sic debet perficere forma celestis quod ab ea tollat puationem forme generabilis: oportet quod ponat ibi formā generabilē sub propria natura. hoc autem est impossibile ut ostensum est. ergo impossibile est vere dicere quod ideo forma celestis in materia cui adiungit nō ponit puationem forme generabilis: quia ibi ponit formam generabilē. Si autem de secū videlicet quod forma celestis iccirco dictā puationem non ponit in materia quam perficit. quia et si talis materia de sua essentia habeat naturā inclinatioem in formam generabilē: cum tamen coniungit forme celesti: tollit huiusmodi naturalis inclinatio ab ipsa: apparet statim hoc esse impossibile. naturalis etenim inclinatio rei illa dicitur que consequitur naturalia et essentialia principia rei. talis autem inclinatio tolli nō potest nisi tollantur ipsa rei naturalia et essentialia principia ad que talis inclinatio sequitur: sicut quia aptitudo naturalis ad ridendum: naturalia et essentialia hominis principia consequitur nullo modo tolli potest nisi essentialia hominis tollantur et homo ipse: et per consequens corumpatur. Constat autem quod inclinatio materie in formā substantialē ipsam eius naturam et essentialia consequitur. si ergo hec inclinatio tollit ab ipsa cum coniungit forme celesti: oportet necessario quod pariter tollat et ipsa eius essentia et natura. hoc autem est impossibile quod tunc forma celestis subsisteret ablata essentia proprie materie. quod esse nō potest. Et preterea materie essentia et natura et eius naturalis inclinatio nō corumpitur ex eo quod coniungit sue formali perfectiōi: sed potius de necessitate perficitur. Si ergo forma celestis corporis coniungit essentie talis materie que vna est omnium corporalium veluti vna de formalibus suis perfectiōibus: ipsam et eius inclinatioem corumpere nō poterit: sed necessario perficiet. Aut ergo dicendum est quod perficiat totā naturalem inclinatioem talis essentie: et sic per consequens nullam in ipsa puationem reliquat: aut quod partem tantum. Et sic per consequens ponat in ea puationem alterius forme: ut puta illius cuius in materia carētiā ponit cum inclinatioem naturali ad ipsam. totam autem perficere et terminare non potest. quia talis vnius essentie inclinatio est in formā ingenerabilē et in formā generabilē sub natura propria vtriusque. forma celestis vero perficit ipsam solū sūm quod inclinā in

formā ingenerabilē: cum in simul secum ut supra ostensum est non possit in ea ponere formā generabilem sub propria natura. Patet igitur quod de necessitate oportet dicere quod supposito quod vna sit in essentia omnium corporum materia quod forma celestis adiuncta sue materie ponit in ipsa puationem forme generabilis: et sic quod non terminet totā naturalem inclinatioem ipsius. et cum naturalis appetitus nō sit aliud quod ipsa naturalis inclinatio: concludit de necessitate quod forma celestis non terminet nec perficiat totū naturalem appetitū sue materie: et quod celeste corpus sit naturaliter corruptibile: que omnia impossibilia sunt. ergo impossibile est omnium corporalium materiā vnā esse in essentia. patet autem subtiliter intuiti que diximus: quod nihil est dicere quod ideo materia posita sub forma celesti non potest aliam appetere. quia cum forma celestis sit nobilior omni forma corporea: sequeretur quod nobilior appeteret minus nobile. hoc enim esset bene dictum si materie conueniret appetere formā aliam ex eo quod est perfecta tali forma. Nunc autem hoc veritatem non habet etiam de materia sub vilissima forma stante: quia tunc vnum oppositorum appeteret aliud. quod est impossibile. unde nec corpus celeste appetit esse corpus generabile. quia hoc non solum esset appetere aliquid se ignobilius: sed etiā esset appetere sui destructioem: sed materia que stat sub forma celesti in quantum puaata forma generabili qua naturaliter sūm illam positioem nata est perfici: nō autem actu perfecta: et sic in quantum imperfecta appetit naturaliter formam generabilē: sicut vniuersaliter imperfectū appetit suam perfectioem quod nō est nobilior appetere minus nobile. Et isto solo modo sub cuiuscumque forma ponatur ipsa materia dicitur appetere formā alterius rei et nō aliter. Unde eodem modo quo alia corpora dicuntur corruptibilia dicitur etiā esse corporale et corpus celeste saluata positioem de vnitatem materie. quod sicut dictum est: est omnino impossibile. Et sic completa est secunda via declarandi quod volebamus sumpta ex ratione puationis. Tertia vero via sumitur ex ratione contrarietatis reperte in formis substantialibus naturalibus. Ad cuius intelligentiā notandum est quod forme substantiales nō dicuntur a physico sibi inuicem contrarie: quia inter ipsas talis distantia attendi possit qualis attenditur inter qualitates vere contrarias. Forma etenim qualitatis in ipsa sua essentia quandā latitudinē habet propter quā cum a suo subiecto incipit remoueri nō statim ab ipsa remouetur sūm se totā: sed primo inde remouetur sūm gradū vnum: et postea sūm gradū aliū. propter quod in ablatione talium formarum dicitur fieri processus a gradu intenso ad gradū remissum: sicut in corruptioem albedinis fit processus a magis albo ad minus album. Et quia plures gradus sunt inter vnum extremū et aliud quod inter mediū et extremū: iccirco distantia medij ab extremo nō dicitur maxima. quia maior est distantia vnius extremi ab alio: sicut etiā inter

ipsa plures gradus includunt. Quāto enim vnus
 distat ab alio p plures g̃dus: tāto distātia est ma
 ior. et quia omnes g̃dus nature illius generis qui
 sub extremis cōtinētur includuntur inter extrema
 sicut omnes g̃dus coloris includuntur inter albe
 dinē et nigredinē: ideo extrema dicuntur maxime
 distātia in suo genere. Nihil enim accipi potest sub
 ipso quod p tot g̃dus distet ab aliquo sub eodez
 contēto p quot distat vnum extremū ab alio. Cū
 hac autē maxima distātia habēt talia extrema ad
 inuicē etiā repugnantia: quia in eodem simul eē
 nō possunt: cum hec habēt pariter fieri circa tale
 subiectū in quo est naturalis aptitudo vel inclina
 tio ad vtrūqz. Et ppter mutuā repugnantia et incli
 natōem subiecti cōmunē: quādo vnū ipsorū po
 nitur in subiecto: ponit statim secū in eodem etiā
 p̃uatio alterius: vtputa eius cuius carētia ibi po
 nitur cum naturali inclinātōne ad ipm. Et forme
 quidem substāciales nō dicuntur mutuo cōtrarie
 propter primā conditionē: cū ipse non sint distan
 tes illo modo propter illud qd in sua essentia non
 habēt gradus diuersos: sed sunt actus simplices
 nullā omnino latitudinē habētes. Unde et cum
 aliqua iparū remoueri incipit a materia: statim ab
 ipsa s̃m se totaz remota efficitur: ita qd talis remo
 tio nō mensuratur tēpore sed instanti. Quauis
 autē forme substāciales propter istam primā cō
 ditionē sibi inuicē cōtrarie non dicuntur: appellan
 tur tamē cōtrarie propter alias cōditōnes. habēt
 enim ad inuicē repugnantia cum vna non cōpati
 atur secū aliā in materia fieri etiā habēt circa ma
 teriā naturaliter inclinātā in omnes. et ppter ista
 duo cū vna earū ponit in eētia talis materie po
 nitur ibi statim et p̃uatio aliarū. quia ibi ponitur
 earum carētia cum naturali inclinātōne ad eas
 ratōne essentie illius materie que inclināt in oēs
 sicuti cum in essentia materie ponit forma ignis:
 ponitur ibi statim p̃uatio forme aeris propter id
 qd vna est eētia materie que inclināt in vtrūqz.
 Iste autē omnes cōditōnes oportet qd repiatur
 saluata vnitāte materie inter formas celestes et
 formas istorū inferiorū. sicut enim supra dictum
 est: tales forme sunt repugnantia naturaz. habēt
 etiam salua positōne predicta fieri circa vnā eēn
 tiaz materie que est in istas et in illas naturaliter
 inclinātā. quia vt dicunt vna est omnino essentia
 materie inclinātā in vtrasqz: et per cōsequēs cum
 vna earū ponitur in tali eētia: ponitur ibi de ne
 cessitate forme alterius p̃uatio. Et sic de necessita
 te oportet qd eque perfecte forme istorū inferiorū
 sunt cōtrarie formis celestibz et sibi inuicem.
 Et per consequēs oportet qd sicut ista corpora in
 ferioza ratōne suarū formarū sunt nata moueri
 cōtrariis motibus: sic etiā corpora celestia ratōne
 suarū formarū naturalium sunt nata moueri cōtra
 riis motibus motibus istorū. Itē quēadmoduz
 vnū inferioruz patit ab alio: sic etiā et corpus ce
 leste naturaliter pati poterit ab istis. Cuius decla

ratio est. quia sicut habet in p̃mo physicozū: vna
 formarū contrariarū nō potest agere in aliā: nec
 ab aliā pati. Formarū vero vna talium formarū ra
 tione site forme agit necessario in aliud et necessa
 rio patitur ab alio: nō nisi ratōne materie sue que
 vnus eētie cui sit: est naturaliter susceptiua forme
 contrarie. Cōsimiliter nec forma celestis ages
 re poterit in formas istorū inferiorū nec ab eis
 pati: sed corpus celeste aget necessario ratōe sue
 forme in inferiora corpora: et patiet de necessitate
 ab eis ratōne sue materie que vnus essentie cum
 sit: susceptiua est omnium formarū corporalium. Nā
 cōtraria nata sunt agere et pati ad inuicē et ab in
 uicem. poterunt ergo de necessitate corpora infe
 rioza in suam substātia transmutare corpora ce
 lestia et cōuerso. Item cum cōtrarias formas se
 quāt qualitates se inuicem nō cōpatiētes: lux que
 sequit naturā celestis mobilis cōtraria erit omni
 bus qualitatibz istorū inferiorū: et corruptā eozuz
 non potēs in eodē simul esse cum eis: cuius con
 trariū ad sensum cōtinue expimur. Cum igitur hec
 omnia sint irrātōnabilia patet qd irrātōnabile sit
 ponere materiā omnium esse vnā in essentia. Argu
 mentū autē cōtrarie opinantium omnino nullum
 est cum supponat ibi qd materia celi compabilis
 sit materie istorū inferiorū: et per consequēs qd sit
 vnus nature cum ipsa. quia non sunt compabilia
 nisi que vnā naturā habent. vt patet in secūdo
 physicozū. Ultimū autē veritatē habet qd vtraqz
 materia est pura potentia: nec ideo tamē oportet
 qd inter ipsas nulla cadat distinctio. Ideo enī act^o
 dicitur distinctōis p̃ncipiū. quia cum sit p̃ncipiū
 essendi: oportet qd ex diuersis actibus diuerse cō
 surgant entitates. Verū est igitur actum eē disti
 ctiū illius entitatis solum cuius ipse est constitu
 tum p̃ncipiū. non est autē constitutiuis entita
 tis essentialis ipsius materie siue essentie ei^o: quin
 potius eētia actus eius alia est omnino ab eēn
 tia materie: constituit tamē hanc entitatē vel eēn
 tiaz materie in aliqua entitate siue quidditate spe
 cifica. Et quia vnūquodqz ab eodem habet enti
 tatem: et entitatē distinctā ab aliā: iccirco necessa
 riū est qd entitas specifica materie in qua ipsa ma
 teria per actum ponitur distinguat solum ratōne
 actus. Quia vero entitatē et essentia suam que est
 alia ab entitate vel essentia actus ab actu nō ha
 bet: non oportet etiā qd eius distinctōnem s̃m se
 sumpte habeat ab actu. Verū quia hoc quod est
 in sua propria essentia effectiue habet a create:
 habet etiā distinctōnem primariā ab eodem effe
 ctive. Et quia sic actus hoc ipm qd est in sua eēn
 tia formaliter a se habet: iccirco sicut act^o se et ipso
 essentialiter distinguit et ab alio actu et etiā a ma
 teria: sic etiā et materia se ipsa eēntialiter distinguit
 et a materia alterius essentie et nature qd sit es
 sentia sua et etiā ab actu. Est igitur pura potentia
 et materia corruptibiliū et materia icorruptibiliū
 corporū: et nihilomin^o distincte sunt in eētia: nō

Questio

per actum sed per seipsas ad inuicē et ab essentijs actuū per quas in specifica entitate ponunt. sicut enim seipsa formaliter habet vna quod sit essentia et natura potētie perfectibilis totaliter vno determinato actu: et per consequēs vno actu inseparabiliter coniuncte. alia vero habet formaliter a seipsa quod sicut essentia et natura potētie nō totaliter vno singulari actu perfectibilis nec per consequēs vno inseparabiliter actu determinato coniuncte: sic etiā seipsa vna est ab alia distincta vel diuersa: et nō propter aliquē actum. quēadmodū etiā et quia seipsa materia est potētia: et forma seipsa est actus: materia seipsa est essentialiter diuersa ab actu: et non propter actum aliū sue potētie adiunctū: quia tunc iretur in infinitū: aut essentia materie esset idem cum essentia forme vel actus. quod totū ē impossibile. Sic igitur oportune iam patet et quomodo sit alia materia ingenerabiliū et generabiliū: et quomodo actus sit principiū distinctiōis in entibus: et quomodo in essentia materie cum sit pura potētia possit cadere distinctiō. Ad primū ergo dicendū quod forma celestis non est media inter formam elemētis et animā intellectiuā. quia mediū est in eodē genere physico cum extremis: forma vero corporis celestis non est eiusdem generis physici cuius predictis propter id quod ille forme sunt cuiusdam generis physici: quia habēt idem susceptiōes primū quod de istis nō est verū vt ostensum est.

Ad secundū dicendū quod corpus celeste nō habet esse a seipso sed a pncipe vniuersi: cuius infinitate per consequēs ostēdit sua infinita duratio. dicitur tamē incorruptibile naturaliter. quia in se nullum habet principiū inclinatiois ad corruptiōem: sicut habēt corpora generabilia naturaliter. Ad tertium et ad quartū dicendū quod illa que habēt idem generū physicū vniuoce predicatū habēt eandē mām corpus autē nō est generū physicū. cuius ratio est. quia omnia physica. vt dicitur secūdo physicorū sunt sic similia: quod in sua rōne includit sensibile māz. corp⁹ autē in quō corp⁹ nō includit in sua rōne māz sensibile. quia tūc mathematica etiā sicut rōez a sensibili mā nō abstrahēt. quod similia ē. Corp⁹ igitur ex ea rōne qua corp⁹ ē nō ē quod physicū: sicut ex ea rōne solū quod ē mobile. Si autē corp⁹ mobile generū physicū ponat statū appz quod corruptibile et incorruptibile corp⁹ nō vniuoce in genere physico. hō etenim generū quod ē corp⁹ mobile sic diffiniri dicitur vt dicat quod ē corp⁹ hōis in seipso principiū mot⁹. et hō quod ē uenit tā corp⁹ gnābili quod etiā ignābili sicut nō vniuoce. quia corp⁹ ingnābile hōis in se principiū mot⁹ ad vbi solū: nō autē principiū mot⁹ ad formā. corp⁹ vō gnābile hōis vtzqz. Ad quintū dicendū quod aliūde sumit equocatio corporis mobilis de perpetuo et de corruptibili: et aliūde equocatio predictio animā de asino et equo. Corp⁹ etenim mobile predictio equocatio per equocatioz principij mot⁹ quia corruptibile hōis principij mot⁹ ad formā quod ē ipsa nā māe gnābiliū corp⁹. perpetuū autē corp⁹ nō hōis in se principiū mot⁹ ad formā vt dictū ē: et id nō hōis in se

nāz māe gnābilis corporis. vñ talis equocatio pcedit ex diuersitate māe. al autē predictio equocatio per equocatioz tūm mot⁹ et nō principij. al. n. ē corp⁹ hōis in se principiū mot⁹ ad formā quod ē principiū viuēdi et sentiendi. et hō quod ē principiū mot⁹ quod ē mā supradicta habet oīa alia. sicut formā quod ē vite et sensus principij ad quā tūm mot⁹ predictio nō hōis eādē. quia nō ē eadē spē cuius alia aīa. et sic alia equocatio ponit vnitatē māe: et fore diuersitatē. Ad. vi. dicendū quod agētia et patiētia mutuo cuiusmodi sunt illa quod cū agūt repatiūt ab eis in quod suas impmūt actōes cōiscāt nccio in mā. Corpora autē celestia et si agūt in ista inferiora: nō tūm repatiūt ab eis: et propterea nō ueniūt in mā. Ad. vii. dicendū quod et si corporib⁹ celestib⁹ debeat mot⁹ de vno vbi ad aliud rōe suaz ptiū: nō tūm eis debet mot⁹ quod ē in tōria quoz acq̄sitiō pōat variatōez in subā ipoz: quod variatō ppe vocat trāsmutatio. et id nō debet uenire in mā cū istis inferiorib⁹ quod tali trāsmutatioi subiiciūt. Ad. viii. dicendū quod si ignis mīm⁹ dicitur accipi nō potest hō fieri in sphaera ignis quod tota ē plena cōtinuo igne: sicut fiet in sphaera alicui⁹ alteri⁹ elemētis: cui⁹ quidē mīmū sic resolui potest in multa mīma ignis: sic etiā in se hō multas ptes in quod multa mīma ignis resolui pnt: quod quod ptes dū sunt sibi inuicē continue retinet formā illi⁹ elemētis cui⁹ sunt ptes. cū vō diuidūt formā illius elemētis nō retinet: sicut in multa ignis mīma resoluiunt. Dicendū igitur quod si mīm⁹ ignis possit accipi in sphaera aeris et diuidi: nō resolveret in totū mīmū aeris: sicut in aliqua illi⁹ mīmū pte: que dū cēt in toto mīmo aeris formā habet. si vō a toto diuideret: in mīmū ignis resolveret. Ad. ix. dicendū quod mā inferiorū seipsa eēntialr distincta est a mā celestiu. et ad talē distinctiōem eēntiaz sequit distinctiō ordinis ad formā. et quis quidē intellect⁹ cōcipiat quod eēntia vtriusqz māe sit pura potētia: accipit tūm cū hō piter quod alteri⁹ eēntie et nāe est vna potētia: et alteri⁹ alia. quia eēntia et nā vni⁹ talis est quod actu vniuo totalr pficit. eēntia vō materie alteri⁹ vt supra patuit opposito modo se hō. Ad. x. dicendū quod in pura potētia nō est dare grad⁹ potēntialitatis ppe quos dici possit vna mīm⁹ potēntia quod alia: et sic pōis in sua essentia p hōe de actu. est tūm ibi dare grad⁹ tales p quos dici possit vna potēntia esse altioris eēntie et nature quod alia: cum altioris nature potēntia sit illa que de sua natura habet quod semp sit determinato actu coniuncta: quod illa que hoc de sua natura non habet. Ad. xi. dicendū quod actio illa qua agens in passum suam formā potest inducere potius ignobilitati quod nobilitati attestat: cum attestetur generabilitati et corruptibilitati.

Ad duodecimū dicendū. quod omne quod agit de necessitate nature tāntū potest impmēre in passum quantū in ipso est illud quo agit si tamē passuum sit tale quod id in tali gradu suscipere possit. nullum autem passiuū inueniri potest quod tantū in se recipe possit de lumine de se existenti cōmunicabiliter quantū est in sole: sicut etiā et si

forma celi de sua nã sit cõicabilis multis: qz tñ ei⁹ mã e talis: qz vnica singulari for tota replet z pfi⁹ cit: nõ remanet p⁹ vni⁹ mãz: alia cui possit cõicari z sic tollit celestis forme multiplicatio: z filr etiaz qlitatis actio sub gdn illo i quo cõseq⁹ formã talẽ

Ad. xiiij. dicẽdũ: qz significatũ nois vtriusq; mãe e h⁹ qd dico corpale. z vtq; e mã corpalis. Sz si p pzijs noib⁹ vocarent: queadmodũ sũt i seipsis diuerse sic etiã noia z noiaz sig⁹ eẽnt diuersa. Ad xiiii. dicẽdũ: qz ens e equocu ad ens corruptibile: z ad ens incorruptibile. z filr nõ ens e equocum ad id qd opponit corruptibili: z ad id qd oppõit incorruptibili. vñ ens z nõ ens nõ sũt duo extrema tm: sz ad min⁹ qttuoza se iuicẽ diuersa. vñ etiã oz qz ad min⁹ duo diuersa media cadãt ncẽio inẽ ipa

Ad. xv. dicẽdũ: qz corp⁹ celeste ex ea pte q⁹ qũtũ e diuisibile e i infinitũ: sic z qdlibet cõtinuũ. ex ea vo pte qd e nãle e tal nãe qz diuidi nõ põt: qz tũc eẽt corruptibile. Argm̃ igit ex falsa suppoẽ. pcessit.

Questio quarta.

Questio quarta e: Vtr⁹ eẽntia materie sit pura potẽtia: z videt qz nõ. eẽntia matie fm phm e ignãbil z incorruptibilis. vñ adueniẽte eẽt for ñ recedit: sz potẽtia ad formã

corũpũt z recedit for adueniẽte: igit ipossibile e: qz eẽntia matie sit ipa potẽtia ad formã. Sz q⁹ sit eẽntialr i diuersis pdicamẽt: sũt eẽntialr diuersa z q⁹ sic dñt sũt diuersaz eẽntiaz. potẽtia aut nãlis fm phm i pdicamẽt: e in pdicamẽto qlitãt z potẽtia matie e potẽtia nãlis. ipsa vo eẽntia mãe e i pdicamẽto subẽ: igit potẽtia mãe e oĩno alr⁹ eẽntie ab ipsa mãe eẽntia. Sz eẽntia mãe cũ diũcta forme pficiãt: aut i ea remanet potẽtia ad formã illã: aut nõ. Lõstat aut qz ñ remanet: qz cũ potẽtia dicat carẽtia act⁹. z sic ncẽio dicat qd ipfectũ: tũc mã diũcta forme carẽt for illa: z eẽntiali pfectioẽ illi⁹: qd e ipossibile: igit ipossibile e qz remaneat potẽtia ad formã illã: remãet aut eẽntia. g⁹ ipossibile e qz eẽntia mãe sit i potẽtia ad illã formã. filr aut dici põt z de oib⁹ alijs formis: igit eẽntia mãe est oĩno aliud a potẽtia ad formã. Sz hĩpm qd sigt nomẽ potẽtie: e i pdicamẽto retonis. hĩpsum aut qd mã e i sua eẽntia e solũ i pdicamẽto subẽ. igit nullo mō qz e eẽntia mãe põt vocari potẽtia z si nõ vocari: multo magis nec eẽ. Si dicat. qz sz aliã z aliã rōez eẽntia mãe e tã i pdicamẽto subẽ qz i pdicamẽto retonis. z sic ipsa eẽntia q⁹ e subã est etiã potẽtia q⁹ dic⁹ retonẽ ad aliud. Lõtra eẽntia mãe sz rōez q⁹ subã e: aut e potẽtia aut nõ. si e potẽtia: tũc de ncẽitate eẽntia mãe sub rōe q⁹ subã e: erit i pdicamẽto retonis: qd e ipossibile: nõ igit sub rōe q⁹ e subã põt eẽ potẽtia: e aut sz se subã: igit sz se nõ e potẽtia. Sz vna potẽtia tota pficiãt vno actu. si igit eẽntia mãe est ipsa potentia ad formã

subãle: cũ talis eẽntia sit vna nũero z nõ multe. pficiẽt tota ab vna nũero for subãli. z sic nõ remanebit potẽtia ad alias for: nec possẽt h⁹ potentia eẽ illa q⁹ e vna: for illis opposita iã pfecta: sed alia z eẽntia sit solũ vna. videt d⁹ ncẽitate dicẽdũ: qz potẽtia nõ sit ipsa eẽntia mãe subiecte forme subãli. Sz oẽ qd e i genẽ: cõpositũ e ex genẽ z oĩa: sz mã pma e i genẽ subẽ. g⁹ e cõposita ex genẽ z oĩa. sz in oĩ tali cõpone: gen⁹ e potẽtia z oĩa act⁹: g⁹ mã pma cõposita e ex potentia z actu. Si dicas qz mã e in genẽ reductiue: qz e vnũ de pncipijs subẽ: z qz tale e: nõ oz qz sit cõpositũ ex potẽtia z actu. Lõtra qd picipat generi rōez: z vlt⁹ h⁹ hz pziã oĩa: ex genẽ z oĩa de ncẽitate oz eẽ cõpositũ. sz mã pma picipat rōnẽ subẽ: cũ sit subã. z vlt⁹ h⁹ hz pziã oĩa: p quã distinguit ab alijs substãtijs. vñ z cõueniẽt dñ qz potẽtia e ei⁹ subãlis oĩa. cõponit g⁹ oĩno ex genẽ z sua oĩa: z sic idẽz qd pũs. Sz qd imediate pdicat de plib⁹ solo nũero dñtib⁹ spẽs e mã aut eẽntialr pdicat de plib⁹ solo nũero dñtib⁹. cũ eẽntia matie vni⁹ z eiusdẽz ppe rōnis exñs nũero sit disticta sub diuersis formis subãlib⁹: g⁹ spẽs qdã e. ois aut spẽs eẽntialr hz specif⁹ cũ actũ: igit de ncẽitate mã pma de se z sui eẽntia aliqũe actũ hz. Sz nihil põt eẽ subiectũ dimẽsioni nisi sit aliqũe ens actu: qz pura potẽtia dimẽsionata eẽ nõ põt. Lõstat aut qz mã pma de se e subiecta dimẽsioni inẽminate: qz ut ait cõmẽtator i de subã orbis: Dimẽsio inẽminata e i mã añ oẽm formã. z itẽz ibidẽ dic⁹: qz dimẽsio inẽmiãta q⁹ e corpus est ppetas matie: g⁹ de ncẽitate mã de se est ens in actu aliquo. Sz oẽ illud qd in se subsistere non põt: si dõz poni i actu eẽndi: oz qz sustentet in aliquo: sz forma subãlis mãlis in se subsistere nõ põt oz igit qz i aliquo sustentet: sz pura potẽtia nõ potest eẽ sustentamẽtũ alic⁹: oz igit qz ei⁹ subiectum qd e mã pma in q⁹ sustentat sit aliqũe ens nõ i pura potẽtia sz i actu. Sz mã nõ dñ ens in potẽtia nisi inquãtũ caret for quã e nata habẽ. qñ vo stat sub forma dñ subiectũ z nõ potẽtia. h⁹ aut eẽt ipossibile si ipsa diceret. eẽntialr potẽtia. nõ e igit sua eẽntia pura potẽtia. Sz mã ad eẽ suũ essentialẽ qd e eẽ sue eẽntie nũqz e in potẽtia sz i actu. semp eni h⁹ hz: cũ ipm hẽat de se z non ab aliq⁹ forma. si igit semp respũ illi⁹ eẽ est actu. vñ non posse dici qz sua eẽntia sit pura potẽtia. Sz act⁹ qd dicitur z qd dicitur vlt⁹ eẽntia idẽ sũt. vñ qz actũ qd dicitur nõ habet: nõ habet etiã quiditatez siue eẽntiã: sz mã habet eẽntiam. ergo habet aliqũe actũ qd dicitur.

Et pterea esse est act⁹. z mã de se hz eẽ essentialẽ igit de se hẽt eẽntialẽ actũ: nõ est g⁹ pura potẽtia.

Sz eẽntia materie nõ dependet a forma: sed potius ecõuerso: qz illa per creationẽ: ista p generationẽ: z materie transmutationẽ: sed qz tale est potest p se esse saltim actione eius qui eã per se creat z qz põt per se eẽ. est ens aliquid in actu quiditatiuo per se. igit mã nõ est pura potẽtia. Sz oẽ qd est effectus primi necessario habet de se aliquem

Questio

actū: cū nulla actio iminet ad purā potentiaz: sed mā est effectus pmi z immediatior q̄ forma z cōpositum. cū ista p̄duci p̄nt a generante: illa vō nisi a creante. ergo de necessitate o3 q̄ ipsa de sua eētia habeat actū aliquē. ¶ Illud quod est res ab alio distincta de se diuina essentia imitat. z q̄ tale est: h3 necessario de se ideam in deo. z q̄ huius est necessario de se habet aliquē essentialē actum z potest per se p̄duci. sed materia de se etiā p̄ suaz essentia est res distincta ab essentia forme. igitur de se habet aliquē essentialē actum. z sic sua essentia nō est pura potētia. ¶ Omnis relatio fūdat̄ tur sup̄ aliquod absolutum: ergo etiā relatio inclusa in noīe potētie: o3 sup̄ aliquid absolutum fundari. hoc aut̄ nō est potētia: quia tūc restaret itez q̄ de relatione inclusa in ipsa. z cū nō sit in infinitum ire: oportz necessario dare aliquid absolutum cui⁹ eētia nō sit potētia. Cum ergo mā hēat potētia ad formā: o3 de necessitate in ipsa dare aliquid absolutum: q̄ nō sit potētia: hoc aut̄ nō p̄t eē nisi essentia materie: igit̄ zc. ¶ Si subiectum vel mā esset idem eētia q̄ sua potētia. cum in subiecto vel materia sint diuerse potētie ad diuersos actus. ille diuerse potētie oēs essent essentialiter idēz quod mā: z idē p̄sequens fm se: quia quecūq; vni z eidem sunt eadē: sibi inuicem sunt eadē. hoc aut̄ est falsum: ergo illud ex quo sequit̄ essentia ergo materie non est pura potētia. ¶ Cōmentator sup̄ primo phisicorū dicit q̄ ipsa mā nō est ens in actu z q̄ nō est priuatio: z itez q̄ nō est potētia: ita q̄ potētia sit in sua diffinitione.

Sed cōtra hoc est q̄ materia diuidit̄ ex opposito cōtra formas. sed forma est eētia liter actus: igit̄ z mā est eētia liter potētia. ¶ Actus z potētia sunt in eodē genere: sed forma q̄ ē act⁹ substantialis est in genere substantie: ergo z sua potētia est in genere substantie: z est per consequēs substantia. ¶ Actus z potētia immediate diuidunt ens. sed eētia materie est ens: z nō est actus: ergo est potētia. Respondeo ad istā q̄onem: dicunt aliqui: q̄ eētia materie nō est potētia: sed est ī potētia nō p̄ aliquid sibi additū: sicut ignis est in potētia ad calefaciendū p̄ calozē additum sue eētie: sed per se ipsam: sicut calidum per seipsum est in potētia ad calefaciendum. Et quemadmodū potētia ad calefaciendū: nō est ipsa calozis essentia sed ipsam immediate consequit̄. sic etiā ut dicunt potētia ad formā nō est ipsa eētia materie: sed immediate consequit̄ ad eam. Responso aut̄ sic dicētium est: qz phs in tertio phisicorū dicit: q̄ es differt fm q̄ est potētia ad statuā: z fm q̄ est es. z differt sanguis in eo q̄ sanguis. z fm q̄ est in potētia ad sanitatē. ergo vniuersaliter id quod in potētia est: differt ab ipsa potētia. Sed q̄ ista positio sit irrōnabilis: duplici via ad p̄ns ostendi p̄t. Et prima quidē via sumit̄ ex diuersitate potētiarū. Ad cuius intelligentiā sciendum est: q̄ duplex potētia inuenit̄: fm q̄ ad p̄ns sufficere p̄t

vna quidē que ponit aliquaz impfectionē. vel ut p̄p̄ius loquamur aliquā carentiam essendi in eo cui⁹ est potētia. Alia vō est que de sua rōne nulli⁹ esse impfectionē vel carentiam ponit. z si possit carentiā ponere ī aliquo opandi quā etiā de sua rōne ponere nō h3. Et p̄ma quidē extenso nomine d̄r potētia passiuā. secūda vō est potētia actiuā. actiuā etenim potētia de sua rōne non h3 q̄ ponat īpfectionē eēndi in eo cui⁹ est potētia: sed potētia habet ponere contrariuz. passiuā vō de sua rōne hēt q̄ ponat carentiā alicui⁹ esse in eo cui⁹ est. Hoc aut̄ sic declarat̄: Omnis potētia necessario ex ipsa rōne qua potētia est ad actū d̄r: aliter tñ z aliter. Potētia enī actiuā d̄r ad actū egredi possibilem ab agente. nō p̄t aut̄ actus z esse effectiue p̄gredi nisi ab existente actu: qz agere nō competit nisi actu existenti. o3 igit̄ q̄ necessario actiuā potētia sit alicui⁹ actu existenti. z sic talis potētia de sui rōne nō ponit carentiā alicui⁹ esse: quin potius p̄supposita actualitate essendi ponit possibilitatē agendi. Potētia vō passiuā d̄r ad actum recipi possibilem in eo cui⁹ est potētia. z qz actus v̄r est rō z principium alicui⁹ esse. o3 de necessitate q̄ in quocūq; recipi p̄t aliq̄s actus: in eo recipi possit aliq̄d esse potētia igit̄ passiuā in eo c⁹ est potētia: ponit necessario receptibilitatē alicui⁹ actus. z sic p̄ oīs ponit semp̄ in nā ei⁹ cui⁹ est potētia alic⁹ eē carentiā. cū receptū sit oīno extra eētia vel nām recipiētis. Et potētia quidē mālis: nō est actiuā potētia: quā potius diuidit̄ ī ipsam. Est enim potētia actiuā ut dixim⁹: potētia agentis. Mā vō cui⁹ est potētia mālis: nec in idem numero: nec in idem specie p̄t coincidere cū agente: sic nec etiā cū forma: nec cū fine: ut habet̄ ex tertio phisicorū: ex quo cōcludit̄: q̄ nec etiā potētia mālis in idē coincidē p̄t cū potētia actiuā q̄ est solius agentis. Coincidit aut̄ in idem cū ea que passiuā d̄r. vnicuiq; etenim habētī materiā: ipsa mā principium est: z rō patiēdi. Et qz omnis potētia passiuā: ut ostensū est in eo cui⁹ est potētia: ponit alicui⁹ esse carentiā non alic⁹ q̄ ponēdo in ipso carentiā alicui⁹ actus: qui v̄r ē rō essendi. o3 de necessitate q̄ ipsa potētia mālis q̄ est potētia passiuā: ut ostensū est: ponat in essentia materie carentiā alicui⁹ eē: ponēdo in ea carentiā alicui⁹ act⁹: qui eēndi est rō z principium actus aut̄ qui est rō essendi in genere: nō inuenitur nisi duplex: fm q̄ duplex actuale eē: z duplex ens vnicuiq; h̄nti nāz entitatis actuale eē p̄portionalitū sue nature r̄ndz. Et iō quēadmodū inuenit̄ duplex ens: videlz ens simplr: z ens fm q̄d. sic etiam repit̄ duplex eē: qz eē simplr: z eē fm q̄d: ut p̄mūz r̄ndeat p̄mo enti: z secūdo secūduz. Et qz ens simplr nō ē nisi subā: z ens fm q̄d nō ē nisi acc̄ns. iō esse simplr est solū substantie: z eē fm q̄d solius accidētis. Cōs̄r aut̄ fm duplicitatē entis z eē: inuenit̄ etiā z duplex act⁹: qui est rō eēndi. vnus quidem qui est substantia: z alter qui est accidens. Et act⁹ quidē qui ē subā: qz nō p̄t eē actus alte

rius est entis simpliciter: non potest esse ratio nisi eendi simpliciter. actus vero qui est accidens: quod est actus entis simpliciter quid tamen: non est ratio nisi esse simpliciter quid. Et sicut inuenimus duplicem actum qui est ratio eendi. sic etiam inuenimus et duplex actum receptiuum. Unum quidem quod est receptiuum actus accidentis. et aliud quod est receptiuum actus substantie. Ulterius autem considerandum est: quod quicquid aliquid compatitur ad aliud sicut recipiens ad receptum: id quod recipiens est in sua ratione vel in sua essentia et natura non habet illud quod est in ipso receptum. et ratio est quod illud quod habet in essentia alicuius est sibi omnino intraneum. id autem quod receptiuum est extraneum est omnino: et non intraneum recipientis essentie: quod recipiens et receptum sunt diuersarum naturarum. Naturarum autem diuersarum una intrinseca alteri nature in essentia esse non potest. Ad hoc autem euidenter sequitur quod primum receptiuum actus accidentis in sua essentia et natura: nullum actum accidentis habeat. et quod primum receptiuum actus qui est substantia nullum actum qui est substantia habere potest de sua essentia. si enim primum receptiuum actus accidentis de sua essentia actum tale haberet. haberet etiam necessarium absque ulla receptione actus qui est ratio essendi simpliciter quod extrinseci sue essentie de se simpliciter quid esse. et hoc competere propriissime sue nature. hoc autem falsum est quod substantie que est primum accidentis receptiuum non competit de sua natura ut predictum est: nisi esse simpliciter. igitur quod in essentia substantie. nullus actus cadat qui sit accidens. et sicut oportet dicere quod primum receptiuum actus qui est substantia: nullum tale actum habeat de sua essentia. si enim de sua essentia esset aliquid tale: necessario oporteret quod existeret simpliciter sibi de sua natura competere sine ulla receptione actus extrinseci: quod est omnino impossibile. nam et tunc frustra propter acquirendum hoc esse ponere in potentia ad actum substantie: et frustra eius essentiam ponere sequi naturalis inclinatio in actum predictum: quod totum est inconueniens. Oportet igitur necessario dicere: quod sicut potentia ponens receptibilitatem eendi simpliciter quod: et actus accidentis: ponit in primo receptiuo talium actuum quod est substantia: siue in eius essentia carentiam omnis actus accidentis: sic etiam et potentia ponens receptibilitatem eendi simpliciter actus qui est substantia ponat in essentia primum receptiuum talium actuum carentiam omnis actus que est in substantia. et per consequens cuiuslibet alterius hoc autem primum receptiuum: est illud quod dicimus materiam primam. de necessitate igitur: quod materia prima sic careat omni actu quod de essentia sua nec actus aliquis sit: nec aliquid actum habeat. et per consequens si oportet esse aliquid. igitur quod sit essentialiter pura potentia. Et hoc est valde clarum et euidenter iam: quemadmodum enim esse simpliciter quid: quod presupponit esse simpliciter: actus etiam qui est ratio eendi simpliciter quod: igitur quod presupponat actum qui est ratio eendi simpliciter. et sic necessario oportet recipi in eo cuius essentia est vel simpliciter actus vel includit actum que essendi simpliciter est ratio: sic etiam quod esse simpliciter nullum aliud esse ante se presupponit igitur quod actus qui est ratio eendi simpliciter nullum presupponat ante se actum in quo fundetur. et per consequens quod in eo recipiat cuius essentia nec sit actus: nec actus includat in sua ratione ullum: sed sit pura potentia. Et sic

completa est prima via declarandi propositum: sumpta ex diuersitate potentiarum. Secunda autem via ad ideas declarandum ex una diuisione entis per immediata accipitur. Ad cuius intelligentiam sciendum est: quod si illa diuisione entis que dicitur ens aliud in actu aliud in potentia sit per immediata: quod quicquid est aliquo modo: igitur quod habeat esse altero illorum duorum modorum. nihilominus tamen dici non potest quod hoc sit per immediata eorum que sunt: aliud est actus aliud est potentia: propter illud quod cadit medium inter ipsa. scilicet compositum: quod nec est actus nec potentia: sed in sua essentia habet utrumque. si igitur et hoc per immediata esse: igitur quod ibi addatur compositum. et dicatur quod quicquid est: vel est in sua essentia actus: vel est potentia vel est ex potentia et actu compositum. sic etenim procedendo comprehensa erunt omnia quocumque habentia realem essentiam. Est enim valde ridiculum dicere: quod est dare aliquam essentiam que non est actus: neque potentia: neque compositum ex utroque: cuiusmodi est essentia materie que est in potentia. Si enim hoc quod dico esse in potentia non est ipsa essentia materie: sicut veritas est: sed accidit illi essentie. De essentia ipsa querendum est: utrum sit actus vel potentia vel composita ex utroque. Qui autem ipsam dicit nihil habere esse: et tamen esse aliquid: ignorat proprias entitatis diuersas. necesse est enim omnem entitatem et omnem essentiam esse alterum predictorum. Et preterea autem dicitur materia ens in potentia: quod de se nullam entitatem seu essentiam a qua unumquodque dicitur ens habet sed habere potest. aut dicitur ens in potentia: quod et si de se entitatem aliquam essentialiter habeat ad quam nunquam est in potentia potest tamen aliquid in se habere ut puta formam per quam ponetur in essentia actuali quam de sua natura non habet: primum autem stare non potest. Quod enim nullam entitatem vel essentiam habet: est omnino nihil et ideam nullo modo habens in mente artificis dei. Quod vero est de se aliquid et non nihil igitur quod de se essentiam habeat ad quam nunquam sit in potentia. de ista igitur essentia ad quam materia nunquam est in potentia est quod utrum sit simplex actus: sicut est essentia forme vel composita ex potentia et actu: sicut est essentia composita ex materia et forma: vel sit pura potentia. aliter enim entitatem non inuenitur modum. non enim potest dici quod non sit potentia sed sit in potentia: quod ad ipsam nihil est in potentia: quod et materia semper habet eam in actu. impotentia vero est ad aliquid aliud. qui igitur dicit essentiam materie: nec esse actum nec potentiam: neque ex utroque compositam: inueniat aliam diuersam entis et essentie: sub qua essentiam materie collocare possit. aut dicat ipsam nihil esse. Non est autem possibile aliam entis et essentie diuersam inuenire. Non sunt etiam diuersae supradicte solum actu existit: quoniam potius actu existibus omnes conuenire non possunt. nullum enim actu existens propter deum est actus purus nec aliquid actu existens est potentia pura: sed unumquodque est necio compositum ex actu et potentia. ille igitur differentie ad ipsas rerum essentias se extendunt. Inuenimus etenim ut dictum est aliquam essentiam compositam ex potentia et actu cuiusmodi est omnis essentia substantie corporee et cuiuslibet substantie separte. Essentiam vero que est pura potentia nullam inuenimus: nisi dicatur esse talis essentia materie. unde si ipsa dicatur non esse pura po-

Questio

entia: subtrahit necessario vna dicitur entis et essentie. et remanent tamen due: videlicet actus et compositum ex potentia et actu. Sed compositum oportet quod subtrahat nisi dicatur remanere composita essentia ex duabus talibus essentiis: quod vtraque sit actus. si enim altera essentia vel altera pars compositi sit potentia pura: et sit substantia: non poterit esse substantia composita: nec substantia cum forma: sed erit necessario sub materia. si igitur substantia materia non sit pura potentia: non poterit inueniri esse composita ex pura potentia: et ex puro actu. sed necessario essentia omnis substantie: erit vel purus actus: vel composita ex pluribus actibus. et quod impossibile est ex pluribus actibus fieri substantiam vnam simpliciter: oportebit tandem dicere quod omnis essentia substantie vna simpliciter sit actus simplex et consequens cum essentia materie sit vna simpliciter erit necessario simplex actus. quod autem hoc sit impossibile non est diffinibile demonstrare. non enim inuenitur in tota vniuersitate reum nisi duplex actus in genere. horum autem vnus est actus existentie actualis. alter vero est actus quiditarius: qui est ratio essendi in actu primo. et essentia quidem materie non est actus actualis existentie. cuius ratio est: quod actus qui est existentia actualis cum incidit extra intellectum essentie cuiuslibet rei create. materia autem est quid creatum: oportet igitur necessario quod actus existentie actualis cum incidat extra intellectum essentie ipsius materie. quod autem cum incidit extra intellectum essentie alicuius: non potest esse eius essentia. oportet igitur de necessitate quod actus existendi non sit ipsa essentia materie: nec etiam essentia alicuius existentis rei create. si dicatur quod ipsa essentia materie sit actus quiditarius: qui videtur ut predictum est: ratio est aliquo modo eendi. erit etiam necessario alter duorum. omnis etenim quiditarius actus: vel est accidens vel est substantia. Et essentia quidem materie non potest esse ille actus qui est accidens: quod actus qui est accidens non est pars quiditatis substantie. essentia vero materie pars quiditatis substantie corporee: et actus qui est accidens necessario est receptibilis in aliquo subiecto. essentia vero materie in nullo subiecto receptibilis est. si autem essentia materie sit ille actus qui est substantia. oportebit etiam necessario quod sit alter duorum. omnis enim actus qui est substantia: est ratio existendi simpliciter. hoc autem non inuenitur esse nisi duobus modis: quod autem est talis actus ratio existendi alicui alteri existenti in potentia ad ipsam aut nullo modo est alteri ratio existendi: sed sibi ipsi. ita scilicet. quod de seipso habet quod poni possit sub actu existendi absque hoc quod aliquis actus alius sit ei ratio receptibilitatis essendi. Et essentia quidam materie non potest esse alicui alteri a se ratio existendi: quod omnis talis actus est perfectio eius cui existendi est ratio: et in ipso recipitur sicut in suo receptibili sicut patet de forma substantiali que est perfectio ipsius materie cui est ratio existendi: et in ipsa ut in suo perfectibili recipitur. essentia autem materie non est perfectio alicuius nec in aliquo ut in suo perfectibili recipitur. igitur non potest esse actus ille substantificus qui est ratio existendi alicui alteri a se. non potest etiam esse actus ille qui sibi est ratio recipiendi in seipso existere simpliciter

omnis etenim talis actus in esse actuali positus: habet de se completam spem et suppositum. vnde et anima rationalis et si possit per se existere: non habet tamen de se suppositum completum: neque completam spem: quod ratio est existendi alicui alteri: utpote materie cuius est perfectio naturalis. Si autem nulli esset ratio existendi: et per se posset existere et completum suppositum et completam spem de se haberet: sicut habet alie substantie sepe. Si igitur essentia materie nulli alteri esse potest ratio existendi ut ostendimus: sed sibi est ratio eius: quod est posse actu existere: necessario completum suppositum et completam spem de se habebit. hoc autem est impossibile: quod quod de se spem completam habet: nullo modo potest esse pars essentialis alterius spei. essentia vero materie multarum specierum pars essentialis est. nullo igitur modo esse potest actus in nullo receptibilis: in se tamen existere potest. non est igitur essentia materie aliquis actus substantia: cum vniuersaliter omnis talis actus ratio sit existendi simpliciter. Preterea impossibile est aliquid vnum et idem esse essentialiter actum et essentialiter potentiam cum rationes actus et potentie sint sibi inuicem repugnantes. Si igitur materia essentialiter siue de sua essentia habet quod sit in actu substantificus: nullo modo esse poterit ad actum substantificum essentialiter in potentia: sed accidentaliter solum. et sic actui substantifico solum accidentaliter coniungetur et per consequens ex coniunctione eius cum actu predicto: non fiet quiditas vna essentialiter: sed solum accidentaliter. Quiditas igitur substantie cuiuslibet corporee: erit vna accidentaliter et non essentialiter. quod cum sit absurdum: omnino absurdum est dicere etiam quod essentia materie sit actus substantificus. Preterea omnne quod est in determinato et completo gradu substantie: est substantia corporea vel incorporea. omnne autem quod in sua essentia actum substantificum habet. vel est substantificus actus in nulla materia receptibilis est de se in determinato et completo gradu substantie. propter id quod distinctio determinatorum et completorum gradu substantie: sumitur secundum reale distinctionem substantificorum actuum. Si ergo essentia materie quod non est in aliquo materia receptibilis: est actus substantificus: necessario erit in determinato et completo gradu substantie. et per consequens est corporea vel incorporea substantia. Non potest autem esse substantia corporea: quod omnis talis substantia in sua essentia composita est ex materia et forma. essentia vero prime materie subterfugit compositionem materie et forme. in determinato etiam et completo gradu substantie incorporee esse non potest: quod omnne quod tale est: substantia intellectualis spiritualis et immaterialis est. Materia autem non est substantia talis: quod non potest esse substantia corporea in potentia sicut etiam in potentia formam corpoream habet: igitur ipsa in nullo gradu completo substantie esse potest: et per consequens eius essentia nullus actus substantificus est. Et preterea illud est essentia esse ponibilis in multis completis gradibus substantie: non est de sua essentia in vno determinato sub gradu. sed essentia materie ponibilis est in multis gradibus substantie corporee: igitur ipsa non potest esse in vno substantie gradu

deinmatio & cōpleto. ergo nec substantific^{us} act^{us} est. Si dicat^{ur}: q^{uod} ipsa est substantific^{us} actus sed icōpletus: & iō nō est in cōpleto substantie gradu: apparet statim q^{uod} hoc ē impossibile. In eētia etenim nullius substantie cōtingit dare gradū & gradū: q^{uod} oīs talis eētia deduci pōt de vno g^{radu} ad aliū gradū & sic suscipe magis & min^{us}: q^{uod} de subā dici nō potest. vñ grad^{us} cui^{uslibet} substantie cōsistit in indiuisibili & pfectus est: de sua eēntiali pfectione. vnde si eētia materie est actus substantific^{us} de se cōpletus & pfect^{us} erit necessario: nec vlt^{erius} v^{el}lo modo deduci poterit ad vlt^{erius} eēntiale pfectionem.

Præterea q^{uod}ditas cui^{uslibet} subē corporee est cōposita ex eētia mat^{er}ie: & ex eētia forme. si igit^{ur} eētia materie est substantific^{us} act^{us}: cū etiā eētia forme subālis sit act^{us} substantific^{us} etiā q^{uod}ditas cui^{uslibet} subē corporee cōposita erit ex duob^{us} actib^{us} substantific^{is}: q^{uod} est incōueniēs: cū eētia substantie corporee sit vna & nūq^{uam} ex duobus actib^{us} fieri possit q^{uod}ditas vna eēntialit^{er}. Incōueniēs est igit^{ur} eēntiaz materie eē actū aliq^{uod}. Præterea sicut oīs actus quātūcūq^{ue} impfect^{us} est aliquo mō rō eēndi i actū: sic etiā oīs act^{us} substantific^{us} est rō esse di simpl^{er}: q^{uod} tūcūq^{ue} sit ifim^{us} act^{us}: q^{uod} alias nō esset actus subālis. Si igit^{ur} eētia materie est act^{us} substantie ipsa necessario erit rō eēndi simpl^{er}. Est aut^{em} & forma subālis h^{ab} rō: igit^{ur} eētia subē corporee habebit in se duas rōnes existēdi simpl^{er}. Quolibet igit^{ur} suppositū talis subē de sua nā habere poterit duo existere simpl^{er}. Et tūc aut^{em} vñ numero suppositū habebit duo existere simpl^{er}. aut quodlib^{et} suppositū substantie corporee erit duo supposita: q^{uod} totū est absurdū: igit^{ur} absurdū est oīno: q^{uod} eēntia mat^{er}ie sit actus subā. Præterea vñq^{uod}q^{ue} sic se h^{ab} ad posse itelligi: sicut se h^{ab} ad eē. hoc aut^{em} non est itelligere de eē actuali: q^{uod} si hoc eēt: tūc cū q^{uod}ditas spēi nō possit habere eē actuale sine ipsi^{us} singularib^{us}: nō posset ullo mō itelligi singularibus nō itellectis: q^{uod} falsum est: cū spēs de se sit itelligibilis. Est igit^{ur} illud itelligendū de eē q^{uod}ditatio q^{uod} spēs de se h^{ab} esse aut^{em} q^{uod}ditatiū est ipsa eēntia p^{er} diffinitionē rei significata. Et q^{uod} act^{us} est rō eēndi vnicūq^{ue}. & p^{er} se sequēs est etiā rō itelligēdi: iō oē illud c^{uius} eēntia vel q^{uod}ditatiū eē est substantific^{us} actus: q^{uod} est rō eēndi simpl^{er} vel i se: talē actū includit: est de se itelligibile simpl^{er}: vel ē rō itelligēdi rem c^{uius} ipsum ē ps eēntialis. Nā aut^{em} de se nō est simpl^{er} itelligibilis: nec est rō itelligēdi aliqd: quin poti^{us} h^{ab} impedire itelligibilitatē: q^{uod} tanto aliqd est magis itelligibile: q^{uod}to magis ē a mā eleuatū. igit^{ur} eēntia materie: nec act^{us} substantific^{us} ē: nec actus substantific^{us} h^{ab} intrinsecū: sed ē pura potētia: ut sic merito dicat^{ur} nō posse al^{iter} itelligi q^{uod} p^{er} ordinē ad formā substantiale: q^{uod} v^{el} potētia nō pōt itelligi nisi p^{er} ordinē ad actū. nihil aut^{em} est oīno dicere q^{uod} & si materia in sua eēntia nō sit potētia: est t^{amen} ens in potētia: p^{ro}pter illud q^{uod} potētia ad formam sequit^{ur} ei^{us} eēntiaz: & ideo nō pōt p^{er} se itelligi: sed in

telligit^{ur} p^{er} ordinē ad formā ad quā est i potētia nulla etenim res itelligit^{ur} intellectu simplici p^{er} illud q^{uod} cadit vel cōsequit^{ur} ipsius essentiā: sed vnaqueq^{ue} itelligit^{ur} p^{er} id quod est in sua eēntia nō itellecto eo q^{uod} cōsequit^{ur} ipsam quātūcūq^{ue} hoc essentiam inseparabiliter cōsequit^{ur}. Si igit^{ur} essentia materie nō est ipsa potētia: sed ipsam cōsequit^{ur} potētia ad formam speciale itelligi poterit intellectu simplici: nō itellecta potētia ad formā: nec etiā itellecto ordine ad ipsam. & cū non itellecta potētia que essentiā cōsequit^{ur}: remaneat in app^{ro}hensione itellectus ipsa essentia fm illud q^{uod} in se est & absoluta: o^{mn}is tūc necessario dicere: q^{uod} eēntia mat^{er}ie sit d^e se absolute itelligibilis: q^{uod} ē oīno absurdū: igit^{ur} oīno absurdū ē dicere: q^{uod} ipsa eēntia materie nō sit potētia pura. Et sic cōpleta est sc^{ilicet}da via declarandi p^{ro}positum sumpta ex diuisione entis p^{er} actū potētiā & compositū. U^{nde} q^{uod} ad p^{ro}batāz veritatē quedā difficultates cōsequi vident^{ur}: restat nūc igit^{ur} illas remouere. Sciendū est ergo: q^{uod} p^{ro}cipue due magne difficultates vident^{ur} esse cōtra determinatam positionē. Et p^{ri}ma quidem p^{ro}uenit ex eo q^{uod} nulla forma dicit^{ur} alicui^{us} rei p^{ro}fectio nisi altero duoz modoz. aut enī est p^{ro}fectio ipsius s^{ed} id q^{uod} ipsa res est in sua essentia: quod esse nō potest nisi forma sit de essentia rei. aut est p^{ro}fectio eius nō fm illud q^{uod} ipsa res i se est: sed fm q^{uod} est i potētia ad formam ipsam: & tunc talis potētia nullo modo i re ipsa manet apud presentiam forme: sicut sanitas que nō est p^{ro}fectio humoris fm id q^{uod} humor in se est: sed fm q^{uod} est potētia sanus adiūcta actu aliter humorē excludit ab ipso potētiā p^{ro}dictam. humor enī actu subiectus sanitati: nō est i potētia ad sanitatē. & sic talis potētia necessario est aliud ab humore. forma aut^{em} substantialis non est de essentia materie: & per cōsequēs nō est p^{ro}fectio eius: fm illud q^{uod} materia in sua essentia est. relinquit^{ur} itaq^{ue} q^{uod} sit actus eius & p^{ro}fectio ei^{us} fm q^{uod} est in potētia ad formā. hec aut^{em} potētia forma adueniente non remanet: q^{uod} quando materia actu formā h^{ab}: non est ad ipsam in potētia sicut nec sanguis sanus iam est in potētia ad sanitatē. Et ex hoc aut^{em} sequi videt^{ur}: q^{uod} sicut potētia ad sanitatē: aliud est omnino ab esse sanguinis: sic etiā i potētia ad formam: aliud est oīno ab essentia materie. Secūda difficultas esse videt^{ur} que p^{ro}uenit ex eo q^{uod} si potētia nullius: ut quidam dicūt: addit realitatem aliquā supra essentiam rei cuius est potētia. sed solum respectū ad actū: ita videt^{ur} q^{uod} ipsa essentia absolute cōsiderata: nō d^{icitur} potētia accepta v^{el}o cum respectu ad actum: potētia dicit^{ur} cū etiā respectus ad formā non sit eēntia materie quare ipsa fm q^{uod} est i sua essentia dicit^{ur} potētia poti^{us} q^{uod} essentia alterius substantie dicat^{ur} eē sua potētia cum vniuersalit^{er} respectus ad actū nō sit essentia alicuius substantie. Ut ergo iste difficultates remoueantur: considerandū est quantū ad intellectum difficultatis p^{ri}me: q^{uod} in omnibus

Questio

subijcibilis alicui actui non aut subiectis semper inueniuntur. propriissime duo: quia hoc quod dicitur potentia actus vel forma: et hoc quod in se recipit actu formam et potentia formam. Idem est omnino id in quo quicquid est potentia forma: et quicquid actu forma. et hoc quidem sicut est aliud ab hoc quod dicitur actu forma. sicut est aliud ab hoc quod dicitur potentia forma: quia alias idem reciperet seipsum: et esset in potentia ad seipsum: quod totum est impossibile. nam actu forma et potentia forma: sunt omnino una et eadem res differentibus modis accepta. hoc autem per exempla euidenter ostenditur. In sanguine etenim: qui quicquid est sanitati subiectus: quicquid non inuenitur potentia sanitas. et ipse sanguis in quo est sanitas potentia vel actu. et sanguis quidem non est actu nec potentia sanitas. sed in se habet actu vel potentia sanitatem. Alteri autem considerandum est: quod actu sanitas et potentia sanitas. et si una res sint: opponuntur tamen sibi inuicem propter oppositionem modorum sub quibus accipiuntur. nam potentia solus sanitas tollit actualitatem sanitatis quam ponit actu sanitas. et quia opposita simul esse non possunt idcirco adueniente actu sanitati ipsi sanguini: tollitur ab ipso potentia sanitas: que non est actu sanitas et vel sic se habet de actu forma: et potentia forma. quibus autem actu forma opponatur potentia forme. non tamen illi potest opponi in quo recipitur: quia unum oppositorum in alio recipi non potest. hoc igitur visum ex parte actu forme et potentia forme. Alteri ex parte eius quod utriusque subijcitur est considerandum: quod hoc necessario oportet quod sit ens aliquod in rebus natura ponibile. Quod enim non est ens ponibile actu in rebus natura non potest subijci forme actu in rebus natura ponibili. Inuenimus autem talem diuersitatem ex parte habere receptiuum. quoddam est. n. taliter se habens ad formam in ipso receptibile: quod per ipsam non est ponibile actu in natura rebus: sed potius in tali actu ponibile est per suam naturam: sicut sanguis non ponitur in actu eundem per sanitatem: sed per suam formam naturalem. Quoddam vero aliud est: quod nullo modo est actu ponibile in natura nisi per formam in ipso receptibile eo quod nihil habet quod sit sibi ratio eundem in natura: nisi formam que est ratio eundem in actu. Et quia sic dicitur unumquodque ens: sicut ponibile est actu in natura rebus: eo quod esse reale ens: et esse actu in rebus natura ponibile: sibi inuicem conuertuntur. idcirco illud quod in sua natura habet aliquid quod sibi est ratio existendi in rebus natura: dici potest de se etiam subtracta forma in ipso receptibili ens actu vel etiam actus: sicut sanguis etiam sanitate subtracta est ens actu et substantia separata: et vel forma ens actus. quod autem subtracta forma in sua essentia non habet illud quod est ratio existendi in natura rebus. de sua essentia non potest dici ens actu: neque ens actus. sed quia de sua essentia habet quod possit coniungi forme: et sic tandem existere. de sua essentia habet quod sit potentia ens. nam potentia est una de differentibus entis. et quia de sua essentia non habet quod recipiat actum eundem: sed habet per formam sibi coniunctam: que est ratio existendi. idcirco cum in actu eundem ponitur: est ens actu per formam non per suam essentiam. et per consequens sua essentia etiam coniuncta forme remanet potentia posita tamen in actu quia coniuncta forme: que est ratio existendi in actu. Sic

igitur in receptione forme accidentalis est quicquid potentia forma. et hoc tollitur cum in ipso efficitur actu forma. est etiam ibi et natura vel essentia receptiuum que est ens actu vel ens actus. et hoc nunquam per formam tollitur: sed per ipsam perficitur in quantum ipsam recipiendo actu acquirit perfectionem quam habere non dicebat cum formam habebat solum in potentia: non autem sic ipsa perficitur: quod per eam in actu eundem ponatur: nec etiam in se. In receptiuo autem forme substantialis est quicquid potentia forma. et hoc non est esse receptiuum: quia potentia forma: et actu forma: sunt una res: essentia vero materie alia res est a forma et per se a potentia forma. unde et hoc ab ipso receptiuo tollitur: cum in ipso efficitur actu forma. est etiam in receptiuo habere forme: et ipsa essentia receptiuum que est etiam potentia: sed non potentia forma: sed potentia coniungibilis forme. nam essentia habere receptiuum ut dictum est non est secundum se ponibilis in actu eundem: sed secundum formam cui coniungibilis est: et idcirco ipsa non est ens actu vel ens actus: sed ens potentia. compositum vero est ens actu: quia de sua essentia habet quod sit immediate ponibile sub actu essendi. forma igitur substantialis non est de essentia materie et tamen dicitur ipsam perficere secundum illud quod est: quia secundum illud quod est: habet quod sit ponibilis sub actu eundem: non tamen nisi per formam: et in se sicut in quibus omnino actu ponitur cum in ipsa est actu forma: et idcirco cum in ea est potentia forma: adueniente igitur actu forma: tollitur potentia forma: sed potentia coniungibilis forme que est ipsa essentia materie non tollitur sed perficitur modis predictis et sic iam remota est prima difficultas. Ad intelligendum autem scilicet difficultatis sciendum est: quod res cui conuenit ratio predicamenti: et quod est una res a ratione dicta analogum est ad omnem rem: et ad omne esse in creaturis. Et potest dupliciter distingui: quia vel ex parte ipsius rei: vel ex parte essentie quod rei conuenit. Et ex parte quod rei cui conuenit esse. res distinguitur tripliciter secundum triplicem rem absolutam. scilicet substantie: quantitate et qualitate. et iste quidem res diuerse sunt. et sic repugnantes: quia una non potest esse alia. nam predicamentum substantie est res in se existens: et nullo modo inherens. Alie vero sunt res inherentes: scilicet diuersimode: quia quantitate proprium est inherere per modum mensurantis: qualitate autem per modum afficietis. Isti autem tres modi eundem sunt sibi inuicem repugnantes. ita videlicet quod res que habet unum non potest habere alium. et propter hoc una per dictas res nullo modo potest esse alia. Ex parte autem ipsius esse quod rei conuenit. distinguuntur res etiam tripliciter penes triplicem modum eundem qui reperitur in rebus. aut enim rei conuenit esse in se: aut in alio: aut in ordine ad aliud seu in se sistendo: in alio inherendo: ad aliud inclinando. et penes hoc sumuntur tres modi predicamentorum. scilicet substantie: accidentium absolutorum: et relativorum. et duo primi sunt omnino repugnantes: nec fieri possunt circa eandem rem: ut dictum est. Tertius autem modus disparatus est ab utroque priorum: sed nulli repugnans: quia se bene circa idem copatiuntur. nam et rei cui conuenit esse in se: et rei conuenit esse in alio: conuenit etiam esse ad aliud. sed hoc esse ad aliud distinguuntur secundum diuersos modos in. vii. predicamenta: quorum. vi. scilicet actio et passio: quibus ubi situs et habitus. fundantur solum super quantitate: scilicet

nō fundent sup quantitātē eiusdē spēi: ppter qđ
sūt pdicamēta accidētū pure. pdicamētū autē re/
lationis 7 sup rē substātie 7 quātītatis 7 q̄lītatis
fundat: nec dī pdicamētū accētis: nisi p quanto
fundat sup accētī pdicamētū. nec tñ dī dī pdi/
camētū substātie inquātū sup subē rē fundat nisi
intelligat qđ h̄ nomē subā ut est nomē scōe inten/
tīōis: sit sumptū a mō eēndi in se: ita qđ nō in alio:
nō solū absolute: sed etiā ad aliud: ut s̄z h̄ res sub/
stātie ptineat ad duo pdicamēta. s. ad substātiā 7
ppe dictā: 7 ad relationē fundatā sup rē substātie
quēadmodū accētis put est nomē scōe intētīōis
sumptū a mō eēndi in alio: pōt duplr itelligi. s. ab/
solute fm qđ est res utpote quātītatis vel q̄lītatis: vl
ad aliud fm qđ est res pdicamētū relationis. 7 sic
hoc nomē accētis uenit trib⁹ pdicamētis. s. quātī/
tati: q̄lītati: relōni: inquātū fundat ī reb⁹ vtrūq̄.
Dis ḡ sic nūc brenit dicitis: est vltēris sciendū: qđ
res qđ est subā vel quātītatis vel q̄lītatis. pōt qñq; sic
se habere: ut tale eē qđitātū hēat ut p ipm neces/
sario sit ad aliud. Nā ut dictū ē mod⁹ eēndi ī se 7
mod⁹ eēndi ad aliud circa vnā 7 eādē rē imedia/
te attēdi pōt. Sitr autē 7 mod⁹ eēndi in alio: 7 mo/
dus eēndi ad aliud. si igit res se hēat mō quo di/
rim⁹: tūc necessario ipsa res p suū eē qđitātū: ha/
bebit qđ sit relatiū: 7 qz nulla res intelligit nisi in/
telligēdo eē qđitātū ipsi⁹: eē aut qđitātū talis
rei ut supponim⁹: nō solū est in se vl in alio: s̄z etiā
necessario ad aliud: talis res intelligi nō pōt nisi
intelligat ad aliud. S̄z scia fm illud qđ est: est q̄/
lītatis in subiecto. 7 fm illud qđ est: referē ad scibi/
le. vñ fm illud qđ est: relatiū est: nec itelligi pōt:
qñ intelligat ad scibile depēdere. Si aut illud ad
quod res sic dī: sit act⁹: tūc ipsa res p illud qđ est
dices illud relatiū qđ est potētia: sicut visus: qz p
id qđ est: dī aliud visibile qđ est pfectiūz ipsius:
s̄z illud qđ est dī potētia. nō quidē qz sit potētia
spēs visibilis cui subijct sed qz eēntialr est potē/
tia visua: sicut p illud qđ ē: etiā ad aliō ut ad visi/
bile ē. Et sic mā pma p illud ipm qđ in sua eēntia
est ens: nō in alio ē: 7 sic subā est. Itē p idipm qđ ī
sua eēntia ē: ad actū substantificū ē. 7 sic relatiūz
qđ est potētia substantifica ē. qñ ḡ dī: qđ eēntia ma/
terie nō est respect⁹ ad actū dicendū: qđ h̄ipm qđ
est eēntia matē respicit actū: 7 iō h̄ipm quod est
potētia est. Res aut c⁹ eēntia hocipm quod ē non
respicit actū mō pdicto: nō est h̄ipm qđ in sua eēn/
tia potētia est. 7 sic declarata ē secūda difficultas.
Ex pdictis iā p̄z quō auctas p̄hi assumpta de ter/
tio p̄hysicōz sit itelligēda. nō eiz forma subālis sic
est act⁹ matē s̄z illud qđ ipsa mā ē: qđ sit de eēntia
ei⁹. s̄z qz mā s̄z illud quod ē: ponibilis ē p formā:
7 in spē: 7 sub actu eēndi. 7 p formā sibi actu iū/
ctā. 7 qz in eē sic ponit: ipsa forma merito dī act⁹
ei⁹ fm illud quod est: quod nō pōt dici de forma
statue respicū eris: nec de forma sanitatis respectu
sanguis. Ad alia aut argumēta nō est difficile
rīdere. nā p̄mū iā solutū ē ex dictis. potētia. n. for

ma abijct: vel cedit adueniēte actu forma: s̄z po/
tētia iūgibilis forme qđ subijct actu forme: 7 po/
tētia forme nō abijct. Ad scōm dicēdū qđ potē/
tia nālis qđ ē pncipiū alic⁹ act⁹ accētalis: ponit ī p/
dicamēto q̄lītati: 7 nō illa que est pncipiū 7 pars
substātie: q̄lis est eēntia matē qđ est ps qđitatis
cōposita ex potētia 7 actu. Ad tertū dicendū
qđ potētia qđ est eēntia matē dicit carentiā actus
intrinseci nō aut extrinseci. 7 cū iūgūt quidē for/
me: actus intrinseci carentiā quā dicebat retinet:
qz nūq; forma sic iūgūt matē: qđ fiat vel eēn/
tia vel ps eēntie ei⁹. 7 iō semp talis essentia retinet
potentiā etiā cōiuncta actui: ut sic merito qđitas
substātie corporee cōposita dicit ex potētia 7 actu
sed potētia forma qđ accidit huic potētie qđ est eēn/
tia matē: dicit carentiā etiā act⁹ extrinseci a ma/
terie eēntia: 7 iō tali actu adueniēte matē tollit:
7 nō manet. Ad q̄rtū dicendū qđ h̄ipm qđ s̄gūt
nomē potētie est in pdicamēto relationis: nō sicut
relatio: sed sicut relatiū. relō. n. est ipse respectus
quo vnū referē ad aliud. respicū autē ad actū: nec
est potētia actiua: nec potētia passiua. sed potētia
actiua est pncipiū agendi: 7 potētia passiua ē pnci/
piū patiendi. 7 vtrūq; istoz pncipioz aliquo res/
pectu referē ad aliter. Et eēntia quidē matē bene
est in pdicamēto relōnis: sicut qđ relatiū ad actūz
7 si nō sit relatio: nec enī sibi inuicē repugnāt esse
substātiā 7 eē relatiū: ut supra dictū est. Ad
q̄ntū dicendū: qđ essentia matē dī substātia ex
eo qđ nō est in subiecto. dī aut potētia ex eo qđ ē
ad actū: 7 p idē eē quiditātū: mā habet vtrūq;
Idē etenī eēntialr est: qđ in nullo subiecto ē: 7 qđ
ad actū est. ppter p̄mā aut rōnē: mā h̄z qđ sit sub/
stātia: nō tñ dēmiata 7 distincta ab alijs substan/
tijs: qz enī substātie cōe est nō esse in subiecto. Ex
secūda aut rōne h̄z qđ sit substātia mā: 7 nō subā
forma: nec substātia cōpositū. vñ s̄gūt vult itelligē
subā qđ est mā: qz itelligat eēntiā inclinātā ad
actū substantificū: nec talis subā aliū p̄p̄iū intelle/
ctū habere pōt. Eēntia igit matē: sub rōne qđ est
substātia distincta a subā qđ est act⁹: 7 a substātia
qđ ē cōpositū: est potētia. 7 si ab eadē rōne nō hēat
qđ sit subā simplr 7 qđ sit substātia potētia. Ad
vi. dicēdū: qđ eēntia matē generabiliū nō dicit
vna nūero de se: qz hēat ī se formā facientē ipsam
eē vnā ab alijs reb⁹ nūero distinctā: sed pot⁹ dicit
vna p abnegationē omniū formaz ipsam ī diuer/
sis spē vel nūero distinguētū. Sitr aut sub diuers
formis posita est nūero alia 7 alia. 7 vna 7 eadem
nūero: pus stans sub vna forma: etiā postea stare
pōt sub alia. Ad vii. dicendū: qđ mā nō est in ge/
nere: sicut spēs: sed sicut ps spēi. Ad viii. dicēdū
qđ qz mā est substātia distincta a substātia cōposi/
ta: 7 ab illo pncipio substātie qđ est act⁹. qz neces/
sario qđ cū ipsa ī rōne substātie ueniat cū vtrōq;
p aliquā rōnē p̄p̄iā distinguat ab eis. distinguat
aut p eē potētia: 7 eē quidē potētia: qz qđ ei sit
intrinsecū 7 eēntiale: si distinctio dī esse eēntialis:

Questio

qz p illud qd est extrinsecū eēntie: nō sit nisi disti-
ctio accidētal. nec tñ iō substantia ē gen^o materie
qz substātie distinctio p eē actū z eē potentia z eē
cōpositū: ē distinctio nō vnifici: q̄lis d3 esse distin-
ctio generis sed analogi. Ad. ix. dicendū qz sup-
positū sp̄i nō d3 esse ps suppositi substātis: s3 po-
tius d3 eē p se substātis. cū est. s. substātia ab alijs
distincta. Cū igit. materie sub formis stantes nō
sint supposita substātia sed pres suppositoꝝ. o3
etiā qz eēntia matie de ipsis p̄dicat: sit sp̄i ps: et
nō sp̄s: qz sicut se h3 h ad h: ita z simplex quiditi-
tas ad simplicē quiditatē. Ad. x. dicendū: qz di-
mensio infimata p̄intellecta in mā oī forme sub-
stātia: nō est nisi potētia ad quātitatē terminataz
nihil aut. phibet potētia substātia: subiectuz esse
ei^o qz est potētia quātitas. sed ista qd alibi melius
discutiet. Ad. xi. dicendū: qz sustentamentū qd
nō est potētia substātia: sed ē subā altiori mō: est
sustentamentū soli^o forme accidētal. sed forma
subālis nō ē forma accidētal. z iō nō pōt recipi
nisi in substātia: cui^o eē est pura potētia. Ad. xij.
dicendū: qz mā de sua eēntia: d̄r potētia: qz sua es-
sentia: nec act^o nec ex actu etiā alio cōponit. talis
aut remanet: ut supra dictū ē: etiā qñ sub forma
ponit. fm aut qz mā d̄r in potētia habēs formam
aliquā: qñ ipsam h3 actu: uō remanet pl^o potētia:
q̄ est eēntia materie i potētia ad ipsā: sed sibi actu
subiicit. vñ talis potētia resp̄cū illi^o forme non re-
manet i potētia: nec iō tñ ut dictū est: ipsa materie
eēntia: nō d3 dici potētia: qz z diūcta forme z nō
diūcta: d̄r potētia: z nō diūcta nō solū dici potē-
tia: sed in potētia ad formā: diūcta vō nō sic: sed
d̄r potētia formā actu habēs. Ad. xij. dicendū
qz esse essentia z eēntia idē sunt z eēntia materie
qz ut dixim^o potētia est: semp ipsam in actu eē res-
p̄cū talis eēntie: est semp i actu eē potētia. z sic
magis arguit p̄positū q̄ oppositū. Ad. xij. di-
cendū: qz illa eēntia dici pōt act^o q̄ditatiū: q̄ ē sim-
plex act^o: z nō q̄ est pura potētia: aut cōposita ex
potētia z actu q̄ditatiū. z eēntia quidē matie est
ut dixim^o pura potētia. z talē eēntiā bene habere
pōt illud qd de se q̄ditatiū actū nō h3. Ad. xv.
dicendū: qz cū eē eēntie sit idē cū eēntia. si eēntia ē
potētia: z eē eēntie erit potētia. act^o aut dici nō po-
terit nisi forte equiuoce. Ad. xvi. dicendū: qz si
forma p generationē pducit: z nō mā. qz tñ for-
est rō effendi ipsi materie z nō ecōuerso. ipsa mā
a forma i effendo magis depēdet q̄ forma a mā
vñ z posset de^o formā i esse sine mā pducere z cō-
seruare: nō aut ecōuerso. Ad. xvij. dicendū: qz oē
qd oē qd est effect^o p̄mi in se pduct^o vel pducibil^o
h3 aliquē actū. sed ipsa mā i se extra cōpositū: nō
est pducta: vel pducibilis. Ad. xvij. dicendū: qz
quicqd ē res ab alio distincta: z nō i aliud ordina-
ta de se absolute ideā in deo h3. Mā aut z si res
sit de se a forma distincta. est tñ de se in ipsam ordi-
dinata: z iō ideā in deo h̄re d3 p ordinē ad formā
qz aut sic i deo ideā h3: pura potētia esse potest.

Ad. xix. dicendū: qz ipsa eēntia materie p se ipsa
z rōne h3 absoluti. ppter illū eēndi modū quo eē
d̄r nō in alio: z sic substātia ē: z rōez habet relatiui
vel relati: ppter illū eēndi modū: quo ad formam
inclinat: z sic d̄r subā potētia: z sic ē ibi dare abso-
lutuz z relatiuū. Ad. xx. dicendū: qz potētia for-
ma: nō est eēntia materie: nec ē vna sed multiplex
fm multiplicationē formaz. potētia vō diūgibilis
forme est eēntia materie. z est vna oīuz geuerabi-
lium. Ad vltimū dicendū: qz cōmetator fuit opi-
nionis d̄re. z iō sua auctas i p̄posito nō recipit.

Questio quinta.

Quinta questio

q

est: Utz necessariū sit ponere in
mā inchoationes formaz: Et vi-
det qz sic. beat^o eni aug^o d̄ libero
arbitrio dicit sic: Si forme pfectio
bona est: nō nullū etiā bonū est forme inchoatio.
p hoc ḡ qz distinguit inchoationē forme a pfecti-
one ei^o: p3 qz inchoationes formaz sunt. P̄ idēz
sup gen. caplo sc̄do dicit: Dis res qcquid pgressu
nāli p tpa congrua p̄dit atqz explicat: etiā ante cōti-
nebat occultū. z si nō sp̄e vel mole corpis i genere
tñ z rōne nature. Ratio aut nāe qd formale dicit
z nō qd nāle: ḡ ante generationē: forme quodā
mō occulte in mā: de qua educit^o necessario cōti-
nent. P̄ forma: aut educit^o p se: aut p accidens:
si p se: cū nihil ei^o sit in mā: o3 dicere qz creat. z sic
agens nāle creat. Si aut p accidēs pducit: z nihil
ei^o est in mā: ḡ saltz p accēs creat. z sic etiā p istaz
viā excludi nō poterit creatio. P̄ oīs res q̄ deus
nō est: creatura ē. sed si forme nō sūt cōcreate ma-
terie: z vnaqueqz res id qd ē: p formā ē: h3 mā pos-
nat^o creat. nulla tñ res habēs formā q̄ educit^o de
potētia māe: dici pōt creatura: cū illud qd ē i ea
potissimū: nō ponat^o a deo creatū. hoc aut est falsū
z incōueniēs. ḡ illud ex quo sequit^o. ueniēs ē igit
ponere formas materie cōcreateas. P̄ violentū
est: quod est a p̄ncipio extrinsecō nil cōferente viz
passo. Cū igit nihil forme sit in mā: nec in ista mā
resp̄cū cuiuscunqz forme sit maior aptitudo q̄ res-
p̄cū aie intellectiue: tūc nlla generatio erit nālis: s3
oīs violēta. P̄ Sanguis ē potētia caro: z nō la-
pis. aut igit ista potētia est i sanguine rōne forme
sanguinis. z sic forma sanguis appeteret corrupti-
onē p̄p̄riā. aut rōne p̄uationis forme carnis. z sic
etiā p̄uatio appeterz sui destructionē. aut ratione
ipsius materie. sed mā in se cōsiderata nō est pl^o in
potētia ad formā carnis q̄ lapidis: nō ḡ rōne ma-
terie. Cū ḡ ita sit determinata ad formā carnis qz nō
lapidis. relinquit^o h̄ eē nō posse: nisi qz in mā q̄ est
sub forma sanguis: est inchoata forma carnis.
P̄ oē qd est in potētia materie: educit^o de potē-
tia materie. Si igit eē in potētia materie ē eē solū
in pura potentia passua. cū aia intellectiua sit i tali

potētia materie: educet de ipsa et erit corruptibilis. Minoris autē declaratio ē: quod potētia quę est in materia dicitur naturalis: alias generatio naturalis non est. Cum igitur generatio hominis naturalis sit: eius anima erit in naturali potētia materie. Pręsentia materie de se respicit equaliter omnes formas. Cum igitur posita sub aliqua forma determinate se habeat magis ad hanc quam de ipsa vna educit quam alia: oportet quod per aliud ista determinatio fiat. non fit autem per agens intendens producere sibi simile: quod antequam agens mouere incipiat magis ad formam sue speciei: illa determinatio in materia inuenitur. non fit etiam per formam sub qua est materia constituta: quod cum omnis forma subalternis immediate recipiat in eentia materie: et in ipso ponat prouationem omnis forme subalternis sibi repugnantis: non magis materia habet ab ipsa quam in vna inclinatur quam in alias. videtur quod habet esse solus quod materia sub vna forma stante contingit esse plures gradus forme vni quam alterius. Si videtur quod determinatio procedit ex maiori conuenientia dispositionum forme stantis in materia ad dispositiones forme vni quam alteri. Contra quod forme que sunt dispositionum principia magis sibi conueniunt: tanto conuenientiores esse debent et dispositiones earum. Constat autem quod omnis anima omni anime magis conuenit quam conueniat alia cum alia forma: que non est principium vite. quod et dispositiones animarum: magis sibi conueniunt: quam dispositiones vni animati: conueniant dispositionibus inanimatarum et tamen videmus materiam que stat sub forma inanimati: magis determinari ad animam aliam: quam materiam que stat sub forma aliam animatarum ad formam alteri animati. igitur hoc non procedit ex dispositionum conuenientia: sed solum ex causa assignata.

Principium naturalis transmutationis: non potest esse pure nihil. est autem prouatio principium transmutationis predictę. non oportet igitur ponere puram carentiam forme que est nihil ponit quod necessario aliquid forme inducende: non enim est principium transmutationis ad formam que abiicit: sed potius ad formam que ad illius abiiectionem inducit. Prę Aristoteles in secundo physicoz distinguens naturam dicit: quod species est magis natura quam materia. addit autem postea: quod prouatio est quodammodo species. hoc autem non potest esse: si prouatio que est principium transmutationis est pure nihil. Prę in artificialibus: quod ipsorum principium actiuum est extra: prouatio forme inducende nihil ponit de foris. In naturalibus igitur quorum principium est intra: videtur quod debeat aliquid ponere. Prę forme artificiales que sunt in materia non sunt actiue et passiuę. et ideo in materia artificialium non potest poni quod sit aliquid forme que coagat motori. sed forme naturales eorum actiuę uel sunt et passiuę: et ideo videtur posse poni in materia aliquid de forma naturali: quod coagat motori extrinseco. Prę Aristoteles in secundo physicoz dicit: quod si est in ligno virtus nauis factiua. sicut arti natura fecisset. per hoc igitur videtur quod naturalia habeant in materia de qua fiunt: aliquod sue perfectionis principium. Prę artificialia dicuntur a commentatore super verbo predicto fieri a principio extrinseco. natura vero a principio intrinseco: quod ideoque prius. Si dicas: quod naturalia habent principium intrinsecum passiuum: et non actiuum. Contra principium extrinsecum a quo artificialia fiunt est principium actiuum: igitur et principium intrinsecum a quo naturalia fiunt: oportet esse actiuum: alias non different per habere principium extrinsecum et non extrinsecum. natura et habere princi-

pium passiuum intrinsecum: conuenit utrisque. Et preterea non potest de aliquid fieri ab eo quod in sua factione est passiuum: sed potius ab eo quod in ipso est actiuum. vnde cum de aliquid fieri ex tali re ly ex tali respicit principium materiale. Cum autem de fieri a re tali: dat intelligi principium actiuum. Prę in secundo physicoz dicitur: quod ars et motus et forma arte. per accens coniunguntur in eodem principio: vnde naturalis motus et motus ipse coniunguntur in eodem per se. hoc autem non intelligitur de principio passiuo: quod utrobique principium passiuum et motus contingit necessario esse coniuncta. cum motus dari non possit sine mobili. intelligitur ergo solum de actiuo principio.

Prę quod educit de materia: necesse est in materia prouisse sed omnes forme materiales de materia educuntur: igitur omnes ante generationem in materia preexistunt. Prę cum corrumpitur compositum: forma compositi aut cedit in nihil aut in aliquid non in nihil: quod sicut ex nihilo nihil fit. sic etiam nulla res corrumpitur in nihil: cedit ergo in aliquid: et sic etiam per corruptionem compositi: aliquid forme remanet in materia prima. Prę corrupto composito et anima remanente potētie que erant perfectiones compositi quantum ad singula organa in anima remanent radicaliter: et hoc modo sibi create fuerunt. ergo et sicut corrupto composito: et materia remanente: forma subalternis in materia remanet radicaliter: et sic sibi extitit concretata. sed illa radix est ratio seminalis: et inchoatio forme. igitur inchoationes formarum sunt in materia. Incontrarium est quod beatus augustinus dicit in libro de libero arbitrio. Sicut inquit: mutabile dicimus: quod mutari potest: ita formale quod formari potest appellaueris: et postea adiungit. nulla autem res formare seipsam potest quod nulla res potest sibi dare quod non habet. Ex hoc igitur patet quod impossibile est aliquid forme esse in materia: que moueat ad sui productionem. Prę idem in eodem sic ait: Demum nisi mensuram numerum et ordinem videris deo arifici tribuere ne cunctis. vnde autem ista penitus destraxeris me oino remanebit: quod et si remaserit aliquid forme alicuius inchoatio: vbi neque mensuram neque numerum neque ordinem inuenias: quod ubicunque ista sunt: forma perfecta est. oportet etiam quod auferas ipsas forme inchoationem: que tanquam materies subiacere videtur arifici. Si autem ubicunque ista sunt: nihil oino remanet cum inchoatio forme: non sit forma perfecta: tria predicta in ipsa non inueniuntur. ex quo sequitur quod inchoatio forme nihil sit. Prę quicquid est infra materiam primam est oino nihil. quicquid autem est supra: est simplex ens inducendo sub isto modo substantiam et accens. quicquid autem est pura potētia: est materia prima. si ergo est aliqua inchoatio forme in materia: aut est infra materiam primam et sic est pure nihil: aut est pura potētia: et sic est idem quod materia prima: aut est supra: et sic est simplex ens: et sic sequitur quod forme que sunt simul actu in eodem quod est impossibile: ergo nulla est forme inchoatio in materia. Rñdeo ad huius intelligentiam quoniam sciendum est: quod cum de progressu formarum in esse apud antiquos due opiniones contrarie habentur. Una quidem dicentium: formas substantiales omnes: ab extrinseco prouenire. Alia vero dicentium eas prouenire totaliter

Questio

ab intrinseco. Arl. ytraq; opionez reprobās: mediā q; viā eligēs: posuit eas nec totalit̄ pcedē ab extrinseco: nec totalit̄ ab intrinseco: s; pti ab it̄: z pti ab ex̄: ut sic forme z de materia educant̄: z virtute agentū naturalū: p̄grediant̄ ad esse. hanc igit̄ positionem utpote p̄e ceteris magis consonaz veritati: posteriorēs eligentes: circa ipsam diuersimode p̄ceserunt. Quidā nanq; dixerūt formas substantiales omnes de mā educibiles quantū ad aliqd̄ sue essentie in ipsa p̄existere ante generationē. quantūz vō ad aliquid: de sua eētia eas p̄uenire dicūt ad actum: per actionē p̄ncipaliter exterioris agentis. Quidā vō volunt ipsas quantū ad totā suā essentiam p̄existere in mā: sub quodā esse imp̄fecto: ad esse vō perfectū: fm̄ eos deducunt̄ ab agente nāli. Alij vō dicūt: eas nec quantū ad totā suā eētiaz nec quantū ad partē ipsius in materia actu p̄existere: sed potētia soluz de qua virtute agentis fm̄ eos p̄ducunt̄ ad actūz. Quantū aut̄ ad euidentiā p̄me opionis sciendū est: q; in quibusdam formis accidentalibus sic videmus: q; in sua eētia gradū diuersos habēt: ad vnā t̄m̄ z eandem spēm p̄tinētes sicut apparet in albedine: z i formis suscipientib; magis z minus. Albedo enī fm̄ gradus diuersos sue nature p̄cipat̄ a diuersis: nec t̄m̄ p̄pter illorūz graduū diuersitatē: ipsa albedo in diuersis est diuersaz speciez: sed vni t̄m̄: p̄pter illud q; magis z minus albū: in participādo albedinē: nō diuersificat spēm. Et in talib; quidē formis videm; q; nō statim cū aliqua eaz ponit̄ in subiecto: necessariū est q; in ipso ponat̄ fm̄ totā sue nature p̄fectionē q̄n̄ potius ibi pōt̄ existere sub gradu imp̄fecto sue nature solū. Et h; quidē rō est: q; z si talis forma naturalit̄ esse habeat in tali subiecto: nō t̄m̄ ē nata existere: nisi in subiecto depurato a dispōne contraria depuratū: fm̄ qd̄ p̄mittit possibilitas naturalis: erit ibi forma sub gradu sue nature p̄fecto fm̄ q; ipsam est possibile in talib; repiri. Si autēz ab hac dispōne subiectū fuerit minus p̄fecte absolutum: formā habebit sub gradu sue nature imp̄fecto t̄m̄. ab hoc aut̄ gradu: si ipsa forma accidentalis deduci debeat ad gradū perfectiorē: o; necessario fm̄ istos: q; ibi duo concurrāt: q; z actio motorū extrinseci: z actio forme in subiecto inchoate ipsi motori extrinseco quō coagentis. Concurrat siquidem ibi actio motoris extrinseci: dispōnez forme p̄dicte contraria remouentis a subiecto. z formā ipsam paulatim de gradu imp̄fecto ad magis ac magis p̄fectū deducētis. Concurrat etiā ibi z actio ipsi forme in subiecto inchoate. Cū enī talis forma contrarietate habeat ad formā abiiciendā: z vnū contrariorū naturalit̄ natū sit expellere reliquū: motori extrinseco ipsa quodāmodo coagit ad expulsionē dispōnis vel forme sibi contrarie. coagendo aut̄ ad expulsionē ipsius: coagit ex consequenti z q̄si per accidēs ad sui deductionē de imp̄fecto gradu ad gradū perfectiorē. Sicut enī supra dictū est: tāto

magis subiectū ad ipsius p̄fectionē deducit̄: quāto magis absoluit̄ ab accidente contrario: sicut aut̄ in istis formis accidentalibus esse videt̄: sic etiam fm̄ istos: est z in omnib; formis substantialib; p̄ viā naturalis transmutationis educibilib; de mā. Om̄s etenī fm̄ istorū positionē forme substantiales sic de mā educibiles per naturam in sua essentia gradus diuersos habent ad vnā z eandē speciem pertinentes. sub quibus omnibus ipse nate sūt existere in materia. v̄z q; forma substantialis non habet esse in materia: quōcūq; accepta: sed soluz in mā disposita. actus enī actiuorū: sunt in patiēte z disposito: idcirco si mā fuerit ad talē formā p̄fecte disposita ipsam p̄fecte siue sub gradu p̄fecto de necessitate habebit. si vō disposita p̄fecte ad ipsam non fuerit: sub p̄fecto gradu neq; habebit. habere tamē eam poterit sub imp̄fecto gradu sue nature. z quia nunq; i materia generabiliū ad formā aliquam dispositionē talem possumus inuenire que ab ipsa possit excludere omnes gradus dispōnum ad formas alias: idcirco ut dicunt: talē materiaz nunq; possēt ponere sic stare sub aliqua forma q; abiici possunt ab ipsa alie forme substantiales: quantūz ad omnes gradus sue nature: quin potius quēadmodū in mā cuiuslib; necessario est dispositio ad formam quālibet sub quodā gradu dispōnis imp̄fecto: sic etiā inquirunt z in mā formata quacūq; forma inchoata est forma substantialis cuiuslibet alterius rei generabilis sub quodā gradu imp̄fecto sue nature: a quo si deduci debeat ad gradū p̄fectū: cōcurrēt ibi necessario z actio extrinseci motoris: z etiā actio forme extrinseco coagentis motori: eo mō qui supra de formis accidentalib; est recitatus. talis est ḡ istorū extranea opio. Rationes aut̄ quas p̄ se adducunt sunt in obiectionibus recitate. z iō ad p̄ns itez eas adducere: sup̄fluū est. Siquis aut̄ vellet ostendere hanc opionē esse p̄biaz: nō multū sibi difficile eēt. p̄cipue cū Arl. dicat: Substantiā oīno nō suscipere magis z min;. Itē q; in subā nō est mot;. Itē q; spēs substantiaz sunt sicut spēs numeroz. quaz rō in diuisibili consistit: z q; forma subālis nō introducitur in tpe i māz s; i instāti: z plura his filia v̄z q; eis p̄bi v̄ba nō sapiūt: s; ipsa asserūt simplr̄ eē falsa: tētabim; eos etiā ex appentib; ad sensū p̄cedere: q̄tinus p̄ sensibilia q̄ sequūt̄ possunt suaz pōnez asp̄icere eē falsā. p̄cedem; aut̄ i ipsos h; ordine: ut p̄mo sic sufficē putam;: ad p̄ns ostendamus q; forma subālis nō pōt̄ magis z minus suscipere z q; in sua eētia gradū z gradū ut eā habere dicūt nō h; . Scđo q; dato eā habē gradū z gradū positū: oēs simul eē in aliq; pte mat̄ie sub ḡdib; imp̄fecti nō p̄nt. Tertio q; dato eas sic existere i mā: coagēt t̄m̄ motori nō valēt. Quarto q; cōcesso etiā q; motori coagent: t̄m̄ difficultatē nō fugiūt quā p̄ suaz pōnem fugere se credebāt. Quātū ad p̄mū considerandū est: q; in oibus formis oppositis suscipientibus magis z minus: ita est q; simul cū inducitur

aliquid de perfectione unius: abijciat etiam necessario aliquid de perfectione alteri: sicut simul cum inducitur aliquid de perfectione albedinis: abijciat etiam aliquid de perfectione nigredinis. h^o autem ratio est: quia cum perfectiones talium formarum: sint sibi inuicem repugnantes. si cum inducitur aliquid de perfectione unius non simul abijceret aliquid de perfectione alterius: opposita et repugnantia starent in simul in eodem: quod esse non potest. Si autem eadem ratione videmus quod cum per continuam graduum formae unius inductionem pervenit ad gradum medium inducende formae: pervenit etiam per continuam aliorum graduum abiectionem: ad gradum medium formae abijciende. Alteri autem videmus: quod medium utriusque unum essentialiter est. et a subiecto tollit absolutam denotationem cuiuslibet extremorum: sicut palor vel paliditas que est medium albedinis et nigredinis: est unus color essentialiter: et a subiecto tollit absolutam denotationem: tam albi quam nigri. videmus etiam quod hoc medium formarum suscipientium magis et minus: sic determinate respicit duas formas extremas: quod semper cum ab ipso recedit: necessarium est accedere ad alteram duarum determinatarum extremarum formarum: sicut semper cum a palido recedit: necessarium est omnino accedere vel ad album vel ad nigrum. et semper cum recedit a tepido. necessarium est omnino quod accedat vel ad calidum vel ad frigidum: et vltimum in omnibus formis suscipientibus magis et minus. etiam contingit dare unum medium: sic determinate respiciens duo extrema ex quibus consistit: quod necessarium est ab ipso recedendo non accedere nisi ad alteram duorum terminum. Tale autem medium non contingit dare in substantialibus formis. Est enim omnino inconueniens dicere quod unum et idem essentialiter sit medium essentie unius forme substantialis: et medium essentie alterius. et quod una forma substantialis ex duabus formis substantialibus consistat. Sed nec etiam inter tales formas dare contingit aliquod medium sic determinate duas formas substantiales respiciens: quod semper cum ab ipso recedit: sit necessarium accedere non nisi ad alteram duarum terminum. videmus enim quod in generatione animalium: in qua est ordinatissimus processus a forma seminis acceditur ad formam sanguinis: et a forma sanguinis ad formam carnis: nec unquam ordine nature potest ad formam carnis a forma seminis transiri: nisi prius perveniatur ad formam sanguinis: semper igitur necessario in tali processu: forma sanguinis est media inter formas seminis et formas carnis. Et tamen quis sic necessario cadat semper media inter eas: non tamen necessarium est quod semper cum ab ipsa recedit: accedat ad alteram earum. potest enim esse quod per corruptionem sanguinis: fiet transitus a forma eius: non ad formam seminis: nec ad formam sanguinis: sed ad formas essentielles: et inde ulterius procedat ad formam lapidis: vel ligni: vel alicuius alterius mixti. quod si talis forma sic patenter cadens media inter formam seminis et carnis: non sic determinate eas respicit: quod ab ipsa recedendo sit omnino necessarium ad alteram earum accedere uniuersaliter inter nullas substantiales formas videtur quod sit dare aliquod medium

sic determinate duas formas terminum respiciens quod sit omnino necessarium: cum ab ipso recedit ad alteram earum accedere. precipue cum in talis substantie generatione sit ita determinatus et ordinatus processus sicut est in generatione animalium perfectorum. Cum ergo vltimum ut supra dictum est inter formas suscipientes magis et minus: contingat inuenire medium unius essentie supra dicto modo: duo terminum extrema respiciens: et inter formas substantiales ut ostendimus hoc inueniri non possit: concluditur sensibiliter si hoc dicere liceat: quod nulla forma substantialis potest magis et minus suscipere. Propter omnes formas suscipientes magis et minus successive inducuntur per naturam et ab ipsa successive abijciuntur: et non in instanti cuius ratio est: quia natura in sua operatione saltim non facit: nec potest aliquo modo de extremo in extremum transire nisi per medium. In formis autem suscipientibus magis et minus sic est: quod inter gradum infimum et supremum sue nature intenduntur plurimi gradus medij. Et idcirco necessarium est: quod in inductione naturalium formarum: ipsa natura prius perveniat ad gradum medium earum quam perveniat ad gradum ultimum et completum. Similiter etiam necessarium est quod in earum abiectione procedendo a gradu supremo ad infimum: prius pertingat ad gradum medium quam ad ultimum. et sic nulla forma suscipiens magis et minus in instanti a subiecto secundum se tota potest induci vel abijci per naturam: sed necessario sit utrumque successive: et in continuo tempore: propter illud quod motus continuus tempore continuo mensuratur. si igitur aliquae forme sint que subito secundum se totas abijciuntur a suis subiectis: tales nullo modo erunt de numero formarum suscipientium magis et minus. sunt autem huiusmodi plurime forme substantiales: sicut pars de aibus animalium. Quis enim propter tonitruum vel aliquam causam aliam: animalia subito moriuntur et in instanti auferuntur ab eis anima: et secundum principium sentiendi: et secundum principium vegetandi: quia vltimum auferuntur secundum quod erat sibi principium viuendi: et remanet illud mortuum quod fuerat prius vivum. hoc autem esse non posset: si anima susciperet magis et minus prius enim abijceret secundum unum gradum sensitivae partis: et postea secundum alium: et deinde secundum alium. abiectionis autem omnibus gradibus sensitivae partis abijceret postea unus gradus vegetativae: et postmodum alij successive. cum igitur videamus quod subito et in instanti quicquid tota anima abijciat. et secundum quod est principium sentiendi. et secundum quod est principium vegetandi. etiam secundum quod ipsi concedunt: concluditur de necessitate: quod anima est indivisibilis in essentia. Sed si anima que est multiplicior in virtutibus qualibet alia forma substantiali est indivisibilis in essentia multo magis hoc dicere oportet de alijs substantialibus formis. nulla igitur substantialis forma habet gradum et gradum in sua essentia: sicut habent forme suscipientes magis et minus: sed est omnino indivisibilis essentie. Preterea quandoquidem aliqua forma in sua essentia et natura gradus diversos habet ad modum formarum suscipientium magis et minus. id quod secundum ipsam perfectum est intendi et remitti potest.

Questio

z ab ea fm magis z minus denominari: sicut quia albedo i sua natura gradus diuersos habet. albus intenditur z remittitur. vnde enim z idem: quandoq; est magis album quandoq; minus. Est enim vnus albus magis album alio albo. Si igitur forma substantialis in sua natura gradus diuersos habet: ut forme suscipientes magis z minus: de necessitate id quod forma substantiali perficitur intendi poterit z remitti: z ab ipsa fm magis z minus denominari. z sic vnus homo erit magis homo alio homine: z vnus lapis erit magis lapis alio lapide: z sic de singulis. hoc autem totum falsum est. Quilibet enim homo est equaliter homo cuiuslibet homini. z quilibet lapis est equaliter lapis cuiuslibet lapidi. z quodlibet lignum est equaliter lignum cuiuslibet ligno. z quilibet aeris pars est equaliter aer cuiuslibet alteri parti aeris: z sic de singulis substantijs: sub vna specie contentis. ergo nulla forma substantialis suscipere potest magis z minus. Preterea aut forma substantialis sub quolibet gradu sue nature accepta est immediate in essentia materie prime: aut sub gradu supremo tñ est immediate in ipsa. sub gradu vò infimo: est in composito ex materia z dispositionibus: z per consequens in composito ex materia z forma: ad quam ille dispositiones sequunt. Non potest autem dici qd solum sub gradu sue nature supremo: sit immediate in essentia materie prime. ois etenim actus cuius subiectum immediatum est quid compositum ex materia z forma: est de necessitate accidens. z omnis actus cuius subiectum immediatum est ipsa essentia materie prime est de necessitate substantia. Si ergo forma substantialis deducat essentiam materie prime de gradu infimo ad gradum supremum vna z eadem forma in eentia deducet de gradu accidentis ad gradum substantie. z vnus z idem erit quandoq; accidens quandoq; substantia: quod est impossibile. Est igit ois non necessarium qd forma substantialis sub quolibet gradu nature sue sit immediate sicut in proprio susceptiuo in essentia materie prime. si in quolibz gradu debet esse actus substantia z non accidens. Constat autem cu in essentia materie prime: que est immediatum susceptiuum forme substantialis: sub quolibz sue nature gradu non sit aliqd repugnans talis forme eentie materie prime q ante oem dispõnem sibi vnice: necessarium est q habeat statim z totam essentiam ut sic nullo modo poni possit in eentia ei recipi q est indiuisibilis aliquid de eentia talis forme qn ponat in ipsa z tota essentia. Sed nulla forma q de necessitate in suo ppo susceptiuo recipit simul tota. pot suscipere magis z minus. g nulla forma substantialis suscipere pot magis z minus i sua eentia nec in ipsa pte z pte habere. Notandum q si forma subalis sequeret dispõnem in ma: sicut effectus causa rõnabilr dici posset: q si dispõ eest i gradu ipfecto aut pfecto in ma q etiã forma subalis in ea osilr existeret. nũc aut qz ipsa ante oem dispõnem adiungit essentia materie pdicte que ad ipsam sub gra

du quolibet accepta se hz equaliter. necessario fit ea ponit fm aliqd sue eentie: ois q in ipsa ponatur statim z fm se tota. Põ ois forma que suscipit magis z minus in suu subiectu p motu inducit. si igit forma subalis magis z minus suscipit inducetur necessario in suu ppium susceptiuu per motu. In ducit aut p generatione: ergo generatio q est introductio subalis forme est motus. Mouet aut oem qd subicit motui: z oem qd actu mouet est existens actu: ergo oem qd alicui motui: z p consequens generationi subicit: est ens quantum z ens actu. Est autem idem qd est subiectu in toto motu: z qd subicitur termino motu: sicut idem est subiectu albationis z albedinis q p motu acqrit: g idem est subiectu subalis forme q p generatione acqrit z ipsi generationis. Est aut conclusio q ens quantum z ens actu est subiectu generationis: g ens actu p formã subalẽ est rõ esse di fm qd. z sic est accis: g ois forma subalis est accidens. hoc autem est impossibile: g impossibile est q eius subiectu sit ens actu exis de se. z p ois impossibile est q ipsa iducat p motu quantum ad sua eentia. necessarium est g q ois forma subalis sit in sua eentia indiuisibilis: nõ potes magis z minus suscipere. Hoc g viso vltiori videndum est: vtz in ma cuiuslibet poni possint forme subales sit existe sub gradibus ipfectis sue nãe cõcesso eas hãre gradum z gradum i sua eentia vlnã. Et q h nõ sit possibile: facile est ostendẽ. ponamus enim gradus ipfectos subalium formarum de ma educibiliu sit existe i ma sic ponit. aut g oes illi gradus sunt vnus p eentia: aut diuersi: nõ pot dici q sint vnus p eentia: cu vna eentia substantificor graduum sit vna for subalis. oes illi gradus erunt vna forma subalis: sed vna for subalis nõ est ichoatio diuersor graduum repugnatiu formarum subalium. forme autem subales reprobabiliu: sunt sibi inuicẽ repugnantes. illa igit forma subalis nõ erit ichoatio earum. z ptea for subal vna nõ pot sit cu alia stare in eadẽ pte mae. in illa igit mae pte i q stat vna formarum gnabiliu: utputa for afini vlt alicu alii: illa for subalis q surgit ex oibus ipfectis gradibus stare nõ potit. z sic p ois tales ichoationes formarum i ma sub nulla for gnabil rei stante: stare poterunt. Et ptea illa vna for q est ichoatio oium formarum gnabiliu erit cõfusa oibus gnabilibus nõ solũ elat: s; etiã elis. z sic dare oportebit quantum corp ex quo elã z elata sunt qd est a pho reprobatu. Põ tũc dicet for subalis vna eẽ ichoata i aliq re solũ qz sub quodã gradu sue nãe vtute continet in subã forme illi rei sic forme elales vtute continet in for mixti. z sic forme oium generabiliu vtute continetur in for hois. s; nec ipsi sic ponit ichoatione. nec etiã h ppe dẽ ichoatio. Si g dicat q illi gradus ipfecti formarum sunt oes distinctarum z diuersarum eentiarum s; q sunt diuersẽ eentie formarum gnabiliu: h etiã stare nõ poterit. impossibile est enim repugnãtia fm qd sunt eentia liter diuincta simul iniciari in eodem. si ergo illi imperfecti gradus formarum substantialium sunt distinctarum essentiarum fm quod distincte sunt essentia formarum generabilium: cum tales sint sibi inuicem repugnantes: impossibile est quod

illi gradus simul inueniantur in eadem parte mae. vno igitur in vna parte mae posito: necesse est omnes alios excludi. In quacumque autem parte materie est forma substantialis completa: in eadem sunt omnes gradus forme illius. Ex quo sequitur quod in nulla parte mae formata forma generabili possint esse imperfecti gradus formarum aliarum si ponantur realiter in eentia distincti. sicuti etiam si gradus medius albedinis et gradus medius nigredinis: facerent duos colores in eentia distinctos: realiter nunquam simul inuenirentur in eodem subiecto. Verum quia pallor qui est medius nigredinis et albedinis: est eentialiter vnus color virtute habens aliquid de utroque extremo: medius albi et medius nigri: simul in eodem inueniuntur. Similiter ergo et si imperfecti gradus formarum substantialium sunt distinctarum et repugnantium eentiarum: simul non poterunt stare in eadem parte mae. quod si in simul stare ponuntur: erunt necessario vnum per eentiam.

Preterea. eentia materie prime indiuisibilis est de se et forma substantialis sub quolibet gradu sue nature sibi immediate vnica: vt supra probatum est. Indiuisibile autem ab vnico indiuisibili totum attingitur. ergo eentia materie prime ab vnico gradu infimo substantialis forme tota attingitur. non est igitur intelligibile quod aliquid secundum se totum eam immediate simul attingat a pluribus ab ipso realiter differentibus. ergo eentia materie prime simul a pluribus gradibus formarum subalium attingi non poterit. vnus ergo solus gradus forme erit sicut in proprio susceptiuo et eentia materie prime. Alij vero omnes erunt in composito ex materia et aliquo gradu forme. Est autem quilibet gradus forme eentialiter actus substantialis: et quilibet actus substantialis quantum cuius imperfectus est ratio existendi simpliciter. quia aliter non distingueretur ab actu accidentali. ergo omnes gradus imperfecti substantialium formarum excepto vno tantum: erunt vt in proprio susceptiuo in simpliciter actu existente et per consequens erunt de necessitate accidentia. quod est impossibile. ergo impossibile est gradus imperfectos omnium substantialium formarum simul esse in eadem parte materie. **P**. numerata materia necesse est numerari et ea que sunt in ipsa. quia impossibile est aliquid vnus et idem numero simul inueniri in pluribus numero duntaxat. **N**on autem que stat actu sub forma ignis si differt numero a materia que stat actu sub forma aeris: et a materia stante sub forma aque: et a stante sub forma terre. igitur et inclinatio forme que est in materijs quattuor eorum est necesse quod sit numero distincta et diuersa. **P**onamus ergo quod elementa concurrant ad mixtionem et deueniant ad asini generationem. completa itaque generatione asini: aut omnes quattuor anime asinine que in quattuor elementis erant inchoate corrumpuntur: aut alie perficiuntur et alie non: aut perficiuntur omnes. **N**on potest dici quod omnes corrumpantur. quia secundum istos per generationem rei forma in materia inchoata ad gradum completum deducitur. **N**on potest etiam perfici vna sola. quia non est dare quare perficiat magis vna quam alia. perficiuntur itaque omnes: et sic in asino generato erunt quattuor numero anime asinine complete. quod est absurdum. ergo absurdum

est in materia stante sub qualibet forma esse gradus incompletos omnium aliarum formarum. **V**iso ergo quod forma substantialis in sua eentia non habet realiter gradum et gradum: et quod dato ipsam gradum et gradum habere: non ideo tamen potest poni quod in eadem parte materie simul sunt gradus imperfecti omnium formarum substantialium. **T**ertio videndum est breuiter: vtrum concessio quod forma substantialis preexistat in materia sub gradu sue nature incompleto: coagere possit motori ad sui productionem. **Q**uod autem hoc sit impossibile facile est ostendere. **E**ius etenim est agere cuius est esse: cum agere presupponat esse: et nihil agat nisi secundum quod est in actu: sed esse non est forme et si sit per formas. est autem compositum: igitur et compositum est agere. gradus autem forme est forma simplicitate: et non quid compositum ex materia et forma. ergo eius non erit esse nec agere. sed compositum ex ipso et materia: et cuius hoc compositum sit illud in quo actio recipitur. ergo aliquod ens agere poterit in se totum. quod est impossibile. nullam enim partem compositum est dare in qua non sit inchoatio forme inducende simul cum forma abiicienda. **P**reterea. sicut in materialibus id quod est ratio essendi non est ipsum per se existens: sic etiam in eis id quod est ratio agendi: non est ipsum agens. est autem forma ratio agendi: sicut est ratio essendi. ergo forma non est agens. **M**ulto igitur magis neque gradus incompletus forme poterit esse agens vel poterit agere: esse tamen poterit ratio agendi. **A**ut ergo erit ratio agendi ipsi exteriori agenti: aut illi quod recipit exterioris agentis actionem et in quo est ipse gradus incompletus forme inducende. **N**on potest autem dici quod sit ad proprium quod sit ratio agendi ad expulsionem forme que est ei a quo talis forma expellitur. primo quod quod forma non est ratio agendi ipsi rei in seipsum sed in aliud. **S**ecundo. quia cum forma expellenda sit in tota substantia rei et forma inchoata sicut vt supra diximus propter id quod non est dare quare forma inchoata sit in vna parte rei potest quod in alia: alij res in se tota agere poterit transmutando se ab vna forma in aliam. quod est impossibile. non potest ergo esse generatus talis forme ratio agendi ad expulsionem alterius forme illi a quo forma expellitur. **E**rit ergo ratio agendi exteriori agenti: sed hoc est inconueniens. primo quod quod forma est ratio agendi sicut et eendi ei in quo est. sicut. n. vnus quodque est actu per suam formam et non per alienam: sic etiam nihil agit per formam in alio existente. sed solum per formam quam habet in seipso. **S**ecundo. quia tunc superfluum erit ponere tale gradum incompletum in passiuo ad forme contrarie expulsionem et inductionem alterius. **C**um enim agens extrinsecum in seipso habeat completam formam que est ratio agendi: et per consequens perfectam agendi rationem subtracto gradu imperfecto a passiuo: adhuc agens exterior per suam formam: ipsum complete poterit transmutare. omnino igitur frustra talis actus incompletus ponitur in passiuo: cum nec sit ratio patiendi propter id quod hoc est potentia et non actus: nec sit agens: nec ratio agendi. vt ostensum est.

Questio

Habito ergo quod si gradus incompletus forme inducende sit in materia eo modo quo aduersarij ponunt: agere tamen vel coagere extrinseco motori non potest. Alteri quarto videndum est utrum concessio etiam eis quod exteriori agenti coagat difficultas fugiat quam isti per suam positionem fugere se credebant. Est autem difficultas illa precipua de productione formarum. dicunt enim quod si nihil forme ponatur in materia ante generationem in qua postmodum tota inuenitur erit productum per generationem aliquid de nihilo. quod est impossibile. Non autem ipsi per suam positionem hanc difficultatem non fugiant facile est ostendere. Aut enim per generationem producit aliquid de essentia forme quod prius non praefuit in materia: aut nihil. Si nihil producit per generationem quod prius non praefuit in materia cum post generationem inueniatur in materia forma completa: sequitur quod forma completa praefuit in materia. et sic redibit opinio de latitudine formarum. Si autem aliquid de essentia forme per generationem producit quod prius non extiterit in materia: tunc oportet dicere unde producat. Aut enim producit vel accipit de essentia materie: aut de essentia forme contrarie: aut de parte forme persistente in materia: aut de essentia compositi: aut decidit a forma agentis. Non potest dici quod accipiat de essentia materie. quia haec essentia tota est potentia. id autem quod de essentia forme producit est essentialiter actus. Non accipit etiam de essentia forme opposite. quia nihil quod est de essentia unius oppositorum: potest fieri de essentia alterius. Non accipit etiam de parte forme in materia persistente: nec de essentia persistentis oppositi. quia in neutro istorum ut etiam ipsi concedunt: hoc actu fuit ante generationem. Non decidit etiam ab essentia forme generantis ipsi. quia tunc quot gradus de essentia forme generantis producit per generationem: tot gradus erit necessarium decidi ab essentia forme ipsi generantis. quia tunc quot gradus de essentia forme generantis producit per generationem: tot gradus erit necessarium decidi ab essentia forme ipsi generantis. producit autem per generationem omnes gradus qui sunt de essentia forme rei generantis praeter infimum. gradus et ab essentia forme rei generantis omnes gradus decidit praeter infimum: et remanebit per se quibus generans de necessitate corruptum in fine generationis. quod est aperte falsum. Si ergo quod de essentia forme per generationem producit non decidit a forma generantis: nec accipit ab essentia materiae: nec ab essentia forme opposite nec a persistente gradu essentiae: nec a persistentis essentia compositi: aut dicat. hoc quod de essentia forme producit per generationem produci ex nihilo. quod non voluit: aut dicant nobiscum quod illud per se non producit sed per accitum ad productionem oppositi quod de materia producit in qua praefuit ratio forme potentia: sed non actu. et tunc ad hoc quod res non producat ex nihilo dicat non requiri quod aliquid de forma ante generationem actu persistat in materia: sed quod forma se tota potentialiter solus in ipsa persistat: sicut nos dicimus. Vis ergo opinione illorum ponentium formas substantiales in materia actu ante generationem existere sub gradu incompleto sue essentiae: et visa etiam improbatone ipsi: alteri videndum est aliquid de opinione

ponentium formas substantiales quantum ad totalitatem sue essentiae persistere in materia sub quodam esse confuso. Ad cuius opinionis intelligentiam sciendum est quod in formis accidentalibus contrariis sic videmus quod extrema sub esse distincto accepta se inuicem circa idem non compatiuntur: sed potius nata sunt se mutuo expellere albedo etiam sub esse distincto accepta: non compatiuntur secum nigredinem in eodem: nec e converso. Sub esse tamen indistincto et confuso se mutuo circa idem compatiuntur. Unde quia extrema non sunt distincte in medio: sed confuse simul in ipso sub quadam tamen confusione inueniuntur. ab ista autem confusione deducuntur ad esse distinctum virtute agentis materiam vel subiectum determinate ad alterum extremorum motus: sicut virtute calidi motus determinate ad ipsam caliditatem quod erat tepidum: et per consequens confuse calidum distincte calidum efficit: et virtute alteratis frigidi efficit distincte frigidum. Quoadmodum autem in istis est sic etiam secundum istos et in formis substantialibus suo modo esse videtur. si enim forme substantiales sub esse distincto accipiunt se pati non possunt circa eadem partem materiae. In qua tamen materia sub esse indistincto et confuso omnes infiniti existunt. hoc autem esse confusum ut dicunt nihil aliud est quam habitus confusus formarum et potestas habitualis materiae in qua potestate ipsa materia habet confuse omnes formas: nullam tamen distincte: sicut etiam genus potestate quadam quae est habitus confusus differentiarum indistincte et confuse differentias omnes habet. et sicut genus per intellectum ad alteram oriarum determinat: sic etiam et materia per virtutem naturalem agentis determinat ad alteram formarum in ipsa indistincte praemittit contentarum: ut sic dici possit quod forma substantialis quantum ad essentiam suam totam et non quantum ad partem quae indivisibilis est sub esse confuso ante generationem existit necesse in materia: et per generationem virtute naturalem agentis etiam quantum ad essentiam suam totam de esse confuso deducit ad esse distinctum. ut sic etiam quantum ad esse partim sit ab intus et partim ab extra. quantum vero ad essentiam tota sit semper in materia: sub esse tamen confuso ut dictum est: de quo ad esse distinctum per agens exterius deducatur. Ista autem opinio uno modo ipsam intelligendo vera est: et alio modo falsa. Per esse etenim confusum: aut intelligitur actus existendi: aut sola aptitudo materie ad esse et ad formam quae est ratio existendi. et quidem si per ipsum confusum esse intelligat actus aliquis existendi: ita videlicet quod ponendo formas existere in materia sub esse confuso: necessarium sit eas ponere actu existere in materia: erit positio omnino impossibilis.

Ad cuius intelligentiam sciendum est quod cum nullum indivisibile habeat partem et partem: de necessitate oportet dicere quod unum indivisibile attingens aliud indivisibile secundum se totum et totaliter totalitatem suae essentiae aliud indivisibile totum attingat. Est autem essentia materia de se cui forma substantialis coniungitur omnino indivisibilis. unde oportet de necessitate quod forma substantialis actu attingens essentiam materiae secundum se totam et totaliter ex parte sua ipsam totam actu attingat. si autem essentia forme actu est in materia necessarium est dicere

q̄ actu attingit ipsi⁹ essentiā. nō enim est intelligi-
 bile q̄ essentia forme sit actu in materia: et actui
 essentie ipsius materie non cōiūgatur. Ex hoc autē
 q̄ essentia forme tota ⁊ totaliter attingit totā eēn-
 tia; materie: consurgit actualis existētia coniūcti
 tota ⁊ cōpleta. Si igit̄ essentia forme actu in ma-
 teria ponat̄: necesse ē dicere q̄ materia stet actu
 sub esse cōpleto nato consequi formā illam: et p̄
 consequēs si ante generatōem forma actu tota ē
 in materia: oportet dicere de necessitate q̄ esse ge-
 nerati totū ⁊ cōpletū generatōi p̄existat. quod ē
 impossibile. nō pōt autē dici q̄ forma q̄tū ad esse
 eēntie sue ante generatōem est in mā: ⁊ nō q̄tū
 ad esse existētie. quia per hoc q̄ alicui correspōdē
 eē eēntie non dicit̄ actu existere in aliquo: s; soluz
 per se existere. Cuius ratio est. quia ⁊ si eoi⁹ res
 haberet nō quidē existere posse sed actu existere
 quo habet esse eēntie: cum esse eēntie vnaq; res
 eēntialit̄ ⁊ inseparabilr habeat: habebit vnaqueq;
 eēntialr ⁊ inseparabilr actu existere. quod est here-
 ticū. igit̄ si solū esse eēntie ipsi⁹ forme añ gnātōem
 respicit̄ a mā ⁊ nō esse existētie: p̄ hoc ipsa forma
 nullo modo habebit q̄ actu existat in materia: s;
 solū q̄ ipsa possit existere. Si autē dicat̄ q̄ essentia
 forme ante generatōem est coniūcta mat̄ie actu:
 sed impfecte: patz q̄ hoc nihil est. cum enim talis
 essentia sit indivisibilis: si actu alicui coniūgit̄: to-
 ta sibi coniūgit̄. ⁊ si tota illi coniūgit̄: nihil sui re-
 stat illi ampli⁹ coniūgendū: ⁊ per consequēs talis
 essentia est sibi perfecte coniūcta. Est enim omni-
 no puerile dicere q̄ aliquid sit fm totā suā essen-
 tiam actu coniūctū alicui: ⁊ tamē sibi sit impfecte
 cōiūctū. cum illud solū impfecte sit coniūctū ali-
 cui quod fm aliquid sui est sibi actu coniūctū: ⁊
 fm sui aliquid restat illi posteri⁹ coniūgendū. Ex
 hoc autē patz q̄ nec etiā dici potest talis eēntia in-
 distinte coniūcta esse materie. quia solū in potē-
 tia res indistincte continet̄: per actū autē ⁊ maxime
 per completū omnia distiguūt̄. Essentia autē for-
 me vt ostēsūm est si actu est coniūcta m̄e: nccō
 est sibi cōiūcta pfecte ⁊ distinte: ⁊ per consequēs
 distinctōe cōpleta: quod esse ante generatōez oio
 nō pōt. Præterea. Si essentia formarū substā-
 tialiu⁹ omēs in aliqua mā actu p̄existūt: aut sunt
 ille essentie formarū omniū indiuiduozū de m̄e
 potētia produci possibilū per naturā: aut eēntie
 formarū omniū specierū solum. Si sunt essentie
 omniū formarū indiuidualiu⁹ produci possibilu⁹
 p̄ nām: cum fm facultatē n̄e indiuidua produci
 valeant infinita: erunt simul in materia actu eēn-
 tie formarū substantialiu⁹ numero infinite: ⁊ non
 solū semel sed multotiēs infinite. quia sub qualibet
 specie rei generabilis: infinita indiuidua p̄du-
 ci possunt successiue: ⁊ forme p̄ducibiliū fm istos
 actu in materia productōni p̄existant. Est autem
 omnino impossibile quod cōclusum est. igit̄ om-
 nino impossibile est in materia p̄existere actu es-
 sentias omniū indiuidualiu⁹ formarū produci de

ipsa possibiliū per naturam: nō possunt etiā in ipsa
 p̄existē eēntie forāz oim spēz solū: ita q̄ nō indi-
 uiduoz. qz forā spēi de se sumpta s; s; spēi cor-
 rīdet ē forā v̄lis. forā autē actu exis in mā ē forā
 indiuidualis. qz act⁹ eēndi nllō mō v̄li pōt nisi in
 indiuiduo p̄petē. vñ si in mā nō ponant̄ forē indi-
 uiduales s; v̄les: nō erūt v̄llo mō actu in mā: sed
 potētia solū. q̄ si actu in ipsa existē dicant̄ nō erūt
 v̄les sed indiuiduales indiuiduis p̄mo corrdēn-
 tes. nō est autē dare quare in mā sint poti⁹ forme
 corrdēntes aliquib⁹ indiuiduis q̄ alijs: ⁊ sic oportet
 tebit nccō in mā p̄existē actu formas oim indiui-
 duoz de ipsa p̄duci possibilū p̄ nām. qd̄ iā osten-
 dim⁹ eē impossibile. Si autē dicat̄ q̄ in illa mā actu
 p̄existit vna tm̄ forā numero fm vnaquāq; spēz
 successiue diuersis spēi indiuiduis corrdēns: appz
 h̄ subito eē impossibile. Cū. n. ab vnica forā sit vni-
 cū eē numero: ⁊ vnū numero eē nullo mō possit
 eē pluriū indiuiduoz numero distinctoz: sequitur
 de necessitate q̄ oia indiuidua sub eadē spē succes-
 siue de illa mā p̄ducta sint vnū numero. qd̄ ē oio
 impossibile. de aliq. n. pte aque p̄ corruptōem ipsi⁹
 poterit aliqua ps aeris fieri: ⁊ de illa parte aeris p̄
 ei⁹ corruptōem fieri aq̄ poterit. ⁊ erit aq̄ p̄mo cor-
 rupta ⁊ postea gnāta eadē aq̄ numero. qd̄ ē im-
 possibile. igit̄ oio impossibile est pō q̄ ponit essen-
 tias totas forāz subaliū actu p̄existē in mā. p̄
 illud eē cōfusuz qd̄ ponit eē quidā act⁹ exīdi: aut
 sequit̄ formā subālē vna eēntialr: aut foras subā-
 les eēntialr distinctas. ois eteni act⁹ exīdi eēntiaz
 alic⁹ forē cōsequit̄. Et quidē si vna formā tm̄ cōse-
 quit̄: tm̄ vna forā p̄ tale eē ponet̄ in mā: nō enī p̄
 actū exīdi in mā alia forā ponit̄ nisi illa quā illō
 eē cōsequit̄. Sic ḡ sub tali eē cōfuso nō poterūt dici
 existē in mā eēntie oim formarū subaliū de ipsa p̄-
 ducibiliū. Si autē tal act⁹ essendi cōsequit̄ foras subā-
 les eēntialr distinctas cū de necessitate ad formas
 distinctas eēntialr sequat̄ act⁹ eēndi realr distincti
 eē illō sub quo multe forē subāles sit in vna pte
 m̄e ponit̄ erit nccō nō cōfusuz s; distinctū: ⁊ p̄nī
 in eadē pte m̄e sit erit ples forē subāles sibi inui-
 cē repugnantes sub eē distincto. qd̄ ē impossibile. ergo
 oio ē impossibile pō q̄ ponit formas subāles q̄tū
 ad totas suas eēntias sit p̄existē in mā sub eē cōfu-
 so. si tamē p̄ eē tale aliquis act⁹ exīdi intelligat̄ ⁊
 nō aptitudo ad existētia; actualē. Qd̄ si p̄ esse
 cōfusum non intelligat̄ existētia in actu sed i apti-
 tudine solū: vera esset opio. Et forte sic ista positō
 intelligitur. per actum eteni res ad inuicem disti-
 guūtur: que in aptitudīne indistincte ⁊ cōfuse ha-
 bentur. Actus eteni distinguere habet ⁊ determi-
 nare aptitudinē rei. Eo igit̄ ipo quo ipsi dicūt for-
 mas subāles nō p̄existere in mā sub esse distincto:
 sed sub esse cōfuso: videntur velle q̄ ipse in ea sub
 existētia in actu nō p̄existat: sed solum sub existētia
 in aptitudīne sumpta: in q̄ existētia indistincta ē ⁊ cō-
 fusa. Manifestū ē. n. q̄ mā naturalit̄ inclināt̄
 in esse habendum: ⁊ non nisi per formam. in sua

Questio

igitur inclinatio naturalis iam includit omne esse omnis forme
ma de ipso educibile et essentialiter per omnes forme que
sibi est ratio et principium extrinsecum. si enim sit aliqua forma
in cuius essentialiter non inclinatur: sicut ipsam in sua
naturaliter inclinatio non prohibet: sic etiam actu ipsa
informari non poterit. Materia igitur in sua inclinatio
natura naturali que est eius naturalis aptitudo
ad formam: prohibet necessario esse consequens forma
ma quolibet et sub illo esse essentialiter tota cuiuslibet
forme etiam prohibet necessario. Et quia materia non magis
de se inclinatur in unam quam in aliam: ideo in sua apti-
tudine naturali includit equaliter omnes formas et
sibi esse consequens eas. et sic non distincte habet hanc
vel illam: sed indistincte omnes et sub esse confuso.
Quia autem actu sua aptitudo perficitur forma aliqua. quia
de ratione actus est distinguere aptitudinem materie
ad formam ynam. Efficaciter tunc sic distincte sub una
forma que insimul cum ipsa secundum actum distinguen-
tem et determinantem eius naturalem inclinationem:
aliam habere non potest. Et quia unumquodque ad
id movetur naturaliter ad quod habet aptitudinem
naturalem. non autem movetur ad ipsum: nisi quando id
actu non habet. quia quia id actu habet: sub ipso na-
turaliter quiescit: sicut grave. quia aptum natum est
habere locum deorsum quando ipsum actu non ha-
bet naturaliter tendit deorsum. quando vero est actu
in loco deorsum: in ipso naturaliter quiescit. ideo
et materia cuius actu formam habet quia est apta
nata habere: non movetur ad ipsam sed in ipsa potius
naturaliter quiescit. cuius vero eam actu non habet pro-
pter aptitudinem naturalem quam de sua essentialiter ha-
bet ad ipsam: naturaliter siue secundum suam naturam ten-
dit in ipsam. Et quia unumquodque id quod de sua
habet aptitudinem naturalem: habet semper actu: nisi
aliquod impediens ipsum extra illius actualitatem de-
tineat: sicut grave est semper actu deorsum quantum
de se est et si propter aliquod impediens quandoque est
locum deorsum detineat. ideo et materia quantum ex
se est: semper est actu sub forma illa quam de sua apti-
tudine naturali habet. et si extra illam detineat quam
doque per aliquod impediens eam sub ipsa stare. Et quia in
detentis extra id quod de sua habet naturalis aptitudinem
per aliquod impediens: necesse est aliquid dare quod
prohibens remaneat si actu in id tendere debet. ideo
et si materia per aliquod impediens remota a forma sibi
debita: naturaliter actu in ipsa tendere debeat: necesse
dare oportet aliquid quod ab ipsa remoueat impediens
eam sub forma debita sibi stare. Impedit autem materia
ad presentiam agentis stare sub forma quam est apta nata
de sua natura habere ad agentis presentiam: propter dispo-
sitiones contrarias illi forme in ipsa materia existentes. has igitur dispo-
sitiones necesse est primo a materia remoueri. unum autem contrarium
a subiecto non remouetur nisi per inductionem alterius. ergo
si ille dispo-
sitiones contrarie fore inducere debent a materia remoueri: necesse est in ipsa introduci ab agente dispo-
sitiones illis contrarias: ipsa forma agentis cuius similitudo in materia
est impeditur contraries. Et sic quia iste dispo-
sitiones contraries agentis forma: magis ac magis in materia inducet: dispo-
sitiones contrarie

impediens magis ad agentem presentiam actu stare sub forma
simili fore agentis magis ac magis remouebunt et materia
velocius in similitudinem tendet agentis. et eorum motus naturalis
in fine fortior quam in principio propter id quod videtur impediens
semper est circa principium fortior quam circa finem. unde quare
impeditum esse deorsum per corpus in medio inter ipsum. et
locum deorsum consistens: quanto magis ad locum deorsum
appropinquat: tanto velocius movetur quia continue corpus
impediens minus efficaciter et minoris virtutis ad impediendum
habet autem toto remoto: statim quare in illo ubi efficaciter quod
a suo naturali consequente gnante. Sicut autem in his est: sic suo
modo est et in motu materiae ad formam. In principio etenim
dispo-
sitiones contrarias habet interiores et fortius impediens magis
stare sub presentia agentis similitudine: sed per continuam indu-
ctionem disponuntur contrarium formam agentis et remotio-
sionem debilitat disponuntur impediens videtur et materia fortius in
agentis presentia similitudinem tendit donec tandem toto impe-
diens remoto in ipso instanti remotio-
sionis presentia agentis similitudinem perfectissimam consequitur: quia similitudine adeptam
ipsa postea naturaliter descendit: utpote sui naturalis appetitus mo-
tu detato et completo adepto. Et quia perfectissima simi-
litudinis est que attenditur secundum subiectum et secundum formam subiectam. perfecti-
ssimam autem agentis similitudinem materia non consequitur nisi in
instanti in quo completur totum impediens remotio. ideo
materia solum in instanti ultimo remotio-
sionis dispo-
sitionis impedientis eam similitudinem agentis assequitur consequitur formam subiectam
le fore gnantis similem. sic ergo per secundum istam poem que
est etiam inter superiora recitatas: quomodo materia actu ante gnationem
natura dispositi formam non habet: sed solum in potentia et aptitu-
dine naturali. Sed etiam quia motus eius ad formam et ad seipsum
gnantem non est violentus sed naturalis cum sit secundum naturalem aptitudinem
ipsius et violentus sit etiam naturalis aptitudinem rei motus.
Sed etiam quia motus materiae ad naturalem formam est omnino diuersus
a motu ligni ad formas artificiales. nec enim lignum
naturaliter inclinatur in formam artificialem: et ideo etiam naturaliter non tendit in
ipsum. In materia etiam que ad formam artificialem movetur si efficaciter
virtute agentis aliquid qualitas actiua dispositiua ad for-
mam artificialem: ad contrarium receptio-
sionem in ipsa dici possit remoueri
ab ea qualitas fore que inducenda est repugnans: et ipsa materia
etiam ex contrarium velocius tendit ad similitudinem agentis presentia
panda: sicut contingit in motu naturali quo materia tendere debet
ad agentis sibi presentia perfectam similitudinem. Dis igitur ostenditur
deratis facile est ad argumenta facta in contrarium respondere
Ad primum itaque dicendum est quod forma non solum
dicitur de actu substantifico qui est perfectio propria
materie: sed etiam de quidditate specifica que ap-
pellari consuevit forma totius: que quidem forma
composita est ex actu substantifico et essentialiter materie
Et accipiendo quidem formam primo modo inchoatio
forme dicitur ipsa actus substantifici essentialiter manens
et inclusa ab ipsa creatione materie in aptitudinem
naturali ipsius. Accipiendo vero formam secundo mo-
do: inchoatio forme dicitur essentialiter ipsa materie. non
quidem actu: sed sua aptitudinem naturali essentialiter
actus substantifici coniuncta. Quod autem sic beatus
Augustinus forme inchoationem acceperit patet per hoc
quod in eodem libro dicitur: quod hec inchoatio velut
materies subiacere videtur artifici.

Ad secundū dicendū q̄ omnis res quicquid progressu naturali per tempa congrua p̄dit atq̄ explicat etiam ante contrinebat sed occulte. quia non cōtinebat in actu: sed in aptitudine naturali.

Ad tertiuū dicendū q̄ forma p̄ acc̄is p̄ducit: q̄a ad p̄ductōem d̄positi. q̄z cū agēs agat sibi sile oī mode cū est agēs d̄iuctū z ip̄m sit in sua subā cōpositū ex mā z fōra nō pōt sua silitudo in simplici forme eētia refuari. z iō nō p̄ducit eētia simplicis forme ad esse sed specificā q̄dditatē d̄positi sub fōra d̄ria nō actu p̄eritē: s̄z aptitudine nāli p̄ducit ad actū ex̄ndi. h̄ aut̄ totū de nō eē ad esse p̄ductū p̄z q̄ de nō ente simplr nō p̄ducit: s̄z de nō ente actu ente aut̄ in potētia. q̄z ip̄m totū ante de ductōez ad actū sub forma d̄ria potētiāl̄ p̄eristebat: z si n̄ actualr vt p̄dictū est. iō totū nō p̄ducit p̄ creatōez q̄ oīo nihil p̄supponit: s̄z p̄ gn̄tiōem q̄ p̄supponit ens in potētia. forma aut̄ q̄ est act̄ sub st̄atific̄ p̄ducit ad p̄ductōez cōpositi: z ideo nō p̄ acc̄is cāf ad creatōez alteri. Cū aut̄ d̄positū p̄ducit p̄ viā gn̄tiōis nō ad creatōez s̄z ad gn̄tiōez cōpositi tūc p̄ducit fōra: z iō tūc gn̄t̄ p̄ acc̄is: z nō creat̄. Ad q̄rtū dicendū q̄ forme p̄oz p̄ductorū ad eē fuerūt a deo insil̄ cū mā z d̄positis create: q̄ bus p̄ductis cōcreata etiā fuit z virt̄ p̄ducēdi sibi filia que p̄ opa adm̄stratōis a deo mediātib̄ secūdis agētib̄ tanq̄ suis instr̄is p̄grediūf ad eē: z iō aīa ip̄i creature merito appellāt̄. Ad q̄ntū dicendū q̄ in motu nāli ad formā: mā q̄ ad formā mouet̄ d̄fert ad motū p̄ aptitudinē nālē ex q̄ nāl̄ cōpetit sibi talis mot̄. q̄b̄ de his q̄ violenter moueri dicūt̄ dici nō pōt vt. s̄. dictūz ē. Ad. vi. dicendū q̄ in mā stante sub fōra sanguis est inclinatio magis d̄f̄minata ad formā carnis q̄z lapidis. q̄z in ip̄a inchoata est iā ad aliq̄lē ḡdū: vt p̄p̄te ḡdū p̄fecto p̄p̄inquū d̄ducta dispō ad formā carnis: nō aut̄ in ip̄a sic est inchoata dispō ad formā lapidis. Ad. vii. dicendū q̄ z si mā in sua potētia z nāli capacitate: aīaz̄ it̄lectiūā aliquo mō includat: nō t̄n̄ eā totalr̄ intra suā nālē capacitatē d̄cludit cū t̄n̄ intra ip̄az̄ formas alias nāles cōcludat. z iccirco merito alie oēs p̄ter it̄lectiūā aīa mā de ip̄a dicūt̄ educi. Ad. viii. dicendū q̄ mā stans sub forma vna: magis in vnā inclināt̄ q̄z in alias p̄p̄ dispōem ichoatē z d̄ducētē ad altioez gradū dispōis ad formā vnā q̄z ad aliā: vt p̄d̄z ē.

Ad. ix. dicendū q̄ dispō q̄ est in mā stante sub aīa aīati p̄fecti est dispō iā d̄pleta z virtute nālis gn̄antis ad gradū vltimūz d̄ducta. z iō iā ē i suo termino nāli. Contingit aut̄ vt dictū est in materia stante sub forma alicui inaiati esse dispōnem nō quidē vltimatā sed inchoatā: z p̄ cōns in vlt̄riorē dispōis gradū materiā ordinantē. quia im̄p̄fectū ad sui p̄fectōem nālē naturaliter inclināt̄.

Ad. x. dicendū q̄ cū transmutatio de sua rōne includat carentiā ei ad quod tendit. q̄z nihil mouet̄ ad id quod iāz̄ habet sed solū ad id quod nō habet: nō est mirū si p̄uatio que dicit̄ p̄auaz̄ ca-

rentiaz act̄ cū aptitudine tamen naturali ad ip̄m pōt esse ip̄i naturalis transmutationis p̄ncipiū.

Ad. xi. dicendū q̄ species vel forma p̄ quaz̄ ponit̄ materia in actu naturali que est p̄fecte et vere species: dicit̄ magis natura eē q̄z materia. vt patet p̄ rōnes Ar̄. ibidē: z nō spēs dicta de p̄uatōe que sicut dicit̄ carētiā h̄it̄ z t̄n̄ quodā mō h̄it̄ dicit̄ vt h̄r̄ q̄nto metha. sic etiā z dicēs carētiāz̄ spēs dicit̄ quodā mō spēs z q̄dā acc̄is māe. Ad. xii. dicendū q̄ p̄uatio in artificialib̄ dicit̄ carētiāz̄ forme absq̄z pōne nālis iclinatōis ad ip̄az̄: cū vt. s̄. dictū ē: res nālis nō iclinef̄ tāq̄z in suā nālē p̄f̄cōez i formā artificialē: s̄z p̄uatio i nālib̄ vt plies dictū est: sic ponit̄ i mā carētiā fōre q̄ ip̄a relinq̄t aptitudinē nālē ad eā. z h̄ sufficē vt̄ ad d̄riaz̄ vtriusq̄ p̄uatiōis. Ad. xiii. dicendū q̄ forme subāles z si sint p̄ncipia q̄litarū actiuaz̄ z passiuaz̄: sunt t̄n̄ indiuisibilis eētie: iō in mā in q̄ nō sunt actu fm̄ se totas eē etiā actu nō p̄nt̄ s̄z aliq̄d sue eētie. Ad. xiiii. dicendū q̄ vlr̄ de oīb̄ subst̄atijs trāsmutabilib̄ nāl̄ loq̄ndo sic eē vt̄ q̄ ip̄a fōra subālis nō est imediatū trāsmutatōis p̄ncipiū: s̄z pot̄ h̄ ē ip̄a q̄litas actiua a fōra subāli rei nālis p̄ueniēs. h̄ aut̄ actiua q̄litas cū vt̄tute agētis nālis d̄rigētis passiuū efficit̄ in passiuo formalr̄ ip̄m ab agētis d̄f̄f̄m̄le ad silitudinē nālē trāsmutat̄: inq̄tū p̄ ip̄ius inductōez vt. s̄. dictū est remouet̄ impediēs passiuū tēdere in agētis sibi p̄nt̄is silitudinē. vñ z q̄to magis ad ip̄i inductōem de dispōe motū ad illā silitudinē ipediēte remouet̄: tāto vt. s̄. dictūz est: passiuū veloci tēdit ad eā. z q̄n̄ iā tota ipedimēti remotio p̄ficiat̄ assequit̄ statū vt̄ p̄dictū est ipsuz̄ passiuū d̄pletā agētis silitudinē: q̄ est silitudo in specificā q̄dditate: cū agēs fuerit vniuocū. p̄ hāc ḡ q̄litate actiua q̄ filis est q̄litati agētis: ip̄m passiuū formalr̄ tendit in silitudinē gn̄antis: effectiue nō tēdit in ip̄am p̄ agēs extrinsecū q̄b̄ illā in ip̄o efficit̄ q̄litate. z talis virt̄ actiua vel q̄litas que ē imediatū formale p̄ncipiū talis mot̄: cū ip̄o nāli motu p̄ se z nō p̄ acc̄is d̄iugit̄ in passiuo nāli. q̄b̄ de artificialib̄ dici nō pōt. Et sic p̄z̄ r̄f̄sio ad. xiiij. z ad alia q̄ttuoz̄ argumēta seq̄ntia. Ad. xix. dicendū q̄ forme nāles de māe potētia educūt̄ z in ip̄a potētia p̄fuerūt aī gn̄tiōez. Ad. xx. dicendū q̄ forma subālis nālis p̄ corruptōem nō cedit in pure nihil: s̄z cedit i ens i potētia: q̄z redit i potētiā māe. Ad. xxi. dicendū q̄ ip̄a eētia aīe est radix potētiāz̄: z iō in ea remanēt sicut in radice. et si quis q̄dē dicere velit q̄ eētia māe sit radix formaz̄ poterit dicē post corruptōez eas radicaliter in mā remanē: nec iō t̄n̄ h̄bit̄ q̄ aliq̄d de eētia forme actu in mā remaneat: cū ip̄a mā nihil sit talis eētie. veyz̄ est aut̄ q̄ silitudo oīo nō valz̄. quia eētia aīe est p̄ncipiū potētiāz̄: sed essentia māe non sic est p̄ncipiū formaz̄: z forma est perfectio materie: non autem potētia essentie zc̄.

Questio sexta e

9

Utrum forma subalis immediate coniungat prime matie. Et videtur quod non. Actus. n. actiuorum ut habetur in secundo de anima: sunt in patiente et dis-

posito. forma autem subalis est actus ab aliquo actiuo posita in materia que rationem et locum patientis tenet. igitur forma subalis non potest esse in materia nisi disposita: et sic videtur quod materia vniuersaliter mediate dispo- nitur. In his autem sim- bolis ut in de generatione dicitur facilius est transitus. cum per symbolicas qualitates fiat transitus ab una forma in aliam facilius: videtur quod per symbolica qualitate forma subalis materia vniuersaliter. Actus quilibet ei vniuersaliter cuius est actus: sed quedam forma subalis ut anima est actus corporis physici organici: ut dicitur in secundo de anima. anima corpori physico organico vniuersaliter: sed corpus physicum organicum non est materia prima: cum sit compositum ex materia et forma. igitur ad minimum forma subalis que est anima: non immediate coniungit materiam prime. Una forma non potest vniuersaliter nisi materia stanti sub preiudicio alteri: sed cuius preiudicio non sit pura potentia: quia tunc non differret a materia nec sit pure nihil: quia tunc non esset principium entium naturalium: relinquitur quod sit quedam actus: et sic per omnia nulla forma vniuersaliter nisi materia stanti sub quodam actu imper- fecto. Quod sunt realiter diuersa non videtur posse sine aliquo medio coniungi: sed forma subalis et materia sunt realiter diuersa. forma non potest coniungi materie sine his que ipsam in materia necessario preiudicant: sed dis- positiones ad formam necessario preiudicant formam in materia. forma necessaria vniuersaliter matie mediantibus dispositibus. Si dicitur quod dispositiones preiudicant formam in via generationis: non autem in via eendi. Contra. Licet fieri terminetur ad eam: de necessitate illa sunt prius que post fuerunt: et per omnia que prius habent fieri in materia prius etiam existunt in ipsa. si ergo prius in materia dispositiones inducunt que forma: oportet necesse quod in ipsa etiam prius existant. Si dicas quod in ipsa prius existunt sub gradu imperfecto: sed sub gradu perfecto contra formam. et ideo non sunt medium vniuersaliter fore ad materiam.

Contra. cum dispositiones ad formam non auferantur a materia per aduentum forme si aliquo modo sunt in materia ante formam: necesse est dicere quod ad minimum eo modo quo a forma in materia presupponitur ipsis mediantibus forma materia coniungat.

Secundum. In de suba orbis: dimensiones interminate sunt in materia ante omnem formam: nec abiciuntur per aduentum forme sed solum terminantur. igitur ad minimum mediantibus dimensionibus interminatis forma subalis coniungit materiam. Si dicitur quod opinio contra. non est vera sed potest forma subalis ante omnem dimensionem recipere in materia.

Contra cum essentia matie sit indiuisibilis de se: si forma subalis recipit ante dimensionem in materia: recipit necesse in ipsa forma quod indiuisibilis: et per omnia eam totam replebit: nec aliquid de materia actu inueniri potest extra formam vniuersaliter sub alia forma: sed hoc est falsum: quia similitudo materia sub diuersis formis diuisa inuenitur. quod quilibet talium formarum presupponit dimensiones interminatas.

Quod est omnibus conueniens non sequitur per se forma alicuius: sed dimensio interminata est omnibus generabilibus conueniens. quod

per se. quia nulli appropinquat dimensio nisi sub certa terminatione. Constat autem quod ipsa de se non est nata stare plene sub vna terminatione quam sub alia. igitur ipsa de se non magis appropinquari potest vni quam alteri. et cum omnibus conueniat dimensiones habere: sequitur quod si ablata terminatione ipsa dimensio omnibus sit conueniens. sola ergo terminatio dimensio non sequitur formas proprias singulorum. ipsa vero dimensio omnibus presupponitur in materia. igitur omnes forme subales mediate dimensionem interminata materie coniunguntur.

Secundum. Materia nunquam expoliat respectu ad formam. quia etiam antequam forma habeat respicit formam ipsam et etiam cum actu ipsa perficitur: nec vniuersaliter forma potest coniungi nisi materia actu ipsam respiciendi: necesse igitur forma quilibet tali respectu vniuersaliter matie: sed talis respectus est accidentialis. igitur quilibet forma materie vniuersaliter mediate aliquo accidente.

Secundum. quod non potest esse immediate actus alicuius agentis subiectum non potest etiam esse immediatum subiectum actus ex actone illa surgentis: sed materia prima non potest esse immediatum alicuius actus subiectum. quia pura potentia non potest esse passiois subiectum: et per omnia nec actonis. Quare nec subiectum esse potest actus ex actone surgentis agentis alicuius: sed forma cuiuslibet rei generabilis in materia conueniens surgit ex actone generantis. ergo materia prima nulli forme generabilis esse potest subiectum immediatum. In contrarium est quod ex materia et forma fit essentialiter vniuersaliter: sed ex his que per aliquod medium necesse coniunguntur nunquam fit essentialiter vniuersaliter. igitur materia et forma subalis non vniuersaliter sibi per aliquod medium. Ratio. ad hanc questionem simpliciter dicendum est quod omnis forma subalis immediate coniungit prime matie. quod potest ad prius via triplici demerari. Et prima quod de sumitur ex eo quod forma et materia sunt essentialia principia rerum naturalium. Ad cuius intelligentiam considerandum est quod ea proprie dicuntur esse essentialia principia alicuius que essentialiter ei ingrediuntur. essentialiter autem compositi ingrediuntur omnia que spectant ad primariam constitutionem ipsi. Et quia tamen materia que forma spectat ad primariam constitutionem rei naturalis. igitur utraque sunt essentialia principia talis rei. si autem inter materiam et formam necesse incidit aliquid medium: ita videtur quod sibi inuicem opponi non possunt: nec villo modo ad constitutionem materialis rei concurrere nisi illud incidat medium inter ipsa: erit necesse et ipsum spectans ad essentialiter compositum et constitutionem primariam rei predictae: et erit per omnia essentialiter ipsi principium. Quod autem hoc stare non possit statim primo aspectu apparet: cum secundum philosophum in primo physicorum: principia per se repleantur que sunt principia eorum essentialiter constituentia et ingredientia compositum eorum non sint nisi tria duo: videlicet materia et forma: tertium vero sicut preiudicio non est principium per se: nec est re essentialiter constituentis. Sed et magis ingredientibus apparet hoc stare non posse si consideret qualis esse possit essentia illi medium. necesse est enim quod aut sit essentia composita ex materia et forma: aut essentia materie tantum: aut essentia forme vel actus subalis: aut essentia forme vel actus accidentalis. non potest autem esse essentia actus accidentalis. quia illud medium ut est omnibus: necesse est venire ad primariam constitutionem materialis subiecti et esse principium essentialiter ipsi. accidentis autem esse non potest de constituentibus subiectum. quia ex non substantiis non fit substantia. Et hoc omnibus accidentis nec ordine presupponit subiectum suum

Subiectū autē accētis actus habētis realitatē aliā
quā vltra realitatē sui subiecti. q̄a de tali accidēte
loq̄mur nō pōt eē sola mā. q̄z pura potētia nō po
test eē immediatū talis accētis subiectū. Non
pōt etiā eē sola mālis forma que nō est p se exiēs
quia subiectū talis accētis eē d̄z quid p se potens
existere. relinquit ergo q̄ ei subiectū sit quid cō
positū ex mā z forma. p̄supponit igit̄ nccō tale ac
cidēs ante se ens ex mā z forma cōpositū. Quod
autē tale cōpositū p̄supponit: nccō etiā p̄supponē
d̄z coniūctiōez forme z māe. z q̄d hāc iūctiōem
nāe ordine p̄supponit: eē nō pōt mediū iūctiōis
eorū. Concludit ergo de nccitate q̄ eētia rei q̄ ē
mediū iūctiōis forme ad mā: nullo modo esse
possit eētia forme accētalis. nō pōt etiā essentia
talis eē quid cōpositū ex mā z forma. quia tūc ad
eētia vni rei mālis occurrēt due māe z due for
me. q̄z mā z forma cōstitutā eētia mediū: z mā
z forma que p illud mediū iūgi ponit. Cū enī
hoc sit oīo absurdū: absurdū est etiā inter eētia
māe z eētia forme subālis interciderē mediū rē
cōpositā ex mā z forma. Nō pōt etiā poni q̄ eē
tia talis mediū sit eētia māe. q̄z tūc etiā ad vni
rei cōstōem due eētie materierū cōcurrēt. quod
s̄l̄r est absurdū. Nō pōt etiā esse eētia dicti me
diū eētia forme subālis. quia essentia huius forme
adiūcta eētie māe facit de se subāz cōpletā. Si ḡ
mediū cadēs inter formā subālē z p̄mā māe sit
forma subālis adiūctū māe: faciet sine forā sequē
te cōpletā subām. z forma etiā subālis nāe ordine
h̄ mediū ante se in nā p̄supponēs: nccō p̄suppo
nit subām cōpletā: sed oē q̄d nāe ordine cōpletam
subām p̄supponit est accētis. Si igit̄ impossibile ē
q̄ forma subālis sit accētis: impossibile est p̄ cōis q̄
aliq̄ forā subālis an se aliquā formā subālē i mā
p̄supponat: z p̄ cōis ē etiā impossibile q̄ int̄ formāz
subālē z p̄mā māz aliq̄d int̄cidat mediū cui eē
tia sit essentia subālis forē. Si ḡ int̄ māz z formā
subālē nō pōt cadere mediū q̄d ex mā z forā cō
positū: nec aliq̄ altera mā: nec eētia subālis forē
nec res q̄ sit act̄ accētis: relinquit̄ q̄ inter ipa nulla
res int̄cidat: z q̄ oīs forā subālis imediate sit in
eētia p̄me māe. Et sic p̄ma via ostēdēdi p̄positūz
cōpleta ē sumpta ex eo q̄ solū mā z forā sint essen
tialia p̄ncipia māliū subārū. Secūda vō via ad
ostēdēdū idē sumi pōt ex cōpatiōe potētie ad actū.
Ad cuius intelligētia cōsiderādū ē q̄ potētia h̄ipm
q̄d ē ad actū d̄r. h̄ aut̄ ipm q̄d ē potētia: ē ipa q̄d
ditatiua z eētialis rō potētie. igit̄ potētia eētia
lit̄ d̄r ad actū. Si igit̄ inuenire possum̄ aliq̄ duo:
quoz vni h̄ipm q̄d ē in sua eētia sit potentia et
reliquū: h̄ipm q̄d ē in sua eētia sit act̄ p̄ illius
potētie: h̄ duo p̄ h̄ipm q̄d sunt in sua eētia: erūt
ad iūicē ordinata: ita vīz q̄ int̄ ipa nihil oīo pōt
cadē mediū. sunt autē talia mā p̄ma z forā subālis
Subālis etei forā h̄ipm q̄d ē in sua eētia ē sub
stātif. c̄ act̄. actui autē substātifico nō pōt cōr̄ndē
tanq̄ potētia p̄pa potētia accētalis p̄p̄ id q̄ act̄

z potētia esse debēt in eodē genere. z act̄ quidez
substātific̄ est in genere subē: potētia vō accētalis
ē in genere accētis solū. Solū igit̄ potētia substā
tifica cōr̄ndet tanq̄ potētia p̄pa actui substātif
co: s̄z potētia substātifica ē ipa eētia p̄me māe. ḡ
eētia māe p̄me est p̄pa potentia act̄ substātifici
seu subālis forē: s̄z q̄libz act̄ in p̄pa potētia recipit̄
ḡ z q̄libz subālis forā recipit̄ tanq̄ i p̄po susceptiuo
in eētia māe p̄me: z nō in cōposito ex mā z forā.
q̄d etiā meli⁹ cōsiderātib⁹ h̄ euident̄ innotescit. sic
ei act̄ substātific̄ est eētialr actus: sic etiā poten
tia substātifica q̄ est p̄pa potētia ipi⁹ ē eētialiter
potētia. Nullū autē cōpositū ex mā z forā ē eētia
liter potētia: cū iā sit ex actu z potētia cōstitutūz. ḡ
nec ex mā z forā cōpositū eē pōt substātifica potē
tia. Si ḡ oīs act̄ substātific̄ in eo recipit̄ q̄ ē potē
tia substātifica: cōcludit̄ de nccitate q̄ nulla subāl
forā recipi possit in cōposito ex mā z forā: s̄z solū
in p̄ma mā q̄ est eētialr potētia. Et p̄. substātif
ca potētia idē est q̄ subā potētia: s̄z act̄ substānti
fic̄ ad id d̄r solū q̄d est subā potētia. nihil autē cō
positū ex mā z forā pōt eē subā potētia. Aut. n. ē
cōpositū ex mā z forā subāli: aut ex mā z forā ac
cidētali. Et q̄dē si cōpositū sit ex mā z forā accēta
li cū forā accētalis an se p̄supponat formā subālē
erit etiā oīo cōpositū ex mā z forā subāli. Dē autē
cōpositū ex mā z forma subāli est cōpositū ex subā
potētia z subā actu. q̄z mā ē subā potētia: z subāl
forā est subā actu: s̄z nihil cōpositū ex subā poten
tia z subā actu ē subā potētia. ḡ nil cōpositū ex
mā z forā esse pōt subā potētia. sic ḡ oīs act̄ sub
stātific̄ vel subā forā recipit̄ in potētia substātif
ca: z h̄ est subā potētia q̄ nō pōt eē q̄d cōpositū ex
mā z forā: s̄z nccō est ipa simplr eētia p̄me māe
cōcludit̄ de nccitate q̄ oīs forā subālis tanq̄ in p̄
prio susceptiuo: recipit̄ imediate in eētia p̄me
māe. Et sic cōpleta ē secūda via declandī p̄positūz
sumpta ex cōpatiōe potētie ad actū. Tertia via
autē ad idē ostēdēdū sumit̄ ex ordine actūū ex̄ndi
Ad cui⁹ intelligētia cōsiderādū ē q̄ in tota vniuer
sitate rerū fm q̄ etiā dixim⁹ in p̄cedētib⁹ q̄oibus
nō inuenit̄ nisi duplex act̄ ex̄ndi. quia act̄ ex̄ndi
simplr: z act̄ ex̄ndi fm q̄d. Et act̄ q̄dē ex̄ndi sim
plr est solū subē q̄ est ens simplr. act̄ vō ex̄ndi s̄z
quid ē solū accētis: q̄d est fm q̄d ens. Et que ad
modū q̄dē accētis nccō ordine nāe p̄supponit sub
stātia: z nō ecōuerso: sic etiā de nccitate z esse fm
q̄d ordine nāe p̄supponit eē simplr z n̄ ecōuerso
Que admodū autē inuenit̄ duplex act̄ q̄dditatus
q̄ est rō eēndi. vñ quidē q̄ est rō ex̄ndi fm q̄d: q̄
ē forā accētalis. z ali⁹ qui est rō ex̄ndi simplr: qu
est forā subālis. si ergo subālis forma vltra eētia
p̄me māe q̄ est pura potētia p̄suppōit actū aliq̄
in suo susceptiuo: aut p̄supponit illū actū q̄ est for
ma accētalis: aut illū qui est forā subālis. Et q̄dē
si forā subālis in mā p̄supponit formā accētales:
cū ad accētales formā imediate fm ordinē nāe
seq̄t̄ eē fm q̄d: ad subālē vō cōsequat̄ esse simplr

Questio

de necessitate oportebit quod esse simpliciter ordine nature ante se presupponat esse secundum quid. hoc autem cum sit impossibile: concluditur impossibile esse quod forma substantialis ante se in materia presupponat aliquam formam accidentalem non potest etiam in ipsa presupponere formam substantialem. quicquid etenim in suo susceptivo presupponit ante se formam substantialem: presupponit etiam necessario in ipso et existere simpliciter quod de necessitate illam formam consequitur: sed nullus actus qui in suo subiecto presupponit ante se esse simpliciter esse potest suo susceptivo ratione extendi simpliciter: sed solum secundum quod: et omnis talis actus est actus accidentalis. si ergo nulla forma substantialis esse potest accidentaliter actus nec per se in suo susceptivo presupponere existere simpliciter: concluditur de necessitate quod nulla forma substantialis presupponere potest in suo susceptivo aliquam formam substantialem. sed si nec actum substantialem: nec actum accidentalem potest substantialis forma in proprio susceptivo presupponere ut ostensum est: relinquatur de necessitate dicendum quod proprium cuiusque substantialis forme susceptivum sit pura potentia subiectiva: sed hoc est ipsa essentia materiae prime. quod necesse est quod omnis forma substantialis immediate in materia prima suscipiatur. Completa est igitur tertia via declinandi propositum: sumpta ex ordine actuum extendi. Apparet autem evidenter ex predictis quod irrationabilis est opinio dicentium quod aliqua forma substantialis non recipitur immediate in materia prima: sed in opposito ex materia et forma subiectiva. Ad primum ergo dicendum est quod actus actiuorum ad formas subiectivas referendo: non dicitur esse in patiente dispositio. quia compositus ex materia patientis et qualitate dispositiva sit ipsorum susceptivus: ut videlicet talis qualitas in unione potentie et actus sit medium inter essentiam utriusque. sed dicitur solum esse in patiente dispositio. quia in patiente esse non potest sine dispositio ipsius convenientibus. per hoc autem non habet quod dispositio sit media inter materiam et formam: sed potius quod forma sit media inter dispositionem et materiam. Ad secundum dicendum quod in huiusmodi symbolis facilior est transitus propter id quod qualitas symbolica in gradu uno consequens formam unam nata est in gradu alio illi proprio consequi formam aliam. ad istum quidem gradum qualitatibus symbolice non est possibile transire: nisi ordine nature prius sit in materia forma: quod nature qualitas consequitur in hoc gradu. unde non est forma in materia per hunc qualitatis gradum: sed potest e converso. Ad tertium dicendum quod actus ei unius cuius est actus tanquam formabilis: et non ei cuius est actus tanquam ipso formati seu perfecti: sicut lux suscipitur in diaphano cuius est actus: tanquam ei quod est luce perfectibile. non autem suscipitur in lucido cuius est actus: tanquam quod est luce perfectum. et aliam quidem est actus corporis organici: tanquam ei quod est ipsa formatum. et ideo in ipso non suscipitur sed in prima materia cuius est actus tanquam ei quod est anima formabile. Ad quartum dicendum quod privatio non est principium per se entium naturalium: sed per accidens. ut habet in primo philosophorum. et in materia non ponitur nisi forma cui annexa est negatio alterius forme. De alia autem forma nihil actu in ipsa ponitur sed aptitudinem solum: et sic formam in materia materiae stanti sub privatione forme alterius est una forma uniri materiae carenti actu sibi opposito. Ad quintum dicendum quod ea que sic di-

versa sunt quod unum non ordinatur ad aliud sicut potentia ad actum: uniri possunt per aliquod medium. materia autem prima et forma substantialis opposito modo se habent. quia prima materia ad formam ordinatur substantialiter: sicut propria potentia ad actum proprium. et ideo ununtur sine medio.

Ad sextum et ad septimum dicendum quod dispositiones ad formam sunt in materia sub gradu imperfecto antequam in ea sit forma: sed in gradu perfecto in materia fieri et esse non possunt: nisi prius natura rei fiat et sit forma ad quam dispositiones illae disponunt. Ad octavum dicendum quod argumentum illud ex falsa imaginatione procedit. imaginatur etenim illo modo arguentes quod forma prius manet ex materia post materiae dispositionem ipsi materiae disposite applicet et supra dispositiones existentes in materia recipiat. quod totum est falsum. Debemus ergo imaginari quod forma de potentia materiae educitur ad productionem substantie dispositae que illis dispositionibus subicitur sicut proprius subiectum earum. ut sic. quemadmodum forma substantialis que abicitur ad inductionem alterius prius erat sub illis dispositionibus imperfectis manens immediate in essentia materiae prime: sic etiam et forma substantialis sequens de potentia materiae producta productione compositi fiat immediate in essentia materie manens sub dispositionibus iam perfectis. et sic dicendo apparet quod forma substantialis immediate est in essentia materiae prime et non mediante dispositione: cum dispositio non sit in materia sub forma: sed e contrario forma sub dispositione in ea existat. non enim materia sed formatum est talium dispositionum subiectum.

Ad nonum dicendum quod dimensio interminata potest accipi dupliciter. Uno quidem modo ut idem sit dimensio interminata quod potentia dimensio. Alio vero modo ut sit idem quod actu dimensio non includens aliquam signatam terminationem. utroque enim istorum modorum accipitur dimensio dicitur a dimensione terminata. nam terminata dimensio est actu dimensio et certa terminatione includit. Et quocumque quidem istorum modorum accipitur dimensio: semper invenitur quod formam substantialem naturaliter presupponit in materia sed diversimode. Nam dimensio terminata in materia presupponit determinatam formam substantialem indeterminate sumptam: cum potentia dimensio presupponat in ea potentia formam substantialem. Quod autem naturalis terminatio dimensionis in materia presupponat determinatam formam substantialem ab omnibus est confessum. Quod autem dimensio presupponat etiam actu formam evidenter apparet. Constat autem quod actu dimensio in substantia intellecta facit intelligi substantiam actu dimensionatam. Si ergo actu dimensio per intellectum generis forme substantiali in materia: precipue tunc omnibus formis substantialibus a materia per intellectum remanebit materia intellecta actu dimensionata: et erit ipsa proprius subiectum dimensionis in actu. Compositum vero ex materia et forma erit immediatum subiectum: non quidem dimensionis sed solum terminationis. quod est impossibile: cum accidentis in actu subiectum proprium sit substantia in actu et non in potentia: et materia prima sit ens solum in potentia. ens vero in actu sit ens ex materia et forma compositum. Necessarium est ergo quod actu dimensio presupponat ens actu per formam substantialem. vix quod hac formam substantialem sequitur actu dimensio sub huius terminationis

gradu: et illam sequitur actu dimensio sub hoc fini-
 nationis gradu. et sic de singulis actu autem dimensio
 sic simpliciter sumpta non includit aliquam diminutionis
 gradum. ideo non includit etiam actu hanc formam
 specialem vel actu illam: sed includit actu formam
 subalem sic simpliciter et indeterminatam sumptam. una enim
 et eadem actu dimensio modo sub isto gradu determi-
 nato sumpta sequens formam istam: postea deducta
 ad alium terminatōis gradum sequitur formam aliam. et
 sic semper actu dimensio in materia presupponit potentiam
 formam subalem. non enim ob aliud in materia est potentia ad
 dimensionem in actu nisi quia in ipsa est potentia ad for-
 mam subalem in actu quam nata est sequi actu dimen-
 sio. sic igitur forma subalis est simpliciter in materia ante omnem
 dimensionem. verbum autem dicitur sic intelligendum est ut di-
 mensio indeterminata dicatur in materia precedere omnes formas
 subales determinatas sicut hanc formam vel illam. quia etiam
 in materia prius intelligitur forma subalis quam hanc determinatam
 forma. prius dico formam quia intellectus indeterminatus est
 prior intellectu determinato. unde etiam quia dimensio cose
 quia forma subalem qualis habet unamquamque non sequitur
 dicitur terminata. ideo quia una forma a materia remouetur
 et inducitur alia dimensio quam prius fuerat in materia: non abiicitur
 sed manet: aliter tamen terminata quam prius fuerat. nec ideo tamen se-
 quitur quia forma subalis materiae uniat mediante dimensionem
 quam potest forma quam sub dimensionem prius solum potentiam
 fuerat in materia: postea in ipsa ad abiectōem alterius
 sub dimensionibus actu efficiuntur. hoc autem necessarium est. quia cum
 actu dimensio ante se presupponat actu formam subalem
 in materia. Cum ante ipsam in materia actu forma alia existens
 inde remouetur: necessarium est quod ibidem alia forma subalis
 in actu ponatur. quia aliter actu dimensio sine actu subali
 forma maneret in materia. quod est impossibile: ut. s. ostē-
 sum est. Ad. x. dicendum est quod si eentia materiae de se
 indivisibilis sit: est tamen diuisa sub quibus forma per dime-
 sionem terminatam formas singulas dicitur. et quibus quidem
 determinata forma subalis in materia presupponit diuisi-
 bilitatem et dimensionem simpliciter sumptam: et etiam formas
 subales indeterminatas sumptam sicut: quia forma subalis
 determinata postea ad hanc formam subalem vel illam
 efficiuntur etiam et dimensio actu determinata hac dimen-
 sione terminata vel illa: et materia etiam prius diuisa in po-
 tentiam: actu deinde formam hanc: efficiuntur actu diuisa.

Ad. xi. dicendum quod dimensio interminata est omnibus
 cois: nec sequitur hanc formam vel illam: sed formam
 subalem indeterminatam sumptam. hoc autem dimensio termi-
 nata est propria huius rei et eius propria forma sequitur: nec
 deduci hoc dimensio in actu potest ad determinationem
 propriae rei alterius: nisi sub ipsa fiat actu in materia illius rei
 forma subalis propria. Ad. xij. dicendum quod respectus ad
 formam nullam addit realitatem supra eentiam materiae. et
 ideo non tollit immediationem unius. Ad. xij. dicendum quod
 eentia materiae non potest esse immediatum subiectum actio-
 nis sed realiter idem cum motu: est tamen immediatum subiectum
 actiois et passiois quae sunt realiter idem cum mutatioe. per
 hanc autem forma subalem actu potest in materia et non per motum.

Questio septima:

Questio septima

9

Utrum actio et passio realiter tamen in se
 se quae etiam a motu differant. Et videtur
 quod sic. primo quidem. quia decem predicameta
 sunt decem generum rerum: scilicet actio

et passio sunt de decem predicamentis. sunt duo quaedam
 genera rerum: sed talia genera rerum sunt immixta: ita videtur quod
 aliquid unum et idem non potest cadere in coordinatōe
 duorum. generum res que cadit in coordinatōe actiois: non
 potest cadere in coordinatōe passiois: et per omnes actio
 et passio inter se realiter differunt: et sic realiter differunt
 a motu: cum motus non sit due res sed una tamen. Si dicitur
 quod unum et idem secundum rem cadere potest in predicamento actio-
 nis et passiois: non tamen secundum eandem rationem. Contra. aut
 actio et passio sunt diuersa predicamenta secundum res: aut
 secundum rationem. si secundum rationem solum. generum actio et passio sunt unum
 generum secundum rem et non duo: et per omnes secundum rem non erunt decem
 predicamenta: nec decem prima genera rerum. quod est omnino falsum.
 igitur actio et passio secundum rem sunt diuersa predica-
 menta. Sub predicamentis autem secundum rem dicitur non potest
 cadere eadem res etiam secundum diuersas rationes: ita tamen quod
 utrobique secundum suum esse ponatur. generum omnino alia res est illa quae
 secundum illud quod est dicitur actio: et res quae secundum id quod est dicitur
 passio. Multo magis conueniunt ea que specie dif-
 ferunt et non genere: quae etiam genere sunt diuersa: sed
 calefactio et frigidatio dicitur specie sed non genere.
 actio autem et passio genere dicitur. generum magis debet con-
 uenire frigidatio et calefactio quam actio et passio: sed
 illa quae dicitur conueniant: re tamen dicitur. generum multo magis
 actio et passio debet realiter differre. Si dicitur diffini-
 tiones sunt diuersae: et diffinitionum signa igitur esse diuersa:
 sed significatum diffinitionis est ipsa eentia diffini-
 ti. generum si diffinitiones sunt diuersae: et eentias diffinito-
 rum esse diuersas: sed eentia quaelibet est aliquid rei: et per
 omnes que dicitur eentia realiter dicitur realiter. sunt autem dicitur
 diffinitiones actiois et passiois. generum actio et passio eentia-
 tialiter: et per omnes realiter differunt. Si. voces sunt
 signa passionum anime: et passiones anime sunt similitudines
 rerum. ergo diuersae denominationes diuersas anime conce-
 ptiones ostendunt et diuersae anime conceptiones diuersas
 res: et sic a primo ad ultimum diuersae denominationes
 reales res diuersas denotant: sed reales denota-
 tiones actiois et passiois sunt dicitur. generum actio et passio
 realiter dicitur. Si. actio dicitur respectu agentis: et
 passio dicitur respectu patientis: sed agens et patientis
 realiter dicitur. generum actio et passio realiter dicitur. Si. diuer-
 sarum rerum perfectiones proprie debet esse realiter diuersae. agens
 autem et patientis realiter dicitur: et actio est perfectio propria agentis
 et passio actus et perfectio propria patientis. generum actio et passio
 debet realiter differre. Si. si actio et passio sunt idem
 realiter quod motus: tunc quod conueniet actioi et passioi:
 conueniet etiam motui. sed actioi et passioi conuenit quod sunt
 predicamenta. ergo motus erit predicamentum. hoc autem est
 falsum. ergo falsum est quod actio et passio sunt idem
 realiter quod motus. Si. que idem sunt in re videtur
 posse de se inuicem predicari: cum idem de eodem predicari
 contigat: si actio non potest predicari de passione nec

Questio

ecōuerso. ergo non sunt realiter idē. Preterea aut actio et passio dicūt aliquid vltra motū: aut nihil. si nihil: tūc actio et passio erūt oīo idē. quod ē simplr falsum. Si aut dicūt aliquid vltra motum aut dicūt aliquid rōis: aut aliquid rei nālis. non dicūt solū quid rōis. qz tūc eēt solū de cōsideratōe logici qui entia rōis cōsiderat. qd est falsum. q̄ vltra motū dicūt aliquid rei: et p̄ oīs realr a motu differūt. Si dī. q̄ actio et passio nō dicūt aliaz rez q̄ motū: ipm tamē dicūt sub respectu diuerso et ideo diuersa sunt. Cōtra si actio in q̄tū actio et passio in q̄tū passio dicūt vltra motū solū respectū quendā: cū respect⁹ et relatio sint idē: et relatio queniēter spectat ad p̄dicamētū relatiōis: actio in q̄tū actio: et passio in eo q̄ passio spectabūt ad p̄dicamētū relatiōis: et ipa p̄ oīs p̄dicamēta n̄ erūt. qd est falsuz. P̄. res sicut et ens circuit oē gen⁹ et cōsistit in decē p̄dicamēta diuidit. cū ergo que ex opposito diuidūt ens sint diuersa entia: etiam que diuidūt rem ex opposito sicut diuersae res eē debēt et decē p̄dicamēta ex opposito rē diuidāt. cōcludit q̄ decē p̄dicamēta sint oīo diuersae res: et sic actio et passio realr dicit. In huius est quod phis in t̄tio phisicorū: det̄minat actionē et passionē realit̄ inter se nō differre: nec etiā a motu. R̄ideo ad hui⁹ qōnis intelligētia sciēdū est q̄ actio et passio non sunt de numero accētū absolutoz: s̄ sunt de numero accētū relatiuoz. Accētū aut relatiua p̄fecte cognosci nō p̄t: nisi natura relatiōis aliq̄r cognoscat. et ideo si velim⁹ bene videre an actio et passio realiter int̄ se differant et etiā a motu cōsiderandū est p̄mo: vtrū relatio differat realiter a suo fundamēto. Qd aut circūscripta realitate fundamētū nulla remaneat realitas ī relatiōe s̄ maneat p̄cisa ratio que intelligit mod⁹ essendi ad aliud: multipl̄ ostēdi potest. Primo quia omne illō et solū reale est p̄dicamētū penes quod in ipō accipiūt specificē differētie et distinctio sp̄ez specificis eteni differētis: sp̄es que sunt res p̄dicamētorū cōstituiunt: et p̄ idē etiā aliqua in re ponūt et distinguunt realiter ab alijs. Idem enim est omnino id p̄ quod cōstituit res substātie que est homo: et id p̄ quod distinguit in re ab alijs substātijs. Idē etiā est omnino id p̄ quod constituit res quātitatē q̄ est linea: et id p̄ quod ipa distinguit in re ab alijs quātitatibus. Similr etiā est omnino id p̄ quod constituit res qualitatis que est albedo: et id p̄ quod in re distinguit ab alijs qualitātibus. Cōstat aut q̄ speciez distinctio et specificē differētie in relatiōe accipiūt solū penes res super quas ipa relatio fundatur. Si enim circūscribas p̄ intellectū fundamētū relatiōis: et solus relatiōis intellectus concipiat siue respectus ip̄e p̄cise: sub illo respectu impossibile erit assignare differētiās specificas aut species differētes. Ipsū enim esse ad aliud quantū est de se eiusdē rōis est in omnib⁹ in quib⁹ est. Nam quēadmodū esse sp̄em nō est alterius rōis circa boiē et circa asinū: nec etiā

ratio generis circa animal et circa arborē: nec est aliud genus animal q̄ arbor: nisi quia alia res est arbor: et alia res est animal: sic etiā et ipm ad aliud esse non est alterius ratiōis: nec est differēs circa dñm et scientiā et alias relatiōes: nisi quia est circa aliud et aliud fundamētū. Unde et quādo dicit q̄ relatiuoz: aliud est relatiuū suppositōis: et aliud eq̄parantie: hoc pro tanto veritatē habz. quia relatiōnū aliqua habz fieri circa res quaz vna supponit alteri: et aliqua fit circa res quaz vna alteri equipat. Cum igit vniuersalit̄ ita fit q̄ specierum distinctio et specificē differētie in relatiōe accipiūt solū penes fundamētū super quod ipa relatio fundatur: cōcludit de necessitate q̄ nulla alia realitas fit in relatiōe a realitate sui fundamēti.

Secūdo autē hoc idem sic ostendit. De illud quod est res aliqua de se: impossibile est fieri in aliquo de nouo sine reali transmūtatiōe eius in quo de nouo fit. Est enim omnino nō intelligibile dicere q̄ aliqua res acquirat vel perdat aliquā realitatē: et tamē non transmūtet realiter. Videmus autē q̄ relatiōes acquirunt et perdunt ab eis subiectis in quibus sunt absq̄ vlla reali ipoz subiectoz transmūtatiōe. Patre enim vnū tm̄ filiu habente: filio mortuo p̄dit paternitatis ratiōem: nulla tamē in se transmūtatiōe facta. Similr etiā vnus homo acq̄rit relatiōem similitudinē ad aliu quem aliū solo illo altero transmūtato. Impossibile est igitur q̄ per ipas relatiōes aliqua realitas imporetur p̄ter realitatem sui fundamēti.

Tertio autē hoc idem ex eo ostendit q̄ mod⁹ eēndi ip̄i rei: nullā rē ponit in nā p̄ter rē cui⁹ est mod⁹. Est enī oīo vanū dicere: q̄ res et mod⁹ rei sūt diuersae res. Et sicut penit⁹ est nouū dicē: q̄ modus rei ponit rē aliquā in nā p̄ter rē c⁹ est modus tunc. n. mod⁹ rei cū re ipsa c⁹ mod⁹ est faceret rez aggregationē: et ipsa res cum suo mō accepta nō esset res vna simplr: sed eēt necessario vna res ex duab⁹ rebus cōposita: qd est oīo falsum. Cōstat autē q̄ ipsa relatio sumit a quodā mō essendi ad aliud: igit evidētissimū est q̄ ipsa relatio nullam rem ponit in nā p̄ter rem sui fundamēti. Quarto h̄ idē ostendit ex eo q̄ mōi essendi: qui se circa idem cōpatiunt nō ponunt in nā diuersas res: s̄ vnā et eandē. modi vō illi qui se circa idem nō cōpatiunt: ponunt oīo in nā res diuersas et differētes. vnde videm⁹ q̄ qz modus essendi in se et nō ī subiecto: et modus eēndi nō in se sed in subiecto: se nō cōpatiunt circa idē. nō enī aliquid vnū et idē in nā pōt nāliter esse in se et nō in subiecto: et non esse in se sed in subiecto: iō substātia cui cōuenit esse in se et nō in subiecto est res oīo differens ac diuersa a quātitate et qualitate quib⁹ cōuenit nō esse in se sed in subiecto. qz etiā esse in subiecto per modū mēsurātis. et esse in subiecto p̄ modū afficiētis se circa idem nō cōpatiunt. nō enī aliqd idē esse pōt in subiecto p̄ modū mēsurantis: et p̄ modum afficiētis: iccirco quantitas cui conuenit in

subiecto esse p modū mēsurantis est res omnino differēs ac diuersa a qualitate cui cōuenit esse in subiecto p modū afficiētis z nō p modū mēsurantis. sic ergo vlr̄ ita est q̄ modi essendi qui se circa idē nō opatiunt̄ in natura: ponūt res oīo diuersas z dīntes. Et sīlr̄ etiā ecōtrario modi eēndi qui se circa idē opatiunt̄ in natura: ponūt rē vnā z eādē. Constat aut̄ q̄ mod⁹ eēndi p̄p̄us ipsi⁹ rei sup̄ quā relatio fundat̄: z etiā mod⁹ eēndi ad aliud: a quo relatio ip̄a sumit̄ circa eādē rem se opatiunt̄. Videm⁹ enī q̄ eē in subiecto p modū afficiētis qui ē mod⁹ p̄p̄ qualitatis inuenit̄ in albedine. In eadē etiā inuenit̄ mod⁹ eēndi in subiecto ip̄m ad aliud ordinādo: vtp̄uta ad illud cui est subiectū ipsum. p albedinē simile vel dissimile dī. Cōcludit̄ ergo de necessitate q̄ vnā z eādē rē ponit in nā mod⁹ p̄p̄us ipsi⁹ rei sub qua relatio fundat̄: z modus eēndi ad aliud a quo relatio ip̄a sumit̄. Nūc aut̄ ita est q̄ mod⁹ eēndi p̄p̄us ipsi⁹ rei sup̄ quam fundat̄ relatio: nō ponit rem aliā in nā a re cuius est modus. Unde mod⁹ eēndi in subiecto ip̄m afficiendo: nō ponit rem aliquā in natura p̄ter rē qualitatis cui⁹ est mod⁹ p̄p̄us. igit̄ z mod⁹ essendi ad aliud: z ip̄a p̄ sequēs relatio nō ponit rez aliquā in natura p̄ter rem sui fundamētī. Sic igitur iam euidentissime patz q̄ ip̄a relatio realiter a suo fundamēto non differt. Ex hoc aut̄ statim appet̄ veritas p̄ncipalis quesiti. Cum enī actio vltra motū nō dicat nisi quēdā respectū agētis ad patiens in motu fundatū: nec passio dicat etiā vltra motum nisi quēdā respectū patiētis ad agens fundatū in motu. Concludit̄ iam euidenter q̄ nec passio nec actio realiter a motu differat. quia tūc oportet q̄ relatio vel respectus poneret in natura realitatez aliam a realitate sui fundamētī. quod iā ostēsūm est esse incōueniēs. Sed si actio est realiter idem motui: z passio sīlr̄. cū ea que vni z eidē sunt realiter eadem: sint etiā z sibi eadem fm̄ rem: cōcludit̄ de necessitate q̄ actio z passio in se realiē nō dīnt.

His ergo p̄mo visis. vlt̄erius vt appareat quō actio z passio sint diuersa p̄dicamēta: cum oīsum sit q̄ in re nō dīnt: cōsiderandū est fm̄ q̄ in p̄cedētib⁹ q̄ōib⁹ tetigim⁹ q̄ res cui cōuenit rō p̄dicamētī z q̄ est vere res a ratiudine dicta q̄d analogū est ad omnez rem z ad omne esse in creaturis reptuz etiāz potest dupliciter distingui. quia vel ex parte ipsi⁹ rei cui essendi modi attribuunt̄: vel ex parte ipsius esse in re ip̄a repti. Et ex parte siquidez rei: res distinguit̄ tripliciter fm̄ triplicē rem absolutam. videlz substātie: quātitatis: qualitatis: q̄ sunt res ita diuersē q̄ vna nullo modo potest esse alia quod quidē ostēdit̄ ex modis essendi eis cōuenientibus qui sic repugnātes sunt q̄ se circa idēz nō compatiunt̄: vt iam ostēsūm est. Similr̄ etiāz ex parte ipsi⁹ esse in rebus reperti res potest tripliciter distingui. aut enim conuenit esse in se: aut in alio vt in subiecto: aut in ordine ad aliud. Et siquidem in se cōuenit ipsi substātie: esse vō in subiecto

absoluto cōuenit accidētib⁹ absolutis: sicut quātitati z qualitati. Esse autē in ordine ad aliud conuenit entib⁹ relatiuis. Et p̄imi quidez duo modi sicut iam ostēdimus: sunt omnino repugnantes. Tertius vō essendi modus diuersus ē ab vtroq̄ illorū duorū. Modus enī essendi ad aliud: non est modus essendi in se: nec est modus essendi in alio absolute. Quāuis autē tertius modus sit ita diuersus ab vtroq̄ illorū: nulli tamē eorum repugnat. Nam z id cui cōuenit esse in se: z id cui conuenit esse in alio: potest habere moduz essendi in ordine ad aliud. Unde videm⁹ q̄ per eandē essentiam p̄ quā aliqua substātia habet q̄ in se existat z non in subiecto: habet etiā q̄ sit distincta z diuersa ab alia substātia: z sic circa ip̄as attendit̄ relatiuū diuersitatis. Item p̄ eandē essentiā per quam habz mā q̄ nō sit in subiecto: habz etiā q̄ ad aliō: vtpote ad formā substātificā ordinē. sicut autez de substātia dictū est: sic etiā dici pōt de quātitate z qualitate. sic ergo iam manifestū est q̄ eē in se: z esse in alio: circa idē realr̄ secū cōpatiunt̄ esse ad aliud. vep̄ est tamē q̄ h̄ esse ad aliud s̄z diuersos modos in septē p̄dicamēta distinguit̄. Que q̄dem distinctio sic accipi pōt. aut. n. respect⁹ ille quo vnū intelligit̄ ad aliud inclinātū rei cōuenit in se z absolute siue simplr̄. aut in connexiōe aliquorū ad inuicē. Et quidē si in se z simplr̄ cōueniat rei: ille respect⁹ quēadmodū respect⁹ ad scibile in se z simpliciter cōuenit ipsi scie. z hoc q̄d dico duplū conuenit q̄to: spectabit tūc respect⁹ ad p̄dicamētū relationis. Si aut̄ respect⁹ ille rei cōueniat: nō quidē in se z simplr̄ s̄z in cōnexionē aliquorū ad inuicem. Tunc res illa circa quā talis respectus cōsiderat̄ aut est motus: aut est aliquid per motū in mobili acquisituz. Et siquidē est motus: tunc est actio et passio. Que diuersimode in motu accipiunt̄ sub cōnexionē eadem sed sub diuerso respectu ponit̄ ibi cōnexio agentis z patiētis. Et motus quidē i tali cōnexionē acceptus sub respectu agentis ad patiens dicit̄ actio: sub respectu vero patiētis ad agēs dicit̄ passio. Si vero id circa quod attendit̄ talis respectus sit aliquid acquisitū per motū. Tūc aut̄ ibi attendit̄ connexio mobilis cum tempe: aut cōnexio locati cum loco. Et siquidez ibi attenditur cōnexio mobilis cū tpe q̄d p̄ se est mēsurā mot⁹: sic est q̄n. q̄n̄ eteni nō attendit̄ in re mobili nisi fm̄ q̄ ip̄a res mobilis tpi cōnexa sub certo z finito tpe cadit: sicut p̄z in q̄rto physicoz. Vñ quēadmodū mot⁹ accept⁹ in cōnexionē agētis z patiētis sub respectu agētis ad patiens dī actio: sic etiā vt videt̄ termin⁹ mot⁹ accept⁹ in cōnexionē rei t̄p̄alis z t̄pis: sub respectu t̄p̄alis rei ad tēp⁹ in quo mot⁹ terminatus est vel inchoat⁹ dī q̄n. Si aut̄ ibi attendat̄ connexio locati cū loco tūc adhuc duplū esse poterit: aut enī iccirco q̄ cōsiderat̄ talis respectus est aliquid acquisitū ex constitutiōe locati in loco in eo q̄ habet rationē locati: aut in eo q̄ habet rōnem loci. Et secūdo quidē modo est habit⁹: p̄mo vero

Questio

est ubi et situs. sed differunt. quia ubi dicit respectum locati ad locum simpliciter: situs vero dicit respectum locati ad locum: non quidem simpliciter sed ratione partium locati ad partes loci. Considerandum est ergo breviter quibus ad hec tria ultimo dicta quod quemadmodum locum continent et conservant locatum: sic etiam et vestis et calceus continent rem vestitam et calceatam cum ipsam ornent et tegant. Unde et in quanto metha. Aristoteles dicit quod cum inter rem habentem et rem habitam cadat velut quedam actio media secundum quam hoc dicitur ornare: illud vero ornari: vel aliquid haberi: tunc hoc est habitus. Quemadmodum ergo ubi et situs qui est predicamentum in re non videtur ponere nisi constantem et continentiam locati in loco. sic etiam et habitus vel est predicamentum in re: non videtur ponere nisi continentiam sed actiuam talis rei ornantis vel tegentis in re ornata vel tecta. Et sicut continentia locati in loco accepta in connectione reali loci et locati sub respectu totius locati ad totum locum dicitur ubi: et sub respectu vel ordine partium locati ad partes loci dicitur positio. sic etiam et continentia vestis actiuam vel alicuius talium in re vestita accepta in tali connectione utriusque sub respectu vni ad alterum dicitur habitus. Ex his ergo iam manifestum est quod actio et passio sunt diuersa predicamenta et in re non oriuntur secundum quod res stat pro ipso reali modo essendi. Nam et in diuisione rei cadunt ut ostensum est solus secundum quod ipsa res est quid analogum ad omnem rem et ad omne reale esse inuentum in creaturis. Dis itaque visis ad plenioris quodis intelligentiam: cum ex diuersis modis essendi: diuersae denominationes secundum diuersa predicamenta sumantur ad sciendum que sint nomina rerum et que non: et quomodo: et ad quod significandum imponantur hec et illa. Considerandum est ulterius quod triplex fieri potest nominis impositio. vna quidem ad significandum rem ipsam precise. alia vero ad significandum rem ipsam non quidem simpliciter sed potest habere tale modum essendi. Item alia impositio potest fieri ad significandum precise ipsum essendi modum. Et si quidem primo modo esset nomen rei impositum que potest esse diuersorum predicamentorum secundum diuersos essendi modos: tunc non spectaret res illa tali nomine significata potius ad vnum predicamentum quam ad aliud: sed esset illud nomen absolutiuum nomen rei. Secundo autem modo diuersum est nomen impositum rei ut est res vnius predicamenti: et ut est res alterius predicamenti: quemadmodum eidem rei impositum est hoc nomen albedo: et hoc nomen similitudo. Sed hoc nomen albedo est impositum illi rei ut cui conuenit esse in alio ipse afficiendo. hoc vero nomen similitudo est eidem impositum ut cui conuenit esse in alio ipse ad aliud ordinando. Quod si etiam si fundata esset similitudo super aliquam substantiam: ut puta super humanitatem eadem res significaret humanitas et similitudo sed diuersimode. quia hoc nomen humanitas illi rei conueniret ut habet esse in se et non in subiecto. hoc vero nomen similitudo conueniret eidem ut habet esse in ordine ad alterum. Et tunc res significata nomine similitudinis fundate super substantiam et super qualitatem esset alia et alia: secundum quod alia res est substantia: et alia res est qualitas.

Esset autem res tali nomine significata alia et alia sub vna tamen ratione essendi que est respectus ad alterum. Est enim similitudo nomen rei: non quidem simpliciter sed potest ut circa ipsam est natura considerari talis modus essendi. Tertio autem modo diuersa sunt imposita nomina rebus secundum diuersos essendi modos precise consideratos. Et sunt hec nomina secundarum intentionum circa res illas consideratarum. quemadmodum hoc nomen accidens est impositum precise ad modum essendi in altero: et est nomen secundae intentionis commune multis predicamentis. Sic etiam si modis singulis singulorum predicamentorum essent precise nomina imposita: essent similiter ipsa nomina secundarum intentionum: et precise significarent rationes proprias cuiuslibet predicamenti penes quas attenditur predicamentorum distinctio. predicamenta. n. distinguuntur penes modos essendi: et non penes res existentes. et hoc solum est essentiale predicamenti. quia accidit predicamento ut predicamentum est: quod vnum significet rem aliam quam aliud. Quia. n. diuersi modi essendi aliquorum predicamentorum se circa idem non compatiuntur: cum sunt modi substantie: quantitatis et qualitatis. ideo hec significant res ita diuersas quod vna nullo modo potest esse alia: et distinguuntur ista persequens: non solum penes diuersos essendi modos: sed etiam penes diuersas res et essentias. hoc autem non oportet nisi sint diuersi modi essendi non repugnantes: sed se circa idem compatietes: cuiusmodi sunt modus essendi in se: et modus essendi ad aliud: et modus essendi in alio: et modus essendi ad aliud. vnum non est necesse quod talia predicamenta significant diuersas res et essentias: sed significantur penes vnam et eandem secundum tamen diuersos modos et diuersas rationes predicamentorum penes quas ipsa predicamenta distinguuntur: sicut iam patuit in actione et passione que dunt solum diuersos respectus circa eandem rem. s. circa motum. sed autem aliquod nomen relatum ut similitudo fundata super diuersa predicamenta: ut super substantiam et qualitatem. si super ipsa fundaret eandem rem significaret quam nomen substantie: et quam nomen figure qualitatis: non tamen hoc eis conuenit equaliter. quia forma et ratio nominis relatiui imponitur a modo essendi ad aliud: que quibus de se est vnicum et vniuersum: et res ipsa quasi materialiter cadit in suo significato. Et secundum hoc relatio ut est nomen generalissimum et nomen relationis realis: vniuocum est ad diuersas relationes fundatas super diuersas res predicamentorum diuersorum. Et hec quidem albedo et similitudo sed idem in re significantur: non tamen vnum predicamentum de alio proprie diuersos modos essendi a quibus formaliter imponitur. Sicut autem de his dictum est: sic etiam est intelligendum de actione et passione et motu. Nam quauis actio et passio idem in re significantur quod motus: non tamen hoc eis conuenit equaliter. quia nomen actionis et passionis imponitur a modo essendi ad aliud: et motus ipse quasi essentialiter cadit in eorum significato. Non predicatur etiam vnum de alio quanticumque idem in re significantur. quia diuersi sunt modi essendi a quibus formaliter imponuntur. Dis ergo consideratis apparet manifeste quod argumenta facta in contrarium sunt soluta.

Nā ad p̄mū z sc̄dm dicendū: q̄ actio z passio re nō d̄rnt accipiēdo rē fm̄ q̄ stat p̄ eo cui uenit mod⁹ eēndi. differūt autē fm̄ q̄ res stat p̄ ipso mō reali eēndi penes modos autē eēndi p̄dicamēta di stinguunt: et imp̄mixta sunt. Ad. iij. dicēduz q̄ ea q̄ in genē cōueniūt z in sp̄e differūt magis ueniūt i rōne p̄dicamēti q̄ ea q̄ generalissimo genē differūt: nō t̄m magis cōueniūt in fundamēto rōis illi⁹: qz sicut p̄dictū ē distinctio speciez i entib⁹ res latius: attendit fm̄ distinctionē fundamētoz: sed distinctio p̄moz genēz: attendit penes diuersas rōes p̄dicamētales: z nō penes diuersa fundamē ta: z sic frigefacere z calefacere: ueniūt i vna p̄dic amēti rōne q̄ est rō actiōis: s; differūt fundamen to: qz supra d̄ctos mot⁹ fundāt. frigefacē vō z fri gefieri i fundamēto ueniunt: qz sup eodē motu fundāt: d̄rnt t̄m rōne p̄dicamētali: sic agere z pati z actio z passio. Ad q̄rtū dicēdu: q̄ eo mō quo sunt diuerse diffinitōes: sūt etiā diuerse eēntie. ois finitio autē actiōis z passiōis idē absolutū accipiūt fm̄ diuersū respectū. est autē actio: act⁹ agētis i pas sū. passio vō ē act⁹ passi ab agente: ut d̄r i tertio phisicoy. Consīl̄ etiā in vna eēntia absoluta ueniunt: sed d̄rnt in eēntia relata. Ad. v. dicendū: q̄ diuersis denoiationib⁹ z ceptib⁹: sufficit q̄ in re cor̄spōdeāt diuersi modi ipsi⁹ rei: qz de vna z eadē re pōt formare rō cōcept⁹ diuersos penes di uersas acceptiones ipsi⁹ rei. Ad. vi. dicēdu: q̄ si mot⁹ resp̄cū agētis d̄r actio: z resp̄cū patiētis pas sio: q̄tūcūq; agens z patiēs in re differāt. actio t̄m z passio vna res eē p̄nt: cū nec agens sit actio: nec patiēs passio: s; mot⁹ sit vtrūq;. Ad. vii. dicēdu: q̄ diuersoy nō pōt eē vna p̄fectio fm̄ modū eūdē sed diuersimode: sic z act⁹ quidē q̄ d̄r actio z pas sio est p̄fectio agentis tanq; influētis: z sic ē actio est etiā p̄fectio patiētis tanq; recipiētis: z sic ē pas sio. Ad. viij. dicēdu: q̄ h; actio z passio sint idem mot⁹ i re. dicūt t̄m vltra motū diuersas rōes p̄dica mētales: z qz mot⁹ de se rōnes illas nō dicit: iō nō est p̄dicamētū sic sūt actio z passio. Ad. ix. dicē du: q̄ p; r̄nsio. nō. n. actio z passio de se iuicē p̄dis canē pp̄t diuersas rōnes a qb⁹ formalit̄ i ponunt Ad. x. d̄b. q̄ actio z passio aliqd rei vlt̄ motum dicūt qd nō ē aliqd q̄ dē realis resp̄cū. Ad. xi. p; r̄nsio p̄ s̄ dicta. Ad. xij. d̄b. q̄ res ut stat p̄ eo cui uenit eē: circuit directe tria p̄dicamēta solū. s. subē: q̄t̄itatis: z q̄l̄itatis. fm̄ vō q̄ ē qd cōe ad oēs rōnē: z ad oē eē in creaturis reptū circuit oē gen⁹ z i re sic sūpta actio z passio differūt: ut oñsuz est.

Questio octaua.

Questio octaua

est: Utz de⁹ possit facere actu i finitū: z v̄r q̄ nō: qz de⁹ nō pōt facē aliqd qd sibi equef. deo autē z si ens finitū eq̄ri nō possit pp̄t

illud qd ē infinitū. v̄r. t̄m q̄ sibi eq̄t ens i finitū: q̄t̄ v̄r nō pōt de⁹ facere ens actu infinitū. s; de⁹ nō pōt facere illa q̄ d̄dictionē iplicant: s; infinitū esse actu iplicat d̄dictionē: qz eē actu dicit pōnez act⁹. infinitū vō dicit negationē finitū: z p̄ oñs act⁹ ne ga tionē: q̄ i finitū actu a deo fieri nō pōt. s; nulli⁹ creature pōt eē v̄tus i finita: s; i finitū ē i finita v̄t⁹: igit̄ nihil i finitū pōt eē qd creatū. s; ens i finite virtutis pōt in i finitū effectū: s; nihil creatū pdu cere pōt effectū i finitū: q̄ ens i finitū nō pōt eē ens creatū. s; oē factū h; eē p̄cipatū ab alio: s; oē qd h; eē p̄cipatū: h; eēntiā finitā z limitatā. infi nitū autē h; eēntiā i finitā. q̄ i finitū nō pōt eē a deo factū. s; oē illud p̄ qd ponit̄ d̄na potētia limi tari ē i possibile a deo fieri. s; si de⁹ p̄ducēt corp⁹ i finite magnitudis: limitaret̄ ita dei potētia q̄ aliud corp⁹ p̄ducē nō posset. nā si adhuc aliud corp⁹ p̄ duceret. v̄nū corpoz illoz ad altez: cuz duo corpa nō possunt eē simul: necessario finiret̄: z eēt etiā p̄ sequez finitū vtrūq;. ambo etiā i simul accepta maiorē quantitātē haberēt quolibet ipsoz per se sumpto. z sic eēt aliquid maius infinito: qd est im possibile. q̄ i possibile est infinitū: corp⁹ actu a deo fieri. s; de⁹ nō pōt facere in corpe qd tollit ras tionē corpis. Est autē de rōne corpis q̄ superficie terminet̄ sicut de rōe sup̄ficie est q̄ terminet̄ linea z de rōne lineę q̄ terminet̄ puncto. sed h; totū tol lit p̄ corpis infinitatez. ergo i possibile est deo facē corpus actu infinitū. s; ponamus: q̄ de⁹ faciat v̄nū corp⁹ i finite magnitudinis. aut ergo eē quā libet illius corpis partē poterit dari alia ps: aut n̄. Si dicat q̄ nō. Cōtra: oē corp⁹ extra cuius aliq̄ quā ptē nō cōringit aliā ptē dare. est finitū: s; cor pus infinitū nō est finitū. q̄ extra quālibet ptē cor poz i finitū ē dare aliā ptē. Qd si ccedat. Cōtra si extra quālibet ptē corpis i finitū ē dare aliā ptē tunc extra oēs p̄tes corpis: z p̄ oñs extra totū cor pus poterit dari alia ps corpis: qd ē i possibile: q̄ i possibile ē corp⁹ actu infinitū a deo fieri. s; aut totū eēt: aut nō totū eēt: nō pōt dici q̄ nō totū eēt qz tūc nō eēt actu ipm corp⁹ infinitū: o; q̄ dicē q̄ totū eēt. s; h; ē i possibile: qz cū nomē totū: sic z no mē p̄fecti i sua rōne finē icludat: oē qd d̄r totū o; eē finitū: q̄ i possibile ē eē corp⁹ actu i finitū. s; oē qd ē factibile ē scibile: z de oī scibili pōt eē scia de i finito aut n̄ pōt eē scia: q̄ i finitū: nō ē scibile neq; factibile. s; qd repuḡt sup̄iori repuḡt i fe riori. corp⁹ autē ē sup̄i⁹ ad corp⁹ nāle: z corpi repug nat moueri i i stātū: q̄ z corpi nāli: s; si eēt corp⁹ q̄ ue aut leue i finitū: illud i i stātū moueri posset: ut p̄bat i libro d̄ celo: q̄ i possibile ē eē corp⁹ q̄ ue aut leue infinitū. s; nulli⁹ intellect⁹ creat⁹ cū sit fini tus: pōt itelligere i finitū: s; si eēt i finita i diuidua eiusdē sp̄e: cū angel⁹ oīa eiusdē sp̄e i diuidua p eandē sp̄em itelligat: z oīa que itelligit p̄ vnam sp̄em possit simul itelligē. angel⁹ posset sil i finita i diuidua cognoscere: qd est i possibile: ergo im possible ē sil eē i finita i diuidua eiusdē speciei.

Questio

¶ si de^o pot sub vna spe pducere infinita indi-
uidua: pot eade rone h^o facere: et sub quolibet spe c^o
libet generis. ponam^o g^o q^o h^o faciat: tunc aut poterit
plura pducere: aut no. si poterit: g^o poterit aliquid
pl^o infinito: qd est impossibile. si no poterit: g^o dei po-
teria erit totalr limitata: qd similiter est impossibile
ergo oino impossibile est deū facere simul infinita i-
diuidua eiusde spei. ¶ In corpe infinito e neces-
sario virt^o infinita: sed vbi est infinita virt^o: ibi e in-
finita eentia. cu eni virt^o sequat eentiaz necesse e
q^o virt^o infinita sequat eentia infinita. In infinito
g^o corpe erit necessario ifinita eentia: s^o de^o no pot
facere infinita eentia: g^o nec cor^o infinitu. In
3^o est: q^o de^o est agens ifinite virtutis: sed agens
ifinite virtutis: vr posse i effectū ifinitu. ¶ de^o
pot simul ifinita itelligere. opaf aut p intellectū: g^o
pot simul ifinita pducere. Rñdeo ad h^o qonis
intelligentia tria pcpue cōsiderada sūt: videlz que
sint a deo factibilia et q^o no quot modis dicat infu-
nitū. et vtz quolibet illoz modoz ifinitū cadat sub
nūero eoz q^o sūt a deo factibilia vel sub nūero eoz
q^o 3^o mo se hñt. Quātū aut ad p^o cōsideradū e
q^o de^o est p^o ma et vltis cā essendi. sub p^o ma v^o et vlti
eā eēndi: cadāt oia q^o pñt picipare esse. que aut eē
picipare no pñt sub tali cā no cadūt. pñt aut esse
picipare oia q^o 3^o dictionē no iplicāt. que v^o 3^o dicti-
onez iplicant esse habē no pñt: ea etenim q^o iplicant
3^o dictionez: sunt oino impossibilia. oino v^o impossibi-
lia dicunt: q^o nullo mō poni pñt i actu essendi. s^o r
etiā q^o 3^o dictionez no iplicant sunt simplr impossibi-
lia. Simplr aut possibilia dicunt: que pñt aliquo
mō picipare eē. si igit sub p^o ma et vlti cā essendi ca-
dāt oia et solū illa q^o pñt actū eēndi picipare. cōclu-
dit de necessitate q^o sub vna potentia cadāt oia q^o
3^o dictionē no iplicāt: et q^o ab ipsa oia q^o 3^o dictionez
implicāt secludant. no aut p istoz exclusionē tol-
lit^o dei oipotētia. sic eni de^o d^o oipotens: siue oia
potēs: sicut etiā d^o et oia sciēs: et tñ no obstāte q^o
sit sciēs oia: d^o tñ recte q^o ipse no scit hoiez esse asi-
nū: qz tūc falsam h^oret sciam: qd est absurdū. ergo
et s^o r no obstante ei^o oipotētia pot dici q^o facē no
pot: q^o h^o sit asin^o: vel aliqd aliud qd iplicet 3^o d^o
ctionē. no valet eni facere illa quoz sciam habere
no pot. sicut g^o de^o d^o oia sciēs: qz scit oia q^o sūt sci-
bilia quoquo mō: sic etiā d^o et oia potēs: qz pot q^o
cūqz sunt aliquo mō possibilia. Manifestū e igit
iam: q^o oia illa sunt a deo factibilia: q^o no iplicant
3^o dictionē. que v^o 3^o dictionē iplicant ab eo fieri n^o
pñt. His g^o visis vlteri^o q^o tū ad scdm cōsideradū
est: q^o lz multiplex esse possit acceptio infiniti q^o tū
tñ ad pñs sufficere pot. infinitū aliqd d^o trib^o mo-
dis: videlz infinitū infinitate eentie: ifinitū quo ad
esse: et infinitū ifinitate quātitatis. Infinitū autem
p^o mo d^o: cui^o eentia no est ad vnū gen^o determina-
ta: sed in se claudit et cōtinet pfectiones oīuz gene-
rum: s^o r quē modū deū esse dicimus per eentiaz
infinitum: qz videlz eius eentia no est limitata ad
vnū pfectionis genus: sed extra et supra oē genus

est: tanq^o omnū genēz pfectiones claudens in se
et cōtinens. Infinitū v^o quātū ad eē id d^o q^o et si
h^oeat eentia limitatā ad vnū pfectionis gen^o: h^oet
tñ specificā illius generis pfectionē oībus modis
quib^o haberi pot. quēadmodū dicim^o q^o gratia in
christo infinita est: no quidē infinitate eentie: cū
eentia gratie no sit eentia sapiē: sed d^o infinita q^o
tum ad esse: qz cū ipsa modis i numeris possit ha-
beri: omnib^o tñ modis quib^o haberi pot: habet in
hoie christo: qz no dat ei de^o spm ad mensurā: sic
scriptum est. Infinitū aut infinitate quātitatis
duplr pot accipi s^o r qd est duplex quātitas. Est
eni quātitas magnitudinis et quātitas multitudi-
nis. Et quidē infinitū infinitate magnitudinis d^o
cui^o tanta est magnitudo: q^o accipientib^o partē eius
post partē nunq^o cōtingit ad partē aliquaz deuen-
ire: postq^o alia ps sumi no possit. differt aut hoc
infinitū ab infinito s^o r diuisione: qd ponitur ab
aristotele in cōtinuis. nam in diuisione continui
finiti acceptio partis p^o partē vadit in infinitū: ita
tñ q^o illa sit acceptio partū inequaliū quātitate vt
videlz ps secūdo accepta sit minor parte p^o r sum-
pta per diuisionē: alias diuisio in infinitū no pce-
deret: sed i vere actu infinito de quo loq^omur mō
durat in infinitū acceptio partis post partē sumē-
di etiā ptes equales in quātitate. Cōsilt^o etiam
infinitū s^o r multitudinē d^o cui^o tanta est multitu-
do q^o accipientib^o vnū post aliud nūq^o cōtingit ad
aliquid oino vltimū deuenire. quēadmodū si ac-
ceptio angeli post angelū nūq^o possit finire: esset i-
finita angeloz multitudo. Viso ergo que sint a
deo factibilia: et q^o no: et quot etiā modis dicat p^o
prie aliquid infinitū. vlt^o r cōsiderandū est: vtrū
quolibet illoz modoz infinitū cadat sub numero
illoz que sūt deo possibilia: vel sub numero illoz
que cōtrario mō se habēt. apparet aut p^o rma facie
q^o infinitū scdm mō acceptū no est possibile a deo
fieri. nam in ppōne qua d^o q^o aliq^o res vel nā speci-
fica omnib^o modis quib^o haberi pot habet: nulla
3^o d^octio iplicat. cui^o quidē declaratio est: qz tūc d^o
in aliq^o ppōne 3^o d^octio iplicari: qñ p^o d^octū et subie-
ctum ppōnis sibi inuicē repugnant vel 3^o d^octū: sic
qz h^o 3^o d^octū seu repugnat asino: dicim^o q^o illa p^o
positio: h^o est asinus iplicat 3^o d^octionē. Nunc aut
videm^o q^o subiectū et p^o d^octū ppōis p^o d^octē sibi no
3^o d^octū. est. n. in ea p^o d^octū: h^o qd dico habet. subie-
ctū v^o est h^o totū res aliq^o vel nā specifica oīb^o mo-
dis quib^o h^ori pot. haberi aut pot dic^o potētia ordi-
natā ad actū hñdi: s^o r habet dicit ipm hñdi actum.
Cōstat aut q^o act^o hñdi no repugnat sue potētie.
Euidēs e igit q^o p^o d^octū et subiectū ppōis q^o d^o r res
aliq^o vel nā specifica oīb^o mōis qd^o h^ori pot h^oet. s.
no 3^o d^octū: nec p^o rns in illa ppōne 3^o d^octio iplicat
Significatū igit ip^o no e de nūero eoz que sunt
deo impossibilia. p^o r etiā hoc per exemplum de gra-
tia superius adductum. Cum enim gratia multis
modis possit a deo cōferri hoibus: oīb^o tñ modis
quib^o dari pot: data est s^o r verā fidē hōi xpo: et sic

infinitū sumptū scđo mō: nō solū est a deo factibile: sed etiā est actu factū. appet autē h̄ idē r̄ alr. Cū enī res ordinet̄ p̄ eēntiā suā ad eē ea rōne q̄ i actu eēndi ponit̄ sub infimo gradu sue nāe. pōt etiā in ipso poni r̄ sub ḡdu sue nāe medio r̄ sup̄mo. Manifestū est igit̄ ex dictis q̄ infinitū q̄ntū ad eē: non est impossibile fieri a deo actu. Ulteri⁹ itaq̄ cōsiderandū est: quō se h̄eat de infinito accepto p̄mo mō. q̄ aut̄ ipm nō cadat sub nūero factibilū: euidēt̄ oñdi pōt. quēadmodū enī supra dictū est: id d̄r eē infinitū infinitate eēntie: c̄ eēntia nō est limitata ad vnū p̄fectionis gen⁹: sed in se claudit r̄ cōtinet p̄fectiones oīuz reruz vna autem de perfectiōnibus rerum est ipsum esse. id ergo quod est in eēntia infinitū: in ipsa sua eēntia claudit ipsum eē q̄ aut̄ in sua eēntia claudat actuale eē: est actu per eēntiā suā r̄ nō p̄ p̄ticipatiōē ab alio: q̄ p̄ticipatiōē in quātū h̄ cōcidit extra rōnē vel eēntiā p̄ticipatiōē. Nō aut̄ factū s̄m ipsam rōnē facti h̄z eē p̄ticipatiōē: r̄ nō est actu p̄ eēntiā suā. eē igit̄ factū d̄dicit r̄ repugnat oīno ei q̄ est eē infinitū infinitate eēntie. tale itaq̄ infinitū: nullo mō est a deo factibile

Et p̄terea oē q̄ h̄z eēntiā limitatā ad aliq̄d genus p̄ aliquā d̄iam sibi p̄p̄riā distinguat̄ ab oībus sibi ex opposito diuidentib⁹ gen⁹ illud. Cōstat aut̄ q̄ gen⁹ p̄mū r̄ d̄ia p̄p̄riā rei c̄tēte in genē sūt em̄ infra se claudēt̄ totā eēntiā tal̄ rei. oē ḡ q̄ ad gen⁹ aliq̄d limitat̄. h̄z eēntiā totā infra certos t̄minos eēntie iclusa: r̄ p̄ oīs finitā r̄ limitatā. est autē de rōne cuiuslibet facti q̄ sit q̄d infinitū r̄ limitatū in eēntia. est itaq̄ simplr̄ dicēdū: q̄ si de⁹ nō pōt aliū deū facere: sic̄ i rei v̄itate nō pōt: etiā nō pōt aliq̄d facē q̄d sit infinitū r̄ illimitatū i eēntia. idē. n. videt̄ iudiciū de v̄t̄oz. Dis ḡ v̄sis v̄lteri⁹ cōsiderandū est: v̄t̄z infinitū s̄m quātitatē. r̄ p̄mo v̄t̄z infinitū q̄ntitate dimēsiua sit de nūero factibilū a deo: Et q̄ dē si dicat̄ h̄ eē de nūero eoz q̄ sūt deo impossibilia aut h̄ cōtingit: q̄z infinitas repugnet v̄l̄r ei q̄d ē. aut q̄z d̄dicit̄ enti creato. aut q̄z repugnet ei q̄d ē q̄ntuz aut q̄z repugnet enti nāli. nō ē aut̄ impossibile a deo fieri actu infinitū dimēsiōne: q̄z infinitas repugnat ei v̄l̄r q̄d est. Cōtingit. n. dare aliq̄d: q̄d ē q̄dē actu: r̄ est simplr̄ infinitū sic̄ p̄mū p̄ncipiū q̄d actu ē r̄ simpliciter infinitū ē. h̄ aut̄ eēt̄ impossibile si infinitas repugnat v̄l̄r ei q̄d ē actu. q̄. n. v̄l̄r sibi repugnat: i nulla nā p̄nt̄ diuicta iueniri. si aut̄ dicat̄ q̄ p̄mo entiu⁹ p̄ncipio repugnet eē infinitū dimēsiōne. appet q̄ p̄ h̄ n̄ra p̄batio nō tollit. nō enī iccirco repugnat p̄mo p̄ncipio eē infinitū dimēsiōne: q̄z sibi repugnat i finitas: s̄z q̄z ei repugnat dimēsiō. Ex h̄ aut̄ q̄ p̄mo eēndi p̄ncipio repugnat eē dimēsiōnatū. nō h̄et q̄z repugnet eē infinitū dimēsiōne magis q̄z eē finitum. Quin pot̄ si subtilr̄ cōsideret̄ appebit manifeste: q̄ magis repugnat eē finitū dimēsiōne: q̄z eē talr̄ infinitū. nā eē s̄m dimēsiōne finitū sibi ex duob⁹ repugnat q̄z ex rōne finitatis: r̄ ex rōne dimēsiōnatis. Repugnat. n. p̄mo p̄ncipio: r̄ eē q̄d finitū: r̄ eē q̄d dimēsiōnatū. infinitū aut̄ dimēsiōne repuḡt eīdē ex vno

n̄i: q̄z ex rōne dimēsiōnatis: r̄ nō ex rōne infinitatis. v̄l̄ r̄ si nō repugnaret tali p̄ncipio eē q̄d dimēsiōnatū repuḡret sic̄ dē tē ei eē finitū dimēsiōne: nō t̄n̄ sibi repuḡret eē talr̄ infinitū. Manifestū est igit̄ ex dictis: q̄ nō iccirco ē impossibile infinitū dimēsiōne a deo fieri: q̄z infinitas repugnet v̄l̄r ei q̄d est actu. Itē nō iō ē h̄ eīdē impossibile: q̄z infinitas videt̄ enti creato repugnare. p̄mo. n. de rōne entis creati siue p̄ducti ē q̄ nō sit actu p̄ suā eēntiā: sed p̄ p̄ticipatiōē eēndi ab alio q̄d cuiuslibet ouenit: ex eo q̄ h̄et eēntiā limitatā. Quicquid ḡ tollit ab aliquo limitationē eēntie tollit ab eo rōnē eēndi p̄ p̄ticipatiōē: q̄d aut̄ iā limitationē nō tollit: s̄z ponit: nō aufert etiā s̄z ponit rōēz p̄dictā. nē aut̄ ita ē q̄ limitationēz i eēntia tollit infinitas eēntie. cū eīz opposita h̄eant fieri circa idē: r̄ finitati oppōit̄ infinitas. oīz n̄ccio q̄ finitati eēntie opponat̄ infinitas eīusdē: r̄ q̄z v̄num q̄dōz oppositoz tollit p̄ suū oppositū: oīz de n̄ccitate q̄ p̄ infinitatē eēntie tollat̄ finitas siue limitatio in eēntia. Enti ḡ creato q̄ h̄z ex limitatione eēntie rōnē eēndi ab alio: repugnat infinitas i eēntia q̄ tollit p̄dictā limitationē. Cōstat aut̄ q̄ infinitas q̄ntitate extēsiōis nō tollit finitatem eēntie: q̄z ut dictū est v̄nū q̄dōz oppositoz h̄z auferr̄ p̄ suū oppositū. in finitas aut̄ extēsiōis nō opponit̄ finitati eēntie: sed finitati extēsiōis: cū sic̄ dictū ē: opposita h̄eant fieri circa idē: p̄ extēsiōis ḡ infinitatē tollit̄ t̄miatio extēsiōis: nō aut̄ tollit̄ s̄z ponit̄ limitatio eēntie p̄ talē infinitatē. q̄z p̄ h̄ q̄ aliq̄d ponit̄ siue sub finita siue sub infinita extēsiōe ponit̄ necessario eē limitatū ad gen⁹ rez māliū: ḡ manifestū ē: q̄ p̄ extēsiōis infinitatē nō tollit̄: s̄z ponit̄ rō: q̄ creato ouēit q̄ h̄eat eē acq̄sitū ab alio: nō igit̄ infinitas extēsiōis repugnat enti creato ex rōne q̄ sibi ouenit eē actu nō p̄ suā eēntiā s̄z p̄ p̄ticipatiōē. Itē ad rōēz p̄ducti p̄tinet q̄ si subfugiat cognoscibilitatē. s̄z nec etiā ista rō tollit̄ a p̄ducto p̄ infinitatē dimēsiōis. m̄lto. n. min⁹ v̄l̄ q̄ infinitū simplr̄ cadat i cognitōe alic⁹ q̄z infinitū s̄m q̄d. Cōstat aut̄ q̄ de⁹ cognoscit̄ simplr̄ infinitū. multo igit̄ magis etiā infinitū s̄m q̄d pōt a deo coḡsci. Infinitū aut̄ dimēsiōne nō ē simplr̄ infinitū s̄z q̄d: q̄z infinitū simplr̄ ē solū id q̄d ē p̄ eēntiā infinitū igit̄ infinitū magnitudie a deo coḡsci pōt. Infinitū cognitōi repugnat inq̄tū repuḡt nūerationi. nā p̄tes infiniti nūerare s̄z se impossibile ē: veluti d̄dictionē iplicās. coḡscere aut̄ aliq̄d p̄ nūerationē suā p̄tū: ē p̄p̄riū intellect⁹ cognoscētis successiue p̄tē p̄ p̄tē. nō aut̄ ē h̄ ipsi⁹ intellect⁹ sil̄ diuersa ut p̄tes app̄hēdētis. cū ḡ d̄in⁹ intellect⁹ absq̄ v̄lla successiue sil̄ diuersa imo oīa app̄hēdit. nō magis ipedit̄ infinitū coḡscē c̄tinuū q̄z finitū. Cōstat q̄ diuin⁹ intellect⁹ simul intelligit̄ actu semp̄ oīa q̄ pōt vnq̄z intelligē. aut̄ ḡ ē dare quātitatē aliquā dimēsiuā ita magnā s̄z finitā: q̄ de⁹ maiorē accipe r̄ intelligere nō possit. aut talē magnitudinē dare nō cōtingit. p̄mū autem concedi nō potest. multo enī vigorosior est diuin⁹ intellect⁹ i intelligēdo quolibet intellectu creato cū quēlibet i infinitū trāscēdat.

Questio

Non pot aut dari aliqua dimensio ita magna s; finita q nos no possum⁹ maiorē accipere vel intelligē. Multo g̃ forti⁹ dicēduz ē de intellectu diuino. Et cū ipse sicut p̃suppositū ē: q̃cqd pot vnq; intelligere semp̃ siml̃ actu intelligat: relinq̃t de necessitate q̃ sua actualis cognitio ad nullā dimensionē finite extēsiōis terminet. sub actuali g̃ cognitōe diuina dimensio infinita cludit. Et p̃ absurditas maxima ē credere q̃ de⁹ extēsiuā q̃titate n̄ semp̃ actu cognoscat sub omnib⁹ modis extēsiōis q̃b⁹ de sua nā extēdi pot. nō ē aut dare tot modis sed finitis ipam dimensiuā q̃titate extēdi: q̃ plurib⁹ q̃tnt̄ de se est extēdi nō possit vel extēsiōe de sua natura non patiat. Nec ergo dari pot q̃ de⁹ extēsiuā q̃titate solū sub finitis modis extēsiōis acceptam actu semp̃ intelligat. Reliquit ergo de necessitate dicendū q̃ ipse de⁹ benedict⁹ dimensionē infinite extēsiōis actu intelligere possit z actu cognoscat. apparet igit̃ q̃ta est absurditas z insipientia illius hoīs qui asserit q̃ de⁹ dimensionē infinite extēsiōis nullo modo pot intelligere. Judicat. n. homo ille de intellectu diuino fm̃ dōcōez z ex dōcōe intellectu sui. Et qz su⁹ intellect⁹ infinitū d̃p̃bedē nō pot: cludit h̄ idē esse z de intellectu diuino. p̃cedit aut ex h̄ vlteri⁹ ad asserendū q̃ tale infinitū in deo nō habet ideā. h̄ aut huic hoī ideo d̃tingit vt v̄r. qz credit q̃ idea extēsiue q̃tittatis sit q̃dā forā extēsiōi subiecta: posita in mēte diuina. q̃d totū est absurdū z alienū a fidei veritate. nec. n. aliud ē idea in rē q̃ ipa diuina eēntia imitabilis ab essentia creature: que sicut ē exēplar z similitudo cuiusl; nāe sub quolib; gradu suo accepte: sic etiā similitudo z exēplar est nāe ipsi⁹ extēsiue q̃tittatis sub quo cuiq; extēsiōis gradu d̃siderate. Et qz nunq; q̃tittas extēsiua pot d̃siderari sub tot finitis gradibus extēsiōis fm̃ quot oīo infiniti extēsiōis grad⁹ ei debet. nō ideo t̄m qz dicim⁹ q̃ diuina eēntia ē exēplar talis nāe sicut z cuiusl; alteri⁹: o; nos dicere q̃ extēsiōe aliquā patiat: qz manēs in sup̄ma simplicitatis arce idea ē vel exēplar oīm nāz. Manifestū igit̃ est ex dictis q̃ infinitū dimensionis extēsiōis non ideo repugnare pot ei q̃d est esse a deo p̃ductū subterfugiat diuinā cognitionē. Cognoscit. n. de⁹ suā eēntiā que est idea: vt dixim⁹ et exēplar sup̄mū omniū naturarū. Itē ad rationē p̃ducti p̃tinet q̃ sua excellētia non transcendat virtutē p̃ducētis. Duplici aut ex causa effect⁹ infinite extēsiōis q̃tittatiue pot dici transcendere virtutē agētis: aut videlz quia agēs est virtutis finite: aut quia in suū effectū p̃ suaz actionē successive p̃gredit. virtus. n. augmētatiua naturalis quia finita est ab infinito augmēto transcendit. qz etiā successive ipm̃ q̃tū augmētatur cū non in instāti p̃ducatur totaz q̃tittatē naturalē excellētis siue supatur ab infinita q̃tittate. est. n. de ratōe infinite q̃tittatē vt supra dixim⁹ q̃ accipiētib⁹ partē eius post p̃ter equalē semp̃: nunq; contigat venenire ad partē omnino vltimā. Itē aut cause penit⁹ secluduntur

a virtute diuina. deus enī z infinite virtutis est z totam rem pot p̃ducere in instāti. Quātitas ergo infinita ad diuinā virtutē relata non tollit illā rationē p̃ducti qua p̃ducto venit q̃ sua excellētia non transcendat virtutē agētis: non tollit etiā rōez qua creato debet q̃ non equat creati. Nam deus qui sol⁹ est creator iparū rerū est oīo infinit⁹ z illimitatus in essentia. illud v̄o q̃d est infinitū solū fm̃ dimensionis extēsiōis: vt supra ostēdimus in eēntia sua oīo finitū z limitatū est. Quod aut est illimitatū in eēntia in infinitū supat z transcendit q̃cquid est in eēntia limitatū. de necessitate ergo cludit q̃ in infinitū super a deo illud q̃d est infinitū dimensionis extēsiōis: non tollit etiā tale infinitū illā rōnē qua dicit venire p̃ducto q̃ finiat a virtute p̃ducētis. effectū. n. p̃puz finiri ab agēte nihil est aliud q̃ ipm̃ ab eo totalit⁹ d̃duci ad esse: sed infinitū fm̃ extensionē totalit⁹ p̃duci pot a deo in instāti. p̃ hoc aut non ponit nisi t̄miatio productionis: z t̄minatio eēntie in p̃ducto. Tales at t̄rminatōes nō tollūt p̃ infinitatē extēsiōis sicut apparet ex dictis. Euidēs igit̃ iam est z manifestū q̃ nō ideo impossibile est p̃duci a deo infinitū extēsiōis: quia infinitas sit rōem entis p̃ducti. Apparet etiā ex his que dicta sunt q̃ habere eēntiā limitatā z finitā: z habere infinitā dimensionis extēsiōis: nullā oīo implicat d̃dictionē. De rōe. n. oītis eēntiā limitatā est q̃ habeat vnā p̃fectōnem t̄m: siue q̃ h̄eat t̄m p̃fectōez vni⁹ generis: s; oīm sibi inuicē d̃dicūt. Nō aut sibi d̃dicūt h̄re solū p̃fectōem vni⁹ g̃n̄is: z h̄re p̃fectōem vni⁹ g̃n̄is infinitā. sic igit̃ h̄re eēntiā limitatā ad vnū p̃fectōis gen⁹: z h̄re dimensionis infinite extēsiōis sibi oīo n̄ d̃dicūt. Ladit igit̃ h̄ sub nūero eoz q̃ a deo sūt scibilia. Vlti⁹ aut manifestū ē etiā ex dictis z ex dicēdis q̃ nō infinitū extēsiōis ē deo impossibile: qz talis infinitas ei repug̃t q̃ ē q̃tū. p̄mo q̃dē qz ei q̃d de sua rōe vel nā ad nullū g̃dū extēsiōis d̄terminat nō repug̃t q̃ sub extēsiōe infinita p̃ducatur ab oīode infinita virtute. Quātitas aut extēsiua de nā z rōne sua non limitat p̄cise ad aliquē gradū extēsiōis. sibi igit̃ nō repugnat q̃ actu sub infinita extēsiōe p̃ducatur ab agente omnimode infinite virtutis cui⁹ est ipse de⁹. Itē. eē actu sine t̄miatio extēsiōis si repug̃at quātitati dimēsiue: non pot hoc contingere nisi vel quia termin⁹ talis consequit ipam eēntiā q̃tittatis. vel quia talis quātitas habz eē p̄ talē t̄minū ad min⁹ sicut h̄z eē mā p̄ formā. Primū aut stare non pot. Lū. n. eēntia dimēsiue q̃tittatis ind̄t̄ se h̄eat q̃tū ē de se ad stādū sub quocūq; t̄mino extēsiōis: impossibile est oīo q̃ tales t̄mi ipam d̄sequat. Ea. n. que d̄terminatā eēntiā d̄sequit finita z d̄terminata sunt. Secūdu etiā nō pot stare. Esse enī est act⁹ immediate ipsi⁹ eēntie habētis i se vel actū d̄ditiuū vel rōez act⁹ quidditatiui realis. v̄n̄ z si mā de sua eēntia nō essz potētia: sed realis actus d̄ditiuū: omni etiā subāli forā subtracta possz in seip̄a immediate recipe actū existēdi a deo

Constat autem quod quantitas dimensiva de sua et in sua eentia est quidam actus quidditativus realis. igitur omni etiam termino extensionis subtracto: poterit immediate in seipsa participare actu esse a deo: et sic per consequens poterit esse actu dimensio infinitate seu infinite extensa. Item esse est terminus correspondens terminabilitati ipsius essentie. terminus vero quo finitur ipsa extensio est terminus correspondens terminabilitati extensionis. Constat autem quod ipse terminus extensionis non est ipse esse dimensivus quantitatis. quia una et eadem dimensiva quantitas manens sub eodem numero actu existendi potest terminari diverso extensionis termino. et sic ipse terminus extensionis presupponit in dimensiva quantitate extensivam actualem et non e converso. Et quia id quod est prius hoc modo non dependet in eendo a posteriori: sed magis posteriora priori: concluditur de necessitate quod dimensiva quantitas esse actu non oportet dependere ab ipso termino extensionis: ac per consequens sibi non repugnat: quod virtute divina actu existat infinita seu non terminata termino supra dicto.

Et propterea sic ponere quantitatem infinitam extensam videlicet omnibus modis quibus extendi potest. id est quod ponere infinitum secundum esse: quod iam ostendimus cadere sub his que factibilia sunt a deo. Evidens igitur iam est quod infinitum extensione magnitudinis actu fieri a deo. non est impossibile: quia infinitas extensionis repugnet ei quod est quantum. Ulterius etiam non potest dici quod id tale infinitum non potest fieri a deo: quia dimensio non potest actu esse sine ente naturali: et infinitas tali enti repugnat. primo quidem quia et si naturaliter loquendo ipsa quantitas dimensiva sine virtutibus et qualitatibus naturalibus non possit actu existere: potest tamen sic esse virtute divina. Multo enim minus videtur quod possit manere actu sine priori: ut puta sine proprio subiecto a quo dependet quodammodo sicut a causa naturali: que sine posteriori a quo causaliter non dependet: fit autem illud virtute divina. quod et hoc potest fieri: ut videlicet quantitas dimensiva actu existat sine virtutibus et qualitatibus naturalibus. Non ostenditur igitur quod dimensio non possit virtute nature actu existere sine qualitatibus naturalibus poterit actu fieri dimensio infinita a deo. Et propterea si infinitas extensionis repugnet enti naturali. aut hoc est ratione materie: aut ratione forme: aut ratione motus aut ratione naturalium virtutum. non potest autem dici quod non potest fieri a deo ens naturale sub infinita extensione: ratione materie: quia videlicet nulla materia est in natura que fit in potentia ad infinitam extensionem. quibus enim in natura non invenitur actu talis materia: quia tamen deus non agit ex suppositione materie sed ipsam materiam simul cum tota re materiali producit. non potest hoc tolli quod deus producere possit materiam que fit in potentia ad infinitam extensionem simul cum toto materiali taliter infinito. Et propterea cum materia habeat esse per formam et non e converso: per formam est iudicandum de materia potest que per materiam de forma. Si igitur forme materiali non repugnet infinitas extensionis: manifestum est quod nec etiam materia repugnabit. Videndum est ergo utrum fore repugnet. non videtur autem quod sibi debeat repugnare nisi propter alteram duarum causarum. quia vel propter limitationem quaz

contrahit ipsa forma per esse acquisitum ab alio: vel propter limitationem quam contrahit ex unione ad materiam. Quia autem forma et quilibet res non contrahit nisi limitationem eentie ex receptio eendi ab alio: manifestum est quod propter tale limitationem sibi non repugnet nisi infinitas essentie talis autem infinitas ut. scilicet ostendimus non ponitur: imo tollitur per infinitatem extensionis. Ex unione etiam ad materiam non videtur forma contrahere nisi limitationem ad actum et operationes materiales et ad hoc ens. sed nec ista limitatio tollit per infinitatem extensionis: sed ponitur eo. in ipso quo forma ponitur stare sub extensione: siue finita siue infinita secundum actum. ponitur etiam de necessitate quod sit materialis et limitata ad actum et operationes materiales: et etiam ad hoc ens. Manifestum igitur iam est ex dictis quod infinitas extensionis non repugnat enti naturali ratione fore: nec etiam ratione materie. non potest etiam poni quod sibi repugnet ratione motus: quia neque cuilibet corpori naturali debet aliis motus: quia non potest competere corpori infinito. Quamvis de ratione corporis naturalis sit quod habeat in se principium determinati motus: non tamen est de ratione eius quod ubicumque et quocumque positum moveatur. Quod admodum de ratione corporis generis est quod in se habeat generatam que est principium motus deorsum: et ab hoc habet illud corpus quod sit determinatum corpus naturale. Non est autem de eius ratione quod ubicumque positum moveatur per illud principium sed solum quod positum in loco sursum tendat deorsum. locum autem sursum et locum deorsum non accipiuntur in universo nisi per respectum centri ad circumferentiam. et ideo necessarium est quod subtracta circumferentia subtrahatur. unde si terra ante circumferentiam fuisset a deo creata. quia non fuisset tunc dare locum in quo cogeret sibi motus moveri per sua principia nequiuisset: et si posuisset moveri a deo. hoc tamen non obstaret fuisset de terminatum corpus naturale propter gravitatem que sibi posite in loco sursum esse habet determinati motus principium: sicut etiam si deus terram infinitam creasset: haberet quidem in se generatam a qua diceret determinatum corpus naturale: non obstaret quod per ipsam ideo moveri non posset. quia infinita terra infra circumferentiam in loco sursum concludi non valeret: et tamen posset in suo spacio a deo moveri. apparet igitur quod nec ideo infinitas repugnat corpori naturali quia de ratione eius sit motus. Non potest etiam poni quod sibi repugnet ratione naturalium virtutum que de ipsa sua ratione habent quod limitate sint. non est enim de ratione earum quod sint limitate nisi si limitatio que est ad certum virtutum generum. virtutes enim naturalis alicuius entium naturalium non est quilibet virtus et quecumque indrinter: sed est una et determinata secundum naturam entis cuius est virtus. hoc autem limitatio non tollit: sed ponitur per infinitatem extensionis. si enim corpus grave ponatur sub infinita extensione: virtute sub illa extensione non poterit habere quancumque: sed materiam solum. et hanc non quilibet. quia non virtute levitatis: sed generatam tamen. hanc tamen habere poterit infinitam. Nam habere virtute unius generis tamen: et habere virtutes infinitam in suo genere: contradictionem non implicat. Manifestum est igitur quod infinitas extensionis: a virtutibus naturalibus non tollit illam limitationem que eis de ratione debetur. Est autem attendendum: quod si deus faceret duo corpora contra

Questio

riaz virtutū: vnū infinitū: z reliquū finitū: posset vtrūq; piter seruari a mutua actione z passione etiā in eodē spacio. z sifr posset duo corpa infinita pteq; finitū si haberet in se virtutē infinitā intensiue z nō extēsiue solū. haberet etiā ex sua natura q; posset in instanti in se cōuētere finitū: ut videt nō aut infinitū. Itē vtrūq; infinitū esset in eodem spacio infinito: cum tñ finitū nō possit infinitū spaciū occupare. Cōcludendū est igit; ex oibus supra dictis: q; nō iō infinitū extensione nō est factibile a deo: q; talis infinitas repugnat enti nāli: vl' quāto fm q; quantū vel enti creato: vel etiā q; infinitas repugnet vl' ei qd est. nullo g; mō dicendū est qd iō possibile est deo facere ens infinite dimēsiōnis. Ex h; aut statū habet q; etiā est ei possibile facē infinitū multitudine indiuiduoz vni⁹ spēi. multo enī minus videt; possibile esse vnū ens infinitū q; entia sic infinita multitudine qd tñ in se sit vnum qd; finitū: z p;cipue cū videam⁹ apte q; sub eadē spē pnt per successione accipi indiuidua infinita. Utz aut possit facere spēs infinitas multitudine: nō detmino ad pns: fm tñ ponentes q; facere potuit mundū ab eterno. videt; dicendū q; sic. si enim infuiti dies pcessissent diē hodiernā: potuisset de⁹ die q;libet spēm vnā pducere: z eam seruare: cum incōueniens sit: suā potentiā in pductione speciez terminari totalit; in aliq; die. z sic p; oīs eēt hodie spēs infinite multitudine. hec igit; oīa dicta sūt sine p;iudicio sentētie melioris. nō eiz audeo cū loquor de potētia dei auferre aliqd oīno ab ipsa. Est enī ipse ut ait beat⁹ ambrosi⁹: Venerabilis nature: inextimabilis potentte: imensus in numero: incomprehensibilis in opibus. Impat ipse nature nō possibilitati obtempat: nō mēsuras colligit: nō pond⁹ examiat. volūtas eius mēsurā rex est: sermo eius finis est opis. cū g; talis ac tant⁹ sit: quis timeat ei dicere: iō possibile tibi nihil est. Ad pmū g; argumentū incōtrariū adductū dicendū ē: q; infinitus infinitate eētie si deo equat: nō tñ sibi equat infinitū infinite quātūtatē cōtinue vel discōtinue.

Ad scdm dicendū: q; infinitū z si dicat puationem termini: nō tñ idcirco dicit vl' puationē act⁹ q; actus i pl⁹ se h; q; tminus: cū sit aliqs act⁹ oīno infinitus sen illimitatus. Ad tertū dicendū: q; nihil creatū pōt eē virtutis infinite simplr: q; nec etiā ipm esse pōt simplr infinitū. pōt aut esse infinitum in genere z habere p; oīs virtutē non simplr sed in genē infinitā. Ad qrtū dicendū: q; infinitum simplr sua virtute excellit infinitū in genere. z in genere infinitū supat id qd in genere eodez finitū est. supat aut infinitū simplr illud qd est infinitū in genē. nō qdē q; possit pducere infinitū simpliciter: sed q; pōt pducere infinitū in genere: z q; sua virtus extendit ad res cuiuslibet generis. Infinitū enī in genere nō se extendit ad res cuiuslibz generis: sed ad res generis sui tm. z sicut infinitus simpliciter nō pōt aliud simplr infinitus pducere nec tñ sequit; q; sibi equet; finitū in eodē genere

q; id quod finitū nō poterit pducere nisi in tpe: in finitum poterit pducere in instanti. Est enī diligēter notandū: q; cum quantitas de rōne sua abstractat a virtutibus actiuis quātuncūq; aliqd ponat infinitū infinite quātūtatē: nō est tñ iō necessarium q; ponat infinitum infinite actione virtutis p;cipue cum nec sit necessarium ipm habere aliquaz virtutē actiuā. Qñ ergo dī q; infinitū in genē hēt virtutē infinitam: nō est intelligendū simplr de infinito in genere quātūtatē. sed de infinito i aliquo genere actiuoz: cuius sunt infinitū calidū: z infinitum frigidū: z alia huiusmodi. Calidū aut tunc p; p;rie dī infinitum: qñ caliditate habet omnib⁹ modis quibus haberi pōt: quod p;pe loquendo ē habere caliditate infinite intensiue: z tale infinitum calidū finitum superat: modo predicto. Est etiam notandū: q; si vltorius sic arguat: nihil creatū potest creare effectū infinitū: ut cōcessum est. forma aut naturalis que est quid creatū causa quantitatis extēsiue est in corpe nāli: ergo nullum corp⁹ nāle habere potest quātūtatē infinite extēsiōnis. dici debet q; forma nālis nō potest eē aliquo mō causa effectiua infinite extēsiōnis. Uex tñ est q; sicut forma nō est cā effectiua sui ipsius: sic etiam nō potest p;pe dici causa effectiua dimēsiōnis z alioz accidentiū: que ad eius positionē in mā necessario ponunt: quin etiam potius ille qui effectiue formā ponit sub actu essendi: ponit etiaz in esse z omnia que ipsam necessario sequit;. si ergo de⁹ sit a quo forma ponit effectiue in eē a deo etiā effectiue ponit in esse z accūtia oītia formā. Et q; de⁹ ē simplr infinit⁹: reducef tē effect⁹ infinit⁹ i genē tāq; in cām in id qd est simplr infinitū. vex q; aliq; quā causalitate h; forma super accidentia ipsam sequentia: sufficit ad hanc causalitatem saluandaz ut in quacūq; pte māe ponit accidens sequens formam: ibi etiā ponat z forma. z p; sequens si infinita mā h; accūs ponit: necesse est etiā z formas subālē quā illud accidens sequit; poni in mā infinite extēsiua: ita tñ q; ibi ponat ab agente virtutū simplr infinite: cuiusmodi ē de⁹. z sic nullum incōueniens seqt;. Ad v. dicendū: q; infinitū simplr bene h; illimitatā eētia. nō aut infinitus i genē. z iō scdm pōt eē qd pductū ab alio: nō aut primūz.

Ad vi. dicendū: q; si duo corpa sifr in eodez loco poni nō pnt virtute: nec tñ pnt poni virtute dīna. Infinitū etiā pōt duplr considerari. vno quidez mō simplr z absolute fm qd infinitū. z sic nō pōt ab aliquo sui generis trāscēdi. omne enim quod aliq; quo sui generis trāscēdit ē de necessitate finitū in illo genere. Alio vō mō pōt accipi: fm qd cadit sub aliquo mō finitatis. z sic nihil prohibet q; aliq; quo modo trāscēdat. Vltorius considerandū est: q; maioritas p;pe dī excessum quo vna quātūtas excedit aliquā aliā. Quantitas enī maior illa p;pe dī que vna cū sit tm cōtinet quantū alia. z adhuc ampli⁹: ex quo euident; apparet: q; oīs quātūtas q; excedi pōt excessu maioritatis: necessario ē finita

si ergo ponantur duo continua infinita in eodem spacio virtute diuina, manifestum est quod unum non potest dici maius alio: cum utrumque sit infinitum. Ambo etiam non potest dici maioris quantitatatis continue quam unum ipsorum terminum: quia ut dicitur, est quantitas cui datur excessus maioritatis: ideo quod una manens excedat aliam. Illa autem duo continua infinita non sunt una quantitas continua: nec etiam sic potest addi unum ad aliud quod faciat unam quantitatem continuam maiorem: quia cuiusque sit talis additio: ideo necessario quod sit terminatum ad illam extremitatem in qua contingit a quantitate sibi addita. Nullatenus igitur duo continua infinita sunt maior quantitas continua quam unum continuum infinitum cum nec una quantitas continua sint: nec una fieri possunt modo predicto. due enim cubitales quantitates: et si non sint una quantitas: quia tamen potest fieri quantitas una excellens cubitali quantitate: potest convenienter dici esse maioris quantitatibus quam una cubitalis quantitas. sic igitur iam manifestum est: quod continuum infinitum sic simpliciter sumptum: a nulla quantitate transcendit. si autem accipiat ut cadens sub aliquo modo finitatis: sic nihil prohibet ipsum transcendere: hoc autem modo sumitur cum accipitur ut cadens sub certo et finito numero binario: duo enim continua numero binario mensurantur: et quia duo sunt plures quam unum terminum. ideo potest dici quod duo continua infinita sunt plures quam unum terminum continuum infinitum. Tria. n. continua infinita faciunt maiorem numerum quam terminum duo. His ergo diligentius consideratis appetit solo sexto argumenti: quod ex suppositione falsa processit.

Ad. vii. ob. quod illa non est ratio corporis vel sumpti: sed corporis finiti. Ad. viii. ob. quod si extra quolibet parte magnitudinis infinite dari possit alia pars: non tamen ideo concludendum est: quod ex omnes partes eius: et per omnes quod ex ipsa tota simpliciter dari possit. et ratio est: quia hoc quod dico quolibet pars: non dicitur acceptione maius partium simpliciter: sed unum terminum: et quia in infinita magnitudine non potest dari aliquid una pars ex qua iteque alia atque alia dari non possit. ideo verum est dicere quod ex quolibet parte magnitudinis infinite alia pars dari potest. Sed hoc quod dico omnes partes infinite magnitudinis dicitur apprehensionem infinitarum partium. Et vero partes infinitas in quantum habentur: non potest alie partes magnitudinis dari: et ideo hoc ex quolibet parte dari possit alia pars. non tamen ideo potest etiam dari ex omnes. unde ergo deficit argumentum per fallaciam figure dictionis: cum in ipso fiat transitus ab accipiente quod finitum ad accipiens aliquid infinitum. Ad. ix. dicitur: quod totum potest dici tam de continuo finito quam de infinito. cuius declaratio est: quia sic omne se habet a discreta: ita et totum ad continua. dicimus autem quod omnes species numerorum sunt quantitates discreta: et tamen species numerorum sunt infinite. Constat ergo: si ponatur contineri infinitum sub actu eandem: non obstante infinitate dici poterit: quod ipsum totum est actu exis. totum. n. non dicitur nisi apprehensionem omnium partium aliquid: quod quidem partes in re finita sunt finite et infinite in infinita: quod autem de perfecto dicitur quod finem includit. intelligendum sic est: ut per finem accipiat vel finis virtutis: vel opis: vel entis: vel extensiois. Et in infinito continuo dari potest inclusio finis: finientis entiam quod est ipsum esse. Item dari potest non quod dicitur terminum extensiois a quo extensio habet quod non sit in infinitum presens: sed potest ille a quo habet quod sit presens omnibus modis quibus potest dari: non obstante

igitur infinitate de qua loquimur: adhuc continuum infinitum potest dici perfectum. Ad. x. ob. quod et si infinitum non sit scibile scia quod totum aliquid cognoscitur per numerationem suarum partium: est tamen scibile scia quod sit diuersa et multa cognosci potest. Ad. xi. ob. quod si ponatur corpus infinitum: illud sibi derelictum esse immobile: non obstante quod ab alio: utpote a deo posset in suo spacio in tempore moueri: ut in determinatione dictum est. falsum ergo supponitur cum dicitur quod posset sursum aut deorsum moueri: et in instanti. Ad. xii. dicitur sine iudicio: quod si intellectus angelicus potest omnia simul cognoscere quod per unam speciem cognoscitur: non solum non est inconueniens et impossibile: sed est etiam necessarium quod infinita simpliciter cognoscere possit: si infinita per eandem speciem cognoscibilia simul actu ponantur. nam et si rerum generatio et corruptio fuisset ab eterno. infinita in diuidua sub una et eadem specie processissent: quod nunc intellectus angelicus omnia simpliciter cognosceret: ideo enim talis intellectus non sit simpliciter infinitus: est tamen infinitus et illimitatus secundum quod. et ideo etiam et si non possit apprehendere infinitum simpliciter: non tamen tollitur quod possit cognoscere et apprehendere infinitum secundum quid. quod est illud quod sub finita specie intelligibili apprehenditur. Ad. xiii. dicitur: quod quantumcumque de infinita diuidua et infinitas rerum species actu producere ponatur: sua tamen potentia tota limitari non potest. Ratio autem habetur est: quia nunquam per infinitorum etiam productionem ponitur aliquid produci quod non habeat entiam limitatam per esse receptum ab alio. omne autem tale infinitum distat ab eo quod entiam illimitatam habet. in infinitum autem distantia: semper alia et alia intelligi potest: quia igitur quantumcumque infinite species et infinita diuidua actu a deo produci ponantur: semper tamen ponitur in infinitum distare a deo. Evidenter concluditur: quod semper de alia mota producere possit. Quod autem infinita quantitate plures produci possit: iam declaratum est. Ad. xiiii. ob. quod in infinito corpore est infinita virtus et infinita entia: non quidem simpliciter et omnimode: sed solum infinite extensiois. Vel dicendum: quod virtus infinita simpliciter non inuenitur: nisi in eo cuius entia est simpliciter infinita in quo virtus et entia idem omnino sunt. virtus autem infinita in genere inuenitur in eo cuius entia est in certo genere infinita. infinita autem entiam in genere iam dicimus quod habet omnibus modis quibus habetur potest: quantumcumque entia substantie non suscipiat simpliciter magis et minus: sicut nec etiam forma subalis: comparata tamen ad actus et operationes ipsam consequentes: gradus diuersos habere potest. Sic igitur nunc mihi videri dicitur et ad quod est et ad argumenta. si autem appetit in hac questione aliquid de philosopho Aristotele. non tamen statim ob hoc falsum est iudicandum nisi prius appareat etiam esse theologicam veritatem.

Questio nona.

Questio nona est

Utrum quolibet locum a quolibet loco differat specie: Et vtrum sic: quocumque enim differunt forma: differunt specie: sed quolibet locum a quolibet loco differt forma. cum unusquisque locum distinguatur ab alio distinctione ordinis ad vniuersum qui est quid formale

Questio

in loco: g̃ ois locus ab oi loco differt sp̃e. P̃ for̃
nō pōt seipsa ab alia for̃ distigui nisi ponat diuer
sificationē in sp̃e. Cōstat aut̃ q̃ ordo ad p̃mū cōti
nens qui est q̃d formale seipso distinguit vt ṽr ab
alio ordine. g̃ distinctio ordis p̃dicti: ponit de ne
cessitate specificā distinctionē in loco. variat autē
p̃dict̃ ordo s̃m q̃libet indiuisibile: g̃ z loc̃ s̃m p̃ū
ctū sp̃e diuersificat. P̃ illud q̃d est oīno imobī
le tā videlz p̃ se q̃z etiā p̃ acc̃s nō pōt distingui ni
si distinctiōe specifica. loc̃ aut̃ s̃m Ar̃l. in q̃rto phy
sicoz: vult eē quid oīno imobile. ois igit̃ distinctio
localis est distinctio specifica. P̃ ois mot̃ ē de
ōrio in ōriū s̃m Ar̃l. in. v. physicoz: Cōtingit autez
de quolibz loco trāfire ad locū aliū: g̃ oēs loci sūt
ōrij: z p̃ oīs sūt sp̃e differētes: qz oīa ōria sp̃e d̃rnt
P̃ locatū in motu locali: semp̃ actu ē in aliquo
loco sibi eq̃li: z nunq̃z in duob̃ instātib̃ durante
motu est i vno z eodē loco: sed semp̃ i alio z alio
hoc aut̃ eēt ipossibile si loc̃ nō cōsisteret in indiuis
ibili. oē aut̃ tale sp̃e solū s̃z seipm̃ distinguit. igit̃
distinctio oīuz locoz est distinctio formalis z speci
fica. Incōtrariū aut̃ ē q̃ mot̃ specificat a t̃m̃io
ad quē. oēs aut̃ mot̃ deorsum sūt eiusdē sp̃e: g̃ et
oīa loca deorsum. nō g̃ oēs loci differūt specie.
R̃ndeo: ad hāc q̃ōez simplr̃ d̃. est: q̃ nō q̃libz lo
cus differt sp̃e a quolibet loco: q̃d pōt ad p̃ns du
plici via declarari. Et p̃ma quidē via sumit̃ ex opa
tione loci ad vbi: q̃d cōsequit̃ motū localē. Ad cuĩ
intelligentiā sciendū est: q̃ mot̃ localis directe tē
dit ad ip̃m vbi: q̃d sig̃t esse in loco. Quilibet enim
mot̃ ad id p̃pe tēdere d̃r q̃d p̃ ip̃m acquir̃: quē
admodū dealbatio tēdit ad albedinē q̃ acquir̃ p̃
ipsam dealbationē. z denigratio ad nigredinē filr̃
z sic est ṽr in singulis motib̃: q̃ q̃libet. s̃. mot̃ in
id tēdit directe q̃d acquir̃ p̃ ip̃m. nō acquir̃ aut̃
p̃ motū aliquid manens ex̃ mobile etiā post ipsaz
acquisitionē. sed aliqd̃ manēs in ipso mobili tāq̃z
in subiecto. H̃ aut̃ sufficiens declaratio est: qz ea q̃
sunt idē re: differūt aut̃ sola rōne: sunt etiā necessa
rio in vno z eodē subiecto. Mot̃ aut̃ z act̃ q̃ acq̃
rit̃ p̃ motū in re sunt idē: z in rōne differunt. actus
etenī rem suā simplr̃ z absolute dicit. Motus ṽo
dicit eandē rem stantē t̃ñ sub quadā acquisitione
cōtinua. Est. n. mot̃ act̃ entis in potētia: ut d̃r i. iij.
physicoz. Cōtinua aut̃ acquisitio act̃: nō ponit rē
aliquā in nā p̃ter actū qui acq̃rit̃: qz igit̃ mot̃ nō
est nisi ipsa cōtinua act̃ acquisitio. manifestū ē q̃
ipse in re nō ponit nisi actū qui acq̃rit̃ p̃ ip̃m. Et qz
ut dictū est: ea que ponūt vnā z eandē rem: sūt in
eodē subiecto. cōcludit̃ necessario q̃ in eodē subie
cto sint motus z act̃ qui acq̃rit̃ p̃ motū. mot̃ aut̃
nō est ex̃ ip̃m mobile: quin potĩ necessario ē i ip̃o
mobili tanq̃z in subiecto p̃po. In ipso igit̃ mobili
oz q̃ sit ut in subiecto: z actus q̃ p̃ motū inducitur
Et h̃ quidē loc̃ nō sit in ipso locato siue in mobili
locali: sed in corpe locante. ip̃m t̃ñ vbi ad minus
est p̃pe in ipso corpe locato: cui soli p̃pe conuenit
z eē in loco z locali moueri. ad ip̃m igit̃ vbi q̃d ē

in locato: z nō extra locatū p̃pe ac directe tendit
motus localis. z hoc p̃prie per locum localem
acq̃rit̃. ṽr z q̃ñ aliquid vadit ad suā naturalē lo
cum: d̃r etiā ire ad suū nāle vbi. z qz mot̃ z id q̃d
acquir̃ p̃ motū ordinant̃ in eodez genere: iccirco
p̃hs in. v. physicoz dicit q̃ mot̃ localis est motus
in vbi. His visis ṽterĩ est sciendū: q̃ act̃ q̃ acq̃
rit̃ per motū s̃m aliquid sui oz q̃ sit in toto motu:
s̃m ṽo totā p̃fectionē suaz debet esse solū in termi
no motus. Si enī aliqua forma sit q̃ s̃m nihil sui
cū motu remaneat in ipso mobili: s̃m ṽo se totam
inueniat̃ in termino motus: cuiusmodi est forma
subālis: z quicqd̃ cōsistit in indiuiduali: h̃ nullo mō
dici poterit acquiri p̃ motū: sed p̃ mutationē soluz
est enī oīno ōrōnem mot̃: q̃ secū nihil ponat de
actu qui p̃ ip̃m acquir̃. Manifestū ē enī: q̃ qui
cūq̃ est in cōtinua acquisitione vel acceptance ali
cuĩ act̃: necessario h̃z de actu in c̃ est acceptance
cōtinua. Implicat̃. n. apta d̃dictio: cū d̃r q̃ aliquid
cōtinue accipit aliquē actū: z t̃ñ cū ip̃m continue
acquir̃: nihil de ipso h̃z. Mot̃ aut̃ ut dictū ē: ni
hil aliud est q̃ ipsa cōtinua acquisitio vel acceptio
actus. Si igit̃ saluare velim̃ q̃ sit motus in vbi: oz
necessario nos dicere q̃ in toto vel cuz toto motu
locali maneat aliquid de ipso vbi: q̃d per dictum
motū acquir̃: ita d̃taxat q̃ cōtinue durate mo
tu p̃fectius ac perfectius habeat̃: donec deueniat̃
ad ip̃m totalit̃ completū. z sic infimul mot̃ termi
net̃. hoc aut̃ esset oīno ipossibile si ip̃m vbi in indi
uisibili cōsisteret. q̃d enī indiuisibile est: nō pōt p̃ri
mo acquiri s̃m aliqd̃: z postea s̃m aliqd̃: qz sic ne
cessario haberet partē z partē: z p̃ oīs esset diuis
ibile. Q̃d igit̃ indiuisibile est: statū cū incipit acq̃ri
acquisitū est totū. Si igit̃ ip̃m vbi per motū acq̃ri
rit̃: necessarium est q̃ quandā diuisibilitatē z la
titudinē habeat̃: ut sic dici possit q̃ nō statū cuz in
cipit acquiri est totū acquisitū: sed potius q̃d con
tinue per motuz magis ac magis acquir̃ donec
ipsa acquisitio cōtinua compleat̃. cū aut̃ ip̃m vbi
significet esse in loco: q̃ necessario diuersificat̃ ad
diuersificationē locoz: si locus in indiuisibili cōfi
stit̃: necessariū est q̃ in indiuisibili cōsistat̃ z ip̃m vbi
cuz ergo hoc sit ipossibile ut ostendimus. euident̃
cōcludit̃: q̃ ipossibile est etiā ip̃m locū in indiuisi
bili cōsistere: qz ergo tota rō p̃pter quaz ab aliqb̃
ponit̃: q̃ nō possunt inueniri duo loca eiusdē sp̃e
fit qz reputant locū in indiuisibili cōsistere: ex quo
oīndimus hanc radicē stare nō posse. apparet euī
denter q̃ ipsa etiā positio que supra talē radicem
fundatur: est oīno ipossibilis. ṽz aut̃ qz in toto
motu locali ip̃m mobile d̃r fieri i alio z alio loco.
Sciendum est q̃ forma que per motuz acquir̃
nunq̃z durante motu inueniri potest in duob̃ in
stantibus sub vno gradu sue nālis p̃fectionis: t̃nc
enī ipsa eius acquisitio esset necessario interrupta
vt pote si albedo maneat in vno gradu sue p̃fecti
onis ab vno instanti vsq̃ ad aliud instans in tpe
cadente inter illa duo instantia nihil oīno erit de

albedine acquisitū: quia si aliquid acquisitū foret facta esset de necessitate ipsa albedo perfectior: et per consequens nō mansisset in eodem sue perfectionis gradu. Si igitur ipsa dealbatio seu acquisitio albedinis cōtinuari debeat et nō interrumpi: oportet necessario quod ipsa albedo sic cōtinue fiat magis ac magis perfecta: quia nunquā dealbatione durante inueniri posset in duobus instantibus sub vno gradu sue perfectionis: sed in alio et alio. quantuncūque autē illi gradus perfectionis videantur esse alij et alij nō sunt tamen ita diuersi quod pertineant ad diuersas species sed necessario pertinent ad spēm vnā et eandem: ut puta ad spēm albedinis: que sola per dealbationes acquiritur. Est enim vniuersaliter de rōne cuiuslibet forme que inducitur per motū: quod in sua nā habeat latitudinē quandā cōphensiuā graduum diuersorum ad vnā et eandem spēm pertinentiū. Sicut autem de albedine dictū est: sic etiam si saluare volumus motū esse in vbi: oportet nos cōfiteri quod in toto motu locali ipsum vbi est aliud et aliud: quod sub alio et alio sue perfectionis gradu: et locus similis alius et alius propter alios et alios sue nature perfectionis gradus ad vnā tamen et eandem loci spēm pertinentes. Ex his autem magis habet quod possint esse plura loca eiusdem species quā tria. Ex quo enim latitudinē magnarum habet accipientes due illius latitudinis partes in quibus ponentur duo particularia locata: que erunt per consequens in duobus locis eiusdem nature seu eiusdem species. sic igitur cōpleta est prima via declarandi propositū: supra ex habitudine loci ad ipsum vbi: quod per motū localem acquiritur. Secunda autem via accipitur ex ordine ad vniuersum: qui dicitur esse quid formale in loco. Ad cuius intelligentiā sciendum quod relationes nullo modo diuersificantur: nisi ad diuersificationem et distinctionem rerum supra quas fundantur: ut in precedentibus questionibus dictū est. ideo enim similitudo paternitas et similitudo sunt diuersę et differentes relationes: quia fundantur supra res differentes seu distinctas. Et sic quidē quod res ipsa supra quam relatio fundatur in se diuersificationem patitur: relatio etiā supra eā fundata diuersificari intelligitur. Ponamus enim quod sint duo homines albi: vnus quidem albus perfecte: et alius imperfecte. ille quidem qui imperfecte est albus inquantū cum alio cōicat in albedine vici poterit esse quodammodo ei similis. inquantū vero participat aliquid nigredinis: erit perfecte albo dissimilis. Si autem ille qui est minus perfecte albus moueatur cōtinue motu dealbationis: donec peringat ad gradum albedinis in quo est aliud: erit continue durante dealbatione magis ac magis albus: et perfecte albo ex cōtinua magis ac magis similis: nec vnquā durante cōtinuitate dealbationis poterit inueniri in duobus instantibus in vno gradu perfectionis albedinis: aut in vno gradu similitudinis. Et quemadmodum quidem illi gradus perfectionis albedinis: cōtinuūque alij et alij videantur: nō sunt tamen ita diuersi quod pertineant ad species diuersas: sed spectant necessario ad vnā tamen: utpote ad spēm albedinis quod nō est nisi vna: sic etiā et illi gradus relationis: quod

tuncūque diuersi appareant: nihilominus tamen pertinent ad vnā et eandem relationis spēm: utpote ad speciem similitudinis fundate supra albedinē: que est vna species specialissima ipsius similitudinis. Est enim hoc vltimum: quod si res ipsa supra quam relatio fundatur: habet in sua nā latitudinē cōphensiuā multorum graduum eiusdem species: oportet etiā necessario et relationem fundatam super eā: habere in sua nā latitudinē quandā cōphensiuā diuersorum graduum ad vnā et eandem spēm pertinentiū. Manifestū est igitur quod distinctio et diuersificatio relationum: sequitur semper distinctionem et diuersificationem ipsarum rerum supra quas fundantur. Cum igitur ordo ad vniuersum nihil aliud sit quā relatio quedam ad vniuersum totū: vel ad primum continens. cōcluditur euidentissime: quod ipse nullo modo distingui: aut diuersificari potest: nisi ad diuersificationem et distinctionem eius supra quod fundatur. verum quod hic nō loquimur de quocūque loco sed solus de loco naturali vel physico cui formalis est nō quilibetque ordo: sed ordo physicus: cum quelibet naturalis et physica relatio supra aliquid naturale fundatur. oportet etiā necessario quod ordo predictus per suo fundamentum habeat aliquid naturale. Si autem velimus videre quod illud naturale sit: cōsiderandum est quod cum sit ordinem nature sumatur etiā ordo sit in partibus vniuersi. videmus enim quod ea que sunt altioris nature: sunt etiam in situ altius ordinata: et quod primum continens supremum est ordine nature et situs inter omnia physica: oportet necessario quod ex alia et alia distantia ab ipso: alia et alia naturalitas attendatur. vnde etiam videmus: quod quanto aliqua sunt nobilioris nature tanto sunt sibi propinquiora: tanto autem remotiora quanto natura ignobiliorē habent. nā et hoc necessarium est euenire: quod tanto. scilicet aliqua sunt magis nobilia: quanto propinquiora sunt primo mobili. Ad determinatā igitur distantiam a primo continente consequitur immediate determinata cōnaturalitas supra quam fundatur vnus ordo debet vniuersaliter determinate in vniuerso. Et quod ignis secundum nobilitatem nature: propinquus est primo continenti: supra omnia que sunt in spera actiuorum et passiuorum: iccirco sibi debet in vniuerso ordo fundatus supra cōnaturalitatem consequentem maximā propinquitatem ad corpus celeste. hō autem cōnaturalitas ad ignem primo inuenitur in superficie concava orbis lune. et propterea ignis immediate ordinatur in superficie illa tanquā in loco proprio. Et quemadmodum quidem totus ignis dicitur immediate locari in ista superficie: propter quod in ea primo inuenitur cōnaturalitas ad ignem. sic etiā si per partem superiorem ignis immediate per inferiorem accipiat: per se cōcepta erit locata tanquā in loco proprio in superficie vltima partis superioris: quod quidem superficies: si accepta fuerit ut actu diuidens vel distinguens partem inferiorem a parte superiori: erit actu locus inferioris partis. Si vero supra fuerit ut potentia tamen diuidens: erit etiam et locus in potentia sol. Quāuis autem superficies lune et superficies ignis sunt diuersarum naturarum: quod tamen in vna cōnaturalitate conueniunt utpote in cōnaturalitate ad ignem. cōueniunt etiam in vna rōne locatis. hec autem rō perfectior inuenitur in superficie concava orbis lune quā in superficie ignis et rō est: quod cōnaturalitas que requiritur ad rationem

Questio

locatoziā: attendit p̄cipue fm virtutē cōtinendi z saluandi naturā igneam: que quidē virtus: qz ab orbe supiori puenit: ex distantia ab ipso magis ac magis debilitat. p̄tendit autem cōnaturalitas p̄ dicta vsq; ad certam distantia ab orbe: postq; statim accipit cōnaturalitas ad aerem: que etiā p̄mo intuenit i concava superficie ignis. vnde z aer d̄r in illa superficie imediate locari tanq; i loco p̄po. non n̄ sola superficies est locus naturalis sed superficies sumpta sub virtute cōtentia z saluatiua alius cuius nature. sub virtute dico pueniente ab orbe sic etiā z cōnaturalitas ad aerem vsq; ad certā distantia a p̄mo cōtinente attendit. postq; statim sumitur cōnaturalitas ad aquam: z post ipsam accipit cōnaturalitas ad terrā. Quia ergo ordo qui dicitur esse quid formale in loco: ut ostensum est supra talem cōnaturalitatē fundat: oportet necessario dicere: qd nō diuersificet nec distinguat nisi fm diuersificationē z distinctionem ipsius. talis autem cōnaturalitas fm quodlibet punctū acceptum in directa distantia a p̄mo continente diuersificatur fm tamē diuersos gradus pertinentes ad cōnaturalitatē nō quidē diuerse sp̄i: sed vnius z eiusdem. Lota enī cōnaturalitas ad ignem est vnius sp̄i. oportet igitur de necessitate qd z ordo supra talē cōnaturalitatē fundatus fm quodlibet indiuisibile acceptum similiter variet. Et quia nō soluz quālibet variationē distantie sequit specifica variatio naturalitatis: sed fm certam z determinatā. relinquit etiā qd z specifica variatio ordinis nō sequat nisi certam z determinatā a p̄mo orbe distantia. Cum igitur locus naturalis a tali ordine sp̄m trahat. concludit de necessitate qd nō fm quodlibet indiuisibile sequit specifica variatio loci quin potius sumi possunt in alia z alia distantia ab orbe duo loca differentia quidē numero: sed conuenientia sp̄i: ut puta si in illa alia z alia distantia: sit cōnaturalitas ad vnam z eandē naturā: z ordo persequens vnius z eiusdem nature. Sicut igitur z per hanc secundā viam: euidenter apparet qd non omnia loca sunt differentia specie. z si necessarius sit qd quattuor ad minus sunt diuersarū specierū: fm qd quattuor nature sunt quibus p̄ncipaliter assignatur locus in vniuerso: videlicet ignis: aer: aqua: z terra. Ad p̄mū ergo dicendū: qd z si differentia formalis i formis cōsistentibus in indiuisibili faciat diuersitates in sp̄i. nō tamē omnis differentia formalis hoc facit i formis habentibus latitudinem cōp̄hensiuā diuersorū graduum: ad vnam sp̄m pertinentiū: de quaz numero est forma localis. gradus enī inferior albedis: z gradus superior ad eandē sp̄m pertinent. Ad secundū dicendū: qd cum forma sic solum distinguit a forma: sicut distinguit forma aliqua sumpta in vno gradu a seipsa sumpta i alio gradu eiusdem nature habentis latitudinē: nō autem ponit diuersitatē specierū. Ad tertium dicendū: qd id quod est ita immobile qd nec potest subijci motui: nec circa ipsum potest

esse motus: nullo modo pati potest in sua natura in diuiduale distinctionē. locus autē nō sic se habet quāuis enī ipse nō possit moueri: bene tamē circa ipsum potest esse motus: d̄r autē locus quantum ad id quod in ipso formale est immobilis esse: qz cum celum semp maneat in eodem ordine ad centrum In vna z eandē distantia necesse est puenire semp ab ipso vna z eandē cōnaturalitatē: z p̄ cōsequens vnu z eundē locale ordinē. Ad q̄rtū dicendum qd z si a quolibet loco possit esse motus ad alium locū: nō iō tamē necessariū est qd simplr z absolute sibi contrariet: sed solū fm qd accipiunt sub terminis motus oppositorū rōnum: in quantum videlicet vnus accipit vt terminus a quo: z alius ut terminus ad quem. Ad quintū iam responsum est i p̄ma parte determinationis.

Questio decima.

Questio decima ē

q celum sit in loco p partes: z maxima vltima spera: Et videt qd n̄ Lui enī p se cōpetit motus localis per se v̄r cōpetere locus: sed celo p se v̄r cōpetere talis motus z nō p partes: cū ps cōtinui moueat ad motū totū potū q̄ econuerso: ḡ celo cōpetit esse in loco p se z nō p partes. P̄ locus nō necessario mouet cum locato. ad motum aut vni partis vltime spera: necessario mouentur oēs ptes eiusdem: ergo vna nō cōtinet in alia sicut i loco: ergo nec tota spera dici potest hoc mō in loco esse p partes suas. P̄ corpus qd est in loco p aliud: o; qd sit in loco per aliqd per se in loco exis sed ptes vltime spera nō possunt esse p se in loco: qz eadē est nā totū spera z partū ipsi. z tota spera nō est p se in loco: igitur nec ptes ipsius: z p oēs nec tota erit in loco p ptes. P̄ qd est p se i loco p se etiā est p locū a pte in mō: sed ptes ipsi spera nō sūt p se: ḡ nec p se sūt i loco: z sic idē qd p̄us. Incontrariū ē qd Ar̄. dicit i. iiii. physicorū: qd celū nō ē alicubi totū: s; aut qd mouet sic z locū ē p̄tib; altera. n. ab alia habita p̄tū est: igitur celū est i loco p ptes. Ad h̄ qōnis intelligentiā sciendū ē qd motus localis sic h̄t in. v. physicorū est motus i vbi z ad vbi: quēadmodū z motus alterationis ē motus i q̄litate z ad q̄litate: z motus augmenti i q̄titate z ad q̄titate nūc aut ita ē: qd i quocūq; subiecto natū ē eē aliqd motus: i eodē etiā necessario aptū natū ē eē z id qd p illū motū acq̄rit. vñ i quocūq; natū ē eē motus alterationis: in eodē ē etiā apta nata eē z ipsa q̄litas q̄ nccio acq̄rit p alterationē. o; igitur de necessitate qd i quocūq; ente inuenit motus localis: i eodē inueniat z vbi: qd sēp p locale motū acq̄rit. cū ḡ i vltia spera inueniat localis motus: o; oīno qd i ea inueniat z ipz vbi. vbi aut s̄gt eē in loco. Infallibilr ḡ concludit qd vltia spera aliquo mō sit i loco. Hoc aut viso vlti sciendū ē: qd locū formalr v̄r nihil aliud eē q̄ ordo

determinat^o in vniuerso corpore. c^o declaratio est: qz
 quādiu mobile manet in eodem ordine talis vni
 uersi: d^r manere simplr in vno z eodē loco. statiz
 aut cū mutat ordinē d^r ē mutare z locū. vñ si na
 uis in flumine ligata stat fixa i eodē ordine ad vni
 uersūz q̄tūcūqz sup̄ficies aq̄ cōtinētis nauī mutēf
 p̄p̄t vnitātē tñ ordi d^r manere simplr i vno z eo
 dem loco. Si aut ipsa nauis ifima cū sup̄ficie vna
 cōtinētis aq̄ transeat de vno ordine ad aliū: q̄tūcū
 tunc nauis maneat in vna z eadē sup̄ficie cōtinētis
 aq̄: nihilomin^o tñ p̄pter mutationē ordinis d^r sim
 pliciter mutasse locū. h^o aut signū satis sufficiens vñ
 ad ostendēdū qz talis ordo sit formalr loc^o: qz enī
 forma dat esse z non mā: p̄pter aliā z aliā formā
 specificā: o3 qz sit aliū z aliud eē specificū: z p̄pter
 aliā z aliā formā nūeralē aliud z aliud eē nūerale
 z nō p̄p̄t māz. Ex his aut euidēt^r cōcludit^r qz cuiūcū
 qz fm se totū p se debet ordo determinat^o i vniuerso
 corpore: ei etiā p se debet z loc^o formalr sum
 ptus z p se ei debet vbi: p̄t figt eē in loco taliter
 accepto. z qz vltia spera p se ē i ordine determinato
 vniuersi corporalis: o3 necessario qz ei p se debet id
 qd est formalr loc^o. z filr etiā ipm vbi mō p̄dicto
 acceptū. vñ z dicim^o qz vltia spera fm se totā semp
 manet in vno z eodē vbi realr: ptes vō eius nō re
 manēt realr i eodē vbi: s3 durante motu fiunt cō
 tinue in alio z alio. His visis vlti^o cōsiderādūz
 est qz loc^o māli^o sumpt^o nihil aliud est fm opioez
 p̄p̄teticoz qz sup̄ficies vltia corpis ambientis
 aliud corp^o. sic aut sumēdo locū ei solū fm se totū
 p se debet loc^o cui p se cōpetit fm se totū cōtinēri
 sup̄ficie alic^o alteri^o corpis. z qz vltia spera s3 se to
 tā i sup̄ficie nulli^o corpis cōtinēt p̄p̄t id qd nāle cō
 tinens d3 eē nobilius z supi^o cōtēto. z nullū corp^o
 est supra vltimā sperāz: iccirco fm se totāz nō pōt
 eē in loco sic sumpto p se. Si ḡ aliquo mō i tali lo
 co ponat eē erit in eo solū p accidēs siue p aliud.
 Qd aut sit illud aliud p qd vltia spera ponit in h
 loco diuersimode d^r a diuersis. Quidā. n. dicūt qz
 ē in loco rōne centri: z nō rōe suaz partiū. Alii vō
 eōzio asserūt: qz est i loco rōne partiū z nō rōe cētri.
 qui aut volūt qz sit in loco rōne cētri: sex rōes p se
 adducūt: pbātes p̄mo trib^o rōnib^o: qz ipsa in loco
 poni nō possit rōne partiū: z postea trib^o alijs qz sit i
 loco rōne cētri. arguūt. n. p̄mo sic. ordo partiū i toto
 est oria cōtūtitatis: ordo aut partiū i loco ē p̄dicamen
 tū qd est sit^o. assigne igif locū alicui ex ordie partiū
 in toto: est ignorare quō differt pō qd est p̄dicamē
 tū a pōne qd ē oria cōtūtitatis. Scdo sic: q̄libet spere
 ps ē semp eidē spere p̄tib^o copulata mānēt i eodē
 ordie ad oēs ptes. si ḡ vltie spere loc^o assignet ex or
 die partiū cū cōtū ad illū ordinē nec tota spa mutet
 nec aliq̄ partiū ipsi^o: seq̄t oīno qz ipsa nec rōe sui nec
 rōe suaz partiū moueat localit^r: qd ē apte cōsēbilia
 Tertio sic: ea q̄ sūt i aliquo loco: aut sūt i eo actu
 aut potētia. ptes aut vltie spere nō sūt actu i loco:
 qz nō hñt eē distinctū: cū sint oēs cōtinue: sūt igif i
 loco sol potētia: ḡ z vltia spera nō ē in loco nisi in

potētia: qd ē oīno falsū: qz qd actu mouet localit^r:
 ē actu i loco. Itē cū tal potētia nō sit reducibil^r ad
 actū nisi p imaginatōez: vltia spera nō erit s3 h^o nisi
 in loco imagiato: qd ē oīno ipossibile. his ḡ rōib^o
 isti pbāt qz vltia spera nō sit i loco rōne partiū suaz
 Qd aut sit i loco p terrā pbāt. p̄mo sic: eo mō mo
 bili assignād^o ē loc^o: quo ei cōpetit mot^o localis. q̄
 ḡ mouent i aliquo debēt eē i loco: qz sūt i aliquo
 qd ē loc^o ipsoz: z q̄ mouent circa aliqd: debēt hñe
 locū: nō qz sint i aliquo: s3 qz sint circa aliqd. vltia
 aut spera mouet circa terrā: ḡ est i loco rōne terre

Scdo sic: ipossibile ē itelligere motū localē nisi
 si intelligat aliqd immobile: qz loc^o vult qd immobile
 eē: ut d^r in. iiii. physicoz: S3 vltia spera h3 immobili
 tatē ex fixationē terre vel centri: ḡ ē in loco p terram
 vel p cētr. Tertio sic: cuiuslibet mobili talit^r locus
 attribuēd^o ē qz p totū motū localē ipm mobile ali
 q̄lit^r mutet locū. sed h^o saluat i motu locali ipsi^o spe
 p terrā. nā in tali motu ptes ipsi^o spere vadūt cōti
 nue respiciēdo alias z alias ptes terre: tota ēt spa
 terrā totā vadūt respiciēdo cōtinue durāte motu
 sub alia z alia dispōne. est igif i loco rōne tēre. Ita
 sūt argumēta q̄ isti p sua pōne adducūt: quā dicūt
 esse pōne oīuz p̄p̄teticoz recte sciētū. S3 qz ista
 pō pcedat ex ignorātia scie p̄ncipis z institutoris se
 cte p̄p̄teticē facile ē vidē cōsiderāti ea q̄ dic^r i. iiii.
 physicoz Arl. qui fuit p̄dicte secte p̄nceps z institu
 tor. nā ibi sic ait: Celū sic dictū est nō ē alicui totū
 neqz in aliquo ē. c^o cām cōter assignās adiungit.
 siquidē nullū corp^o cōtinēt ipm. z postea statī ostē
 dere volēs rōne c^o: z p qd sit ponendū eē in loco
 dic^r s3 aut qd mouet: sic z loc^o ē p̄tib^o. altera enīz
 ab alia habita partiūz est: ne qd diceret h^o itelligēdū
 eē de ipsis ordinib^o z speris sub alijs cōstitutis: z nō
 de p̄tib^o ipsaz speraz adiūgit vlti^o. ptes. n. i loco
 quodā oēs sūt. si ḡ p ptes celi orbes itelligunt: o3
 tūc cōndere quō saluatis verbis Arl. vltia spera sit
 in loco: nō enī dict pōt qz spere iferiores ex eo assi
 gnen^r i loco ex eo qz habite sūt a spera supiori: q̄ si
 nō est i loco: qz sit habita ab alia spera supra ipsaz
 existente: est tñ i loco p centz. h. n. p ipsa vba Arl.
 ostendit eē cō ipsi^o intentionē: cū. n. dixisset: partes
 celi in loco quodā sunt oēs. statī seipm declarand
 do adiecit: In eo enī qz circularit^r sunt siue accipi
 unt cōtinēt alia aliā. hoc aut nullo mō saluari pōt
 si p ptes celi: sole spere itelligunt. est enīz z vltia
 spera de talib^o p̄tib^o celi: nec tñ cōtinēt ab alia spe
 ra. cū tñ Arl. dicat ptes nō quāsdā: sed oēs celi. id
 esse in loco: qz in eo qz circularit^r sunt continēt alia
 aliā. o3 ḡ qz h^o itelligat nō solum de partib^o celi q̄
 spere dicunt: sed de p̄tib^o ipsaz speraz que circu
 larit^r accepte oēs in loco sic sunt: qz vna cōtinēt ab
 alia. sic ergo positio p̄ncipis p̄p̄teticoz nō est: qz
 vltima spera sit in loco p centz: sed potius qz p p
 tes. Qd aut cō veritatē etiā sit dicta positio: multi
 pliciter ostendi pōt: p̄mo quidem: quia quando
 cūqz aliqua duo inter se sic se habent qz vnū ipso
 rum est in loco per se: z reliquum vō est in loco p

Questio

aliud seu rōne alterius eis ambobus correspōdet vnus et idem locus. nō enim alius locus debet ei quod est in loco rōne alterius: nisi ille tñ qui debet ei ratione cuius: et per quod ipsum in loco ponitur. si ergo vltima sphaera et terra ita se habent quod vnum ipsorum est in loco per aliud: ut puta ipsa sphaera per terrā: oportet tunc de necessitate dicere quod sphaera et terra sunt in eodem loco: ita videlicet quod ille qui est proprius locus terre: sit etiam locus vltime sphaere. Constat autē quod proprius locus terre est superficies concava aque. vltima igitur sphaera si non est in loco nisi per terram: ut illi ponit in suis scriptis. de necessitate oportet dicere quod ipsa sit in concava superficie aque sicut in loco et quod hoc solum loquendo proprie sit locus eius realis: quod est omnino derisorium et impossibile. Constat enim quod aqua et superficies aque in eodem sunt sicut in loco: ut puta in concava superficie aeris. aer in concava superficie ignis. et ignis in concava superficie orbis lune: et hoc in superficie concava orbis superioris et sic tandem donec deueniatur ad superiorem concavā vltime sphaere. vnde a primo ad vltimum deducendo superficies aque pariter cum ipsa aqua est tanquam in loco in ipsa vltima sphaera. Quicquid enim est locus locantis: est etiam et locus locati. vnde etiam pari ratione vltima sphaera est locus terre. si igitur ipsa est in loco per terram oportet de necessitate dicere: quod sit etiam non quidem per se sed per accidens siue per aliud in seipsa sicut in loco: quod stare non potest sicut patet per philosophum in quarto physicorum ubi demonstrat quod non est possibile nec per se nec per accidens aliquid esse in se ipso: sic itaque impossibile est quod celum sit in loco per terram. Secundo autem hoc idem sic ostenditur quandocumque aliquid est in loco per alterum quod est vere locatum est actu in illo alio ratione cuius ponitur esse in loco. anima enim est in loco per corpus: et est actu in corpore. et pars alicuius totius per se locati est in loco per summum totum: et est actu in toto: et accidens etiam in loco est per subiectum: et actu est in suo subiecto. et vniuersaliter verum est: quod id quod est in loco per aliud oportet actu esse in eo ratione cuius et per quod ponitur esse in loco. Si igitur vltima sphaera est in loco per terram vel per centrum: oportet omnino dicere quod ipsa sit actu in terra vel in centro: et quod sit actu terre vel centro coniuncta: quod est omnino impossibile: igitur omnino impossibile est quod vltima sphaera sit in loco per centrum. Est autem ipsa actu in suis partibus nam vnus modorum essendi inest quo totum esse dicitur in partibus suis. Si igitur illis partibus per se valeat dari locus: multo rationabilius vltima sphaera est ponenda in loco rōne suarum partium in quibus est actu quod ratione centri a quo est omnimode separata. dicere autem quod vltima sphaera est in loco per centrum: propter id quod centrum est aliquid vltime sphaere et ipsum est in loco est omnino ridiculum: cum sicut dictum est: ipsum sit omnino extraneum et separatū ab ipsa

sphaere natura. quod tamen de partibus eius dici non potest. quāuis autem et tota sphaera dicatur esse in partibus suis: et ipse etiam eius partes esse dicantur in ipsa non tamen ideo concludi potest quod vltima sphaera sit in seipsa: propter id quod non idem modus essendi in re seruatur hic et ibi. vnde et vltima sphaera est per accidens: et si non per se in locis suarum partium sicut in loco. hec autem loca si sint in ipsa sphaera non sunt tamen in ea sicut in loco nec per se nec per accidens patet igitur quod celum est in loco per partes suas et non per centrum. Et preterea vbi sicut supra dictum est significat esse in loco. cum autem queritur vbi sit vltima sphaera: nullo modo respondere potest: quod sit in centro: vel vbi est centrum: cum tamen conuenientissime responderi possit quod est vbi sunt omnes partes ipsius: ergo ipsa non est in loco per centrum sed per partes. Et preterea inconuenientissimum est dicere quod locans siue remotus siue propinquus sit in loco ratione eius et per id quod locatur in ipso. Cum igitur terra sit tanquam in locante ad minus remoto in vltima sphaera: omnino inconueniens est et irrationabile est dicere: quod ipsa vltima sphaera sit in loco per terrā. vltimū etiam quāto idem sic declarari potest materia et forma que vni et eidem rei correspōdet: nō debet vlla rōne spacio esse ab inuicē separata. ordo autem determinatur in vniuerso ut pluries iam diximus est id scilicet quod attenditur formalis rōne loci. superficies continens est in loco sicut materia. ordo igitur accipiantur cum vni rei correspōdere debet nō ut spacio ad se inuicē distantia: sed coniuncta: ut sic vbiusque attenditur ordo ibi etiam accipiantur et superficies ordini subiecta. ordo autem determinatus in vniuerso quod correspōdet vltimae sphaere nō potest aliquo modo attendi in centro: quia ibi attenditur solus ordo corripōdes infimo et ignobilissimo corporum: et non ille qui corripōdet corpori nobilissimo et summo: cuiusmodi est vltima sphaera. sibi etenim debet in vniuerso corpore ordo vltimae superioritatis qui nō in centro: sed in circūferentia solū attenditur: quod de necessitate ordo quod si ipsa vltimae sphaere corripōdet locum materiam sumptam siue aliquam superficiem continens: quod superficies talis accipiantur sub illo ordine summo quod est in circūferentia: et nō alibi. et quia nobilissimo corporum secundum se totū deuenire per se nō potest quod contineatur in superficie alicuius corporis cum vltima sphaera sit corporum nobilium: ordo necessario dicere quod ipsa secundum seipsam totā nō habeat locum sic sumptū. vnde quia omne corpus continetur per partes habet inuicē per superficiem continuatas quarum vna dicitur esse et contineri in superficie illa supra ut principium est partis alterius et dicitur in ea contineri tanquam in proprio loco. cum etiam vltima sphaera partes habeat hoc modo sibi inuicem continuatas per superficiem: ordo scilicet dicere quod vna illarum partium tanquam in loco sibi proprio contineatur in ipsa superficie ad quam terminatur: sumpta quidem nō scilicet quod est principium per aliam. sola enim talis superficies accipitur in ordine totius sphaere et partium ipsius: et nulla alia quae habere possit villo modo ratione locati vel vltimam sphaeram vel aliquam partem eius. Et siquidem superficies accipiantur ut actu distinguens vnā partem ab alia habet ratione locati in actu. si autem summat ut non distinguens actu: habebit solū ratione

locantis in potētia. que quidē potētia in corpibus gnābilib⁹ z corruptibilibus bene reduci valet ad actū. vey qz a corpe nobilissimo: quale est vltima spera: debēt eē oīo elōgate pegrine impfōēs: oꝝ nccio ipa nobilitate z pmitate vltime spere cogente: qz partib⁹ ipsi⁹ nō corūdeat supficies hñs rōez locātis in actu: sed solū in potētia nō reducibili sꝫ rem ad actū. Et omnib⁹ quidē partib⁹ vltime spere fm circulū sumptis talis loc⁹ corūdet. Ex quo euidentē liquet qz valde congrue postqꝫ Arl. pmi fit qz quedā sunt in loco actu: quedā potētia. z ex emplificās fm motū adiūxit. vna causa otinuū sit quod est simul partis fm potētia in loco ptes sint z deinceps adiecto. qz celū est in loco p accidens: qz p partes. statim adiecit. partes in loco quodaz omēs sunt. qd declarās vlti⁹ signāter dixit: In eo. n. qd circularitē sunt continet alia aliā. Et qz totū nō est pter ptes: sequit⁹ qz tota vltima spera sit ī loco rōe suarū partiū: nō ppter aliud nisi qz oēs ei⁹ ptes in loco sunt fm motū pdictū. Euidētissimuz igif iam est qz vltima spera est in loco p ptes suas: z nō p cētrū. Et obiectōes quidē aduersariū oꝝ qz friuole sunt de facili ostēdit. Qd. n. dicif qz ordo partiū in toto est oꝝa quātitatē. vey quidē est. sed cū dī qz ex hoc ordine vltime spere affigē locus: falsum est. z vel ex malicia vel ex ignorātia prolatus. assignat. n. ei poti⁹ loc⁹ si dicere liceat ex ordine partiū in toto sumpto respectu ordinis de terminati in vniuerso: qui ordo est formalr locus. Sitr etiā ex ordine priū ad iuicē sibi nō assignat loc⁹ nec forāl⁹ sumpt⁹. qz sic nō dī loc⁹ ille ordo: sꝫ ordo ad vniuersum. nec sumpt⁹ nāl⁹. quia sic dī ibi loc⁹ illa supficies p quā ptes otinuāt ad iuicē. Et q̄uis ptes a talib⁹ supficiēb⁹ nō remoueat: nihilomin⁹ tamē dicif mutare locū. qz nō remanēt semp in eodē ordine ad vniuersum. Et id q̄dez quod est formalr loc⁹ actu vltime spere debetur: nō rōne terre sꝫ rōne supficiē: sicut declaratū est: sicut etiā debet nccō cuilibz moto localr p se ipm id vō qd est māl⁹ loc⁹: pmo corpi nllō mō debet actu nec etiā potētia fm se totū: ptrib⁹ etiā ei⁹ talis loc⁹ nllō mō debet actu nisi forte imaginato sꝫ potētia nō reducibil⁹ sꝫ rē ad actū. z tñ illa supficies q̄ est māl⁹ loc⁹ nō ē superficies imaginata solū: sꝫ real⁹ z nāl⁹. Supficies. n. q̄ sunt in corpe imaginato sunt supficies imagnate: sꝫ q̄ sunt in corpe reali z nāl⁹: sunt supficies reales z nāles. Alia vō tria argumēta ex ignorātia artis sillogizādi pcedunt. Nō. n. cludūt qz vltima spera in loco sit p terraz vel p cētrū. Sꝫ poti⁹ terra vel cētrū sit loc⁹ ipius: sicut de facili patē pōt vtutē ipoz ofiderāti. veruz qz h⁹ etiā flm ē expedit vt declaref ipoz defectus. Ad pmiū ergo dicēdū qz circa aliud moto z pci pte cū ē pmiū in gnē corpuz fm se totū nō debet loc⁹ māl⁹ sumpt⁹. loc⁹ tñ forāl⁹ accept⁹ ē ille ordo q̄ attēdit supra z circa omia corpa sub ipō locata: rōe cui⁹ ipm dī positū supra z circa oia illa corpa Ad secūdū dicēdū qz loc⁹ formaliter sumptus

vult esse immobilis: z nō locus sumptus māl⁹iter vnde z ordo correspōdēs vltime spere in vniuerso immobilis pfeuerat. Sic ergo arguendū est. vltima spera semp in equali distantia respicit cētrū. quia ordo ei debitus in vniuerso mutari non pōt ergo talis ordo z non cētrū vel ordo centro debitus est locus ipius. Tertiū autē argumentū procedit ex puris affirmatiuis in secunda figura. Dicif enim qz mobile per totū suū localē motum debet diuersum vel diuersimode respicere locuz. vltima vō spera per totū suū motū diuersimode respicit terrā: z eius partes diuersas partes terre. hec autē est dispō secūde figure. vnde euidentē liquet qz ipsum procedit ex ignorātia logice. Ad pmiū ergo dicēdū qz cui per se competit localis motus: ei per se etiā cōpetit nccō z illud quod est nō māl⁹iter sed formaliter loc⁹. cui vō per se competit transire formaliter de loco sumpto ad locuz cōpetit ei etiā per se loc⁹ sumptus māl⁹iter. vltima vō spera fm se totam nō transit de loco ad locuz. manet enim semp in eodem ordine ad vniuersuz. Mouetur igif in suo loco vel ordine. partes autē ipsi⁹ per moduz totius transeūt de vno ordine ad alium: qui tamē in totius ordine includunt per se igif eis debet locus materialiter sumptus z non toti spere. Ad secūdū dicēdū qz loc⁹ sumptus formaliter nō mouet ad motū locati. locus etiam sumptus māl⁹iter si habeat ratiōem locātis ī actu nō mouet nccō cū locato: sed si habeat solū rōem locantis in potentia: necessario mouet ad motuz ipsi⁹. Ad tertiū dicēdū qz sicut eadē est natura specifica totius z partis: sic ex ratiōe illius nature idem locus debet toto z partibus. ex ratione tamē nō illius nature sed partialitatis competit parti per se qz continueat ab alia parte. Ad qrtū dicēdū qz cui per se conuenit esse in loco locante in actu: conuenit etiam per se esse. quod tamen ei nō cōuenit cui per se debet esse in loco habente ratiōem locātis in potētia. hec igif in his duabus qōnibus de loco nos diximus supposita de loco sentētia ab Arl.

Questio vndecima.

Questio vnde

q̄ cima. questū ē. Vtrū supposito vacuo in ipō possit esse motus: z supposito qz in vacuo aliquod graue descēderet: vtrū descēdet in instāti. Et videt qz nō. Primo quidē quia gūi⁹ pro tāto citi⁹ descēdit qz citi⁹ scindit mediū. citius autē scindit mediū min⁹ resistēs. cum ergo resistētie vacui nulla sit proportio ad resistētiā plenī: videt qz velocitas scissōis z pertransitiōis vacui nullā pportōem habeat ad pertransitiōem plenī. Cum igif hec fiat in tempore: illa erit in instāti. Secundo sic. Motus localis minus habet de transmutatione mobilis: q̄ motus ad formam.

Questio

transmutat autē materia ad formā in instāti sub-
tracta resistētia ad generās: sicut patz in illumina-
tiōe aeris. ergo z mobile graue vel leue: cum de se
nō habeat vñ resistat: subtracta resistētia mediij
mouebitur in instāti. Tertio sic. in motu locali
aut est resistētia ad motorē ex mobili: aut ex me-
dio: aut ex vtroqz. Sed in motu grauiū nō potest
esse resistētia ex mobili. quia per māz resistere nō
pnt: cum mā de se nō habeat vnde resistat. Non
pnt etiā resistere per formā. quia per ipam in suū
naturale vbi in quod mouēt a generāte poti⁹ icli-
nant. nō ergo in motu tali est resistētia ex mobili
sed solū ex medio. Cum ergo hec resistētia nō sit
in vacuo: o3 necessario ponere qd in ipō si moueā-
tur: moueant in instāti. Quarto sic. q̄ue in actu
nō est eēnliter in potētia ad vbi deorsuz: quia de
se id semp habet: sed in potētia per accidēs: quia
ratōe mediij prohibētis. hoc igif amoto: in instāti
erit deorsum. In cōtrariū est. quia tunc equali
virtute motiua manente: mobile pertrāsiret mai⁹
z minus spaciū. quod videt impossibile. Nō autē
in vacuo non possit esse motus sic fuit ostensum.
Motus ad formā est motus ad vbi z ad locum:
z si omēs forme essent eiusdē ratōis nō essz aliqz
motus ad formā. igif similiter nec mot⁹ ad locum
si oia loca sint eiusdē ratōis. sed sic est in vacuo.
ergo zc. Item Arl. in quarto phisicoz dicit qd
in vacuo nullo modo possit esse motus. ergo zc.

Respōdeo ad huius questiois intelligentiā cō-
siderandū est qd mobiliū quedaz qdem sunt que
habēt in seipsis sui motus pncipiū effectiuū: z ta-
lia sunt que dicuntur mouere seipa. alia vero sunt
que in seipsis pncipiū sui motus nō habent nisi
passiuū. cuiusmodi sunt illa que ex seipsis mo-
ueri nō possunt. de quozū numero sunt grauia et
leuia. de quib⁹ philosoph⁹ dicit in octauo phisico-
rum: qd habent in se pncipiū non mouēdi neqz fa-
ciēdi: sed patiēdi solum. Et quidez si loquamur
de pncipiū mobiliū: cum talia sicut dictuz est ha-
beant intra se pncipiū sui motus effectiuū: statim
cum ponūtur in esse vbiqz ponātur: siue in va-
cuo siue in pleno: ponitur vna cum eis z id a quo
progreditur motus ipozū tam effectiue qz etiam
passiue. z iccirco talia moueri possunt si actu exi-
stant: nō soluz per plēnū: sed etiam per vacuū. Si
autem loquamur de secūdis mobilib⁹ tunc aliter
est dicēdum. Cum enim talia vt predictū est in se
nō habeāt sui motus effectiuū pncipiū: non
oportet qd statim cum ipa in esse ponūtur: ponat⁹
etiā cum eis z id a quo effectiue mouētur. Et q̄a
sine tali pncipio moueri nō valent: iccirco oportet
qd talia moueri nō possunt in vacuo: si per ipsam
mediij vacuitatē tale pncipiū auferatur. Veruz q̄a
hoc qualiter se habeat in sequētibus questōibus
concedente domino declarabit. iccirco hoc pre-
termisso ad presens considerandū nūc est de pnc-
questo: videlz si graue descēderet in vacuo: vtpu-
ta: si lapis in concaua superficie orbis lune existēs

descēderet ad conuexū terre: supposita vacuitate
in spacio intermedio: vtrūqz descēderet in nō tpe.
Adhuc autem qdam volētes commētatores se q̄
in suis erroribus dicunt qd talis descensus esset in
vñico instanti temporis mensuranti motum celi:
nec fm tale instans esset ibi vlla successio. Nibilo
minus tamē vt inquit propter diuersas partes
spacij in illo descensu essent diuersa mutata esse:
inter que nō interciperet mediū aliquod mutari.
Hec autē mutata esse mensurarent fm eos diuer-
fis instantibus eis appropatis: inter que similiter
nō incideret mediū aliquod temp⁹. z q̄a ex nullis
indiuisibilib⁹ potest aliquod cōtinuū consurgere
iccirco cū illa mutata esse z illa instātia sint idiuifi-
bilia: nō pōt ex eis fieri aliq̄d cōtinuū: nec. s. mot⁹
nec etiā tps. nihilomin⁹ tñ volūt qd inter illa muta-
ta eē possz quedā successio pōris z posterioris at-
tēdi: cui fm ipos cōrēdet successio fm illa instā-
tia eis appropata: z nō fm instās tps mēsuranti
motū celi. Dicūt. n. z si sic fm instātia illa successio
nō iccirco tamē cludi pōt qd sit successio etiā fm
instās tps: q̄ illis oib⁹ cōrēdet. quēadmodū etiā
si nūc eēnitatis toti tpi cōrēdeat: z i tpe successio
fit: nō tñ ideo pōt cludi qd sit etiā vlla successio
z in ipō nūc eternitatē. Nō aut in illo descēsu sint
multa mutata esse vñico nūc temporis mēsurata
deklarāt per simile de illuminatiōe aeris in qua z
si sint multa generata esse: oia tamē vñico instāti
temporis mēsurant. hec igif est positio istorum.
Ratōnes aut quas p se adducūt sunt in obiectio-
nibus adducte. Sed qd isti in omnibus his valde
pueriliter deficiāt multipliciter ostendi pōt. Et vt
ex his valde que pro se adducūt pncipue ipozū de-
claref defectus considerandū est qd sicut in trans-
mutatiōe materie ad formā eo ipō inuenitur resi-
stētia ad agens quo ipi materie aliqua dispositio
inexistit opposita z repugnās dispōni inducēde
per virtutē agentis: sic etiā necessario o3 qd i trans-
mutatiōe mobil⁹ ad locū eo ipō inueniat resistētia
ad motorē quo ipsi mobili inexistit aliqua dispō-
opposita z repugnās dispōi inducēde per ipsam
transmutatiōem locale. nunc aut ita est qd dispō q̄
p motū locale directe acq̄rif in ipō mobili: dī esse
ipm vbi. Illa etiā que abicit est filr vbi illi oppo-
sitū z repugnās. Et h⁹ quidē declaratio est. qz illa
ncōo dicūt sibi iuicē opposita z repugnātia esse q̄
insil in eodē eē nō pnt. Illa vō vbi que pueniunt
ex diuersis pncipiū spacij: nullaten⁹ pnt filr eē i eodez
mobili. Nō est. n. possibile vnū z idē mobile siml⁹
hēre duo vbi: sicut nō ē possibile vnū z idē locatū
filr eē in duab⁹ pncipiū spacij vel in duobus locis. o3
igif qd talia vbi ex diuersis partib⁹ spacij pueniēti-
tia: sibi iuicē sint oio opposita z repugnātia: z per
oīs ncēm est qd in trāsmutatiōe mobil⁹ ad locū eo
ipō inueniat resistētia ad motorē quo ipm mobi-
le itelligit in alia pte spacij: qz in illa ad quā o3 p-
cedē per vtutē mouētis. nūc aut ita est qd i trāsmu-
tatiōe mae ad formā: ut etiā ipsi dicūt de ncitate

tēptis requiritur propter resistentiā ad agens pueni
 nientē ex dispōne inexistēte materie: p̄cipue cuius a
 sup̄remo gradu dispōitōis nō potest p̄cedi ad in
 fimū nisi p̄cedat p̄ mediū. o3 igit̄ dicit̄ dicere q̄ in
 trāsmutatōe mobilis ad locū de necessitate t̄ps req̄
 rit̄ p̄p̄t̄ resistentiā ad mouēs pueniētē ex vbi ier̄n̄
 te ip̄i mobili opposito vbi inducēdo p̄ locale trāsmu
 mutatōem p̄cipue cū ip̄m mobile nō pōt̄ transire
 de vna extrema parte spaciū in aliam extremā nisi
 trāseūdo p̄ mediā. Cū igit̄ graue sicut vlr̄ nullum
 corp̄ trāfire possit de loco ad locū nō trāseūdo p̄
 mediū: o3 de necessitate dicē q̄ oī plenitudie mediū
 subtracta: ip̄m graue si descēdēt a sup̄ma pte spa
 cij ad infimā: descēdat nō in instāti: sed in cōtinuo
 tpe. ¶. constat q̄ omne corp̄ replet̄ z occupat
 simul totū illud spaciū in quo ē i vno z eodē t̄ps
 instāti: vel etiā in quo in aliquo toto tpe immobi
 liter p̄seuerat. nō potest autē vllō modo fil̄ silitate
 t̄ps occupare nisi spaciū sibi equale. qz o3 semper
 q̄ quātitas spaciū equet̄ quātitati corp̄is spaciū
 occupātis. Si ḡ graue descēdēs a pte sup̄ma spa
 cij ad partē infimā p̄ ptes medias: quaz̄ quelibet
 pōt̄ intelligi sibi eē eq̄lis in vno z eodē instāti
 t̄ps est in p̄tib̄ oib̄ medijs z in pte infima: necō
 infil̄ silitate t̄ps occupabit multa spacia sibi eq̄lia
 z fil̄ tpe replebit spaciū sibi ieq̄le z multo maior
 corp̄is receptū q̄ sit ip̄m. qd̄ ē oīo ip̄ossible. igit̄
 oīo necō est si ḡue in vacuo descēdēt: ip̄m descē
 deret nō in instāti s̄ in tpe. z dicē d̄r̄ū apparet q̄
 est negare illa que sunt p̄ se nota intellectui. qd̄ n̄
 nisi ex ignorātia p̄p̄e vocis p̄cedit. ¶. si in descē
 su illo sunt multa mutata esse: vt cōcedere cogūf̄
 z cōfitem̄: aut sunt ibi actu: aut potētia. Si di. q̄
 ibi sint soluz̄ in potētia: tūc o3 necessario dicere q̄
 descēsus ille sit actu indiuisus: potētia vero diuisi
 bilis. omne aut̄ tale est cōtinuū. ergo ille descēsus
 successiua cōtinuitate cōtinuū est: z ē p̄ cōns mot̄.
 z qz oīo impossibile est motū mēsurari nisi tpe:
 o3 necō q̄ ille descēsus tpe mēsuref̄. Si at̄ dicat̄
 q̄ ibi sunt actu: tūc cum cuilibz̄ mutato eē in actu
 ip̄i mobilis cōm̄deat signū actu fiḡtū in spacio
 oportebit necō dicere q̄ graue descēdēs p̄ spaciū
 tot̄ signa actu fiḡt̄ in ip̄o: quot̄ in suo descēsu sunt
 actu mutata eē: immo quot̄ i ip̄o spacio possunt.
 quia nō est dare quare maḡ signet punctū i vna
 parte spaciū q̄ in alia: cum quālibet totaz̄ attigat.
 possunt aut̄ in spacio infinita p̄cta fiḡri. igit̄ ḡue
 descēdēs in ip̄o: actu ibi fiḡt̄: numerat̄: z dist̄in
 guit̄: z diffinita fiḡt̄: sed hoc est impossibile. ergo
 ip̄ossible est q̄ graue descēdēs per spaciū vacuū
 signet in potentia p̄cta que sunt in ip̄o: sed p̄cto
 fiḡto in potentia cōm̄det solū mutatū esse in po
 tentia ip̄i mobilis. igit̄ in descēsu grauis i vacuo:
 nō sunt illa mutata eē actu sed potētia: z per cōns
 ille descēsus est indiuisibilis f̄m actu: sed diuisus
 in potētia: z sic cōtinuus: z tpe necō mēsuratus
 Et p̄terea hec ē valde euidēs declaratio. aut eniz̄
 graue descēdēs in spacio vacuo: numerabit̄ actu

omnia signa que sunt potētiāl̄ in ip̄o: aut quedaz̄
 actu numerabit̄: z qd̄a potētiāl̄: aut potētiāl̄iter
 numerabit̄ oīa excepto illo qd̄ fiḡt̄ in pte ad quā
 p̄tingit vltimo. Et quidez̄ si omnia signet potētiāl̄
 excepto vno t̄m: erūt etiā necō in ip̄o eī descē
 su oīa mutata eē solū potētiāl̄: vno t̄m excepto: z
 p̄ cōns tot̄ ille descēsus erit cōtinuū z tpe mēsurat̄.
 Si aut̄ numeret oīa actual̄: cū illa sint infinita: se
 quit̄ apte q̄ infinita in instāti vno numerabit̄.
 qd̄ est oīo impossibile. Si vō alia signet actu: et
 alia solū potētia: cū sicut signo spaciū fiḡto in actu
 cōm̄det mutatū eē mobil̄ in actu: sic etiā mutatū
 eē mobilis potētiāl̄: cōm̄dere debeat fiḡto pun
 cto in spacio: nō actu s̄ potētia: oportebit necō di
 cere q̄ nullo descēsu ante mutatū eē in actu: sint
 mutata esse in potentia: z per cōns q̄ ex illa parte
 ip̄e descēsus sit indiuisus in actu z potentia diuisi
 sus: z sic cōtinuus z tēpore mēsuratus. Manife
 stum igit̄ est q̄ suppositis p̄p̄onib̄ necēarijs z no
 tissimis in scia naturali: o3 necō dicere q̄ si graue
 descēderet in vacuo: suus descēsus esset nō in in
 stāti sed in tpe. ¶. Ar̄. in. vi. physicoz̄: ex conti
 nuitate lōgitudis p̄bat cōtinuitatē z diuisibilitatē
 localis trāsmutatōis: nec ab ip̄a vnq̄ talis cōtinui
 tas z diuisibilitas tollitur saluata p̄batōe Ar̄. nisi
 possit fieri trāsmutatio de extremo ad extremū
 lōgitudinis: nō trāseūdo per ip̄am longitudinē.
 Lum igit̄ graue vt etiā ip̄i concedūt: nullo modo
 transire valeat ab extremo lōgitudinis ip̄i spaciū
 in extremū: nisi trāseūdo per longitudinē totam
 sublata etiā ip̄i spaciū plenitudine: op̄z̄ necessario
 q̄ trāsitio grauis in vacuo sit continua z diuisibi
 lis in infinitū: sicut z lōgitudō spaciū super quam
 transit: z sic o3 de necessitate q̄ fiat nō in instāti:
 sed in tēpore. Et p̄. similitudo que adducit̄ de
 illuminatōne aeris omnino nulla est. in ip̄a. n. ps
 aeris p̄us illuminata generat lumē in secūda pte:
 ita q̄ ibi sunt plura generātia z generata. qd̄ totū
 in vno instāti pro tanto simul fit: quia luminosū
 in illo instāti in quo id̄ cōtingit quod est luis susce
 ptiuū: lumē habz̄ in ip̄o efficere. z q̄a partes aeris
 omnes sunt actu se contigētes in t̄mino ad quez̄
 copulant̄. iccirco in eodem instāti in quo lumē
 recipit: habet ip̄sum reddere alteri parti cui tunc
 actu contingit. Non autē sunt ibi generata eē in
 finita. quia cum partes aeris f̄m quas generatur
 esse attendit̄ non sunt indiuisibiles sed diuisibiles:
 nō possunt vllō modo infinite esse aere finito exi
 stente. Quantū autē ad hec omnia dissimilitudo
 est de descēsu grauis in spacio nō pleno. Nō enī
 mutatū esse in tali mutatōe sicut vniuersaliter est
 in nulla trāsmutatōe locali attendit̄ f̄m aliquid
 diuisibile ip̄i spaciū: sed f̄m quid omnino indiuisi
 bile. indiuisibilia autē in quāto cūq̄ spacio infi
 nita sunt. Similiter etiā vna pars spaciū graue ac
 cipiēs: nō reddit̄ graue alteri parti. quia locus nō
 generat nec mouet locatum. Et dato etiā q̄ vna
 pars ip̄sum idem numero redderet alteri parti.

Questio

non posset vlllo modo ipm reddere sibi in vno et eodē instāti tēporis in quo ipm accipit: sed omnino in alio. quēadmodū etiā si pars aeris pmo illuminata eadē formā lucis in numero quā in se recipit transmittēt in partē secūdā: nullo mō i eodē instāti in quo eam recipit: ipam efficit in pte secūda: s; de necessitate in alio. vñū autē z idē numero graue: z p eandē virtutē motiuā p quā attingit ad primā partē spacij: ptingit etiā successive vt etiam ipsi fateri cogunt ad omnes alias: nō distinguēs vnā partē ab alia actu: sed potentia solū. Ex quo necio sequit̄ qd suus descēsus sit potentia diuisus z indiuisus in actu: z sic cōtinu^o z tēpore necessario mēsuratus. quēadmodū etiā z si eadē lux numero pueniēs ad partē primā: inde transfret successive z sine interruptōne ad alias partes aeris: fieret hoc necessario in tempore z nō in instanti.

¶ Aut inter illa mutata esse solū esset successio naturalis: aut alia q̄ naturalis. Si naturalis tñ: tūc euz illa inter que nō est successio prioris z posterioris nisi solū fm ordinē: sint simul similtate tēporis: oportebit dicere necessario qd omnia illa mutata esse sint simul tēpore in omnib⁹ illis partib⁹ spacij fm quas illa mutata esse accipiuntur. quod iam ostēsum est esse impossibile. oportz ergo oio dicere qd inter ipa sit alia successio q̄ naturalis. Non est autē dare aliā ab alia nisi tēporalē erit ergo in illo descēsu successio temporalis: z descēsus p sequeēs tēpore mēsuratus. ¶ Dicere qd tēpore nō mēsurat̄ quia nō reducitur in motū celi: ridiculū est. si. n. motus celi subtraheret z aliqd moueret per plenu: quantūcūq; tūc eius motus non reduceret in motū celestē: nihilomin⁹ tamen mensuraret tēpore. ¶ Quauis nūc eternitatis correspōdeat toti tēpori: hoc tamē nō est ratione sue indiuisibilitatis: sed rōne sue pmanētie. Quia enim tale nūc stat fixum semp vñū z idem: coexistere potest toti tēpori siue ipsi nūc fluenti: quod est nūc tēporis in tota sua fluxiōe accepta. s; nunc ita est qd p nūc tēporis nullaten⁹ stat: sed cōtinue fluit. impossibile est autē qd ipsum nūc fluens sub ratiōe vna sumptū: vtputa sub ratiōe pncipiantis fluxiōem: vel sub ratiōe terminātis tñ: coexistat duob⁹ nunc sibi inuicem succedētib⁹: qñ potius necessario oportz qd si vni illozū coexistit sub ratiōe stans pncipij fluxionis alicuius: alteri coexistat sub ratiōe stans termini terminātis fluxionē eandem. Luz igit̄ instātia correspōdētia mutatis esse que sunt in descēsu grauis in vacuo: vt ipsi cōcedūt sibi mutuo succedāt. z oportz necessario dicere qd si vni illozū correspōdet nūc tēporis vt pncipiās fluxiōem que in rei veritate tūc inicitur quando illud instans in actu ponit: alteri instāti correspōdeat vt termin⁹ fluxiōis eiusdem. Inter nūc autem tēporis sumptū vt est alicui⁹ fluxionis pncipiū: z sumptū vt est terminus finis fluxionis eiusdē: cadit necessario fluxus: z sic tēpus mediū. igitur inter nūc corruētia mutatis esse que sunt in

descēsu grauis in vacuo: cadit omnino tempus mediū: z p nūc ille descēsus necessario tpe mēsurat̄. Ultimo autē idē declarari pōt ex comparatōe spūalis substātie ad substāam corporalē. Ad cui⁹ intelligentiā cōsiderādū est: qd substāa corporalē in duob⁹ precipue q̄tum ad pns spectat: inuenit differre a substāa spūali. Nam substāa corporalis non cedit substātie spūali: qd potest secū in eodē vbi insimil esse. Cedit autē necessario vna substāa corporalis alteri substātie corporali. propter id qd oio est impossibile fm naturā duo corpa siml eē in eodē loco. Secūda vero vna est. qd substātia spūalis potest transire de loco ad locū: nō transeūdo per mediū substātia autē corporalis nullo modo transire potest de extremo in extremū nō pertrāsito medio. His autē suppositis euidenter ostēdit̄ propositū. Si enī tota cā p̄t quā in trāsmutatiōe locali gūiū z leuiū ē resistētia pueniēs ex plenitudine mediū: euz tal resistētia nō possit eē in p̄trāsitiōne spūal subē de loco ad locū. qz pōt sit eē cū substāa corpea vt cōsuz ē: ipa vt vñ in nō tpe de extremo i extremū poterit p̄trāsire maxie si ibi alia resistētia nō inuenit. Nūc autē i spūali substāa sic videm⁹ qd q̄tūcūq; vt dī ab aliqb⁹ trāsire valeat de extrēo i extremū in nō tpe. nihilomin⁹ tñ si d; sic eē i duob⁹ loci: qd cū ē in vno nō sit i alio: o; qd ibi sit tal successio qd in illo instāti t̄pis mēsurat̄ motū celi i quo ē i loco secūdo accepto: nllō mō sit i loco dēlecto. hec autē trāsitiō dicēt tūc p t̄to eē in nō tpe. qz i toto tpe p̄cedēte sic fuiss; in pmo loco: qd tñ in t̄mio solo illi⁹ t̄pis desinēdo ibi eē efficeret in loco secūdo. z qz t̄pis ē instās z nō tēp⁹: dicēt tūc necio illa trāsitiō eē facta in instāti: z nō in tpe. S; si debēt mō etiā p̄dicto eē in trib⁹ locis: viz qd cū eēt actu i vno nō eēt actu in alio: de necessitate in talib⁹ trāsitiōib⁹ oportēt req̄ri t̄ps. Nā z si in loco secūdo eēt i termino t̄pis vni⁹ loco pmo dēlecto: ex quo tñ ponit sic eē in t̄b⁹ loci qd cū ē i vno nō ē i alio: nllō mō eē poss; i t̄tio loco i eodē t̄mio t̄pis i quo efficit i loco scdo: s; fiet ibi de necessitate i alio: si v; successive debēt fieri vtrobiq; z qz in⁹ duos t̄minos t̄pis cadit de necessitate t̄ps mediū: o; tūc oio dicēt qd trāsitiō de pmo loco ad locū t̄tiu req̄ret t̄ps mēsurans motū celi: z nō soluz vnicū instās. nūc at ita ē sic p; ex scda sup̄pōe qd nullū corpū trāsire pōt de extremo i extremū nō p̄trāsito medio. z sic nllō mō d; pma pte spacij pōt effici in vltima nisi fiat i media z cū ē in pma fm se totū: nō est in media. z cum ē in media totū: nō ē in vltima. Ad trāsitiōez ḡ ei⁹ de pma in vltimā: duo instātia q̄ sunt duo t̄mini t̄pis mēsurat̄ motū celi necio req̄rūt: z p nūc t̄ps. z cū talis trāsitiō nō intrūpit̄ ex deuētiōe ad ptes medias quia ibi nō s̄stitur: o; qd continuet̄: z per consequēs qd tempe cōtinuo mensuret̄. sic igitur euidentissimū est qd graue nllō modo i aliquo spacio siue vacuo siue pleno pōt descēdē i nō tpe. qd etiā de quob; corpe est dicēdū: cū vñ nullū corp⁹ transire possit de loco ad locum nisi per mediū.

unde et sua transitio de necessitate aliqua continuitatem habet. sicut. n. totum aliquod corpus non potest transire de extremo in extremum nisi per medium: sic etiam nec aliqua pars quantitativa ipsi: quia omnis talis est corpus. unde si aliquod locatum transire debet de loco uno sibi equali ad locum alium immediate illi coniunctum: et etiam quod pars transeat de parte primi loci ad aliam loci alteri partes sibi equalis: et per omnes quod transeat per omnes partes medias inter partem loci derelictam et partem in secundo acceptam. unde primo acquirit partem partem primi loci continuam: et deinde eodem ordine alias. hec autem transitio si ullo modo interrumpatur: interrupti tamen non poterit in illo instanti in quo ponitur inchoata sed in alio. et quia inter duo tempus instantia cadit tempus medium: oportet necesse dicere quod talis transitio per aliquod tempus continetur. Ad primum ergo argumentum dicendum est quod medium magis resistens: aut habet resistantiam transcendere resistantiam mobilis ad virtutem movetis: aut tale non habet. Et quidem si tale habet: tunc habet retardare naturalem mobilis illius velocitatem: et per omnes tardius habet scindi ab illo mobili quam medium minus resistens. Si autem tale resistantiam non habeat tunc omnino nihil addit supra resistantiam mobilis adveniens et sic motum non habet in aliquo retardare: ac per omnes illud mobile equali velocitate movebitur per ipsum: et per medium subtilius: et per vacuum. quia cum supra resistantiam ipsius mobilis nihil addat manet semper virtutis movetis supra mobile equalis. propter hoc autem non negatur propositio per se nota quam potest concedi. Nam et si notum sit quod magis resistens: quantum est de natura sua tardius scinditur: est tamen cum habet etiam notum quod si nec in magis nec in minus resistente ex sua natura adiacet aliquid ad resistantiam mobilis ad movens: quod resistantia est utrobique equalis: et per omnes utriusque scissio eque velox. non dicitur etiam propter hoc aliquid contra mentem philosophi. quia et si ex illa ratione concludat quod ponentes vacuum debebant negare motum qui non potest esse in instanti. non propter hoc tamen intendit dicere quod si quae in vacuo descenderet descenderet in instanti: nisi supposita positione illorum qui vacuum ponebant. dicebant. n. vacuum debere poni ne motus impediat. unde totum impedimentum ponebant ex medio pervenire. subtracta igitur plenitudine medij: subtrahitur per consequens necesse secundum istam positionem et tota resistantia que in motu talium invenitur. hoc autem positum: quae si in vacuo descenderet: descenderet in instanti. in instanti autem motus esse non potest. Ratio autem philosophi est elctica et non demonstrativa simpliciter. Ad secundum dicendum quod in aere si esset positum aliquid luci contrarium: non posset in instanti illuminari. Et quia eodem modo quod grave intelligitur habere aliud ubi quam primum: habet aliquid positum oppositum ei quod est inducendum per localem transmutationem. igitur quantumcunque descenderet in vacuo: in ipso tamen in instanti descendere non posset. Ad tertium dicendum quod in motu gravium resistantia invenitur: non ex materia simpliciter: nec ex forma: nec solum ex medio: sed etiam ex eo quod quantumcunque: cum sit in ubi opposito ubi acquirendo esse intelligitur.

Ad quartum dicendum similiter quod grave in actu prohibetur actu esse in proprio ubi: non solum ex plenitudine medij: sed etiam ex actuali existentia in ubi illi opposito. non est. n. possibile idem locatum simul in oppositis ubi esse. Ad aliud dicendum quod et si in vacuo non sint virtutes naturales: sunt tamen virtutes imagine. hoc autem sufficit ad motum aelem et si non sufficiat ad motum elem.

Ad aliud dicendum quod philosophus intelligit de motu elementali naturali et de violento sibi opposito.

Questio duodecima.

Questio duode

q

cima est. Utrum tempus habeat aliquid esse in re natura. Et videtur quod non. quia quod componitur ex non entibus: ens esse non potest: tempus

autem componitur ex non entibus quia ex preterito et futuro. Quod. n. iam preteritum: amplius non est. quod etiam futurum est: nondum est ens. igitur tempus ens in natura non est. **S.** omne compositum: aut secundum se totum est si aliquo modo actu est: aut secundum aliquam sui partem. tempus autem neutro istorum modorum esse potest. quia sicut accipitur ex quarto philosophorum: de tempore nihil est actu nisi nunc. quod nec tempus est nec etiam est temporis pars. igitur tempus actu in natura non est. Si dicatur quod tempus quantum ad id quod est in ipso materiale: est in re extra animam. quantum vero ad id quod est sibi formale est in anima. Contra. forma est ratio essendi et non materia. si igitur quod est formale temporis non est nisi in anima: oportet dicere quod etiam tempus in re extra animam esse non habeat. **S.** id quod habet esse ex conceptione et per conceptionem anime: est ens rationis. si igitur tempus accipit suum esse ab anima: non erit ens nature sed ens rationis. In contrarium vero est quod propria mensura entis naturalis non debet esse quid rationis sed quid nature. tempus autem est propria mensura motus qui est naturalis res. igitur oportet quod aliquo modo esse habeat in natura rerum. Respondeo ad huius questionis intelligentiam quattuor ad primum precipue consideranda occurrunt. primo quidem quid sit tempus. secundo quomodo esse additum temporis commodeat. tertio utrum illud esse quod sibi debet habeat ex anima. quarto vero et ultimo in quo sit tantum in proprio subiecto. Quid autem sit tempus potest aliquantulum appetere ex distinctione ipsius ab eternitate et evo. Ad cuius intelligentiam considerandum est quod habet tria videlicet eternitas: eum: et tempus: sunt mensura ipsarum rerum secundum earum esse. Et quia mensura esse debet unigena mensurato: ut habet in. x. metha. igitur oportet quod secundum diversitatem in modo essendi ipsarum rerum differant iste mensura. Modus autem essendi rerum triplex in tota universitate rerum entium invenitur. Unus quidem qui est omnino immutabilis: et actu et potentia: qualis est modus essendi solius prime cause: cuius esse est totum simul separatum ab omni mutatione et mutabilitate.

Questio

Dicitur autem mensura siue mora dicitur eternitas que similiter sic est tota simul quod sibi nihil restat accipere dum. si enim in tali mora essendi aliquid accipere restaret: oportet quod etiam res que dicitur eterna expectaret aliquid de ipso esse accipere. et sic per consequens non haberet totum suum esse simul. que omnia sunt falsa. Quia ergo tale esse est totum simul carere omnino da successione: cum mensura proportionari debeat mensurato: oportet necessario quod etiam ipsa eternitas sit tota simul ab omni successione penitus elongata. Quia etiam tale esse est omnino simplex: oportet communi similiter quod eternitas que intelligitur esse mensura nullas partes habeat: nec simul stantes: nec sibi succedentes. Unde cum eternitas sit mensura omnino simplicis et indiuisibilis esse solum habet rationem continui ex consideratione intellectus nostri comparantis ipsam ad tempus successione continuam: et non ex natura sua ex qua habet quod sit mensura quantitatis essendi esse omnino simplici et uniformi ut dictum est. Unde et propter aliquid eternaliter esse idem est quod esse uniformiter immutabiliter: et sic per omnes sine termino. Alii autem modus essendi inuenitur qui est immutabilis quidem actu: mutabilis tamen potentia: qualis est modus essendi omnium incorruptibilium. Et huiusmodi mensura dicitur esse que propter actualiter immutabilitatem essendi necessio est tota simul. quia videlicet in esse euerterni nihil restat accipiendum. verum quia hanc immutabilitatem essendi tale ens acquirit ab alio potest cadere in non ens: si ipsius prime cause influentia subtrahatur. Quia tamen idem esse et totum quod ei in quantum influentia nunc sibi influunt et semper a sue productionis principio sibi influxum extitit. ideo ipsum nihil expectat de suo esse accipere quod non habeat. propter quod etiam in suo esse nullo modo successione habet. et quia ut dictum est mensura debet esse unigena mensurato. ideo circa necessarium est quod eum etiam quod est eius mensura sit absque illa successione. propter quod totum eum nihil aliud est quam nunc stans immutabiliter ab alio et indiuisibiliter non habens partem: sicut nec eternitas: nisi secundum intellectus nostri considerationem comparatis eum ad tempus et ad partes eius: quibus omnibus ipsius eum cum sit simplex et indiuisibile coexistit. Est igitur eum mensura quantitatis essendi sine mora in essendo esse simplici et uniformi: participato tamen ab alio. Tertius autem modus essendi est mutabilis actu et potentia: cuius mensura dicitur esse tempus quod propter actualiter mutacionem rei temporalis cuius est mensura non potest esse tota simul: sed est necessario succedens. quia videlicet in esse rei temporalis cuiusmodi est motus: semper aliquid restat ad accipiendum: et propter potentiam admixtam actu. quia motus est actus potentie permixtus: semper est fluens: habens partes continue succedentes. et in hoc differt ab eternitate et euo. quod sicut dictum est ipsa sunt mensura quantitatis essendi esse simplici et mutabili. tempus vero est mensura quantitatis essendi esse continue mutabili et fluenti: quale est esse ipsius motus. unde et in quarto philosophorum plus dicit quod tempus est me-

sura motus secundum prius et posterius. Ex hac igitur omnia et distinctio temporis ab eternitate et euo apparet aliquam qualiter quid sit tempus. Ulterius etiam ex hac statim apparet potest quale esse ipsi tempori correspondere quia. n. sicut dictum est. tempus est mensura quantitatis essendi vel mora in essendo esse successiuo: cuius mensura ut dictum est unigena esse debeat mensurato: oportet necessio quod ipsum tempus sit quoddam continuum successiuum: et per consequens quod taliter esse habeat qualiter habet esse ipsa continua successiuo. Continuum autem successiuo aliter habet esse quam ipsa continua permanentia. Continuum etenim permanentia esse habet propter suorum partium simultatem. Quia. n. partes talium simul sunt: sunt etiam ipsa tota. Continuum vero successiuum non habet esse propter simultatem suorum partium: quoniam potius nullo modo habere potest partes in simul stantes. Si enim partes eius in simul essent: iam non esset continuum successiuum sed permanentes. habet autem esse propter actualiter suorum partium ordinem. fundatur autem hic ordo in aliquo continuo fluente. unde quod diu manet actu hoc continue fluens: manet etiam actu continua successio vel fluxio propter ordinem viz continuum fluxionis iam facte ad eam que succedit. Hoc autem continue fluens dupliciter sumi potest. Uno quidem modo secundum quod sua fluxio continua inchoat et continuatur motus: et sic dicitur mobile. Alio vero modo sumi potest secundum quod terminatur prius et posterius in ipsa successione sua duracione: et sic dicitur nunc fluens. quia fluxu suo continuo facit tempus. Unde sicut tempus se habet ad motum: sic etiam et nunc tempus inuenitur se habere ad mobile. tempus autem se habet ad motum quod magis quidem est idem secum. formaliter tamen ab ipso differt. quia motus dicitur putari est actus mobilis: sed vero quod in eo attenditur prius et posterius sumitur ab ipso ratione temporis. Oportet itaque considerari quod ipsum nunc tempus sit idem realiter cuius ipso mobili: dicitur tamen ab eo secundum rationem. prout. n. ipsius fluens accipitur ut subiectum motui dicitur mobile. secundum autem quod sua fluxio terminatur: inchoat vel continuatur prius et posterius in illa successiuo duracione dicitur nunc. unde et quemadmodum ipsum fluens sumptum sed quod dicitur mobile est continuatiuum motus: sic etiam acceptum sed quod appellatur nunc est continuatiuum temporis. et propterea sicut quia ordo partium fundatur in ipso mobili fluente et eo ipso motus dicitur esse quo est ipsum mobile continue fluens: sic etiam quia ordo partium temporis fundatur in ipso nunc continue fluente: eo ipso tempus aliquo modo est quo est ipsum nunc continue fluens. Sicut ergo quia mobile continue fluens est: motus est. sic et quia est fluens nunc continue: est etiam et tempus: quod est mensura et passio quedam ipsius motus. Hoc ergo visum ulterius ad intelligentiam eius quod fuit tertio loco propositum considerandum est quod motus cuius mensura est tempus nihil aliud est quam quedam mutatio mobilis a priori in posterius. In hac autem mutacione que est motus tria est considerare. Primum est ibi considerare ipsius mutacionis continuacionem qua non cessat fluxio eius nec sistit nec deficit. Secundo vero ibi possumus considerare discretiones partium motus a termino medio continuante.

Tertio autē est in motione illa cōsiderare vtrūq; illozū simul. s. q. partes ei⁹ stinuate sint fm rez ad id quod instat de ea: z q. discrete fm rōem pōzis z posterioris. Et primo quidē modo motus considerat vt quid continuū: z est solum in re cōtinue mota. Secūdo vero modo accipit vt discretū: z ē in conceptōe aie tñ. ppter id q. discretio partium motus a medio termino cōtinuante: nec est in re extra: sed solū format eam aia. Tertio autē modo motus accipit vt discretus in cōtinuo z est partiz in aia z partim in re extra. Cum ergo temp⁹ sicut dictū est cōsequat motū vt quedā passio ipsi⁹ poterit etiā ipm cōsimili modo tripliciter considerari. Primo. n. cōsiderari pōt vt cōns motū fm ppriam ei⁹ cōsideratōem: z sic temp⁹ est quid cōtinuū sicut z motus: z est realiter solū in re extra. In aia vō nō est nisi sicut in cognoscēte p suaz similitudinē. potest tempus iterū accipi vt cōsequēs motū secūdo modo cōsideratū. z sic est quid discretū nec est nisi solū in anima. cui⁹ ratio est. quia preteritū p̄sum ab instanti p̄nti z nō copulatū ei nō est pl⁹ in rerū natura: est tamē in cōsideratōe ipsius anime. Similiter etiā ē z de futuro. quia futurū precisus a presenti nūc z nō copulatū sibi nondū est. z sic probat a pho in quarto phisicoz q. temp⁹ nō est quia viz partes eius nō sunt entes: z ex partib⁹ nō entib⁹ nullū cōstituit stinū. Si autē tempus accipiat vt cōsequēs motū tertio modo sumptū fm. s. q. ipse motus cōtinuatōem habet suarū partū p̄terite videlz z future: z cum hoc pariter discretay fm ratōem pōzis z posterioris respectu instantis medij cōtinuantis: accipiet tūc tempus fm perfectam ratōem tempis. Ratio. n. successiōis cum sit formaliter in ipa ratōe prioris z posterioris: z nō in sola ratōe continuatōis ppter id q. cōtinuatō cōuenit nō solū successiuis sed etiā permanentib⁹. Et tempus quidē isto modo acceptū est partiz in anima z partim in re extra. Nam ex ea parte qua est imperfectū z vt māle est in re extra animam. Ex ea vero parte qua perficit formalis ratio eius est in mētis cōceptu z sine anima esse nō pōt. Ergo visis ad pleniorē intelligentiā questōis vidēdū est aliquid de eo quod fuit quarto loco ppositum: in quo videlicz tempus esse habeat tanq; in subiecto. Ad cui⁹ intelligentiā cōsiderandū est fm q. aliqui dicūt q. z si tempus sit mēsurā cuiuslibet motus: nō tamē est passio motus cuiuscunq; sed solius motus primi mobilis qui est p̄m inter omnes motus: z quia omne accidēs in eo ē tanq; in subiecto pprio cui⁹ est passio ppria: cōcludit fm eos q. tempus sit tanq; in subiecto pprio solum in motu primi mobilis. vnde cum motus prim⁹ non sit nisi vnus numero tñ: sequit euidēter q. tempus non sit nisi vnū numero. Nam ex vnitāte vel multiplicitate numerali ipsi⁹ subiecti sumēda est vt dicunt numeralis vnitāte vel multiplicitas accidēt. Si autē tempus esset in motu cōiter sumpto sicut in subiecto z cōsequeret omnē motū: tūc sicut est

multiplex motus: sic etiā esset multiplex tempus vt dicūt. quod est omnino falsū. Sed forte ppter debilitatē mē intellectus hoc nō videt mibi sufficēter dictū. Cum enī vt ipsi dicūt z etiā p se assumunt multiplicato materialiter subiecto multiplicet etiā materialit z accidēs subiecti: si temp⁹ tanq; in subiecto pprio est in motu primo: oportet necessario dicere q. z si motus prim⁹ multiplicaret multiplicaret etiā z tempus. quod est oīo falsū. Nam quotcūq; mūdi essent z quotcūq; celi z quotcūq; prima mobilia z primi motus: ipm tñ tempus semp esset vnū solū numero z non plura. igit omnino falsum videt q. tempus tanq; in pprio subiecto sit in motu p̄mi mobilis. z iccirco absq; p̄iudicio sentētie melioris dicendū videt ad p̄ns donec deus aliter dederit q. tempus consequit oēs motū z est in motu cōiter sumpto sicut i subiecto nec ideo tamē multiplicat ad motū multiplicatōnem. Ad cui⁹ intelligentiā cōsiderandū est q. si tempus esset in motu simpliciter sumpto vt in p̄po subiecto: necō tūc videt debē multiplicari multiplicato motu. Si autē esse tanq; in subiecto ponat fm suū esse cōpletū: nō quidē in motu simpliciter sumpto sed in motu accepto per animaz subratōe simplr vna fm omnes motus tūc quantūcunq; motus multiplicet nihilomin⁹ tamē ppter vnitātē illius ratōis in qua motus singuli vniūf: z fm quē motus accipit ab anima vt subiect⁹ tpi ipm tempus manebit omnino idēz z vnū numero nō multiplicatū multiplicatōne motus. Nunc aut ita est q. oīs motus simpliciter sumpt⁹ est quid māle respectu tpi sumpti sub esse suo cōpleto. et iccirco multiplicato motu: etiā multiplicari videt mā tpi. Quia tñ mot⁹ simplr sumpt⁹ nō ē immediatū subiectū tpi: sed mediāte rōne pōzis z posterioris in ipa successiōe. iccirco dici pōt q. cōtinuūcūq; mot⁹ sit simplex ppter illā tñ ratōnem vnicā mātr fm oēs mot⁹ qua mediāte mot⁹ ab alia accipit tpi subiect⁹ z ex qua temp⁹ ab aia suū accipit cōplemētū: manet ipm temp⁹ vnū numero z nō multiplex. semp. n. ita ē q. quicūq; aliqd ab aia suū recipit cōplemētū ppter aliquā rōem in re ex fundat si illa rō multiplici fuerit: multiplex etiā cōplemētūz ab aia dabit ipsi rei. Si autē ratio extiterit vnicā: tūc cōtinuūcūq; res multiplicet in quib⁹ illa rō fundat. ppter vnitātē tñ rōis nō dabit rei ab aia nisi vnicū numero cōplemētū: z erit p̄ns res cōpleta vna numero tñ. Nūc aut ita est q. tempus accipit ab aia suū cōplemētū ppter ipam rōnē supradictam in motu fundatā: que est vnicā tñ. Accipit igit tempus vnū numero cōplemētū: z est p̄ns tempus ppe sumptū vnū numero tñ z nō multa formaliter: cōtinuūcūq; mot⁹ qui est mā tpi sit multiplex. Sicut aut est de tpe: sic etiā est de ipso nunc qd est p̄ncipiū tpi. sicut. n. tempus cōsequit motū: sic etiā z nūc videt cōsequi mobile. qz tñ nō cōsequit mobile nisi sub rōne vnicā fm oīa mobilia: iccirco cōtinuūcūq; multiplicet ipsa mobilia siue prima siue

Questio

secunda: nihilominus tamē ppter vnitatē ratōnis illi in qua cūcta mobilia vniunt: ipm nūc manet vñū numero tpe tñ. Nō. n. mobile aliqd dī nūc: nisi sumptū vt terminat z cōtinuat p̄us z posteri in successua duratōe: que rō oīo vnica est. vnde si eēt plures mūdi: z plura p̄ma mobilia: z plēs p̄ nīs mot' p̄rimi: z duo mot' p̄riculares sil fierēt z simul finirent q̄tūcūq; nūc p̄ma mobilia essent multa: nihilomin' illi mot' simplr dicēnt eē i vno z eodē numero nūc terminati. Hoc aut ali' sustineri nō pōt nisi dicēdo ipm nūc consequi mobile cōiter sumptū sub rōe vnica fm oīa mobilia p̄p̄t quā nō oī ipm multiplicari multiplicatis mobilibus. Sciendū est aut q' q̄uis tēpus mēsurā fit oīs motus z oēm motū sequat modo p̄dicto. q̄a tñ mīmo sui generis oīa mensurant. iccirco cum motus p̄mi mobilis fit mīm' fm tēpus inter oēs alios eo q' est velocior inter oēs ex tpe sibi applicato certitudinē accipim' de quātitate ipsius t̄pis fm q' oīb' alijs motib' correspondet. Ad p̄ma aut duo argumēta iā in determinatōe r̄sum est.

Ad tertū dicendū q' z si māle nō sit rō eēndi simplr: est tñ rō eēndi aliquid aliquo modo. Qd̄ enī nec est rōne māe nec rōne actus: simplr nō ē. Quod aut suā formalitatē habet: cōpletū est. Qd̄ vō est rōne ei' qd̄ sibi māle est: nō aut hz formalitatē suā: habet quidē entitatē s̄z ip̄fectā: z sic se hz tēpus sine aīa. Ad quartū dicēdū ē q' nō totūz id qd̄ est tēpus: ab aīa z in aīa ē: sed partī in aīa z partī in re extra vt expositū est. iccirco ens ratōis non est: z sic patet.

Questio tertiadecima.

Questio tertia

decima est. Utrū graua z leuia moueāt seīpa. Et videtur q' sic. Que. n. nālīter mouēt ex se mouent. qz natura est p̄ncipiū motus ei' in quo est: s̄z graua z leuia nālīr mouēt. q' ex se mouent. p̄. que hnt in se p̄ncipiū sui motus: mouēt seīpa. sed graua hnt in se grauitatez q' est eis p̄ncipiū sui mot' deorsuz: z leuia hnt in se leuitatē que est p̄ncipiū mot' sursuz. igit graua z leuia mouēt seīpa. p̄. qd̄ ab extrinseco motore mouet: q̄to est min' tātō pōt citi' moueri. s̄z citi' mouet mai' graue deorsuz q̄ minus: z mai' leue citi' q̄ min' tēdit sursum. igit ip̄a nō mouēt ab extrinseco motore sed intrinseco: z sic mouēt seīpa.

p̄. vñū cōtrariōzū natū est trāsmutare alteruz sed graue z leue sunt cōtraria. ergo graue sup leue positū mouebit ipm localr. sed hoc eē nō potest: nisi etiā ipm moueat. igit mouet seīpm ad minus p̄ accidēs. p̄. p̄pa passio cōsequit p̄ncipia intrinseca subiecti: s̄z moueri aut eē deorsū ē p̄pa passio ḡuis: z moueri aut eē sursuz est p̄pa passio leuis. igit etiā mot' sursuz cōsequit intrinseca p̄ncipia leuiū:

z mot' deorsuz cōsequit p̄ncipia intrinseca grauiū. p̄. mobile indiget motore extrinseco ad motū qn̄ caret forā que ē p̄ncipiū mot' z nō qn̄ hz eā. ḡ ḡuia z leuia qn̄ actu ḡuitatē z leuitatē nō hnt ad suū motū indigēt necō motore extrinseco: nō aut h̄ indigere debēt qn̄ illa hnt fm actū. In s̄uz ē qz p̄hs in. viij. physicoz dicit q' ḡuia z leuia i se ip̄is nō hnt p̄ncipiū mouēdi nec faciēdi s̄z patiēdi solū. Rūdeo ad hui' qd̄is itelligētā cōsiderādū ē q' hui' p̄pōis qua dī ḡuia z leuia mouē seīpa: triplex pōt eē intellect'. Nā vno mō pōt intelligi q' graua z leuia moueāt seīpa p̄ se z p̄mo: ita scilz vt dicat q' graue sic mouet seīpm q' totū s̄z q' totū est mouēs: z totū fm q' totū est motū. Secundo autē mō intelligi pōt q' ḡuia z leuia moueant seīpa nō quidē p̄ se z p̄mo s̄z secundario: qz p̄ pres suas vt p̄ tātō dicant se mouere: quia nō mouent neq; mouent p̄p̄t aliqd extraneū a se: s̄z mouent rōne vni' ptis sue z mouent rōne alterius. Scdm etiā q' dicim' aīal mouere seīpm: qz mouet ratōe vni' ptis sue: vtputa rōne aīe. z mouet rōe alteri' s̄z ratōe corpis. Tertio vō mō itelligi pōt q' moueāt seīpa: nō qdē p̄ se z p̄mo: nec p̄ se z secundario s̄z oīo p̄ acc̄ns. vtputa si ideo dicant se mouere q̄a moueāt aliqd extra se ad cui' motūz sequat mot' ip̄oz. fm etiā q' nauta mouēs nauim dicit seīpm mouere p̄ acc̄ns. qz. s̄. nō mouet se nisi inq̄tū mouet nauim: ad cui' motū seq̄t mot' ei'. z qz plibus modis q̄ p̄dictis nō pōt aliqd effectiue dici seīpz mouē: necm ē si nllō p̄dictoz mōz ḡuia z leuia se ip̄a mouē p̄nt: q' nllō mō ex seīpis moueant. Qd̄ aut p̄mo mō nō possunt se mouē de facili appet si cōfidēt ea q' ponit Ar̄. in. viij. physicozū. Adducit enī ibi duas rōnes ad cōndēdū q' nihil totū possit se totū mouē. Prima aut rō ei' est. qz mouēs inq̄tū hmōi: hz rōne influētis motū: mobile vō hz rōne suscipiētis motū in fluxuz a mouēte. Influere autē z recipe: z agē z pati: sunt opposita. opposita vō non p̄nt eidē sil fm idē uenire. q̄. n. sil in sunt eidē z fm idēz: nec sunt diuersa genē: nec diuersa spē: nec diuersa nūero. nā ea q' sunt diuersa genē: sunt opposita dispate. dispata vō nō determināt sibi idē susceptiū p̄puz: s̄z diuersa. vñ q' in eodē z s̄z idē se cōpatiūt nō sunt dispata: nec p̄ nīs diuersa genē. nō sunt etiā eadē genere p̄rio: z diuersa spē. qz talia nūq; in eodē z s̄z idē se cōpatiūt: sicut manifeste appet in singulis inducēdo. Nō. n. idē z s̄z idē pōt esse sil hō z afin': nec albū z nigz: nec dulce z amaz: z sic de singulis: nō p̄nt etiā eē diuersa numero. qz acc̄ntia numerāt ad numeratōez subiectoz. vñ si sunt eadē spē z fiāt circa idē z fm idē necm tūc est q' sint eadē numero. Si igit oīo ip̄osibile est opposita eē eadē spē genē z numero: oī q' impossibile etiā sit opposita sil inesse eidē z fm idē. Nihil igit idē z s̄z idē pōt sil mouē z moueri. Si ergo graue z leue totū z fm totū mouet: ip̄osibile est oīo q' totū z fm q' totū illo motu moueatur. Secūda aut rō p̄bi est. q̄a ip̄osibile est sil

idē esse et nō esse. Quō autē ē actu: hoc inq̄tū hōmōi
 habet esse. quod vero est in potētia: hoc q̄tū est
 de se nō est. q̄ potētia nō est eēndi rō sed act⁹: tē
 ipossibile est idē et fm idē s̄l esse actu et potentia.
 Quō autē mouet est actu inq̄tū hōmōi: et qd̄ mouet
 fm q̄ hōmōi est in potētia. quozū rō est. q̄ mouē
 est quoddā agere: et moueri ē pati a mouēte. agē
 autē est act⁹ secūdo qui nōcō p̄supponit actū primū
 qui est forma que est rō effendi. vñ nihil agit nisi
 fm q̄ est actu. ratio autē patiēdi nō est act⁹ sed po
 tētia receptiua alicui⁹ act⁹ ab agēte. Sic ergo māi
 festū est q̄ nihil mouet nisi qd̄ est actu in quātū
 hōmōi: et oē quod mouet fm q̄ hōmōi: ē in potētia
 vnde etiā mot⁹ est act⁹ entis in potētia. ipossibile
 est igit̄ idē et fm idē s̄l eodē motu mouere et mo
 ueri. Si igit̄ totū graue moueat ita. s. q̄ totū sit rō
 mouēdi: ipossibile est oīo q̄ totū sit rō q̄re moue
 at. q̄a tūc idē et respectu eiusdē eēt ratio eēndi in
 actu et eēndi in potētia. qd̄ stare nō pōt. Sic igit̄
 est manifestū q̄ graua et leuia seip̄a mouē primo
 mō non pōt. Tertia autē declaratio eiusdē sumit̄
 ex libro p̄cli. Ad cui⁹ intelligētia cōsiderādū est q̄
 sicut intellect⁹ nō intelligit seip̄m nisi supra seip̄m
 reflectat vel ouertat: sic etiā nihil agit in seip̄sum:
 nisi p̄ sui supra seip̄m ouersionē. vnde quod seip̄z
 mouet: oīo q̄ supra se ouertatur. et si totū mouet se
 totū: nōcō ē q̄ totū ad se totū s̄l ouertat. Totūz
 autē est idē quod oēs p̄tes. vnde totū ouerti ad to
 tū idē est q̄ oēs p̄tes ouerti supra oēs. et hoc est
 idē quod quālibz p̄te ouerti supra se et omnes
 alias. Quō autē supra aliquid cōuertit̄: ab eo ad qd̄
 ouertit̄ nō distat cū supra ip̄m ponit̄ esse ouertūz.
 ponere igit̄ oēs p̄tes ouerti ad oēs: est subtrahere
 ab eis oēm distantiā. partiū autē subtracta distan
 tia: subtrahit̄ quātū extēsiō. hac vō subtracta
 tollit̄ diuisibilitas cōtinui et remanet qd̄ simplex et
 indiuisibile. Si ergo ipossibile est q̄ ḡua et leuia
 sint simplicia et indiuisibilia relinq̄t̄ dicēdū q̄ im
 possibile sit in grauib⁹ et leuib⁹ ponere q̄ totūz re
 deat supra totū: et p̄ oīs impossibile est q̄ ḡue et
 leue: totū et fm q̄ totū se moueat. posset autē ad h̄
 idē deduci etiā rō p̄hi in. vij. phisicorū: sed p̄p̄ bre
 uitate dimittat̄. Manifestū est igit̄ q̄ p̄m̄ intelle
 ctus pōis qua dicūt graua et leuia mouere seip̄a:
 stare nō pōt. Quō etiā nō possit stare intellect⁹
 secūdo p̄bat Ar̄. in. viij. phisicorū triplici ratōe. Et
 p̄ma quidē rō ei⁹ est. q̄ qd̄ est p̄p̄z viuētū: non
 pōt nō viuētūz ouenire. Ex se autē sic moueri q̄
 vna p̄s sit mouēs et alia mota est p̄p̄z viuētū: et
 graua et leuia nō viuūt. nō pōt igit̄ hoc cōuenire
 eis. Quō autē hoc sit p̄p̄z viuētū sic declarat̄. Illud. n. p̄
 qd̄ p̄mo et vltimo iudicam⁹ alia viuere p̄
 p̄m̄ est viuētū aīaliū. iudicam⁹ autē p̄mo et vltio
 viuere ip̄a aīalia p̄ h̄ qd̄ ē ex se moueri. Quācū
 enī p̄cipim⁹ aīal se mouē: dicim⁹ q̄ viuūt: et si p̄dat
 sensum discretionē victoriā et oīa talia: dū tamen
 retineat hoc quod est moueri ex se ip̄m viuere iu
 dicam⁹. statim autē qñ definit habere motū ex se:

dicim⁹ ip̄m esse vita p̄uātū. ergo manifestū ē q̄ ex
 se moueri est p̄p̄m aīaliū: et p̄ oīs ḡuib⁹ et leuib⁹
 ouenire nō pōt: et maxime sic ex se moueri q̄ vñ
 locū totalit̄ dimittēdo transeat ad aliū. Quāto. n.
 aliquid formā inferiorē et imp̄fectiorē habz: tāto
 inferiorē opationē participat. videm⁹ autē q̄ ex se
 moueri supradicto modo nō quibuscūq̄ viuētū
 tūm conuenit sed p̄fectiorib⁹ solūz. viuētū. n. que
 vltra vitā vegetatiuā participāt vitā sensitīuā p̄
 fectiorē: motu supradicto se mouent: et nō solum
 dilatatiōis et constrictiōis motūz augmētū et de
 cremētū. viuētū vō que participant vitā sensitīuā
 min⁹ p̄fectā: vtpote habentia solū tactūz qualia
 sunt animalia terre affixa seip̄a sic fm locū mouē
 non possunt: vt videlicz locū vñ totalit̄ dimittē
 do transferāt se ad aliū. Sed mouēt seip̄a localit̄
 solū fm dilatatiōem et cōstrictiōem. viuētū vō ad h̄
 min⁹ p̄fecta etiā qualia sunt participātia vita ve
 getatiua solum inueniunt̄ se nō mouere: nec motu
 p̄cessiuo: nec motu dilatatiōis et constrictiōis:
 sed solum motu augmētū et decemētū: et alijs sibi
 annexis. Scdm̄ hoc igit̄ ea que sunt infra gradūz
 viuētū vita vegetatiua: oportz q̄ nec motu loca
 li se moueant de vno loco se totalit̄ trāfferēdo
 ad aliū: nec fm dilatatiōem et constrictiōem: nec
 motu augmētū: nec motu alteratiōis. talia vō sunt
 ipsa graua et leuia. Est etiā considerādū q̄ quia
 forma est p̄cipiū mouēdi et opandi: necessariū ē
 q̄ sic diuersimode res se habeāt ad mouēdū: sic
 se habēt diuersimode ad habere formā. Est autēz
 quoddā ens quod nō pōt in seip̄o habere nisi for
 mam suam tm̄. quoddā vero est quod habz etiāz
 formā alterius. hanc vero non potest ita habere:
 q̄ ad eius aliquale p̄fectiōez p̄tineat: nisi tm̄ sub
 eē intēionali quo mō pōit̄ esse ī virtute app̄hen
 siva: per quā vlteri⁹ p̄ntatur appetitine. vnde que
 habent in se formā suam et formā etiā alteri⁹: ex
 stentē sibi operādi p̄cipiū: necessariū est q̄ aīata
 sint aīa app̄hendēte. Contingit autē aliqua in se
 habere et per se accipere formā alteri⁹ absentis q̄dez
 siue fm locū distantis: sicut sunt animalia p̄fē
 ctiores sensus habētia. et ex hoc contingit q̄ talia
 moueri possunt ad aliquid distans: totalit̄ se de
 vno lo. o ad locum aliū transferēdo. Aliqua vero
 sunt que in se habere nō possunt formā alterius
 et distantis sed solū p̄sentis fm locū: sicut anima
 lia que habēt solū sensum tactus. vnde et talia de
 loco ad locū se totalit̄ transferre nō possunt sed
 solū ad conueniēs p̄sens localit̄ fm quandā di
 latatiōem mouent̄. Alia vero omnia et viuētū et
 graua et leuia que formā alteri⁹ vt p̄cipiū opan
 di non habēt: nec absentis neq̄ p̄sentis: nō pos
 sunt nec primo nec etiam secūdo se mouere s̄z lo
 cum. sed posita in eo loco qui eis fm formā suam
 naturalē debetur: ibi immobiliter quiescūt. extra
 ipsum vero posita in ipsum redūt naturalit̄ per
 virtutē illius agētis quod eis p̄s cōtulit locūz et
 formā p̄p̄iā. hec autē oīa cōueniētia sunt valde.

Questio

ex quo enim se mouere consequitur formā magis a materia eleuatā: rationale est ponere quod grauiā et leuiā que formā habēt omnino immerſam materie: ſe localiter mouere nō poſſunt. Secūda autem ratio philoſophi eſt ad idem probandū. quia que mouent ſeipſa: poſſunt etiā facere ſtare ſeipſa: ſed grauiā et leuiā non poſſunt facere ſtare ſeipſa: quoniam potius poſita extra ſua loca de neceſſitate mouentur niſi impediant. igitur grauiā et leuiā nō mouent ex ſe: ſed ab alio. Ad huius autem ratioſis intelligentiā conſiderandū eſt. quod omne liberū in quantum hūmōi in agendo habet dominiū ſui actus. liberū autem dicim⁹ quod eſt ſuimet gratia et nō alterius: ut habet in primo methaphiſice. Seruus autem nō eſt ſui: ſed domini. domini autem in quantum hūmōi: non eſt iam alterius. unde et liberū in operādo eſt quod ex ſeipſo operat. Quod enim ex ſeipſo mouet ſibi hoc ad moueri libere ſe habet: et per conſequeſ neceſſariū eſt quod habeat dominiū ſui motus: quod admodū etiā id quod moueri et operari non habet ex ſe ſed ab alio: nō eſt liberū in quantum hūmōi: nec habet etiā dominiū ſui actus. Si ergo grauiā et leuiā ex ſe mouent: neceſſariū eſt quod ipſa in ſe habeant dominiū ſui motus. Quod autem in ſe habet dominiū ſui motus: in ſeipſo habet quod moueat. aliter enim ad moueri nō libere ſe haberet. Quod autem tale eſt: nō neceſſario mouet. ergo ſi corpora grauiā et leuiā extra ſua loca poſita non niſi ex ſe mouent: ſequitur neceſſario quod tunc libere ſe habeant ad hoc quod moueant et non moueant. Sicut igitur ſi mouent ex ſe ſunt ſibi cauſa motus: ſic etiā ſequitur quod poſſunt tūc ſibi eſſe cauſa quietis. quod eſt impoſſibile. ergo impoſſibile eſt quod grauiā et leuiā moueant ex ſe. Tertia autem ratio philoſophi ad idem probandū eſt. quia in omni eo quod ex ſe mouetur oportet eſſe partes diuerſas: quarū vna ſit mouens: et reliqua mota. In grauiū autem et leuiū bus hoc accipere nō contigit. Omnes enim partes ipſorum ſunt ad inuicē conſite et cōtinue. ergo grauiā et leuiā nō mouent ſeipſa. Ad hui⁹ etiā ratioſis euidentiā conſiderandū eſt. quod alia eſt ratio mouētis: et alia moti ſibi quod ex ſuperiorib⁹ partibus. unde et partes ita ſe habēt: quod vna mouens eſt et altera mota: oportet ſibi rationem eſſe diuerſas. tales autem partes in moto ex ſe poni nō poſſunt: niſi vel quantitātē vel eſſentiales. partes autem quantitatiue grauiū et leuiū ſunt omnes eiūſdem ratioſis. Unde etiā ſicut per ſe apparet nō poſſunt dari: quare magis in eis vna pars ſit mouens quā alia. Partes autem eſſentiales in eiſdem dari nō poſſunt: niſi materia et forma vel etiā ut omnis cauillatio tollat materia ſtans ſub perfectiōe corporeitatis: et forma naturalis ſibi quod conſtituit tale corpus naturale: ut puta graue vel leue: et ſic de alijs. Si igitur iſte partes nō ſic ſe poſſunt habere: quod vna ſit mouēs et altera mota: neceſſariū tūc erit quod nullo modo quantum ad ſecūdū poſſiōis intellectū: grauiā et leuiā moueant ſeipſa. Ad intelligendū autem quare dicte partes ſic ſe habeant

re nō poſſunt conſiderandū eſt quod mathematica dicunt eſſe immobilia et abſtrahere rationem ſuam a motu: nō propter aliud niſi quia ſibi rationem abſtrahunt a naturalib⁹ qualitātibus que ſunt principia ſingulorum motuum. Naturalia vero ex oppoſito iccirco dicunt eſſe mobilia concernētia motum: quia dictas qualitates concernūt. Nunc autem ita eſt quod materia prima quantum de ſe eſt abſtrahit ab omnibus qualitātibus naturalibus: ſumpta etiā ut ſtans ſub perfectiōe corporeitatis: nullam ſibi quod hūmōi naturalē qualitātē concernit. quia corpus ſibi quod hūmōi: nō magis eſt quid naturale quā quid mathematicū. Concernit autem naturalē qualitātē ſumpta ut ſtans ſub forma aliqua naturali: ut pote ſub forma grauis vel leuis ad quā conſequitur qualitas naturalis que eſt leuitas. Solum igitur ſumpta ut ſtans ſub grauitate et leuitate mobilis eſt. et hoc ipſum eſt ſibi principium et ratio mobilitatis. et quia ultra hoc in quibus et leuiū aliud nō inuenitur: concluditur euidenter quod nihil in eis ſit quod rationem mouētis habeat. Quod autem philoſoph⁹ dicit omnes partes talium eſſe conſitas et cōtinuas: ad partes qualitatiuas referuntur: quas oportet ad inuicē eſſe aliquo modo diſtinctas: ſi vna debet eſſe mouēs et altera mota. Sic igitur manifeſtū eſt quod non poteſt ſtare grauiā et leuiā ſic mouere ſeipſa: quod vna pars ipſorum ſit mouēs et altera mota. Tertio autem modo vult cōmentator quod poſſunt ſeipſa mouere. Ait enim quod grauiā et leuiā poſſunt eſſe in duplici potētia. quia eſſentiali et accidētali. in potētia quidē cōtinua ſunt quando formā cōſtitutiua eſſe grauis vel leuis actu nō habēt: ſed potētia. Et quia nihil potest tranſmutare ſeipſum de nō eſſe ad eſſe: indiget tūc extrinſeco motore qui reducat ipſa ad actū. Quando autem actu ſpēm ſuā et nām habēt: nām eſt quod quantum de ſe eſt actu habeant et locū: et alia que talem conſequuntur nāz ſed ſi extra locū tūc ſint: hoc nō poſſunt eſſe. quia nāz non habeant per quā eis ille locus debet: ſed quia per aliud impediens prohibent ibi eſſe. et ſic ſunt nō eſſentialiter ſed per accidēs tūc in potētia ad propriū locum. unde et indiget motore per accidēs ut pote eo quod remoueat prohibēt. h. n. remoto ſtatim ſunt deorsum. h. autem ipſamet mouēt et remouent: ad cuius motū ſequitur ulterius motus ipſorum: et ſic per conſequeſ mouent ſeipſa per accidēs. Quod autem iſta poſitio nulla ſit: de facili demōſtraſt. Eſt enim duplex mouēs. quia mouens motum: et mouens nō motum. Mouens autem nō motum illud dico quod dum mouet: ipſum nō mouet: nec per ſe: nec per accidēs: cui⁹ mouētia ſunt ipſe ſubſtantie ſeparate. Mouens vero motū eſt duplex. Unū quidē quod ex ſe ſimpliciter nō habet quod moueatur dum mouet immo potest mouere immobile manēs: ſed quod moueat tūc mouet accidit ei ex hoc quod ipſi mobili cui influit motum eſt in eſſendo cōiunctū. iccirco neceſſariū eſt quod moueat ad motum eius: et tale mouens eſt anima. Aliud eſt mouens

quod est nō per accidens sed per se mobile: sicut est omne corpus: et tale de necessitate mouetur: quia vero motus prioris mouetur sibi non conuenit nisi propter mobile cui in essendo cōiungitur: necessarium est quod prius non tēpore sed nature ordine talis motus intelligatur in mobili quā in mouente. de motu autē secundi mouētis hoc dici non potest. Si enī per prius nature ordine intelligatur in mobili quā in ipso: et per consequens sibi non cōuenire nisi per mobile: necessarium erit concedere sicut et de alio: quod ipsius quantum de se est possit moueri non motu. et quod moueatur dum mouet: sibi non cōueniat nisi per accidens. quod totum est impossibile et cōtra rationem mouētis corporei. Necessarium est igitur quod prius ad min⁹ prioritate nature persistat motus in ipso: quā in eo quod mouetur per ipsum: consimiliter necessarium est quod talis motus per se et non per accidens sibi cōueniat. De hoc igitur motu per prius et per se sibi debito et non per accidens siue propter mobile est questio per quid effectiue sibi conueniat. Si enim dicatur quod ipsum habet a seipso: necessarium erit cōcedere quod seipsum moueat per se: et non per accidens. quia sicut ostensum est: talis motus per prius et per se sibi conuenit: et non per mobile: cū presupponatur a motu talis mobilis. Hac positio igitur repudiata cum alijs dicendum est quod graua et leuia effectiue nullo modo mouentur ex seipsis. Ut autē videatur quid sit illud a quo effectiue mouentur: considerandum est quod unum quodque ab eodem accipit operationem et necessitatem operandi siue idem est per quod alicui competit quod stet sub aliqua operatione: et per quod ei ad hoc imponitur necessitas. Necessitatem autem tales unum quodque accipit ab eo a quo sumit formam quae est principium determinate operationis. formam autem accipit unum quodque a generante. Est vero duplex generans. quia particulare: et uniuersale. Et particulare quidem in uirtute uniuersalis generat: sicut etiam uniuersaliter agens secundum agit in uirtute priorum. principaliter ergo et maxime accipit formam et necessitatem ad operationem ipsum genitum ab uniuersali generante. ab ipso ergo sumit etiam quod stet sub tali operatione. Hoc igitur subtracto quod genitum non remanebit sub uirtute eius: oportebit quod nullam necessitatem teneat ab ipso: nec habeat per consequens actum quem habebat prius. Et hoc quidem est uniuersaliter verum: tam in uoluntarijs: quā in naturalibus agentibus. Si enim agens tolleret increatum a quo est omnis inclinatio in bonum: uoluntas in bonum non tenderet amplius: nec etiam ratio uoluntatis remaneret. quia ad ipsam pertinet ut in illud quod est bonum inclinaret. sic etiam si generans uniuersale: ut puta si spera celestis tolleret: necessario tolleret quantum est de ordine naturali a corporibus inferioribus inclinatio ad locum sursum et deorsum: et per consequens nec ea quae modo graua sunt tenderent deorsum: nec ea quae sunt leuia tenderent sursum. quia nec graua grauitate: nec leuia leuitate retine-

rent. unde et si quod est ponderis modo mille librarum tunc acciperet: non magis ponderaret quā una pluma. Sic igitur necessarium est dicere quod per uirtutem uniuersalis generantis tendat deorsum graua: et leuia sursum. Verūtamē considerandum est quod uirtus uniuersalis generantis non est de se terminata ad hunc effectum vel ad illum. et ideo si debet determinatum producere effectum: necessarium est quod per aliquid determinet ad productionem eius. ad producendum autem determinatam formam: determinatur per agens particulare. sed ad efficiendum determinatum motum determinatur per formam naturalem mobilis ad quod consequitur certa inclinatio. unde per grauitatem que est in grauib⁹: determinatur ad mouendum graua deorsum. et per leuitatem que est in leuib⁹: determinatur ad mouendum ipsa sursum.

Ad ergo argumentum dicendum est quod que naturaliter mouentur locali motu: mouentur ex se. non quia habeant sui motus principium effectiuum: sed forma le quod est ipsa forma per quam determinatur ad hoc quod sine particulari motore tali motu moueantur et non alio. Et per hoc patet responsio ad secundum.

Ad tertium dicendum est quod mobile quanto minus habet de eo per quod inclinatur in terminum ad quem a naturali motore mouetur: et plus de contrario tanto tardius mouetur. et e converso. quanto de contrario habet et de conueniente magis: tanto mouetur uelocius. per grauitatem autem graua inclinatur ad motum deorsum: ad quem ab uniuersali generante naturaliter mouentur. et ideo quanto grauiora sunt: tanto citius descendunt. Ad quartum dicendum est quod unum contrariorum naturam est transmutare aliud: presupposita uirtute uniuersalis generantis. Ad quintum dicendum quod moueri naturaliter et non mouere: est propria passio supradictorum.

Ad sextum dicendum quod mobile quando caret forma: indiget extrinseco motore: et ad acquirendum ubi: et ad acquirendum formam per quam ad illud ubi determinatur. quando uero formam habet: indiget quidem extrinseco motore non ad acquisitionem forme per quam ad ubi determinetur: quia istam iam habet: sed ad acquisitionem loci ad quem per talem formam inclinatur.

Questio quartadecima.

Questio quarta

cima est. Utrum in suba sit motus. Et videtur quod sic. Quia contrariorum effectuum contrarie sunt cause: sed proprietates ignis et aque sunt contrarie. igitur etiam forme subales eorum que sunt cause taliu⁹ proprietatu⁹: erunt ad inuicem contrarie. In contraria est motus igitur in formas subales: et per omnes in suba erit motus. In tertio physicoz quod motus est in tribus partibus cameteris. scilicet in suba: quantitate: qualitate: et ubi. In forma que in sua eentia habet gradum et gradum inducit non

Questio

subito: et sic per motum. scilicet forma subalternans in sua essentia habet gradum et gradum. quia superior continet totam inferiorum perfectionem et adhuc amplius gradum. scilicet dispositio que est necessitas ad formam quanto est altior: tanto perfectior est forma ponitur. scilicet talis dispositio ad formas eiusdem speciei potest esse altior et inferior. gradus etiam in forma specifica subest esse dare gradum perfectionis in essentia superiorum et inferiorum. scilicet forma eque perfecte in essentia potest esse perfectius magis. si igitur omnes forme subalternans eiusdem speciei: et per omnes omnes rationales anime sunt eque perfecte in essentia sequitur quod anime generant non magis se habent ad perficiendum generantur quam giganteum corpus. quod est oio finis. quia tunc quilibet anima separata indrinter se habent ad cuiuscumque hominis defuncti corpus in resurrectione corporum informandum.

scilicet gradus dispositionis qui est in inductione ultimam: est in abiectioe primam. Est autem ultimam in inductione ille qui manum necessitat ad formam. gradus et iste dicitur esse quod primo in abiectioe a materia abiicitur. Constat autem quod non statim cum aliquid tollitur de dispositione: subalternans forma tollitur. talis autem gradus non erat necessitas ad totam formam: sed solum ad supremum gradum eius qui ipso inducto inducitur et abiecto abiicitur. gradus subalternans forma inducitur et abiicitur per successionem et non subito. scilicet altior virtus altior est consequens essentiam. scilicet virtus generantia que consequitur animam viri est altior quam virtus conceptiva que consequitur animam mulieris. gradus et essentia illi anime est altior quam essentia istius. scilicet in omni mutatione est prius et posterius que non sunt sine tempore: quod est mensura motus: scilicet generantia est mutatio. gradus mensurat tempore: et est motus. In huius autem est quod philosophus determinat in quanto physicorum: quod in subalternans non est motus. Ratione si de hac questione credat sentientium esse philosopho cito nos de ipsa poterimus expedire. probatur enim in quanto physicorum duplici ratione quod in subalternans motus esse non potest. Quarum quidem una sumitur ex habitudine terminorum vel extremorum motus. Secunda vero accipitur ex conditionibus subiecti. Et ratio quidem sumpta ex parte terminorum est. quia omnis motus est inter contraria. subest autem nihil est contrarium. ergo in substantia non est motus. Expositio autem huius dicti que datur a quibusdam oio est contraria intentioni Aristotelis. Dicunt enim quidam quod de transmutatione substantifica loqui possumus dupliciter. quia vel quantum ad introductionem ultimi gradus: et sic ipsa non est motus. vel quantum ad introductionem totius nature procedentis gradum ultimam: et sic talis transmutatio est motus. Et primo quidem modo finem eos intendit Aristoteles. excludere motum a substantia: non autem secundo. Sed quod ista solutio sit omnino contra philosophi intentionem tripliciter appere potest. Primo. quia motus per tanto reponitur in aliquo predicamento. quia aliquid illi predicamento inducitur per motum. Quia enim aliquid quantitas naturalis et aliqua qualitas et aliquid ubi per motum acquiritur: ideo motus in predicamento ubi quantitatatis et qualitatis ponitur. et vlt in oio eo predicamento necessarium est sic esse motum cuius aliquid per motum acquiritur. nunc autem ita est quod forma subalternans non solum quantum ad gradum ultimo inductum: sed etiam quantum ad totam naturam procedentem gradum illum pertinet ad predicamentum subest: et per omnes necessarium est quod in substantia sit motus et predicamento subest si natura illa inducitur per motum.

vanum est quod Aristoteles simpliciter asserit in predicamento substantie non esse motum. Secundo autem habet appere ex ipsa ratione Aristotelis. Assumit enim quod omnis motus est inter contraria: et per consequens si inter formas substantiales cadit motus: necessarium est quod ipse habeant ad invicem contrarietatem. sed ulterius assumit huius oppositum: videlicet quod substantie nihil est contrarium. et ex hoc concludit quod in ea non fit motus. Quicumque igitur ponit aliquo modo motum in substantia: necessarium habet negare aut maiorem aut minorem propositionem Aristotelis. Tertio autem ex hoc apparet. quia finem modum supradictum non solum a predicamento substantie: sed etiam a quolibet alio motu excludendum est. Cuius declaratio est quia ratione eius quod subito vel in instanti acquiritur: in nullo genere motu ponendum est. Ultimam vero cuiuscumque nature gradus subito acquiritur. si enim acquiritur in tempore: necessarium est quod aliquid eius acquiratur prius et posterius: et sic per consequens habebit partem et partem. et erit ille gradus non unus: sed multiplex. ultimam autem gradus cuiuscumque nature est unum tantum: et non plures. ergo necessarium est quod non in tempore sed subito acquiratur. Ratione igitur eius in nullo genere motus ponendum est. Si ergo propter ultimam gradum solum excludendum est motus a predicamento substantie: pari ratione excludi debet a quolibet alio predicamento. et tamen Aristoteles dicit quod motus est in quantitate qualitate et ubi: et non in substantia. manifeste igitur apparet quod supradicta responsio est oio contraria intentioni Aristotelis. Ratio autem sumpta ex parte subiecti est. quod sicut subiectum albedinis est album cum stat actu sub albedine: sic etiam subiectus motus necessarium est quod moueatur: cum actu motui subijcitur. nihil autem moveri potest: nisi sit mobile. Sed subiectum transmutationis substantifice que vocatur generantia et corruptio: est ens simpliciter in potentia: et nullo modo actu. et quod tale est: non est mobile. ergo generantia et corruptio non sunt motus. Quod autem ens quod nullo modo est actu: moveri non possit. Ex hoc probatur Aristoteles. quia quod sic se habet non est in loco: et omne quod movetur est aliquid. Consimiliter autem exponitur huius rationis que datur a quibusdam extorta est et procedit ex parte vocis ignorantia. Dicunt enim quod transmutatio substantifica non est motus ratione subiecti generantionis quia hoc est ens pure in potentia: sed est motus ratione forme que inducitur per ipsam. unde et ratione huius non autem ratione subiecti est motus in substantia. hoc autem est oio nihil. cuius declaratio potest esse. quia quibus motus reponatur in predicamento ratione forme que inducitur per ipsam et non ratione subiecti: eo quod nunc subiectum producit per transmutationem illam cui subijcitur: nunc in motu esse potest sine proprio subiecto quod est ens mobile. unde si subiectum inductionis alicuius forme nullo modo fit mobile: talis inductionis nullo modo poterit esse motus. quemadmodum si illud quod subijcitur inductioni qualitatis utpote dealbationi nullo modo est mobile: impossibile foret ipsam alterationem esse motum. Et aliter necessarium est dicere de quilibet alia transmutatione. nunc enim. inductionis alicuius forme potest esse motus si subiectum inductionis illius non sit mobile. Quemadmodum dicitur implicat cuius dicitur quod aliqua

forma est albedo cuius proprium subiectum non potest esse album. sic etiam manifeste implicat contradictionem cum ponitur inductio forme motus esse: cuius inductionis proprium susceptivum moveri non potest. concedere igitur quod transmutatio substantifica sit motus: et quod subiectum transmutatiois substantifice non sit mobile: non est aliud quam concedere contradictoria simul esse vera. Manifestum est igitur quod secundum Aristotelem necessarium est ponere: quod in substantia non possit esse motus. Si autem non tantum curamus scire quod philosophus dicat quantum intelligere veritatem: oportet nos subtilius et diffusius procedere ad huius questionis declarationem. nam secunda ratio Aristotelem supponit quod omne mobile sit in loco quod non ponentes motum in substantia negarent de eo quod mobile est ad substantialem formam. Secunda vero ratio supponit: quod in substantia non sit contrarietas: quod etiam isti non concederent. Et si arguatur: quod contraria debent habere quandam latitudinem quare forme substantiales non habent. supponitur etiam tunc quod forma substantialis sit indivisibilis: quod isti non concedunt. Alias ergo rationes oportet adducere ad declarandum perfecte rationes Aristotelem. et quod in substantia non potest esse motus primo autem habemus possumus declarare ex ipsis rationibus forme consistentis in motu et forme substantialis. Ad cuius intelligentiam considerandum est: primo quid sit motus secundo quid sit proprium motus susceptivum. tertio utrum in proprio susceptivo substantifico transmutatiois substantifice possit intelligi aliquod actu esse. Et quarto utrum forma in motu consistens presupponat esse in suo susceptivo proprio. Quantum autem ad primum considerandum est: quod motus secundum commentatorem est acceptio partis forme post partem. non enim dicit aliud motus ad formam nisi successivam et continuam forme acquisitionem. unde quod incipit moveri ad formam per motum acquirendam incipit ipsam formam acquirere: sicut quod incipit dealbari: incipit acquirere albedinem. Et quia in omni successione est dare prius et posterius ideo continuata successiva forme acquisitione. necessarium est quod detur aliquid forme prius acceptum: et aliquid eius acceptum posterius. Aliis enim in acceptione forme non posset intelligi successio: nec per consequens talis acceptio posset dici motus. Manifestum igitur quod motus ad formam est pars forme post partem: siue acceptio partis forme post aliam eius partem prius acceptam. Ulterius quantum ad secundum considerandum est: quod proprium et immediatum motus susceptivum: est illud quod est proprium et immediatum receptivum cuiuslibet terminorum motus: quemadmodum proprium et immediatum subiectum cuiuslibet colorationis est illud quod est proprium et immediatum susceptivum omnium colorum. cuius declaratio est: quod unus et eiusdem nature: unus et idem est subiectum proprium et immediatum quantum ad omnes gradus suos. unde illud idem est receptivum gradus ultimi albedinis: quod est susceptivum omnium graduum precedentium. primum enim omnes ad unam naturam: et unius nature unum tantum est proprium receptivum. Et quia motus non est aliud ut declaravimus quod successiva et continua acceptio for-

me vel graduum formalium. subiectum autem huius acceptionis est illud quod continue accipit formam ipsam. concluditur evidenter quod idem sit proprium subiectum motus: et immediatum receptivum forme que inducitur per motum: et etiam forme que abijcitur: quia idem est subiectum omnium illorum inter que cadit transmutatio per se: ut alias declaravimus. hoc viso consequenter considerandum est quantum ad tertium: quod nihil est actu nisi per formam: et quod forma accidentaliter ordine nature presupponit ante se formam substantialem. necessarium est ut quod caret omni forma substantiali careat simpliciter omni forma. et per consequens necessarium est quod hoc quantum est de se nullum actu esse habeat. Primum autem et immediatum susceptivum transmutatiois substantifice est primum et immediatum receptivum omnium substantialium formarum. et per consequens necessarium est quod de se et natura sua nullam formam et nullum actu esse habeat. quemadmodum etiam quod proprium colorationis receptivum est primum et immediatum susceptivum omnium colorum: nullum colorem habet de se et natura sua. Ulterius autem ad plenioris rationis intelligentiam: et etiam quod fuit quarto loco propositum considerandum est: quod hoc ens dicitur de substantia et accidente: aliter tamen dicitur de uno et aliter de alio dicitur. primo de substantia: et posterius de accidente. Est enim substantia ens simpliciter. accidens autem est ens secundum quod: et per rationem ensi reservatur in substantia: per posterius vero reservatur in accidente. et quod posterius semper ordine nature presupponit primo. ideo necessarium est quod accidens vel ens secundum quod quidam presupponat ante se substantiam vel ens simpliciter. simpliciter autem necessarium est ut esse secundum quod: quod est actu secundum quod entis presupponat ante se esse simpliciter. et per consequens oportet quod forma que est ratio eendi secundum quod: presupponat in suo receptivo formam que sit ei ratio eendi simpliciter. nunc autem ita est: quod omnis forma in motu consistens est ratio eendi secundum quod. presupponit igitur omnis talis in suo receptivo simpliciter esse: et formam que est ratio eendi simpliciter. Ostensum est autem quod transmutatio substantifica in suo proprio receptivo: nullam formam et nullum esse presupponit. necessario igitur concluditur quod ipsa non sit motus. quod autem omnis forma in motu consistens est ratio eendi secundum quod: et non ratio simpliciter eendi: de facili apparet: sicut enim ratio eendi album: est illud quo ablato totaliter auferretur esse album sic etiam ratio eendi simpliciter est illud quo ablato ab aliquo subiecto totaliter etiam ab ipso tollitur esse actu. nulla autem forma in motu consistens est talis. Quod enim movetur habet aliquid de forma ad quam movetur et si tollatur ab eo illud aliquid quod habet de forma ad quam movetur: adhuc in ipso remanebit illud quod habet de forma ad quam movetur: et e converso. et quod quilibet eorum est ratio eendi. necessarium est quod nulla ipsarum sublata tollatur totaliter esse a suo susceptivo. igitur manifestum est quod nulla forma in motu consistens: est ratio eendi simpliciter: sed secundum quod solum unum nulla talis potest esse substantialis forma. ex quo etiam apparet quod substantialis forma latitudinem non habet: propter quam substantia dici possit cum magis et minus. Secundo autem habet declarari potest ex ipsa consideratione maioritatis et minoritatis et magis et minus. Ad cuius intelligentiam considerandum est: quod maiortas et minoritas dicunt quosdam respectus in quantitate fundatos

Questio

nam maioritas dicit quantitatis excessum. et minoritas dicit quantitatis defectum. unde prope maius dicitur quod plures partes quantitatis equales vel quod plures de quantitate habet. Minus vero dicitur quod ab illa quantitate deficit. una autem species rei inuenitur ab alia deficere et aliam transcendere in gradibus perfectionum: et ideo nomen maioritatis et minoritatis conceditur ad eas transsumi. potest enim convenienter dici una species maior alia: ut pote quod continet plures gradus perfectionum quam alia. et sicut etiam minor dici potest: quia videlicet pauciores gradus continet ut sic maior una dicatur quam alia: pro eo quod est maioris perfectionis et complementi: secundum quem modum deum dicimus esse maximum: quia est maxime imo infinite perfectionis. quauis autem maioritas et minoritas sic in speciebus reze reseruetur. non tamen ipse prope dici potest cum magis et minus. unde habet albedo dici potest maior et minor non tamen ipsa dici potest cum magis et minus. habet autem declaratio est: quia magis et minus dicitur quosdam respectus fundatos in participatione alicuius ab aliquo ita quod ibi intelliguntur duo diuersa in eentia. scilicet participatum et participans. Et participatum quidem dicitur cum maioritate et minoritate. participans vero dicitur cum magis et minus. nam magis dicitur quod participat plus de participato. minus vero dicitur quod participatum habet sub minori complemento quemadmodum magis albi dicitur quod plures gradus albedinis participat: et minus quod participat pauciores. secundum hoc igitur apparet quod illud dicitur cum magis et minus quod non est species: sed speciem participat et sic quod ponit quod diuersum in eentia a specie participata. Albi enim quod participat albedine dicitur magis et minus sed albedo quod non est participans imo participatum non dicitur magis et minus: sed dici potest maior et minor. et sicut habet albedo non potest dici magis vel minus quam illa: quia tamen albedo posset dici cum magis et minus. quod falsum est. In accitibus igitur quod oppositum non est species: sed speciem participans potest oppositum dici cum magis et minus: sed in substantiis ipsum oppositum est species: sicut homo vel asinus. non igitur tale oppositum cum magis et minus dici potest. unde homo non dicitur magis et minus: nec etiam hic homo: quia idem iudicium est de utroque. non enim hic homo dicitur aliquid diuersum in eentia ab homine: sed eadem est eentia habet hominis et hominis. Ulteriorem autem considerandum est: quod sicut quod albi dicitur magis et minus: necessarium est id a quo dicitur albi: utpote ipsa albedo aliquam latitudinem habeat propter quam dici possit maior et minor: non autem magis et minus. sic etiam si homo cum magis et minus dicitur: necessarium est quod humanitas a qua dicitur homo habeat latitudinem secundum quam maior et minor dici possit. ultra igitur quod pro hominem aliquid ponatur diuersum in eentia ab humanitate: quod participando ipsam dicatur magis et minus homo. sicut etiam albi aliquid ponit in eentia diuersum ab albedine: quod participando eam dicitur magis et minus albi. hoc autem est omnino falsum: quia homo nullam aliam eentiam et nullam propter humanitatem ponit. unde non differunt in eentia homo et humanitas. propter hanc igitur eentialem identitatem sicut humanitas cum magis et minus: et albedo cum magis et minus non dicitur. sicut etiam neque homo: neque hic vel illa albedo: et propter igitur quod non habeat humanitas latitudinem propter quam dici possit ab homine. et ideo magis et minus participari ab alio autem non participat sicut albedo parti-

partem ab aliquo ab ipsa differente in eentia. Ex hoc autem de necessitate concluditur: quod forma substantialis que est principium humanitatis. et consimili modo quilibet forma substantialis indiuisibilis est et latitudinem non habet. et prosequens subito et in instanti accipitur non ergo per motum: ergo in substantia non est motus.

Tertio autem idem declarari potest ducendo ad impossibile supposita secundum fidem et sicut sane philosophie veritatem incorruptibilitate anime intellectiue. Ad cuius declarationis euentiam considerandum est: quod omnes forme in quibus cadit transmutatio pro se et non pro accitibus ita se habent quod si secundum unam eorum attenditur magis et minus. necessarium est etiam quod attendatur et secundum omnes. Si enim extrema talium formarum sumatur et ab ipsa parum recedatur per actum remissionis. necessarium est quod non tota forma sibi opposita sed aliquid eius inducatur: quemadmodum enim ipsa tota non abiicitur: nisi quia sibi opposita tota inducitur: sic etiam non auferatur aliquid eius: nisi si quod aliquid inducitur de forma opposita: quemadmodum modum non abiicitur aliquid de albedine nisi quia inducitur aliquid de nigredine. unde euidenter apparet quod si secundum unam magis et minus attenditur: necessarium est quod attendatur et secundum aliam. quemadmodum quia inter omnes colores cadit pro se transmutatio. secundum vero unum attenditur magis et minus: attenditur etiam necessario et secundum omnes. et sicut se habet de saporibus et in omnibus consilibus. Ex hoc autem consequitur statim aliud: quia enim una talium formarum non abiicitur nisi ut alia inducitur. necessarium est quod sicut ista potest successiue induci: sic etiam successiue possit abiici et alia. et quia successiua et continua acquisitio vel abiectio forme motus est: necessario contingit quod omnes tales forme induci possint et abiici per motum. Omnis autem talis forma est generabilis et corruptibilis. nunc autem ita est quod in omnes formas substantiales ad minus specificas reze generabilium et corruptibilium: ut alibi sufficiens demonstratione declaratum est: cadit pro se transmutatio: igitur necessarium est: quod si secundum unam eorum attenditur magis et minus: attendatur etiam secundum omnes et prosequens: quod sicut una eorum potest induci et abiici per motum: et sic generari et corrumpi sic etiam se habet et omnes alie. anima ergo intellectiua que una est de numero talium formarum: erit de necessitate generabilis et corruptibilis. Et hoc quidem sic euidentius apparet. ponamus enim quod non tota sed aliquid forme repugnantis anime inducatur in materia. Tunc enim secundum quod ex predeterminatis apparet esse necessarium non tota anima sed aliquid eius tollitur a materia. hoc igitur quod de anima a materia sublatum est: aut actu manet post talem ablationem: aut non manet: sed corrumpitur. primum autem stare non potest. maneret tunc una et eadem forma secundum unam partem sue eentie in materia: et secundum aliam a materia actu separata: quod est omnino impossibile sicut de facili ostendi potest. necessarium est ergo ponere quod totum illud sit corruptum: quod si anima ponitur sublatum a materia: et sic secundum successiuam inductionem forme repugnantis anime fiet successiua anime corruptio:

z erit de necessitate anima humana corruptibilis. Et qz hoc stare nō pōt: necessariū est cōcedere: qz fm formas substantiales nō possit attendi magis z minus: z qz ipse subito z nō p motū inducantur. In substantia ergo nullo mō pōt esse motus. Ad p̄mū ergo dō. est: qz dō effectū cause prime z si debeant esse oppositē: non tñ oz qz sint dō nisi qñ effectus uniuoc⁹ est cause. p̄petas autē nō est uniuoca subiecto suo. vñ ex eo qz p̄petates ignis z aque sunt dō: cōcludendū est nō qz ignis z aqua opponant fm dō: sed qz habeant ad inuicē aliquā oppositionē. Ad sc̄m dō. qz cū dō motus esse in q̄ttuor p̄dicamētis: sumit motus large put includit etiā mutationē. Ad. iij. dō. qz forma supior in simplici z indiuisibili eēntie: cōtinet totū qd cōtinet inferior: z adhuc ampli⁹: nec p̄ talem cōtinentiā dat alia graduuz pluralitas: nisi qz ponit gradus generis z sp̄i: nō aut ista: sed multitudo graduū specificē perfectionis: ponit illaz latitudinē in forma que exigit ad motū. Ad. iij. dō. qz dispō que est necessitas ad formā nō ē p̄ctalis sed hz magnā latitudinē: z sub quolibet ḡdu eius nata est stare nō altior z inferior: sed tota eēntia forme. alias eiz oporteret qz etiā postqz hō generat⁹ est: crescēte z decrescēte dispōne ei⁹ cresceret z decresceret in eēntialibus aīa intellectiua qd substineri nō pōt sine corruptibilitate eius.

Ad. v. dō. qz hz eēntia aīe sit icorruptibilis: nibi loquit⁹ tñ nō est actu sensitua z vegetatiua nisi ex diuisione ad mām. z iccirco q̄ttūcūqz sint oēs aīe rōnales eēntia: qz tñ actu vegetatiue z sensitive sūt ex p̄fecta diuisione: necessariū est qz in eo qz tales sunt: z nō in eēntia sua ineēntes sūt p̄p̄tē materie ineēntitātē: quā qdē ineēntitātē de nā sua retinet semp sumpte solū in eo qz tales ut dictuz ē.

Ad. vi. dō. qz grad⁹ necessitās multiplex est z nō vnus sub quoz quolibz manet tota eēntia forme vt dictū est. Ad. vii. dō. qz virt⁹ generatiua non cōsequit simplr eēntiaz aīe: sed poti⁹ ex diuisione ad mām. Ad. viii. dō. qz in generatiōe talis ē susceptio eē ad nō eē: q̄lis est t̄mini t̄pis ad t̄ps q̄lis successio nō est mot⁹. qd enī generat hz nō eē in toto tpe p̄cedente p̄terqz in eius termino.

Questio decimaquinta.

Questio quinta

decima est: Utz in aliq̄ re creata eēntia z potētia differāt fm rē. Et videt qz sic. sicut enī se hz essentia ad eē: ita se hz potētia ad opari. ḡ p̄ locū a p̄portioe cōmutata: sicut se hz opatio ad eē sic potētia ad eēntiam: sed opatio z eē in oī re creata differūt realit̄: ergo filr potētia z eēntia. P̄ que sunt in re vnū ita se vident habere: qz vñ no ipsoz sublato ex nā rez: tollit etiā z reliquū: s̄z potētia visua sublata ab oculo p̄ cecitatē nō tollit

tur ab ipso anime eēntia: ḡ eēntia aīe z sua potētia nō sunt realit̄ idē. P̄ accidens z substantia non sunt idē realiter: sed eēntia anime est substantia: z eius potētia est accidēs: qz actus z potētia sunt in eodē genere. z opatio que est actus potētie est in genere accidētis. igit eēntia aīe nō est idē realiter cū sua potētia. P̄ que sunt diuersarū sp̄ez non possunt idē realiter cū eo qd est vnus sp̄i tñ. essentia autē vnus aīe vñ sp̄i est: z potētie ei⁹ sūt diuerse sp̄e. ḡ nō sunt realit̄ idē cum ipsius eēntia.

P̄ si potētia nō ē aliud realit̄ ab eēntia: sed solū fm cōsiderationē aīe: tūc potētia ut potētia ē nō erit nisi ens aīe z apud aīaz. s̄z talia sūt figmēta: qd de potētia dici nō pōt. ḡ potētia nō solū fm rōnē: sed etiā fm rem differt ab eēntia. P̄ vna z eadē res nō pōt filr mae filr esse coextēsa z nō extēsa. eēntia aut aīe humane nō ē coextēsa materie cui coextēdit potētia sensitua: igit ad minus sensitive potētie nō sūt vna res cū ipsa aīe eēntia. P̄ nālis potētia est i p̄dicamēto q̄litas: z eēntia aīe ē in p̄dicamēto subē: sed subā z q̄litas differūt realit̄: ergo filr potētia z eēntia. P̄ si potētia supra eēntiaz nō addit nisi relationē ad actū cū rōne eēntie q̄ ē subā sit in p̄dicamēto subē z nō q̄litas: z rōne respect⁹ sit in p̄dicamēto rēlonis: nihil tūc dari pōt: p̄pter qd ipsa sit i genere q̄litas: ḡ zc. In dō est: qz p̄ idē res ē z opaf. est aut p̄ eēntiā forme: z opaf p̄ potētiā: ḡ idēz sūt eēntia forme z potētia.

R̄ideo ad h̄ q̄onis intelligentiā cōsiderandū ē qz aliud est q̄rere: vtz potētia z essentia differāt: z vtz differāt fm rem. nā p̄mo mō qd sit simplr de ipsaz diuersitate. querit. n. simplr: vtz hēant ad inuicē aliquā dōiam. sc̄do aut mō nō q̄rit simplr de ipsaz varietate: sed p̄supposita aliq̄ dōia int̄ ipsa. q̄rit vltēri⁹ de sp̄ealis diuersitatis mō. Querit. n. vtz nō quōcūqz s̄z realit̄ differāt. z qdē si qd p̄mo mō formare apparet de facili qd eēt dicendū. cuilibz enī sane intelligenti appet qz eēntia z potētia in rebus creatis aliquo mō differūt. c̄ declaratio ē: qz qñcūqz aliq̄ duo ita se habēt ad inuicē: qz vnū ipōrū sub rōe p̄p̄a sumptū: accidit alteri sub p̄p̄a rōe cōsiderato: necessariū ē qz int̄ ipsa sit aliq̄ dōia vlt̄ diuersitas. nūc aut ita est qz potētia sumpta sub rōe q̄ potētia est: accidit eēntie vñ eēntia ē: igit necessariū est qz potētia z eēntia aliquo mō differāt. qz aut potētia accidat eēntie de facili appet. qz enī sic cōuenit alicui: qz coincidit ex p̄p̄iū z absolutū intellectu ei⁹: h̄ sibi dicim⁹ accidē. potētia at sic se hz ad eēntiā. pōt enī intelligi eēntia intellectu simplici z absoluto: nō intellecta p̄p̄a rōne potētie. nāz talis rō cōsistit in relatione ad actū. pōt aut intelligi eēntia rei nō intellecta relatione ad actū: excepto actu qui est forma subālis ad quā dō z ordinat eēntia p̄me materie. possū. n. intelligere hōiem ut homo ē nō intellecta relatione ad actū sentiēdi vel vegetādi. Manifestū est igit qz potētia sub p̄p̄a rōne sumpta: accidit eēntie rei simplr cōsiderate vñ potētia et essentia differunt: z sic differunt qz possunt ad

Questio

diuersa genera pertinere: sed hoc non habet ex facta deductione. non enim si aliquid per tanto accidit alicui: quod sic conuenit ei: quod tamen coincidit extra simplicem eius intellectum. statim necessarium est quod possit esse in diuerso genere ab eo. nam spes et differentia diuisiua generis coincidunt extra eius simplicem et absolutum intellectum: nec tamen in alio genere collocari possunt quod in eo cuius sunt spes et differentia. Considerandum est igitur: quod genus et differentia et spes per tanto pertinent ad unum genus: quod in una specie natura uniuersum. una uero spes est unius generis tantum. quauis ergo spes et differentia coincidant extra intellectum generis: non tamen possunt ad aliud genus quod ad ipsum pertinere per tanto quod intellectus generis est indefinitus secundum spes: in specie autem determinatur per differentias. Quoadmodum uero aliqua duo ita se habent: quod unum determinat reliquum ad certum speciei gradum ad quem nullum illud de se determinatum est: illa duo pertinent necessario ad idem genus. Essentia autem et potentia ita se habent. nam quauis aliquo modo essentia determinetur per potentiam non tamen per ipsam intelligitur ut indeterminata determinari ad speciem. nam essentia autem est generalis aut specialis. si autem sit generalis: tunc per suam potentiam determinabitur ad aliquem generalem actum. non autem ad speciem: quemadmodum absolutus intellectus animalitatis: per potentiam sensitiuam non intelligitur determinari nisi ad actum sentiendi. Si autem essentia fuerit specialis seu specifica erit de se in specifico gradu determinata: sed per suam potentiam intelligitur determinari ad actum non intrinsecum sed extrinsecum essentie specificum. unde manifestum est quod essentia et potentia non pertineant omnimode ad idem uerbum: nec necessarium est quod pertineant ad idem genus. differunt ergo ad inuicem essentia et potentia: et taliter quod ad diuersa genera pertinere possunt. forte autem quod aliquis ex hoc concludere uellet quod essentia et potentia differunt secundum rem credens differre realiter quemadmodum differunt secundum genus: sed hoc non uidetur esse sufficiens signum. nam cum scia sit una res: secundum tantum diuersum considerandi modum pertinet ad diuersa genera. scilicet qualitatis et relationis. et sic circa ipsam rationem diuersarum specierum inuenitur. ut ergo uideamus: an essentia et potentia realiter differant considerandum est: quod aliud est aliquo modo secundum rem differre: et dicitur differere proprie res. nam secundum rem dici possunt illa omnia dicitur quod dicitur non facit sola ratio: nec per omnes differunt in sola consideratione rationis intellectus: sed etiam in re extra intellectum diuersitatem habet quo etiam modo differunt res et habitudo rei unius ad aliam. nam in re etiam extra intellectum: habitudo rei non est ipsa res cuius dicitur esse habitudo. unum secundum hunc modum dici potest: quod essentia et potentia secundum rem differunt loquendo de potentia ordinata ad accidentale actum. Essentia enim in re extra intellectum: non est ipsa habitudo sua ad actum: quam tamen habitudines ipsa potentia realiter importat. essentia ergo et potentia isto modo secundum rem differunt: non tamen ideo dici potest quod dicatur proprie res dicitur: quod habitudo rei non ponit proprie rem aliam quam illam cuius est habitudo. quemadmodum habitudo unius

ad alteram penes albedinem non potuit aliam rem proprie quam albedinem et albedinis subiectum. et tamen albedo et habitudo illa non sunt idem. nam albedo est id per quod in re aliquid est album. habitudo uero illa non est in re habet per quod aliquid est album: sed habet per quod unum in re est albi penes albedinem dissimile uel simile. unum manifestum est: quod aliqua dici possunt in re differre: nec necessarium est statim quod dicant dicitur res. quauis igitur essentia et potentia differant: et sic etiam reponantur in differentibus generibus. et diuersitate insuper quam habent: non habeant in sola et a sola ratione: sed etiam extra rationem uel intellectum in re ex natura sua: non tamen statim ex hoc haberi potest: quod ponant diuersas seu res differentes: ut igitur appareat quid de hoc dicendum sit: considerandum est quod res dupliciter potest accipi: quod comiter et proprie. Comiter quod dicitur ut res dicatur quicquid in re natura inuenitur: quo modo res supra diuiditur per. x. predicamenta. et sic res dici potest etiam modus essendi rei et habitudo unius rei ad alteram: et ipsa res uel natura: cui tales modi essendi et habitudines attribuuntur. Proprie autem res sumitur ut dicatur res: non quicquid in re natura inuenitur: sed id solum cui modi essendi et habitudines rebus attribuuntur quo quidem modo res sumitur: res absoluta dicitur: quod quod sit respectiua: habet non habet nisi ut aliquam habitudinem includit. et diuiditur inter predicamenta tantum: ut in precedentibus questionibus: iam declaratum est. Et quidem si primo modo res sumitur: dici potest conuenienter quod essentia et potentia naturales res differentes dicuntur. non enim solum essentia: sed etiam et potentia in re natura inuenitur: propter quod utrumque dici potest: et inuenitur in re aliud essentia et potentia: et aliud essentia ut dictum est. et sumendo rem comiter non solum illud quod est essentia: sed etiam illud quod est potentia ut apparet ex dictis: res dici potest. unum manifestum est quod sic sumendo rem conuenienter dici potest quod essentia et potentia res diuersas ponunt: cum essentia ponat rem ipsam cui modi essendi et habitudines attribuuntur. potentia uero ponat ultra hoc rem quod est habitudo ad actum eliciendum uel recipiendum: et in re ipsa ut dictum est habitudo rei non sit res ipsa cuius habitudo est. Si autem nomen rei magis restringamus et accipiamus rem proprie secundum quod dicitur: non ipse modus et habitudo rei: sed cui tales modi et habitudines attribuuntur. cogemur tunc necessario confiteri quod essentia et potentia non ponunt differentes res. quod quidem iam apparet ex dictis. nam rem proprie sumendo ut dictum est ipsa habitudo non est res sed aliquid rei. et uel omne illud cuius propria ratio in quadam rei habitudine consistit: aliquid rei est: sed non res ipsa: nec rem aliam proprie dicitur ponit: nisi rem cuius habitudo est. et uel omne illud cuius propria ratio in quadam rei habitudine consistit rem aliam dicitur proprie non ponit nisi illam tantum: cuius habitudinem importat nunc autem ita est quod propria ratio potentie unum potentia est: consistit in habitudine ad actum recipiendum uel eliciendum. hoc enim ipsum quod est potentia ad actum dicitur: igitur potentia nullam aliam rem proprie dicitur potest ponere propter illam quam cuius ad actum habitudinem importat: hoc autem

est res illa quam eēntia ponit. Debet enim semper habitudo ad rem illam comparari: cuius est imēdiāte habitudo: et potentia ad illam eēntia cuius est imēdiāte habitudo ad actum quem importat. Manifestū est igitur: quod sumendo rem ppe: eēntia et potentia non ponunt differentes res: sed vnam et eandem. hoc idem autem secūdo demōstrari potest ex ipsa distinctione potētiaz. vix est autem quod potētie pnt duplī distingui: quod penes actū et obiecta et penes diuersos gradus nāz. nō est enim aliqua nā que virtute ppa destituat. vñ necessariū est quod fm nāz diuersitate: sit etiā diuersitas virtutū: vt videlz q̄to nā est altior tāto sit virtutis altioris. vñ et cōuenientē dī: quod nā supior potest: quicquid potest nā inferior et adhuc ampli⁹. Et quot gradus nāz inueniunt in re ipsa: tot etiā in eadē inueniunt gradus virtutum vel potētiaz. Quēadmodū appet in hoīe in c⁹ nā inuenit gradus nature vegetatiue: et iō picipat cū vegetabilib⁹ vegetatiuas vires: inuenit etiā in ea gradus vite sensitīue: ppter quod cū aīalibus impfectis picipat potētia tactiua. inuenit etiā in ipsa gradus vite sensitīue pfecte: et iō cū aīalibus pfectis picipat potētia motiua: et oēs vires sensitīuas. inuenit etiā in ea gradus altioris vite q̄ inueniat in ceteris aīalibus. et iccirco picipat virtutē altiorē: sicut potētia intellectiua: ad quā reliqua aīalia pertinere nō pnt. Manifestū est igitur: quod sic potētie fm gradus nāz distinguunt: quod ad quālibet nām q̄ ē de numero absolutaz rez sequit aliqua potētia tāto altior vel inferior: q̄to inferior vel altior fuerit natura quā sequit. si igitur potētia aliquid vltra rem ppe dictā ponit: tunc aut vtraq; erit in eodē gradu: aut vna in altiori: et reliqua ī inferiori. si autē ccedat p̄mū: necessariū erit ponere: quod sint vna res et nā et nō diuerse. Que. n. sunt in eodē gradu: vnā tm naturā ponit: et nō multas: nisi forte numero. Si autē def secūdu: tūc ita pcedemus. manifestū est enim quod quelibet nā que est res ppe dicta habet suā p̄riā virtutē tanto altiorē vel inferiorē q̄to ipsa fuerit inferior vel altior. Quēadmodū enim naturas sub eodē gradu differētes solo numero cōsequit vires eiusdem gradus seu sp̄i solo numero distīcte: sic etiā nās diuersoz gradū. necessariū est quod csequat virtutes fm sp̄m distīcte. Ex quo igitur res posita per eēntia: et res etiā ppe dicta posita per potētia sunt nature diuersoz graduum: necessariū est quod hēant virtutes fm gradū differētes. quēadmodū quod calor qui ponit per potētiaz calefactiua est inferioris nature q̄ res que ponit per eēntia ignis. videm⁹ quod potētia calefactiua est inferior q̄ virt⁹ ignitiua. De illis igitur virtutib⁹ cōparatis ad eēntias quas imēdiāte ponunt. Etiā iterū queret: vix ponat res ppe dictas differētes ab illis eēntiis vel nō. Et si def quod sic: appet manifeste īnfinītū pcedere. Si autē dicat quod res ppe dictas nō ponit ab eis differentes: cōcludet cōtinue ppositū videlz quod vlt virtus et potentia supra eēntiam in q̄ imēdiāte fundat habitudo per ipsam ipozata: nul-

lam rem ppe dictam superaddit. Tertio h̄ idē declarari potest ex alia distinctione potētiaz que attendit per relationē ad actus et ad obiecta: vbi cōsiderandū est: quod quod potētie specificant per actus et obiecta: necessariū est quod etiā per hoc fm p̄riā distinctionē distinguant. cuius rō est: quod per idē vnūquodq; in sua sp̄e reponit: et distinctione specifica distinguitur ab oī alia quod secus in eadē sp̄e nō cadit: quēadmodū apparet in singulis inducēdo: quia enim homo per rōnalitē reponit ī sp̄e humana. inuenit etiā per eandē a brutis animalibus distingui que eēntia in hac sp̄e nō possunt et eodem mō in aliis se habet. Manifestū est igitur quod potētie ex quo specificant per obiecta distinguunt aut distinctione specifica per ipsa. vltius aut ita est quod subtracto principio distinctionis alioquoz: tollitur de necessitate distīctio ab eis: sicut subtracta per intellectū rōnalitē in qua cōsistit rō distinctionis hoīs a brutis: remanet homo ab eis distīct⁹. nam et impossibile est aliqua a se distīcta esse: et distinctionis rōnem habere. Si igitur potētie per habitudinē ad diuersa obiecta distinguunt: necessariū est quod per intellectū tali habitudine p̄cisa ab eēntia que vna manens est p̄ncipiū virtutū et potētiaz diuersaz: remaneant potētie oīno indistīcte et vnite. nō remanent autē vnite nisi in eēntia cui⁹ sunt potētie. Ex quo igitur sola p̄dicta habitudine subtracta per actionē intellect⁹: remanet de ipsis potētis res vna et eadē sicut res eēntie super quā fundat. cōcludit de necessitate quod a potentia nulla res absoluta alia ponat supra rem eēntie que est illi⁹ habitudinis imēdiātū fundamentū. si enim aliam rem poneret oīno: etiam diuerse per csequens potētie diuersas tales res: cui⁹ nō sit necessarium rem subtractaz habitudini auferri sublata per intellectū illa habitudine: oportet necessario cōcedere quod etiā post subtractionē talis habitudinis potētie distīcte remaneret: et ita vix nō esset potētias distīgui et specificari per obiecta. Si autē dicat quod res quidē differentes remanent: nō tm merent dici potētie p̄cisa habitudine p̄dicta: cōcludet tunc satis euidenter quod ille res absolute que tunc potētie dici nō merent nō adiuncta eis alia re absoluta: sed sola habitudine adiuncta ad obiecta h̄ accipiunt ut potētie ppe dictant. et quod ut p̄dictū fuit. potētia ad illud cōparanda est: quod est imēdiātū fundamentū habitudinis potētia specificantis: satis euidenter cōcludit quod potētia vltra rem talis fundamenti nihil aliud ponit nisi solam habitudinē ad actum et obiectum. nulli ergo dubium esse debet: quod potētia et eēntia sic realit̄ nō differunt: ut potētia ponat rem absolutam aliam a re sui fundamenti. Quarto autē declarari potest ex p̄riis rōnibus potētie actiue et passiue. Ad cui⁹ intelligentiā cōsiderandū est: quod et si cōmanis ratio potētie cōsistat in relatione ad actū passiuā tm potētia et actiua diuersimode ad actum referunt. nā potētia actiua dī ad actū eliciendum.

Questio

Receptiua vō dī ad actū recipiendū. p̄mo autē ma-
nifestū ē: q̄ potētia receptiua vel passiua: nullā rē
absolutā ponit p̄ter rem sui fundamenti q̄ de po-
tentia quidē receptiua actus substantialis: iā ī alia
q̄ōne declaratū fuit. De potētia vō receptiua act⁹
accidentalis: hoc de facili appet. Si enī talis potē-
tia rem aliā ponit p̄ter rem sui fundamenti: tūc ne-
cessariū est q̄ ponat rem substantie vel accidētis.
fatef autē quilibet q̄ rem accidētis ponit: q̄ potē-
tia r̄ act⁹ debēt esse in eodē genere. nunc autē ita
est: q̄ oē accīs est in alio receptum: r̄ omne q̄d ē
in alio receptū: ordīe nature p̄supponit ante se po-
tentia receptiua: tunc silr̄ querem⁹: r̄ cū nō sit ma-
ior rō de vna q̄ de alia oportebit q̄ etiā ipsa rem
aliquam absolutā ponat aliā a re sui fundamenti
r̄ erit p̄sequens p̄cedere in infinitū: quod cū sta-
re nō possit: ōz necessario cōcedere: q̄ talis potē-
tia nō ponat rē aliā a re sui fundamenti. verū enī
ē q̄ substantia p̄posita ex mā r̄ forma nulla re aliā
mediante est p̄p̄riū dimensiois susceptiua r̄ ipsū
dimensionatū nō mediāte re aliā p̄p̄riū receptiua
qualitatū q̄ imediate in quantitate dimensua in-
dicant. r̄ sic etiā de alijs. Ulterius autē quantum
ad potētiā actiua cōsiderandū est: q̄ aliq̄ ordinat
ad actū qui est opatio: sicut potētia intellectiua
ad actū intelligendi: r̄ potētia sensitiua ad actū
sentiēdi aliqua vō vltra hūc actum ordinat ī aliū
qui est forma p̄ducta per talē opationē: quē ad
modū potētia calefactiua per calefactionē tendit
in caliditate ipsam. Et p̄mo quidē de hac potētia
apparet quod intendimus. Est enī res illa hī⁹ po-
tentia que p̄ncipiū est p̄ductionis forme que non
est nisi forma ipsa: sicut rō r̄ p̄ncipiū calefactiēdi
est ipsa caliditas manens in calefaciente. r̄ rō r̄
p̄ncipiū igniēdi est ipsa forma ignis manēs in
igne igniēte: ut sicut potētia calefactiua nō ponat
rem aliā a re caliditatis: nec potētia ignitiua p̄at
rem aliā absolutā a realitate ignis. r̄ eodē mō ōz
dicere de oībus alijs talib⁹ potētis: q̄ eadē rō est
de vna r̄ d̄ oīb⁹. Quantū autē ad alias potētiā cō-
siderādū ē: q̄ ip̄e aliquo mō s̄t actiue: r̄ aliquo mō
etiā passiue: q̄ intelligere r̄ sentire sunt etiā q̄daz
pati. Et fm̄ quidē q̄ passiue sunt: rō sup̄ius addu-
cta de eis sicut r̄ de alijs cōcludit. fm̄ vō q̄ actiue
sunt nō p̄nt aliud q̄ illud q̄d est rō agendi q̄d po-
nit esse forma intelligibilis in intellectu: r̄ forma sē-
sibilis in sensu. Ex quo appet satis eident q̄ illa
r̄ eadē res que ponit p̄ tales potētiā vt passiue
sunt. ponit etiā per eas fm̄ q̄d actiue dicūt: nullo
alio sup̄addito nisi sola informationē sc̄do facta a
formis p̄dictis. Est igit cōsiderandū q̄ vna r̄ eadē
aīe eēntie p̄t poni per potētiā sensitiua r̄ intel-
lectiua differenti t̄n modo: q̄ potētia sensitiua d̄t
vt manens sub certa dispōne organi. Sic enī h̄z
recipe spēs sensibiliū sine mā. potētia vō intellecti-
ua d̄t sumpta fm̄ q̄d transcendit materie capaci-
tate. Sc̄d̄z hoc enī actu quandā imaterialitate h̄z
r̄ sic in ea attendit intellectus agens. fm̄ vō quod

est in potentia ad spēs itelligibiles recipiendas at-
tendit in ea intellect⁹ possibilis. Ad p̄mū ergo
argumentū dicendū est: q̄ eēntia r̄ potentia bene
differūt realiter r̄ fm̄ aliquem modū realitatis.

Ad sc̄dm̄ dicendū est: q̄ que sunt oīno realiter
r̄ fm̄ rōnem idem: necessariū est q̄ simul ponant
r̄ destruant. sic autē nō se habēt eēntia r̄ potētia
ut supra dictum fuit. Ad tertiū d̄t. q̄ accidens
r̄ substantia nō sunt idem fm̄ rōnem nec etiā fm̄
rem: si res cōiter sumat: r̄ sic se habēt eēntia r̄ po-
tentia: q̄ eēntia dicit rem absolutā: r̄ potētia dicit
rem respectiua. Ad. iij. d̄t est eodē modo quo
ad tertiū r̄ p̄mū. Ad. v. dicendū: q̄ potētia non
est ens aīe t̄n sed nature: q̄ diuersitate quam hēt
ad eēntiam nō h̄z ex sola actione aīe intellectiue:
sed etiā nāli quadā necessitate eā habz in re extra
animā. Ad. vi. d̄t. q̄ potētia sensitiua ex ea pre-
qua ponit eēntiā anime intellectiue nō est coertē-
sa materie: sed solū ex ea parte qua ponit certā or-
gani dispōnem. Ad. vii. d̄t. q̄ iāz p̄z r̄sio fm̄ ei
q̄ potētia ponit eēntiam supra quā fundat non
est necessario qualitas: sed p̄t eē substantia. Sc̄d̄z
autem q̄ ponit quendā modū siue quandam de-
terminationē eēntie: sic est q̄litas. r̄ q̄ illa det̄m̄-
natio attendit ex respectu ad aliud: iccirco h̄ mō
est relatiuū. Et p̄ hoc p̄z r̄sio ad octauum.

Questio decimasexta.

Questio sexta

decima est: Utz in aliquo idiu-
duo substantie sint plures forme
substantiales: Et videt q̄ sic: q̄ ī
quolibet corpe est aliq̄ forma p̄
quā cōuenit cūz alio. s. forma corpeitatis: r̄ aliq̄ p̄
quā subāliter differt ab alio quolibet. s. illa p̄ quā
recipit in det̄miata spē sed p̄ eandē formā nō p̄t
aliq̄s cū alijs subālit cōuenire r̄ differre: ergo r̄c.
p̄ oīs forma est in det̄miata mā sicut p̄z sc̄do
p̄hysicoz: r̄ in. ij. de aīa: q̄ act⁹ actiūoz sūt in patie-
te r̄ disposito: s̄z dispōnes sūt accētia: accētia autē
fundat ī aliquo ente actu vel exīte actu p̄ formā
talē: ut hēt a p̄ho p̄mo de generatiōe caplo de ra-
refactiōe: ḡ saltē due forme subāles sūt ī quolibet
idiuiduo: vna ex q̄ mā fit actu. s. subiectū cui sūt
passiones seu p̄me dispōnes: r̄ alia q̄ aduenit ip̄i
subiecto disposito. p̄ p̄bat sp̄aliter de quolibet
corpe mixto: q̄ oē illud ī quo sūt plura eā ī actu
h̄nt in se p̄les formas subāles: q̄ q̄libet eīm h̄z ī
se formā subāle differētē nūero a forma subāli al-
teri⁹ elemēti. s̄z in quolz mixto sūt plura eā actu:
ut vult cōmētator r̄ auicēna ī. iij. celi r̄ mūdi. r̄ etiā
Arl. p̄mo de gn̄atione: vult enī q̄ mixtio fit misci-
biliū alētoz vno. p̄ de quolibz aiato p̄hs dic̄
ij. de aīa: q̄ aīa ē act⁹ corpis organici p̄hysici potē-
tia vitā h̄ntis: r̄ est act⁹ subālis: ut ī eodē p̄bat: sed
oē corp⁹ organici h̄z aliquā formā subālem ḡ r̄c.

¶ pbat de quolibz aiali. si. n. corpus quodlibz mortuu est idē numero qd fuit aialis viui. i quolibz aiali sunt ples forme subāles. qz illa que est in ipso mortuo z aia sepata vel que corrupta est. s. corpus cuiuslibet mortui est idē numero corpus quod fuit aialis viui. qz videm⁹ in ipso eadē acci⁹ tia numero. videm⁹ enī qd eadē est albedo i cadauere cū illa que fuit in viuo. g̃ est idē corp⁹ nūero als acci⁹ eēt trāslatū de subiecto i subiectū. g̃ zc.

¶ in omni eo qd mouet motu pgressiuo z a seipo sunt plures forme subāles. quia oē tale diuidit in duo. quoz vnū est mouēs: z aliud est motū vt vult p̃hs in. viij. phisicorū: sed mouēs z motum debēt esse in actu vt vult cōmētator in eodē. viij. quare relinq̃t qd in omni eo qd mouet a seipo: forme ples subāles sunt. sed oē aial qd mouet motu pgressiuo: a seipo mouet z a se vt euidēs ē. g̃ zc.

¶ sicut se habz de lacerta: ita z de alijs aialib⁹ sed in lacerta sunt plures forme. p̃bō. qz pars lacerte diuisa ab ipa lacerta habz aiam que sentit. si enī pungat retrahit: z p̃ns est aial. z planū ē qd non est eadē numero aia cū alia que p̃us fuit: sed alia aia que est in parte lacerte p̃us fuit in lacerta anteq̃z eēt decisa. Qd pbat. qz illa aia nō ē de nouo genita: cū nec aial cui⁹ est pars sit de nouo genitū. quod pbat. quia omne aial: aut generat per alificatōem: aut p̃ viuificatōem: aut p̃ putrefactioem: aut per vremificatōem. vt vult p̃hs in libro de historijs aliū: sed illud aial nullo illoz modoz ē generatū vt p̃z. ergo zc. ¶ si homo ē corruptibilis: in eo sunt ples forme subāles: sed hō ē corruptibilis. ergo zc. Maior pbat. qz aut ē corruptibilis quantū ad mām: aut quātū ad formā: aut quātū ad vtrūq̃. sed nō quātū ad mām. quia illa est incorruptibilis fm p̃hm p̃mo phisicorū: z p̃ns nec quantū ad vtrūq̃. relinq̃t ergo qd q̃tuz ad formā. qz forma ei⁹ corrupit: sed aia intellectiua est incorruptibilis: vt dicit secūdo de aia. ergo in hoīe est quedā alia forma p̃ter aiam intellectiua p̃ quā est corruptibilis. Alique aut alie ratōes sunt dialetice z vane. In triuz est qd sicut vnū quodq̃ se habet ad esse subāle: ita se habz ad formā subāle. q̃a omne esse subāle est a foīa subāli. Sed vnū quodq̃ indiuiduū in genere habz vnū eē subāle. ratio etēi substātie consistit in indiuiduitate: vt patz. vij. methaphisice. Rūdeo. ad hui⁹ qōis euidentia intelligēdū est qd de illa qōne sunt quatuor opiones. Una est opio. d. qd in quolibz indiuiduo sunt ples forme subāles ordinate se hñtes fm ordinē p̃dicabiliū. Secunda opio dicit totalit̃ triū. dicit. n. qd vnū qdq̃ indiuiduū cōtentū ē vna forma subāli p̃ quaz est quicqd est in p̃dicamēto substātie. Est aut tertia opio tenēs mediū. d. qd in quibusdā indiuiduis subē est tm̃ vna foīa subāli z i quibusdā ples. sic g̃ z ista opio biptita ē. Quidā enī dicūt qd in quolibet corpe simplici est tm̃ vna forma subālis: in oib⁹ aut corpi⁹ mixt⁹ sunt plures. Alij aut dicūt qd in quolibet hoīe sunt ples for

me subāles. in oib⁹ aut alijs ab hoīe est tm̃ vna. Et ista opio de nouo surrexit p̃p̃t corp⁹ christi z sanctorū viroz corpa. Que aut istaz opionū sit verior nō est facile def̃minare. qz vnaq̃q̃ ipaz magnos habuit z hz defensores. qz tm̃ apud latinos maiores tenēt vnitatē formaz. Thomas viz z Albert⁹ z illa opio magis est s̃ona dictis p̃hi z p̃fessoruz ei⁹: credo intrepide tenendū eē in quoz indiuiduo substātie eē tm̃ vna formā subāle. Si aut fm fidē catholicā forte vt celebrē intuētib⁹ oporteat dici cōtrariū: loquēti tm̃ phisice nō ē cura. Dicam⁹ igit qd in quolibz indiuiduo substātie: est tm̃ vna forma subālis. Et hoc pōt declarari ad p̃ns mltis rōnib⁹. Quarū p̃ma sit illa. Si in aliquo indiuiduo substātie essent plures forme subāles: oēs forme post primā erūt acci⁹s. sed hoc est ipossibile. cuius causa est. q̃a quod vere est nulli accidit. s. subā vt dicit p̃hs p̃mo phisicorū. Maior pbat. qz omnis forma subālis dat esse in actu: z sic p̃ma foīa adueniēs mām dat eē in actu. sed omne qd aduenit alicui exñti in actu est acci⁹s. vt p̃z. vij. methaphisice. ergo omēs forme adueniētes post primā sunt acci⁹tia. Sed ponētes opinionē cōtrariā ratiōem istam conant dissoluere. Dicūt. n. declarādo eozū pōem. qd in quolibz indiuiduo sunt plures forme subāles. oēs tamē forme p̃ter vltimā sunt q̃si potētiales z disponētes mām ad vltimā formā que sola dat esse cōpletū z specificū. sola. n. vltima forma: cōpleta z specifica d̃r. Tūc solūt ad ratiōem z dicūt qd oē qd aduenit alicui in actu exñti cōpleto est acci⁹s: sed si adueniat alicui exñti in actu incōpleto nō est acci⁹s. Luz igit oēs forme p̃ter vltimā sint incōplete: relinq̃t qd nulla illaz erit acci⁹s. Sz illa respōsio saluatis dictis p̃p̃tericorū stare nō pōt. z hoc pbat quatuor rōnib⁹. P̃mo q̃a cōmētator p̃mo phisicorū volēs pbare qd mā p̃ma nullā formā hz a se. pbat hoc tali rōne. Nam si mā p̃ma de sui rōne haberet aliquā formā: tūc ois alia forma adueniēs eēt acci⁹s. z tamē manifestū est qd illa forma esset incōpletissima. videt enī qd q̃to aliqua forma est p̃p̃inq̃oz vltime. s. aie intellectiue: tanto est cōpletior. Et sic p̃z p̃mēl. qd omne adueniēs exñti in actu z incōpletissimo est acci⁹s. perist ergo eoz positio. ¶ s. Ar. in p̃mo de gñatione: arguēs cōtra illos qui ponebāt p̃ncipiū māle aliqd elm̃ dicit: qd si aliqd elm̃ p̃ncipiū māle essz: tūc gñatio que est ad formā subāle eēt alteratio. Lū ergo alteratio sit ad formā accidentale sequeret qd forma subālis esset acci⁹s. h̃ aut non est nisi quia adueniret exñti in actu: z tm̃ euidēs est qd forma elemēti est incōpletissima: qz māe p̃p̃inq̃issima. ¶ s. aut forma d̃r incōpleta qz est imp̃fecta: aut qz potētiales. sed p̃mo modo nō pōt dici incōpleta. nā aia asini est incōpleta qz imp̃fecta respectu aie itellectiue. z tm̃ omne adueniēs asino est acci⁹s: vt ipi cōcedūt post formaz siue aiam asini. Nec pōt dici qd sit incōpleta qz sit potentialis. qz sicut mā se hz ad actū: ita forma se

Questio

h3 ad potentiā. sed mā pma de se nullū h3 actuz: vt pbat cōmētator pmo physicoz: g̃ nulla forma h3 aliquā potētiā: 2 p̃ n̄s nō est potētiālis. ¶ Oē qd̄ dat esse simplr̄ dat esse cōpletū. cōpletū enī ad incōpletū videt̄ se habere: ut simplr̄ ad fm̄ qd̄. sed oīs forma subālis dat esse simplr̄: sicut p3 p̄ Arl. p̄ mo de generatiōe: q̄re nulla videt̄ distātia de actu cōpleto 2 incōpleto. Sed forte istabūt ad istas rōnes: q̄ aliqua forma vel actus d̄r̄ incōpletus ex eo q̄ h3 ordinē eēntialē ad aliā formā nō qz̄ imp̄fecta: nec qz̄ habeat aliquā potētiā passiua. Et p̄ hoc p3 solo ad oēs adductas rōnes. p̄ma enī 2 se/cūda nō cōuincunt: qz̄ si mā de se haberet aliquāz formā: illa forma nō haberet essentialē ordinē ad aliquā formā: sed idifferēt se haberet ad omnes alias formas: h3 etiā non eodem modo sit de forma elementi. Ad tertiam rationē iam patet q̄ non dicitur aliqua forma incompleta: quia sit potentialis vel imperfecta: sed quia ordinem naturalem habet ad aliam formam: cum nec ad ipsam sistat generatio: nec intentio nature. Ad quartam rōnē aut̄ dicendum. q̄ illud qd̄ dat eē simplr̄ nō dat eē cōpletū illo mō quo accipit̄ cōpletū. s. q̄ nō h3 ordinē eēntialē ad aliqd̄ ad qd̄ sistat generatio: sed qz̄ dat eē cōpletū resp̄cū eē qd̄ dat forma acc̄ntalis: qd̄ est eē fm̄ qd̄. ¶ Ista aut̄ solo nullū videt̄ eē valoris. nā videm⁹ q̄ forma adueniēs enti in actu est acc̄ns: qz̄ nō videt̄ eē alia cā nisi quia oīs forma req̄rit subiectū in potētia ī quo existat. sicut igiŕ se h3 forma ad formā: ita se h3 potētia ad potentiā. sed forma se h3 ad formā sicut eē ad esse cū a forma sit eē. cū igiŕ esse qd̄ dat forma subālis sit eē simplr̄: 2 esse qd̄ dat forma acc̄ntalis sit esse fm̄ qd̄: ut p3 p̄ Arl. vij. metaphysice. Relinquit̄ q̄ forma subālis sit forma simplr̄: 2 forma acc̄ntalis sit forma fm̄ qd̄. 2 vlt̄er⁹ relinquit̄: q̄ oīs forma subālis siue hēat ordinē ad aliā siue nō req̄rit subiectū ī potētia simplr̄. subiectū autē cōt̄inētū sit in actu incōpleto: 2 h3 ordinē ad aliud: nō est ī potētia simplr̄. nulla g̃ est solo. ¶ Arl. dicit p̄mo de generatiōe: q̄ mā pma est imediatū subiectū generatiōis aliāz aut̄ transmutatiōnū quodā mō. cum igiŕ generatio simplr̄ d̄ q̄ loquit̄ sit introductio forme subālis ī mā: ut vult cōmētator. vi. physicozuz relinquit̄ q̄ mā pma sit imediatū subiectū oīs forme subālis cōt̄inētū: q̄ igiŕ mā sit in actu subāli incōpleto: 2 habere ordinē ad aliud nō possz̄ recipere aliā formā subāle qn̄ eēt acc̄ns. ¶ Dato q̄ esset v̄z q̄ forma adueniēs enti in actu incōpleto non esset acc̄ns: ex eo q̄ ille act⁹ ordinē eēntialē h3 ad aliud: tūc illud in quo essent iste plures forme nō esset vnū subāliter: sed solū ordie colligationis: sic domus 2 fundamētū q̄ q̄si hnt̄ ordinē eēntialē ad inuicē ut fundamētū ad parietē: 2 pies ad tectum ¶ Semp generatio vni⁹ corruptio ē alti⁹: 2 econuerso. sed si in aliquo indiuiduo substātie generat̄ liter de quo loquimur eēt plures forme subāles semp generatio vni⁹ nō eēt corruptio alti⁹: q̄re r̄c.

maior pbat: qz̄ sumpta est a p̄ho p̄mo de generatione. minor pbat: nā introductio oīs forme subālis ē generatio simplr̄. 2 n̄ si in aliquo indiuiduo subē sunt plures forme subāles: alie nō corrupit̄ fm̄ eos. 2 p̄ n̄s manet totū cōposituz. ¶ Ista aut̄ rō nō pōt̄ dissolui nisi vno triū modoz. vel dicēdo q̄ cū Arl. dicit: q̄ generatio vni⁹ est corruptio alteri⁹ dicat h̄ fm̄ op̄ioez alioz. vel dicēdo q̄ h̄ dicit ī generatiōe eloz. vel dicēdo q̄ dicit accipit̄ generatio vno mō particulariē p̄ generatione sp̄alr̄ cuiuslibet forme ex̄tis in cōposito. 2 sic nō intelligit̄ p̄hs: q̄ semp generatio vni⁹ sit corruptio alteri⁹. Alio mō accipit̄ generatio vlt̄er⁹: totū. s. cōposito a p̄ncipio p̄ime forme vsqz̄ ad vltimā 2 completā formā. 2 de hac gn̄atione intelligit̄ p̄hs: q̄ gn̄atio vni⁹ ē corruptio alteri⁹: quia cum introducitur p̄ma forma corrupit̄ alia ut cum introducitur forma sanguis corrupit̄ forma semis. ¶ S3 p̄ma solo nulla est: si quis respiciat ibi p̄hm. q̄rit enī ibi p̄hs: cū oē quod corrupit̄ cedat ī nihil: q̄ est cā q̄re nūqz̄ deficiat generatio: cū semp qd̄libet generet̄ ex alijs. Deinde ponit solones alioz: 2 eas ip̄robat: 2 postea ponit solutionē istā: q̄ cā q̄re generatio semp cōpleat̄ 2 nunqz̄ definat̄ est: qz̄ semp generatio vni⁹ est corruptio alteri⁹: 2 econuerso: 2 istā soloz nō ip̄robat 2 sic p3 q̄ fuit solo nulla: sed argumētū ip̄m reprobat. Nec etiā sc̄da solo valet. p̄mo qz̄ eēt 5 illos qui ponūt plures formas subāles in quolibet indiuiduo. 2 5 istos sp̄alr̄ disputamus. Sc̄do qz̄ videm⁹ exēplū qd̄ ponit Arl. postea magi iseri⁹: sic qn̄ ex semie generat̄ sanguis. 2 planū est q̄ nec semē nec sanguis est elm. ¶ Arl. in p̄mo de gn̄atiōe 2 corruptione dicit: q̄ ip̄se vult definire quōd generet̄ caro 2 alia mixta: ut p3 ibi: g̃ r̄c. Tertia at̄ solo que videt̄ habere aliquid apparētie stare nō pōt̄. p̄mo qz̄ aliquid nō d̄r̄ simplr̄ de aliquo nisi totū vel plures principaliores ptes eius sint tales ut d̄r̄ in fine. v. physicoz. vñ aliquid nō d̄r̄ caliduz nisi totum vel plures ptes eius sint calide. Lū igiŕ simplr̄ dicat̄ q̄ generatio vni⁹ est corruptio alteri⁹. o3 q̄ h̄ hēant vel oēs eius ptes generationis vel plures p̄ncipaliores que sunt vltime: q̄re r̄c. ¶ Sicut se habuerūt in generatione: ita se habebūt in corruptione: ita q̄ corruptio illius forme in cōposito nō erit generatio alteri⁹: cui⁹ generatio n̄ fuit corruptio alteri⁹. Lū g̃ sepabit̄ aīa intellectiua ab hoīe: nō generabit̄ aliquid: sed remanebit aīa sensitiua: etiā p̄ n̄s aīal. 2 h̄ cōsiderat̄ p̄ p̄hs. iij. ethicoz cap̄lo de cōsilio: vbi vult: q̄ oē quod p̄us aduenit vltimo recedit. 2 sic reliquit̄ q̄ postqz̄ hō erit mortu⁹: remanebit aīal 2 ambulabit. 2 postqz̄ corrupta fuit aīa sensitiua: remanebit aīa vegetatiua: 2 p̄ n̄s viuū 2 nutriet̄: quoz̄ quodlibet appet̄ esse absurdū. Et si dicat̄ ad istā rōnem: q̄ iste tres aīe sunt vna numero īquirendū 2 petendū est ab eis: quare magis aīa intellectiua pōt̄ dare esse sensitiuū 2 vegetatiuū q̄ esse corporeū 2 mixtuz. 2 sic de alijs. Est etiā 5 eoz̄ positionē qui ponunt in

quolibet indiuiduo plures formas substantiales esse: ordinate se habentes s; ordine eentialiū pdicabiliū in genere substātie. Et si diceret sicut dicunt quidē: q; recedente aīa intellectuā ab hoīe: adhuc remanet sensitīua: tñ mēbra ita sunt debilitata z alterata ex sepatione aīe intellectuē v; ex aliqua cā q; reddūt inepta ad sensū z motū: sicut videmus ī palyticis manifeste. Solutio ista nō valet: q; oz q; p; mū sensitīuū. s. cor adhuc sentiret z mouer. q; aut nō moueat aliq; mēbr; in quo fit aīa sensitīua nō videt esse nisi ex puatiōe caloris naturalis. Cū ergo in corpe fit calor nālis q; diu durat aīa: sequeret si statim sepata aīa intellectuā foret p; ratio vsq; ad cor: q; aīa remaneret sine aīa. h; autē est falsum: quare zc. P; si sepata aīa intellectuā remaneret sensitīua: hō nō esset mortuus. sed hoc est absurdū: igitur zc. minor p; baf; q; adhuc remaneret anima sensitīua: remaneret vegetatiua: quia nulla alia potētia anime potest esse sine vegetatiua: vt vult Arī. in secūdo de aīa. sed vbi est adhuc anima vegetatiua illud est viuū: quod autē est viuū nō est mortuum: igitur zc. Sed forte adhuc respondetur q; in homine est duplex vita. vna ab anima intellectuā. z ista cōpetit homini in quantum est homo. z q; tu; ad talē vitā homo est mortuus ex sepatione anime intellectuē. z p; sequēs hō est mortu; in quantum ē homo. Secūda est vita que cōpetit sibi in quantum est aīa: z alia que cōpetit sibi in q; tum est vegetatiuū. z quātū ad istā duplicē vitam homo nō est mortuus. Sed ista solō nō valet: quia sicut vult p; s; scō de aīa: viuere viuentibus inest p; vegetatiuā potētiā: z nō p; aliaz potētiā. alias due anie vegetatiue essent ī aīa q; absurdū est: quare zc. P; sicut dicit p; s; scō de aīa: viuere viuentibus est esse. Si igitur in hoīe est triplex viuere: in hoīe est triplex esse. h; aut videtur absurdū: q; vnus rei vnicū est esse: vt p; per p; m; tertio metaphysice. quare zc. Sed aliq; respō; debet ad p; m; rōnem: z dicit q; q; Arī. dicit: q; in omnib; viuentib; inest viuere p; potētiā vegetatiuā; pōt intelligi duobus modis. vno mō q; oē viuere quodcūq; sit illud inest viuentib; per potētiā vegetatiuā. z sic nō itelligit Arī. Alio modo q; in omni viuo corruptibili z generabili de quali loquitur hic p; s;: est potētia vegetatiua. S; ista solutio nulla est: q; q; forte in hoīe fit triplex viuere quod opponit morti: est viuere per aīam vegetatiuā. z hoc p; baf; p; Arī. in libro de morte z vita: vult enī ibi q; duplex est mors. s. nālis de qua loquimur z vocat extinctio. z talis mors est corruptio forme. Alia vocat mors ex consumptione humidī nālis: ad quam sequit destructio caloris nālis. quocūq; aut istoz modoz: mors nō ē aliud q; destructio caloris nālis. z sic q; diu aīa vegetatiua est in corpe z sensitīua: nō est destructio caloris naturalis: q; q; diu aīa vegetatiua est in corpe tā diu fit nutritio in corpe: vt Arī. vult p; mo de generatione cap; de augmēto. sed oē nutrimentuz

oz esse decoctum: vt d; p; mo de p; tribus aīaliū. de coctio aut fit a calore nāli: vt d; eodē loco: q; re zc. Sed forte aliquis respō; debet ad rōnez p; ncipalem z dicit: q; simul z semel recedente aīa intellectuā recedit anima sensitīua z vegetatiua. Et ad auctoritatē p; hi cum dicit: omne quod p; us aduenit vltimo recedit: respondebit q; hoc est verum ī illis que nō sunt essentialit; ordinata qualia autē sunt ille tres anime non habent veritatez. Sed illa solutio non potest stare. p; mo respiciendo intētionem philosophi ibi vbi ponit predictam auctoritatē. dicit q; hoc est verum in inquisitione consilij: q; omne quod p; ius aduenit vltimo recedit z ibidem dicit: q; inquisitio que est consilium: est simile diadramas in demonstratione mathematica. Sed manifestū est q; in demonstratione mathematica: maior z minor ordinant; ad conclusionem. ergo in inquisitione consilij omnia ordinant; ad aliquid vnum. z sic patet q; cū dicit aristoteles: q; p; ius aduenit vltimo recedit intelligit in essentialiter ordinatis: nulla est ergo fuga. Preterea petamus quare accidit hoc. s. q; in essentialiter ordinatis omne quod p; ius aduenit vltimo recedit. in illis autē que non habent ordinem essentialē nō habet veritatē. Ad quod forte ipsi dicent nec aliter possunt dicere: q; hoc accidit essentialit; ordinatis: quia in talibus omnia precedētia sunt propter vnu. s. vltimū. z ideo recedente vltimo cū amplius redire non possit si remanent precedētia esset frustra: quia frustra est illud quod est ad aliquē finem ordinatum quez non includit: sicut dicitur secundo physicoz. sed deus z natura nihil faciunt frustra: vt dicit; primo celi z mundi. sed illa positio repugnat positioni eorum: quia qua ratione recedente anima intellectuā recedit anima sensitīua z vegetatiua eadez ratione recedent oēs alie forme existentes in homine: quia omnes ordinant; ad ipsam intellectuā. Et tamē ipsi ponūt q; corpus hominis mortui est idez numero quod fuit viuū: z per consequens forma substantialis per quam erat corpus nō recessit nec passionē z super hoc firman; potissimam demonstrationem eorum. Preterea si anima sensitīua nō recedet recedente intellectuā nō corrupunt; dispositio; nes quibus mediantibus saluatur z perseverat in materia. cum igitur non sint eedem dispositiones anime sensitīue z intellectuē nō corrupunt; ab eodem corrupente. Preterea si in aliquo indiuiduo essent plures forme substātiales: omnes preter vltimam essent frustra: sed deus z natura nihil faciunt frustra: vt dictum est: quare zc. maior p; batur: quia sicut vult aristoteles secundo de anima: sic est in formis: q; semper p; ior reseruatur in posteriori. vnde ipse dicit q; vegetatiuum est in sensitīuo z semper p; ius in eo quod cōsequenter se habet. Et sic relinquatur q; omnes forme precedentes sunt virtualiter in vltima: essent ergo frustra omnes precedentes: quia illud est frustra

Questio

quod potest fieri per pauciora et fit per plura: ut dicitur primo physicorum. Ad istam questionem respondebit aliquis quod aliquid dicitur esse in aliquo siue in alio multipliciter: ut dicitur quarto physicorum. vno modo sicut aliquid in suo fine et in suo optimo. Et alio modo in virtute sua. primo modo habet veritatem quod vegetatiuum est in sensitiuo: et semper prius in eo quod consequenter est: sicut in suo optimo. omnes enim forme priores in composito sunt propter ultimam formam tanquam propter finem earum. sed illa solutio stare non potest.

Primo quia ipse dicit quod vegetatiuum est in sensitiuo sicut trigonum in tetragono. non est autem trigonum in tetragono sicut in suo optimo: quia figura triangularis potior est quam quadrangularis. omnis enim perfectio consistit in ternario. et ut probat philosophus in primo celi et mundi: propter hoc natura tanquam leges illius ad sanctificationem eorum utimur numero hoc. scilicet ternario. Preterea aristoteles in principio de morte et vita dicit: quod vnum et idem numero est per quod vivit animal: et est anima: sed vivit per animam vegetatiuam: et est animal per animam sensitivam: quare vnum et idem numero est anima vegetatiua et sensitiva in animali.

Preterea boetius in libro de consolatione dicit quod quicquid potest virtus inferior potest virtus superior: et adhuc amplius: quare etc. Preterea ad principalem questionem: sicut se habet in animali: ita se habet in quolibet individuo substantie: quod etiam ipsi concedunt sed in aliquo animali non sunt plures forme substantiales: quare etc. minor probatur: quia secundum philosophum secundo de anima recedente anima: non remanet corpus nisi equivoce. vult enim quod si virtus visiva esset anima oculi quod recedente virtute visiva non remaneret oculus nisi equivoce. Sed si in animali essent plures forme substantiales recedente anima non esset idem corpus nisi equivoce: quia non est idem corpus numero nisi cum remanet eadem forma per quam erat corpus. et etiam ipsi adversarii hoc concedunt imo semper hoc fundant potissimam demonstrationem eorum: quare etc. Ad istam rationem ipsi respondent et dicunt: quod recedente anima non remanet animal nisi equivoce: sed bene remanet idem corpus. unde aristoteles secundo de anima non dicit quod non esset corpus oculi nisi equivoce sed oculus. Sed ista solutio non videtur posse stare si bene respiciamus verbi philosophi ibidem. dicit enim ibidem ita philosophus quod si forma dolabrae esset forma substantialis recedente forma dolabrae non remaneret dolabra nisi equivoce: sed quia forma dolabrae non est forma substantialis et anima dolabrae adhuc remanet dolabra separata et corrupta forma dolabrae. aut ergo philosophus per dolabrae intelligit totum compositum ex corpore dolabrae et forma dolabrae. aut intelligit corpus dolabrae. non potest dici quod intelligit totum compositum ex forma dolabrae et corpore ipsius: quia in rei veritate corrupta for-

ma dolabrae: prout accipitur dolabra pro toto composito non remaneret nisi equivoce. et tamen aristoteles dicit quod non remanet equivoce. intelligit ergo de corpore dolabrae solū: ergo non intelligit de oculo. put dicitur de toto composito: sed de corpore oculi. Preterea aristoteles dicit expresse. primo de partibus animalium: quod animali mortuo non remanet corpus animalis nisi equivoce. Sed forte ipsi respondent ad istas rationes et dicunt: quod corpus animalis potest considerari dupliciter. vno modo secundum quod est corpus: et sic remanet idem numero mortuo animali. Alio modo secundum quod est corpus animalis. et sic non remanet idem numero nisi equivoce. dicitur enim corpus animalis in quantum est subiectum et perfectum ab anima sensitiva. et sic intelligit aristoteles. secundo de anima: et primo de partibus animalium. Sed ista solutio stare non potest. primo: quia dicit aristoteles. secundo de anima: et primo de partibus animalium: quod non remanet oculus nisi equivoce sicut lapideus aut depictus. sed corpus lapideum aut depictum nunquam fuit perfectum anima rationali vel sensitiva: ergo corpus mortui siue animalis fuit perfectum anima sensitiva.

Secundo aristoteles dicit quod remanet corpus dolabrae: et planum est quod non remanet nisi ut corpus. non enim remanet ut corpus dolabrae: corrupta forma dolabrae: sicut dicit aristoteles. quod si forma dolabrae est forma substantialis et anima dolabrae separata forma dolabrae non esset dolabra nisi equivoce. relinquitur ergo quod mortuo animali non remanet idem corpus numero: put consideret ut corpus absolute.

Planum est quod corpus animalis mortui est in aliquo specie: ut in specie cadaveris: quia omne quod est in genere est in aliqua eius specie: sed non convenit idem numero amplius permanere donec in specie permutat: sicut dicitur in topicis: quare etc. Si bene recolo non certitudinaliter assero. aristoteles dicit primo de partibus animalium quod in corpore animalis mortui non remanet eadem figura numero. manifestum est ergo quod nullo modo est idem corpus numero. Ad principalem questionem quam aliqua predicant de aliquo sed diversas formas illa dicunt de se invicem per accidens: sicut videmus quod musicum predicatur de homine secundum istam formam que est musica: et grammaticum per istam formam que est grammatica. et ideo musicum predicatur de grammatico per accidens: et e converso. Si ergo anima vegetatiua sensitiva et intellectiva: sunt diverse forme tunc vivum animal et homo que accipiuntur ab anima vegetatiua sensitiva et intellectiva: de se invicem predicabuntur per accidens: ita quod homo est animal: animal est vivum: est predicatio per accidens sed hoc est absurdum: quare etc. Sed aliquis dicit ad istam rationem: quod illud quod dictum est habet veritatem de illis formis que non habent ordinem ad invicem. de illis autem que habent ordinem ad invicem non habet veritatem. sed quia dictum est quod omnes forme persistentes in composito habent ordinem: et sunt quasi potentiales et dispositives ad ultimam formam: et ideo ratio non convincit. Si ista ratio non videtur valere: quia grammatica quasi ordinem essentialē habet ad logicam. et in hoc est predicatio per accidens: grammaticum est logicum: et e converso. siue grammatica est logica: et e converso.

so. et forma fundamenti habet quasi ordinem essentialem ad formam pietatis. et tunc habet est predicatio per accidens: fundamentum est pietatum: vel e converso. nulla ergo videtur solo. Et si tu dicas: quod grammatica non habet ordinem essentialem ad logicam: nec forma fundamenti ad pietatem. Eodem modo dicam ego tibi: quod si essent plures forme in composito quod ille non haberet ordinem essentialem ad inuicem et prius poteris probare quod ego: quod illud quod dico est aliquale vel per se et manifestum: quod vero tu dicis videtur esse somnium. Sed forte ad rationem principalem tu dices sicut dicunt aliqui qui ponunt istam positionem quod hoc habet veritatem. scilicet quod quoniam aliqua predicantur de aliquo secundum diuersas formas artificiales: illa predicantur de inuicem per accidens: sicut tu mihi ponis exemplum. In illis autem que predicantur de inuicem secundum diuersas formas subales non habet veritatem: quod si diceres petres principium: et ideo ista fuga est valoris. Sed illa solo videtur esse solummodo fuga: quod in omni predicatione per se primo modo dicendi per se: predicatum includitur in essentia subiecti. et habet probatur: quod vult philosophus primo posteriorum quod predicatio in primo modo dicendi per se: est quoniam diffinitio vel pars diffinitionis predicatur de diffinito. sed diffinitio ideo est essentialiter cum diffinito. non enim differt in alio nisi quod illud quod est diffinitum dicitur implicite. diffinitio autem dicitur explicite: sed diffinitio est vna et indiuisibilis secundum rem: et idem est cum diffinito. dicit autem Aristoteles in vii. metaphysice: quod differentia vltima conuertitur cum diffinito sicut rationale cum homine. omne ergo predicatum per se primo modo ideo est essentialiter cum subiecto quare etc. Sed ad principale si in homine non sunt plures forme substantiales: nec in aliquo indiuiduo substantie: quod magis videtur de eo quam de alio. sed in homine non sunt plures forme substantiales: quare etc. maior et minor probantur: quod sicut etiam ipsi ponunt: prius embrio in matrice est viuus: postea illud ideo fit animal: postea illud idem fiet homo. Sed hoc videtur absurdum: quod tunc planta fieret animal vel brutum. et sic planta fieret brutum animal: ut capra: sic capra fieret homo: quare etc. Sed tu respondebis et dices: quod anima vegetatiua que habet ordinem ad sensitiuam non constituit plantam sed solum illa que non habet ordinem ad sensitiuam. et ulterius dices quod animal incompletum habet ordinem ad animam rationalem. et ideo non est inconueniens si fiat homo. tu autem male ponis exemplum de capra: que tale ordinem non habet: et est animal perfectum et completum. Sed in veritate ista solo non videtur valere. Et primo de planta: sicut enim in libro de plantis per triplicem est genus viuentium: siue triplex est anima a qua vita procedit. vnum est genus plante quod constituit animam vegetatiuam. aliud est genus animalis quod constituit animam sensitiuam. et aliud est genus hominis quod constituit animam intellectiuam: igitur videtur quod oportet illud quod habet animam vegetatiuam esse plantam. et etiam quod dicatur quod non est inconueniens quod illud animal quod habet ordinem ad animam intellectiuam: fiat homo. ideo videtur quod animal quantumcumque habeat ordinem ad animam intellectiuam est animal brutum et irrationale. quod autem irrationale fiat rationale: hoc est impossibile: quod hec est predicatio oppo-

siti de opposito et dicitur quod albedo fieret nigredo saluata albedine: quod est absurdum. Sed homo esset duo animalia. esset enim animal rationale et irrationale: quare vulgaris et fatua videtur opinio. Sed ad principale. si in aliquo indiuiduo substantie sunt plures forme substantiales secundum descensum predicabiliu in genere substantie: ut ipsi ponunt: esset aliqua forma sempiterna in materia. sed nulla forma est sempiterna in materia: quare etc. maior probatur: quia nulla alia ratio videtur esse: quare adueniente vna corrumpitur alia que erat in materia nisi quod se non compatiuntur. cum igitur forma corporeitatis secum comparatur quacumque aliam formam: quod omne habens quacumque formam est corpus. relinquitur quod forma corporeitatis est sempiterna in materia. minor probatur: quod omne habens materiam habet terminum ut habet in libro de causis longitudinis et breuitatis vite. et omne habens terminum est corruptibile: ut dicitur primo celi et mundi. Sed Aristoteles dicit in primo de generatione et corruptione. ponens inter generationem et corruptionem differentiam et alios motus: quod vltima generatio et corruptio est quoniam nihil remanet cuius subiectum est accidens et passio: vel cuius alter fit accidens et passio sed accidens et passio sic est compositi ex materia et forma: ut patet per commentatores primo physico: quod subiecta materia cum forma est causa omnium accidentium. habet etiam dicitur in libro de suba orbis: ergo vltima in omni generatione et corruptione subiectum est totum compositum ex materia et forma. Cum igitur introductio cuiuslibet forme subalis sit generatio simpliciter: ut patet primo de generatione. relinquitur quod quoniamcumque introducitur aliqua forma corrumpitur totum compositum. et sic in quolibet indiuiduo substantie erit vna forma subal

Sed ad principale si in quolibet indiuiduo erunt plures forme subales sicut ipsi ponunt: tunc essent aliqua corpora simplicia priora quam elementa. hoc autem est absurdum. maior probatur: quod ignis per aliam formam esset ignis et corpus. et planum est quod illud corpus esset prius quam ignis. et sic arguitur de alijs elementis. Sed ad principale per eandem formam aliquid est suba: corpus et mixtum in genere mixtorum: aut simpliciter in genere simplicium: aut per aliam et aliam. Sed non potest dicere quod per aliam et aliam formas: quod tunc cum prius adueniret vna forma quam alia: prius illud indiuiduum esset substantia quam corporea: et prius esset corpus quam mixtum: vel simplex: simplex autem non existens: non potest fieri mixtum. sed hoc est impossibile: ergo per eandem formam substantiale erit substantia et corpus et mixtum et simplex et eadem ratione quicquid est in genere substantie. Et si tu volens pertrahere et positionem defendere: dicendo quod in eodem indiuisibili tempore introducitur forma per quam est substantia et corpus et mixtum vel simplex. Tua defensio nulla est: quod cum generatio sit indiuisibilis: et vna generatio solum simul et semel possit esse in materia: et omnis generatio spiritum recipiat a termino ad quem: ut dicit philosophus v. physico. relinquitur quod solum vna et indiuisibilis forma: in vno et indiuisibili tempore possit introduci in materia. Rationes autem in contrarium factas volenti respicere non est difficile soluere.

Questio

Ad euidentiā aut solōnis p̄me rōnis & plurimz
aliarū est intelligendū: q̄ nā c̄ sagacitatis nō est fi
nis & diligens cōpendiū: & paucitatis cōplemento
amicabile decretū: inter formas subāles cōstituit
q̄ semp forma posterior haberet in se virtualiter
oēs p̄cedētes. vñ Arl. dicit. ij. de aīa: q̄ vegetatiuū
est in sensitiuo: & semp p̄i^o in eo q̄ c̄sequēter est
& sic in vnaq̄q; forma p̄ter formā p̄mā est q̄si q̄dā
gradus formaz que in ipsa virtualr existāt. & mul
ta cōpetunt alicui forme: fm̄ q̄d in ipsa reseruat
vna forma que sibi nō cōpetunt fm̄ q̄ in ipsa re
seruat alia ut multa cōpetunt aīe intellectiue fm̄
q̄d in ipsa reseruat aīa vegetatiua q̄ sibi nō cōpe
tunt fm̄ q̄d in ipsa reseruat aīa sensitua. Et hoc vi
so p̄ solo de facili. Ad p̄mā rōnem dico enī q̄
lz aliquod corp^o subāliter differat ab alijs & cōue
niat cū alijs. hoc tñ totū est ab vna forma vel per
vnā formā diuersimode cōsideratā. nā put i ipsa re
seruat forma corporeitatis cōuenit cū alijs corpo
rib^o. put aut est deēminate sp̄ei: differt subālit̄ ab
eis. vel possum^o dicere: q̄ vnū corp^o inquantū cor
pus nullo alio addito cōuenit subāliter cum alio
nisi forte logice loquēdo. nā equiuocatiōes latēt
in generib^o: vt dī. vij. phisicorū. Ad aliam rōnez
cū arguit^o: q̄ determinata forma est indeterminata
& indisposita mā. dico q̄ vez est: q̄ cum mā fuerit
ultima dispōne disposita: tunc corrupunt dispo
sitiones: & etiā totū compositum. & sic fit resolutio
vsq; ad primā mām & introducitur forma substanti
alis: & introducuntur dispositiones similes dispo
sitionibus precedentibus. Sed tu arguis cōtra
istam solutionē: quia corruptis dispositionibus q̄
disponebant materiā ad introductionē alicui^o for
me determinate: materia remanebat indisposita
& per c̄sequens nō introducef aliqua alia forma
sed remanebit separa ab omni forma: quod ē im
possibile: ergo c̄. ¶ Ille dispositiones fuissent
frustra: postq̄ corrupunt adueniēte forma: sed
natura nihil facit frustra: vt dī tertio d̄ aīa. In
telligendū q̄ iste rōnes procedūt ex falsa & valde
puerili imaginatione. imaginant enī sic dicentes:
q̄ ille dispositiones p̄ius tēpore corrupunt q̄
introducitur forma illa. ad cuius susceptionem di
sposuerūt materiā: tunc enī rōnes eoz continerēt
veritatē. s; talis imaginatio puerilis valde & fatua
est. simul enī corrupunt dispōnes: & fit resolutio
vsq; ad materiā primā. & introducitur forma sub
stantialis ad quam disposuerunt sic materiā. & sic
rōnes adducte de facili cessāt. Sed forte tu di
ces: illa tua solutio solū est fuga nihil habens rea
litas. faciā enī tibi tale argumentū. accipiat enī
materia disposita ad formā ignis: aut ergo forma
ignis introducitur anteq̄ corrupant dispōsiōes
que erāt in materia: & per c̄sequens q̄ forma sub
stantialis que erat in illa mā. aut p̄ius corrupū
tur ille dispōnes: & postea introducitur forma subā
lignis. Si aut dicat q̄ ante introducitur forma sub
stantialis q̄ corrupant dispōnes: & per c̄sequēs

forma substantialis supra quam fundant ille di
spositiones: sequetur q̄ simul & semel forma ignis
erit in mā cū alijs dispositionib^o. & cū illa forma
supra quam fundant ille dispōnes. qua ergo rōe
in aliquo nūc erunt simul: poterūt esse in tanto tē
pore sequēti. Et sic habet q̄ adueniēte forma sub
stantiali ignis: nec in aduētū: nec in processu t̄pis
propter existentia illius forme ignis corrupetur
nec dispositiones nec forma supra quam fundat.
& q̄ simul erunt plures forme subāles cū forma
ignis in igne. & p̄ c̄sequēs habet q̄ p̄ius arguet
batur. & non remanebit illesa solutio: quia in eo
dem indiuiduo essent plures forme subāles. Si
aut tu dicas q̄ p̄us corrupūt dispōnes & forma
subālis supra quam fundant q̄ introducef forma
substantialis ignis. & p̄us & posteri^o sunt d̄ie t̄pis
vt p̄bat. iij. phisicorū. relinquit q̄ in toto t̄pe inter
medio inter nunc in quo corrupte erant ille dispo
sitiones & forma supra quā fundant. & nūc i quo
introducitur forma subālis: mā erit separa ab omni
forma: quod est impossibile: quare nullius valoris
fuit solutio. Ad istā rōnem dicendū est q̄ ista
solutio ab insufficienti venit. rō est: cū enī arguit q̄ cū
mā disposita fuerit ultimate ad formā substantiāle
ignis: q̄ aut forma subālis ignis p̄us introducef & c̄
dico q̄ nec anī introducef q̄ corrupat forma subā
lignis. sed dico q̄ in eodē nūc t̄pis corrupūt ille
dispōnes etiā cōplete: & introducitur forma subālis
ignis. nā corruptio forme subālis ignis sup̄ quam
fundant ille dispōnes est generatio illius forme
subālis ignis q̄ introducitur: sicut simul & semel est
corruptio tenebre & introductio luminis in diapha
no: q̄ aut sic de necessitate oportuit corrupti di
spositiones mat̄ie forme subālis supra quam fun
dat ille dispōnes: adueniēte forma subāli ad quē
disposuerūt. p̄bari p̄t p̄ rōnez aptissimā. & rō est
ista. nā si manerēt dispōnes q̄ disposuerūt materiā
ad susceptionē alicui^o forme. Et forma subālis su
pra quam fundant adueniente forma alia: cū illa
forma supra quā fundat ille dispōnes essent i mā
disposita eadem rōne remanerent dispositiones il
lius & aliqua alia forma subālis. s. illa supra quam
fundant: & eodē mō erit de alia. & sic in infinitum.
Et sequit q̄ in quolibet indiuiduo substantie erūt
forme infinite subāles. & cū ille forme subāles intro
ducantur successiue: & generatio illi^o indiuidui cōple
at aliquo t̄pe deēminato & finito. relinquit q̄ infinite
forme successiue essent introducte t̄pe finito. & per
cōsequēs infinitum transitum esset in tempore fi
nito. quoz quolibet est impossibile. & q̄ infinite for
me subāles sint in aliquo indiuiduo actu. & q̄ infi
nitū sit p̄ transitum in t̄pe finito. Ad istā rōnez
nō p̄t responderi nisi vno mō dicēdo: q̄ materia
de sui natura habeat aliquam formā sempiternā
que de nouo non sit introducta: que per corrupti
onem aliquarū dispositionū non corrupit. et
istud nō est alienum a mente eoz: qui tenent
pluralitatem formarum: immo tenent & habent

hoc tanq̄ necessariū: q̄ mā de sui natura habeat aliquā formā sempiternā que nō corūp̄it. S̄z in veritate istud dicē q̄ mā habeat aliquā formā sempiternā: ē dictū in extremis ruditatis. Nam p̄mo h̄ est cōtra om̄el. p̄mo physicoz: q̄ vult q̄ n̄lā formā hēat mā ex sui nā. Et h̄ pbat p̄ duas rōnes. quaz vna tacta fuit sup̄ius. P̄. Ar̄. dicit p̄mo physicoz: q̄ mā nō est itelligibilis nec tāgibilis p̄ se etiā in intellectu abstracta. sed si ip̄a mā habēt aliquā formā esset de se cognoscibilis et de se tāgibilis. qz ad h̄ q̄ aliquid possit itelligi: nō req̄rit pl̄ nisi q̄ possit mouere itellectū. Ad h̄ aut̄ q̄ aliquid possit mouere itellectū: nō req̄rit pl̄ nisi q̄ sit in actu. oē aut̄ ex̄is in actu: pōt mouē et agere.

P̄. si mā haberet aliquā formā: esset in actu: et p̄ om̄s possit existere p̄ se: vt p̄z p̄ om̄el. sc̄do physicoz. sed vt dicit Ar̄. p̄mo de gn̄tōe cap̄lo de augmento: q̄ mā nō pōt separi a corporeitate. si igit̄ mā haberet aliquā formā: posset sibi sufficē ad eē. Et p̄terea si Ar̄. dicit q̄ mā nō possit separi a corporeitate: sequeret̄ q̄ mā esset corpus: et cū mā sit in corpore sequeret̄ q̄ corp̄ esset in corpore: et sic duo corpora eēnt in eodē. quod est impossibile.

P̄. incorruptile est nobili⁹ corruptibili: vt dicit Ar̄. viii. physicoz. Luz igit̄ aīa sensitua sit corruptibilis: relinquit̄ q̄ forma media nobilior eēt q̄ aīa sensitua. hoc autē est falsum. quia videmus q̄ in quāto aliqua forma est p̄p̄inquoz māe prime: tāto ē vilioz. Ad t̄tū dicēdū q̄ eīa nō sunt actu in mixto. Et ad pbatōez cū d̄r: q̄ Ar̄. p̄mo de gn̄tōe dicit. Mixtio ē miscibiliū alteratozū vnio. Dico q̄ itelligēdū ē alteratozū a nā sua: et talia sunt corrupta. vel alteratoz. s̄. p̄us et postea corruptoz. oīs. n. corruptio est termin⁹ alteratōis. Sed ista solutio nihil videt̄ valere. Nā Ar̄. dicit q̄ mixtio est alteratozū vnio. illa aut̄ que sunt sic alterata et sunt corrupta: nō possunt esse vnita. quia q̄ vnita sunt: illa sunt: corrupta aut̄ nō sunt. P̄. arguo t̄bi ad p̄ncipale. scilz q̄ elemēta sunt actu in mixto. P̄mo quidē. quia Ar̄. dicit p̄mo de generatiōe cap̄lo de mixtōe: q̄ miscibilia sunt nō in mixto penitus corrupta. sed si elemēta nō eēnt in mixto in actu sed eēnt corrupta subāliter: eēnt penit⁹ corrupta: quia eēnt corrupta quātū ad subiectū eozū: et quātū ad oīa acc̄tia. quia acc̄tis quodlibet corūp̄it p̄ corūp̄tōnem subiecti: als acc̄tis trāsseret̄ de subiecto ī subiectū. P̄. sicut mixtū est: ita elemēta sunt in mixto. sed mixtū est actu mixtū. ḡ elemēta sunt actu in mixto. P̄. nihil mouet̄ motu alicui⁹ ex̄tis in potētia: nisi sit actu in ip̄o. qz om̄e qd̄ mouet vel mouet̄ ē ī actu: vt vult Ar̄. et om̄el. q̄nto physicoz. Sed vnūquodq̄ mixtū mouetur motu elemēti dominātis in ip̄o: vt dicit ar̄. p̄mo celi et mūdi. P̄terea. omne cōpositū ex nō entibus est nō ens. cum igit̄ mixtū dicat̄ cōpositū ex elemēti si elemēta totaliter corrupta sunt: et qd̄ corruptū est est nō ens: sequit̄ q̄ mixtū est cōpositum ex nō entibus: et per cōsequēs quodlz mixtus

erit non ens. quare zc. Ad euidentia solutiōis adductarū rationū est itelligēdū. q̄ in pluribus locis inuenim⁹ dictū ab ar̄. q̄ elemēta sunt in mixto. Quo autē modo elemēta sunt in mixto videt̄ re est valde difficile. Et ideo de hoc sunt q̄ plures et varie opiones auerrois: auic. et aliozū plurium. Relictis autē opinionib⁹ multis: quia de hoc ad p̄ns nō est specialis tractat⁹: dico q̄ elemēta non sunt actu in mixto saluatis suis formis substantiālibus: sicut vult om̄el. auic. et albert⁹: et q̄ plures alij. Et hoc pbat̄. quia sicut vult ar̄. p̄mo de gn̄tione: quelibet pars mixti est mixta: sicut quelibz pars aque est aqua. Si ergo in quolz mixto sunt elemēta in actu: et cū eīm ex̄is in actu sit corpus: relinquit̄ vlteri⁹ q̄ in qualz parte mixti erūt quattuor corpora. qd̄ est impossibile. quare zc. Sed tu dices ad hanc qd̄em q̄ q̄ ar̄. dicit q̄ quelz pars mixti est mixtū: loquit̄ de aliqua magna parte: vt de illa que pōt sentiri in qua erūt quattuor eīa ad inuicē secū posita. nō aut̄ loquit̄ de qualz ei⁹ parte indifferēter. Si aut̄ dicas ignorās ar̄. nam cūz Ar̄. dicat̄ ibidē q̄ miscibilia non sunt in mixto sic aliqua iuxta se posita: sicut est mixtū frumenrū et mileū siue hordeū. etiā dicit q̄ non est cōpositio: et dicit q̄ non pōt eē q̄ aliquod appareat mixtus hōi quod tamē non appareat linteo. Si autē elemēta essent in mixto: non appareret mixtum linteo. et vt sit breuiter dictū hāc opinionē reprobat̄ expresse philosophus in primo de generatiōe.

P̄terea ad p̄ncipale argumentū Ar̄. ponens differentia inter generatiōem et mixtionē dicit q̄ h̄ est differētia. quādo. n. aliquid corūp̄it et aliquid generat̄ simile illi quod corūp̄it̄ est: tūc est gn̄tio. sed quādo aliqua corūp̄unt se et nō generat̄ aliter eoz sed generat̄ quoddā tertiū: tūc ē mixtio. omne ergo mixtū est genitū: vt patz p̄ dicta. Sed omne genitū est genitū ex aliquib⁹ corrupti: vt dicitur primo de generatiōe: sed mixtus est genitum ex elementis. ergo elementa in generatiōe sunt corrupta: et per consequēs non remanēt actu in mixto. Cum ergo Aristoteles dicat in plurib⁹ locis q̄ elementa sunt in mixto. Ad hui⁹ itelligentiā est sciendū q̄ sicut probat̄ proculus: omnis causa virtualiter est in suo effectu. Cum igit̄ elementa fuerint causa efficiens mixti per suas qualitates actiuas et passiuas: in mixto erunt virtualiter omnes forme elementozū: et illam formā substantialē mixti cōsequitur quedā qualitas: in qua erunt virtualiter omnes predicte qualitates elementozū. Et illud elementū quod est in mixtione anteq̄ fieret eozum corūp̄tio: fiet magis dominans: et magis erit virtualiter in forma mixti: et q̄litas eius magis erit in qualitate consequente formam mixti. Et ideo dicit Aristoteles p̄mo de generatiōe: q̄ elementa in mixto non penitus sunt corrupta: nec penitus saluata: sicut albedo et corpus. saluatur enī virtus eozū. Et si illa que dicta sunt sunt vera: argumenta facta in cōtrariū d̄scūt.

Questio

Ad primū dicēdū q̄ illa que nullo modo sunt nō p̄nt eē in mixto: s̄ dictū est q̄ elemēta aliquo modo sunt in mixto. s̄ virtuali. Ad aliud patet nā illa que sunt subāliter corrupta: salua t̄n virt^o eozū sicut dictū est de elemētis. nō enī sunt corrupta q̄ s̄ sint corrupta ad esse illud quod p̄nebat ad eē actuale eozū. Ad tertū quādo d̄r q̄ sicut mixtū est mixtū: ita elemēta sunt in mixto. dico p̄ intēptōem: vel posse cōcedere licz nō esset cōcedendū q̄ elemēta sunt actu in mixto: nisi quantū ad virtutes eoz. Ad quartū dicendū q̄ ad hoc q̄ aliquid moueat motu alteri^o exiētis in potentia sufficit q̄ in ipso sit virtute: siue in aliquo exiētis in actu cui immediate attribuat^r actio: sic tamē q̄ in ipso existit in virtute illud cui^o motu mouetur.

Ad q̄ntū dicendū q̄ p̄pter hoc mixtū: mixtum erit magis mixtū q̄ simplex: quia in ipso sunt elemēta virtute. hoc autēz non accidit in elemento.

Ad sextū sicut ad primū. S̄ forte tu argues cōtra has solutiōes. Primo. quia vbicūq̄ ē passio alicui^o subiecti: ibi de necessitate est subiectū: quia passio nō separa^r a subiecto. si ergo in mixto sunt passiōes z qualitates elemētōz: etiā ipa elemēta formalit^r erūt in mixto. z ideo videt^r etiā q̄ actualiter sint in mixto. P̄. Arl. dicit q̄nto methaphisice: caplo de elemēto. q̄ elemētū est ex quo primo fit res z manet in re indiuisibili specie i aliā sp̄z. Si igit^r elemētū manet in re z habet sp̄m: z h̄ns sp̄m est actu. quia species ē forma vt dicit Auic. relinquitur q̄ elemētū erit in elementato actu.

Ad primū dicendū q̄ passiōes elemētōz non sunt in mixto. ibi enī nō est caliditas simplex: z sic de alijs qualitātib^o: nec etiā in eodē gradu. z ideo ratio nō valet. Ad aliud dicendū q̄ q̄daz dicūt q̄ illa diffinitio data est de elemēto scz mā z non de igne z aqua z alijs elemētis. Vel dicendū aliē z melius. q̄ elemētū est illud ex quo p̄mo fit res z manet in re: q̄ elemētū sumptū extra elemētātū existēs: nō p̄t diuidi in partē alteri^o sp̄i. quelibet. n. pars cuiuslibet elemēti est eiusdē sp̄i cum toto elemēto. z ideo ratio nō valet. Ad aliō p̄ncipale dicendū. q̄ sicut dictū fuit sup̄ius: in aia reserua^r omēs forme p̄cedētes: sicut forma corporeitatis: vegetatiuū: z sic de alijs. Dico igit^r q̄ aia ē actus corporis. corp^o autē est totū cōpositū ex materia z forma z ex ipa anima. quia in ipa reserua^r forma corporeitatis: ita q̄ anima est actus totius cōpositi ex materia z forma z re ipa fm q̄ in ipsa reserua^r forma corporeitatis. Et sic dato q̄ anima fit actus prim^o corporis phisici: tamē p̄pter h̄ nō oportebit q̄ in composito vel in ipso animato sint plures forme substātiales. Sed i veritate q̄ q̄ ista solutio sit subtilis: non tamē placz mibi. quia tūc sequeret^r q̄ anima fm q̄ anima erit actus corporis z forma toti^o cōpositi siue corporis: z p̄ consequēs existentis in actu. z cum omnis actus qui est actus alicui^o existētis in actu sit accūs: sequeret^r q̄ anima erit accūs z forma accūs. quod ē

falsum. Et ideo aliter dicēdū est q̄ nō est intentio Arl. dicere q̄ aia sit act^o corporis q̄ est altera ps̄ cōpositi: sicut aer est subiectū lucis. s̄ est act^o corporis: sicut lux est act^o lucidi. Dicim^o enī q̄ lux ē act^o lucidi: nō qz lucidū est lucidū p̄ter ipam lucē. z h̄ p̄bat p̄ Arl. secūdo de aia: q̄ dicit q̄ aia ē pars corporis. z ideo ratio nō v̄z. Ad q̄ntū dicēdū q̄ si in aiali mortuo eēt eadē accūs nūero q̄ fuerūt in viuo: q̄ in ipso aiali eēt plēs fore subāles. verū est. s̄ cū assumit^r q̄ in aiali mortuo sunt eadē accūs q̄ fuerūt in viuo: dico q̄ ē flm. Et tu dicis h̄ aparet sensui: dico q̄ sensus decipit^r z deludit^r. S̄ ista solutio nō v̄ vera. Et p̄bat p̄mo qz sensus nō decipit^r circa p̄puz obiectū scdo de aia. Cū ḡ s̄sus iudicet eadē albedinē eē in mortuo q̄ fuit in viuo ita ē in veritate. P̄. fama quā multi ppli famāt oio nō p̄dic^r. vij. ethicozū: s̄ iter pplōs est hoc cōe q̄ eadē sunt numero accūs viui z mortui. P̄. nisi sint eadē numero accūs viui z mortui aliq̄d istoz triū impossibiliū sequet^r. s̄. vt q̄ t̄min^o mot^o fit sine motu: vel q̄ mot^o erit in instāti z fil^o cū t̄mio: vel q̄ accūs miḡbit de subiecto i subiectū. quozuz quodlz impossibile reputat^r i phia. q̄ aut sequit^r p̄bat sic. Si. n. albedo q̄ est i mortuo: nō est eadē ei q̄ ē i viuo. ergo de nouo erit genita. Aut ergo hanc albedinē p̄cessit dealbatio: aut non. si nō: cū dealbatio fit mot^o ad albedinē q̄nto phisicoz: relinq̄t^r q̄ t̄min^o mot^o causat^r fit sine motu. Si autē istā albedinē p̄cessit dealbatio: aut in corpe viuo: aut mortuo. Si dicas q̄ i mortuo: cum illud fm te de nouo genitū sit z in instanti: vt patet sexto phisicoz z statim cum fuit genitū in illo fuit illa dealbatio relinquit^r q̄ illa dealbatio siue motus ille in instāti fuerit: z q̄ in eodem instanti simul fit motus scilicet dealbatio: z terminus motus scilicet albedo. Si autēz tu dicas q̄ fuit in viuo illa dealbatio: vt patet per commētatorē tertio phisicozū. vult enī ibi q̄ motus est idem realiter cuz termino ad quē est. Relinquitur ergo fm viam istam q̄ accidens translātū erit de subiecto in subiectū. scilicet de viuo in mortuo. P̄terea. omnis corruptio terminatur ad contrariū primo phisicozū: si ergo albedo que erat in animali viuo corrupta est: illa que est in mortuo generata est: z sequit^r q̄ ille due albedines erūt cōtrarie. quod est absurdū. P̄terea. quera^r a te. quare semp accidit hoc q̄ in animali mortuo semp sunt filia accūs ad min^o s̄ sp̄m q̄ fuerūt in viuo. h̄. n. nō est a casu postq̄ semp accidit: sed oportet q̄ habeat aliquā causam determinatā. Aut ergo ista causa isti^o filis accūs erit materia cadaueris: aut eius forma substātiale: aut materia animalis cuius cadauer fuit. Aut forma eius: aut albedo eius: aut locus in quo fuit mot^o: aut aspectus celestis ad locū decapitatōnis: sicut ponit modo: vel imaginatio ad albedinē in cadauere quā haberet decapitatus: vel etiā decapitatus tunc temporis: vel aliqua alia persona: nec potest alia via iueniri. Sed nō potes dicere q̄ fuerit ma

teria cadaveris. quia cum vna sit materia omnium generabilium ad inuicem: vt dicitur primo de generatione: sequeret quod omnia ad inuicem transmutabilia essent alia. quod falsum est. Nec potes dicere quod fuerit forma substantialis cadaveris. quia accidentia que sunt in composito ratione forme consequuntur totam speciem secundum Auicennam. Et sic omnes homines: vel corpora hominum mortuorum essent alba. quod falsum est. Nec potes dicere quod huius albedinis causa fuerit materia animalis ratione iam dicta. nec etiam esset forma ratione iam dicta. quia omnes homines mortui habent formam eiusdem rationis. nec etiam huiusmodi causa fuit albedo animalis mortui. quia illa corrumpitur antequam ista sit genita. nec etiam locus vel aspectus: nec imaginatio decapitationis vel decapitati. quia si in eodem loco vel aspectu vel decapitate: decapitatus aliquis niger non efficitur albus sed niger remanet: vt apparet ad sensum. quare relinquitur quod accidentia in mortuo et viuo necessario sunt eadem numero. Preterea non est verisimile quod illud quod natura fecit in tanto tempore: violentia destruat in instanti: cum potentior sit natura quam violentia. quare etc. Ad primum horum dicendum quod sicut dicit Aristoteles. visus non decipitur circa proprium obiectum dummodo obiectum sit in proportione distantia: et sensus sit bene dispositus vna cum medio differente. Circa tamen obiectum per accidens bene decipitur. quia hoc pertinet ad superiorum potentiam. Nunc autem sic est in proposito quia visus non decipitur quod albedo sit albedo: sed decipitur iudicando quod illa est eadem numero que prius. Nunc autem iudicare non spectat ad visum: sed ad sensum communem. et ideo ratio non convincit. Ad secundum dicendum quod illa propositio est probabilis: non tamen necessaria: cum ipse in topicis dicat: quod loquendum est vt plures: sentiendum vt pauciores. quia omnis fama est apud vulgum quod tota terra est maior saturno: cuius contrarium veritas habet. tamen est dicendum quod illa propositio tenet in agibilibus in quibus loquitur ibi: non autem in pure speculatiuis: sicut est questio de gradibus in formis. Ad tertium intelligendum est quod accidentia possunt generari duobus modis. Vno modo per se: quando scilicet non generantur ad generationem alicuius subiecti: et tunc sine dubio omne accidens precedit motum. Alio modo generantur per accidens quando scilicet generantur per generationem alicuius subiecti ad quod consequitur: et accidens tale non precedit motum: nec est via ad ipsum: sed dispositio in precedenti subiecto quod corrumpitur: et sic est in proposito. quia albedo que est in caduere non habuit de albedine precedentem que esset ad ipsam saltim immediate: sed solum per accidens: quia ad generationem cadaveris consecuta est. Et eodem modo dicatur ad quartum: quod illa propositio habet veritatem in his que generantur et corrumpuntur per se: quia sunt a contrario: non autem in his que generantur et corrumpuntur per accidens. Et quod ista solutio sit vera de facili probatur. quia si ista solutio non esset vera: ratio in oppositum etiam

concluderet quod scilicet nullum corpus in mundo esset generabile vel corruptibile. quia non generatur aliquid corpus in mundo nec simplex nec mixtum: in quo in eodem instanti in quo generatur non sit aliqua qualitas alteri speciei cuius simile generatur ad corruptionem dicti animalis. et tunc faciam idem argumentum. scilicet vel quod terminus motus fuerit sine motu: vel quod motus fuerit in instanti et simul cum termino motus: vel quod accidens translatum sit de subiecto in subiectum. Cum igitur hoc falsum sit dicere quod nullum corpus in mundo sit generabile vel corruptibile: relinquitur quod ratio in oppositum nulla est: et solutio dicta continet veritatem. Ad quintum dicendum quod causa quare in caduere animalis albi est albedo: causa est solus albedo que fuit in animali viuo. non autem sicut efficiens: vel sicut principium motus sicut tu arguis: vel sicut formalis. tales enim cause sunt ad quartum esse sequitur aliquid aliud secundum Auicennam. sed solum sicut disponens materiam. Sic enim est in omni corruptione quod quando dicitur aliquod accidens subiecti quod corrumpitur: non corrumpitur per se sed solum per accidens ad corruptionem subiecti secundum speciem: et idem est in generatione. et inde est quod quando ex aere fit ignis: tunc corruptio caliditatis in aere: terminatur ad caliditatem in igne. quia per accidens corrumpitur in aere quando ex eo generatur ignis. Ad sextum dicendum quod ars imitatur naturam: vt dicitur quarto metaphisice et secundo physico: et tamen videmus in artificialibus quod illud quod ars non potuit facere in multis mensibus violentia destrueret vna die. Eodem modo non est inconueniens quod illud quod natura fecit in multis mensibus violentia destruat in modico tempore: nec propter hoc erit violentia potentior. nam quod facilius est destruere quam construere: vt dicitur in topicis. Sed forte tu dices. si corpus illud non est idem numero sed simile illi: illud quod natura fecit multis temporibus: violentia fecit in instanti ad minus simile illi. Ad hoc est dicendum quod istud argumentum peccat in duobus. Primo. quod cadaver mortuum non est idem cum viuo nec simile illi in natura: licet sit simile illi in figura et in quibusdam accidentibus. quia secundum naturam longe est perfectius corpus animalis viui quam sit cadaver. Secundo peccat. quod ad corpus quod fecit natura: laborauit solum natura. sed ad cadaver: non solum laborauit violentia sed etiam natura. natura enim sic disposuit materiam per multas transmutationes inducendo in ipsam formam et dispositiones animalis: sic disposuit materiam quod corrupta forma animalis: introduceret formam cadaveris. violentia autem non potest hoc facere ex semine cadaveris. Sed statim dices. ergo ex hoc sequitur quod forma cadaveris sit nobilior quam fuerit forma animalis et altioris gradus. quod semper forma ad quam disponitur materia per aliquam formam: est nobilior quam forma disponens. videtur enim se habere sicut terminus et sicut finis. finis autem est nobilior semper eo quod est ad finem vt dicitur quinto metaphisice. Sed dicitur quod natura introducendo in materiam formam animalis disposuit ipsam: vt corrupta forma animalis: introduceret in ipsam formam cadaveris. ergo habemus intentum.

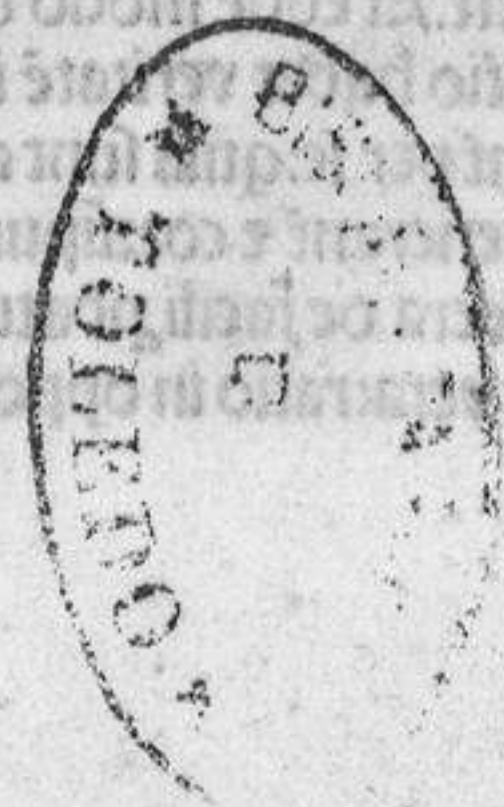
Ad hoc est dicendum quod illa forma per quam materia disponitur per se et ex intentione ad aliam formam inducenda non est nobilior: sed si hoc non fiat per se et ex intentione sed per accidentia: non sequitur nec etiam per se forma disponitur materia: sed accidentia in virtute forme. quod autem forma introducenda cadaveris sit nobilior quam substantia est quam accidentia. sic autem cum forma animalis conveniat: nullum inconveniens est: cum semper substantia nobilior sit accidente. Ad. vi. rationem principalem dicendum quod cum omne quod movetur a seipso dividatur in duo. quorum unum est movens: et aliud motum. non tamen propter hoc oportet quod habeat duas formas subales. quia ut dictum est superius: in forma superiori reservantur virtualiter omnes forme inferiores. et ideo possunt causari diversi motus secundum quod in se anima sensitiva vel intellectiva continentur diversas formas. Sed contra istam solutionem philosophus dicit. viii. physicorum: quod movens et motum debent esse distincta loco et subiecto: cuius contrarium est in proposito. Si esset sicut tu dicis aliquod movens seipsum posset esse continuu. quod est contra philosophum ibidem.

Ad evidentiam istarum rationum est intelligendum quod forma subalis est illud quod dat esse in actu. quia unum quodque operatur in quantum est actu. Ulterius reliquitur quod sicut forma dat esse in actu: ita sit principium operationis: cum anima sit forma subalis corporis. ut patet secundum de anima: relinquitur quod anima dat esse corpori: et est principium operationis corporis. Sed quanto aliqua forma est perfectior: tanto perfectiori modo dat esse. et quanto perfectiori modo dat esse: tanto est perfectioris virtutis in operando: et plures habet operationes: et anima est perfectissima forma: inde est quod anima perfectiori modo dat esse et plures habet operationes: et perfectiori modo operatur quam aliqua alia forma. Cum ergo diverse operationes fiant per diversa instrumenta: quanto maior erit diversitas in operationibus: tanto requirerit ille operationes diversitate maiorem instrumentorum per que exercentur. Et iam videmus quod in formis minus perfectis ad diversitatem operationum earum requiritur parva diversitas accidentium: sicut videmus quod ignis diversas operationes facit per diversa accidentia. sicut per caliditatem calefacit: per levitatem movetur sursum. et quia solum requirit accidentia in istis duabus operationibus ignis que etiam accidentia contrarietate non habent. et inde est quod iste operationes operatur igni secundum quolibet partes eius. sed in formis magis perfectis: requiritur non solum diversitas accidentium: sed etiam diversitas partium et qualitatum instrumentorum: et tanto plus quanto ille res fuerint magis perfecte. et ideo corpus et anima requirunt ad eorum diversas operationes diversas partes deseruietes instrumentaliter: et magis in animali quam in planta. quia anima animalis est perfectior quam planta. Cum igitur instrumentum alicuius operationis in animali sit propter ipsam tanquam propter finem secundum ordinem operationum anime oportet esse ordinem instrumentorum. Cum igitur una operatio anime naturaliter procedat aliam: necesse est quod una pars corporis moveatur per aliam ad suam operationem. et quanto aliqua operatio fuerit perfectior: tanto requirerit plures operationes precedentes et maiorem diversitatem habentes in suis organis. Cum igitur motus processus inter omnes operatio-

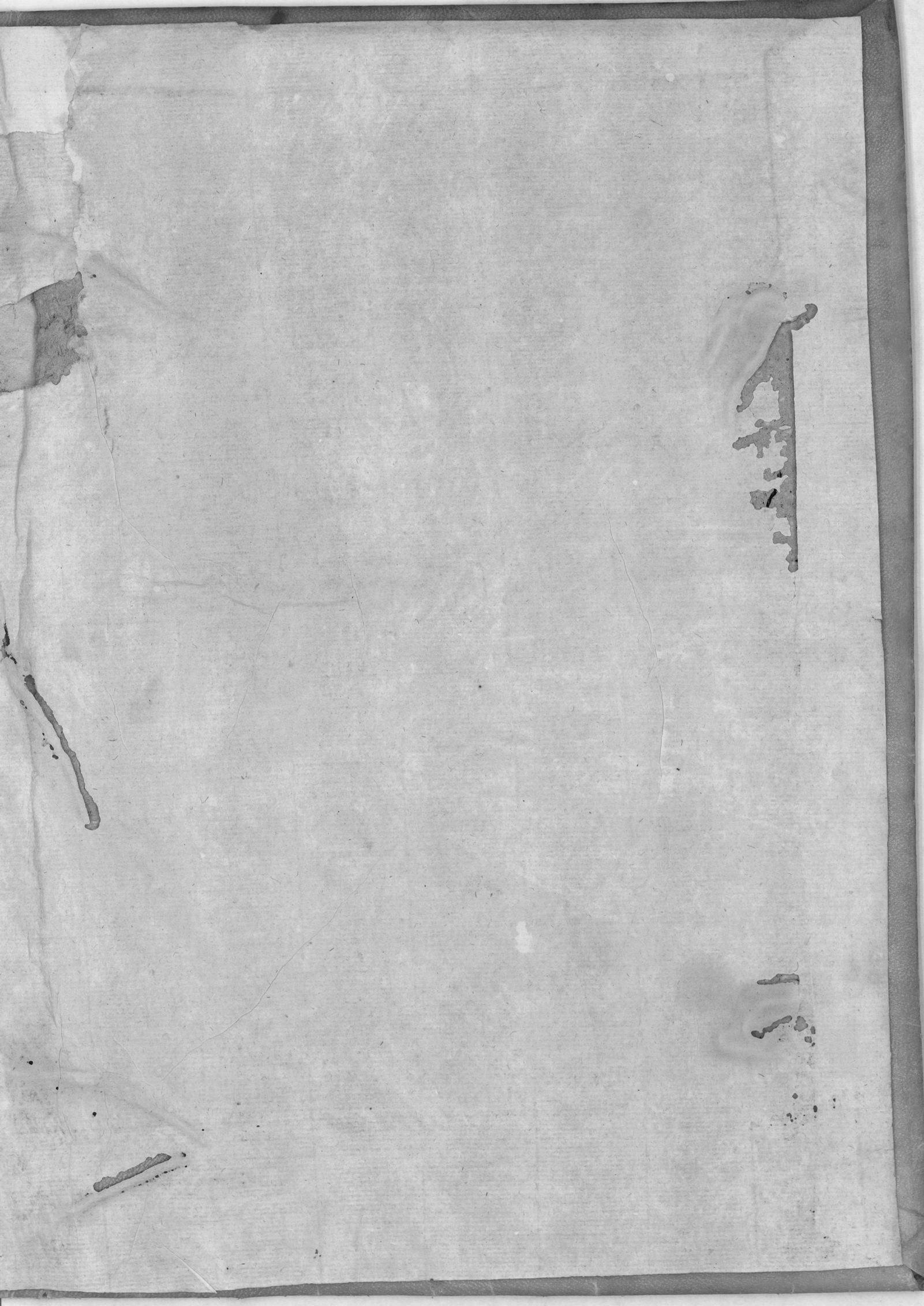
ones animalis in quantum animal sit perfectior operatio. et ideo solum competat animalibus perfectis: relinquitur quod requiratur plures operationes et maiorem diversitatem habentes in suis organis quam aliqua alia operatio animalis. oportet enim quod diversitas sit in organis: et quantum ad formam: et quantum ad duriciam et molliciam et quantum ad multa alia. Per dicta autem patet responsio ad rationes in contrarium. Nam cum dicitur quod movens et motum debet esse distincta loco et subiecto. dico quod verum est ut visum est: tamen erit una et eadem pars subaliter secundum formas et alia accidentia diversificata ut visum est. Ad aliud autem patet per predicta etiam. non enim esset continuu in virtute et figura et aliis qualitatibus de quali intelligit ibi philosophus illud quod moveret seipsum: sed habet diversa instrumenta licet sit unum subaliter et multiplex virtualiter. Ad septimum principale dicendum quod in lacerta non sunt plures anime in actu sed sunt plures in potentia et in omnibus animalibus: sicut patet per Aristoteli in libro de morte et vita. Et ad probationem cum dicitur quod in parte decisa est anima: concedo. et cum dicitur quod ovis est de novo genita dico quod falsum est. Et cum probatur quod illa pars est animalis et tamen non est genita de novo: dico quod immo est. Et cum probatur quod omne animal: aut est genitum per vivificationem et cetera. dico quod philosophus intelligit de animalibus perfectis que possunt salvari in vita: et nutriri et augeri: cuiusmodi non sunt partes lacerte: ut de se evidenter est.

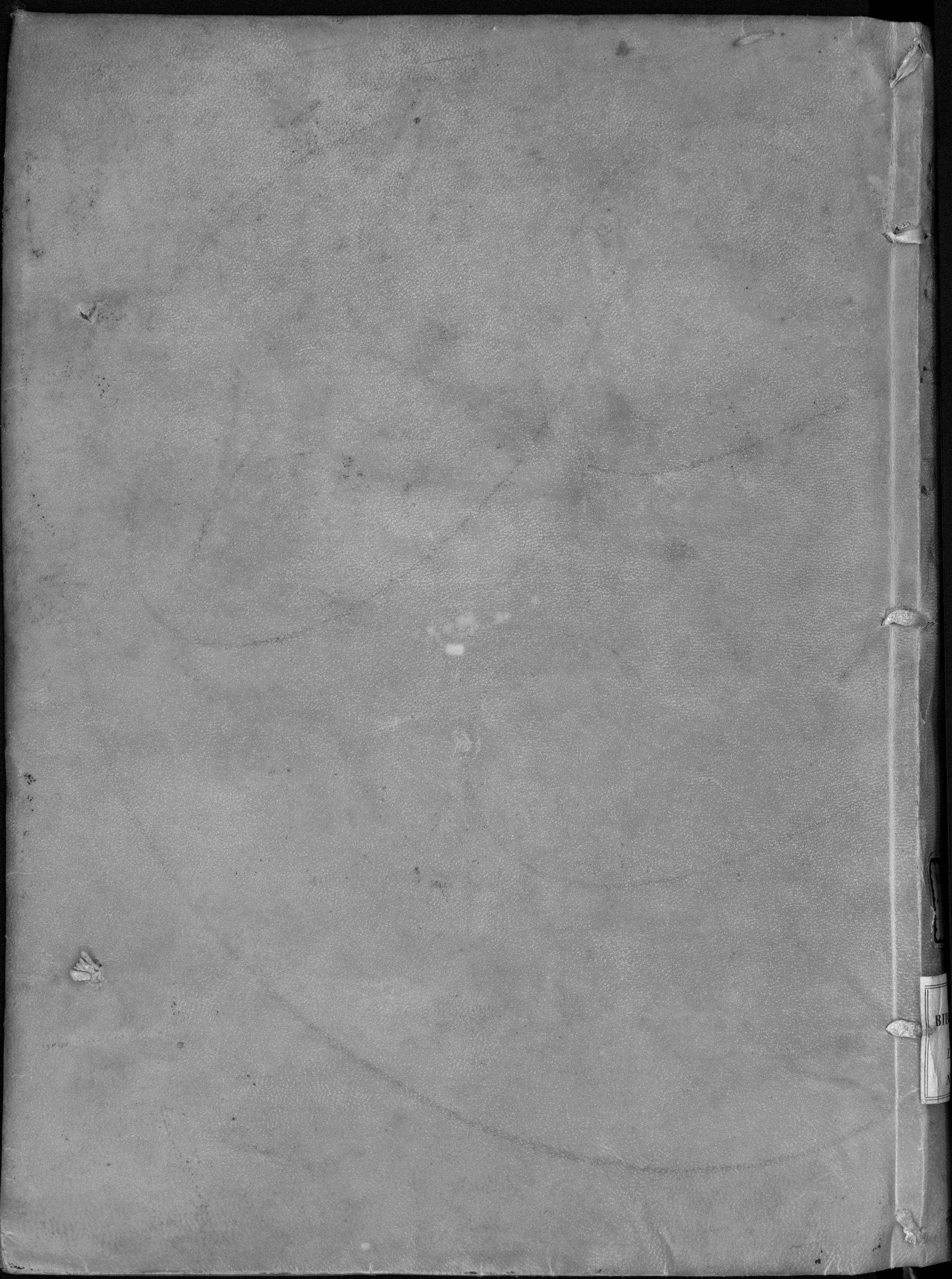
Ad octavum dicendum quod quecumque ita se habent quod unum est prius tempore quam aliud: non sunt unum numero. sed si unum est prius natura quam aliud: bene possunt esse idem numero. et sic est in proposito. Sed ista solutio solum fuga videtur. Queratur ei a sic solventibus. quid intelligent per prius naturam. Aut enim per prius naturam intelligunt prius perfectione: aut quod prius conveniat sibi secundum suam naturam: nec possum dare plures modos. Sed possum dicere primo modo. quia perfectio est anima sensitiva pro vegetativa: et intellectiva pro sensitiva. Nec etiam possum dicere secundo modo quod emersioni magis conveniat secundum suam naturam.

Questiones fratris gratiadei de esculo ordinis predicatorum per ipsum in florētissimo studio patavino disputate: excellentissimi sacre pagine doctoris ad instantiam Antonij de regio: Anno incarnationis christi. 1484. pridie kalendas maias: feliciter Venetijs impressae: ibidemque Joanne mocenigo principe illustrissimo regnante.









GRATIA
dei
de Esculo
1494 = Venet
Alb. Saxoni
et
Averboris
Anelli

1492 = Venet

Nº 197
Labe Reservada
Incompleta

TOLEDO
BIBLIOTECA PUBLICA

Dep. INC.
Núm. 197